
炎の中へ

春日彩良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎の中へ

【Nコード】

N9486L

【作者名】

春日彩良

【あらすじ】

君は僕の炎、僕の情熱、僕の生きる意味……。幼い子どもを部屋に閉じ込め、放火殺人を行った凶悪犯、島貫隆志。見ず知らずの幼児を殺害したその残虐な手口は世論を騒がせたが、彼には誰にも明かすことの出来ない秘密があった。取調べの中で、炎に包まれた罪と罰の記憶を辿る島貫。それは、彼のただ一つの、叶わぬ愛の記憶でもあった。 毎週土曜日更新

プロローグ

君は僕の炎

「お伝えします。あの幼児放火殺人事件の容疑者が逮捕されました」

僕の情熱

「近年稀に見る残虐は犯行を行ったのは、元新聞販売店店員、島貫隆司23歳…」

僕の生きる意味…

「死んじまえ、この凶悪犯！」

「死刑だ、死刑にしろ！」

浴びせられる罵声。

隣にいた警察官が、見かねて僕の頭にスッポリとフードを被せた。視界が遮られる寸前に飛び込んできた、目を焼くようなフラッシュの渦が、瞳の奥で残像になる。

僕は頭を振って、警察官が被せたフードを取ろうともがいた。

「いいから、被ってるッ！」

警察官は苛立たしげに僕の腕を掴んだが、僕は頑として譲らなかつた。フードを取り去ると、いくつものフラッシュの閃光が、僕を焼こうと襲いかかってきた。

「こんな光じゃ……足りない」
「何だとお?!」

僕が思わず呟いた言葉に、隣にいた警察官は目を吊り上げた。

だって、本当のことだった。

世界中の侮蔑と恥辱をこの身に集めても、僕を焦がすことなど出来やしない。

僕を焼き尽くすのは、君だけだから。

君は僕の炎

罪と罰と愛の姿を内包した

ただ一つの、僕の炎

(1)

「名前」

「……島貫隆司」

「職業」

「……新聞販売員です。もう、クビになりましたけど」

額に脂の浮かんだ小太りな中年の刑事は、ひどくぶっきらぼうに、必要な情報だけを集めていった。小さく奥まった瞳は、一瞬、小動物のソレを連想させられるが、瞳の奥の眼光は鋭かった。

「で、何で殺した？」

まるで簡単な質問のついで……というような口調だったが、目の光は鋭さを増して、島貫を射た。

「全部、燃やしたかったから」

「ほっ」

島貫が呟くと、中年の刑事は脂肪を蓄え二重にたるんだ顎に手をかけ、口の端を歪めて笑った。

「おい、お前。聞いたか？」

中年の刑事は、自分の後方に控えている若い刑事を振り返って言った。

「はい」

若い刑事は、あからさまな嫌悪の表情を隠そうともせず、島貫に険しい視線を送った。

「燃やしたかったんだとよ！」

中年の刑事の声が一際高くなる。

「人間ごとな！！」

そう叫ぶやいなや、中年の刑事は、島貫のくたびれたTシャツの襟首を掴み、すさまじい力で締め上げた。擦り切れて綿が飛び出した取調べ室のパイプ椅子が、耳障りな音をたてて、勢いよく後方へ飛んだ。

「…そんなことより」

刑事の激情とは対照的に、島貫は太い腕に締め上げられたまま、静かな声で言った。

「俺は、死刑になるんですか？」

刑事は軽蔑したようにせせら笑った。

「いまさら命乞いか？ せいぜいいい弁護士を雇って、精神鑑定でも受けさせてもらうんだな」

「そんなことじゃない」

「じゃあ、何だ？」

「死に方は選べないんですか？」

島貫は顔を上げて中年の刑事を見据えた。キョトンとした刑事の

顔を見ていると、自然に口の端に薄い笑みが浮かんでくるのを、島貫は抑えられなかった。

「死ぬなら、火あぶりがいい」

「この野郎ツツ!!」

タガが外れたように殴りかかってきたのは、中年の刑事の方ではなかった。若い刑事は、灰色のデスクを乗り越え、島貫に馬乗りになると、冷たい取調室のコンクリートの床に、思い切り島貫の骨ばった身体を打ち付けた。

「ふざけやがって!! この異常者が!!」

「やめろ、遠藤」

中年の刑事は若い刑事の肩に手をかけ、落ち着き払った声で言った。

「落ち着け。煙草でも吸うか？」

遠藤と呼ばれた男は、ようやく島貫の身体を離し、立ち上がった。それと同時に、島貫は締め上げられ吸えなかった空気を取り戻そうと、激しく咳き込んだ。

「悪いが、一服させてもらっぞ」

中年の刑事は、身体を折り曲げまだ呼吸を整えている島貫の傍に座り込み、口の端で煙草を啜えると、胸ポケットから安物のライターを取り出した。

カチツ……シユボ

点火の音と共に、薄暗い取調室に明かりが灯った。

「見ろ、島貫」

中年の刑事は、火の灯ったライターを、ゆっくり島貫の目の前にかざした。

「お前の大好きな火だ」

小さな火を挟んで向こうに見える刑事の脂ぎった顔が、一瞬微笑んだと思った瞬間、肌を焼く激痛に島貫は飛び上がった。

「何なら今この場で、お前を燃やしてやってもいいんだぞ」

腕の裏側、一番柔らかい部分に、赤く燃える煙草の火が押し付けられていた。

「どうした、苦しそうだな。火は好きだったんじゃないのか？」

煙草の火は押し付けられたまま、より深く島貫の腕を抉って焦がしていく。

「熱いか？ 島貫。お前に焼かれた子どもは、もっと熱かっただろ

うよ

「…ふふ」

島貫の唇が笑いの形に歪められた。

「どうした？ 何が可笑的い」

刑事の目つきが険しくなる。島貫の笑いはますます深くなった。

「…足りないよ。そんなんじや、全然足りない」

「何だと？ もういつぺん言ってみろ」

島貫の襟首を締め上げ、中年の刑事は島貫の頬ギリギリに煙草の火を近づけた。

「そんなもので燃やせるなら、とっくの昔にやってるさ」

ジユツ

島貫は力を込め、自分から煙草の火に頬を押し付けた。

肉の焦げる匂いが辺りに充満し、若い刑事は溜まらず口を押さえ、嘔吐を堪えた。

「狂ってやがる」

中年の刑事は乱暴に島貫を突き放すと、立ち上がり、心底気味の悪いものを見るような目で島貫を見下ろした。

そう……僕はもう、何者にも焼き尽くされることはない。

どんなにそれを望んでも、どんなにそこから逃れたくても

あの遠い日々に、一瞬で僕を焼いた紅蓮の炎は
今もこの胸を抉り 焦がし続けている……

(1)

パン パン パン…

乾いた音が、教室の窓枠を震わせる。

開け放した窓から、夏の匂いと熱気が入り込んできて昼下がりの教室を満たせば、子ども達はいてもたってもいられない。

そんなことは、今年大学を卒業したばかりの新米教師にも簡単に分ることだった。

生徒に背を向けて黒板に向かっていても、背後で子どもたちがクスクス、ソワソワする様子が手に取るように伝わってくる。

「おい、集中！」

日頃から子どもたちに向かってよく口にするお決まりの台詞も、余計に子どもたちのクスクス笑いを引き起こし、逆に奇妙な高揚感を高める結果となった。

無理もない…。

今日はこの街で年に一度の、花火大会の日だった。

仕方なく、新米教師は終業時刻残り5分のところで、授業を切り上げた。

途端に歓声があがった。

「おい、隣のクラスはまだ授業やってるんだからな。チャイムがなるまで教室の外には出るなよ。それから、今夜の花火大会、必ず保

護者同伴でいくこと！子どもがふらふらしていい時間じゃないぞ！」

どんなに大声を張り上げても、子どもたちの耳にはもう届いていなかった。

終業の挨拶もそこそこに、はしゃいで隣の生徒と小突き合う者、今夜の花火大会の打ち合わせに興じるもの、夏の熱気と高揚感が教室中に溢れかえっていた。

「まったく」

新米教師は少々大仰にため息をついて見せたが、口の端には「何だかんだ言っても、子どもたちに人気のある『ものわりのいい教師』である自分に、満足する色が浮かんでいた。

キーンコーン　カーンコーン

待ちに待った終業のチャイムが鳴るや否や、子どもたちは限界ギリギリまで興奮の渦を抱え込んだ教室の扉を勢いよく開け放ち、まるで空気の玉をギュウギュウに詰め込んで発射するおもちゃの鉄砲玉のように、散り散りに教室から飛び出していった。

「ほら！　廊下は走らない」

新米教師の声は、きかん気な空気鉄砲たちにはもはや届かない。

明日の職員会議で、また隣のクラスの初老のベテラン教師から嫌味を言われるんだろ？と苦い気持ちになりながらも、新米教師は子どもたちの熱気に当てられ、自分もワクワクする胸騒ぎを押さえきれなかった。

河川敷で行う年に一度の花火大会は、まさにこの街唯一の「祭り」であった。

大企業の下請け会社が主な産業であるこの街においては、滑稽な程「社会的な階層の差」が歴然としていた。

中小企業の経営者とその労働者

「雇う者」と「雇われる者」。

それは子どものも社会においても同じである。

より素直に残酷に、親の価値観を投影する子どもたち。

もとからが決して豊かではなく、貧しい中からそれでも「この街ではそこそこの成功者」である親たちは、少々行きすぎなほどに、上を目指すことに固執する。

そんな親たちが決まって顔をしかめるのが、街で唯一の国鉄の駅の裏手に広がる、歓楽街の存在だった。

工場の労働力として、出稼ぎの日雇い労働者を囲っているこの街は、その男たちを迎える女たちも、また多く抱えていた。

かくいう新米教師も、幾度となくそんな女たちに世話になったことがある。

若く独り身で、こんな娯楽のない街に赴任してきたのだから、それぐらいは許容の範囲内…。

それは、同じ小学校で唯一の20代である年上の女性教師に抱く淡い想いとは、また別の次元の話…。

そんなことを考えながら、ふと教室の隅を見やると、まだ熱気の名残を残しつつも、閑散とした教室で一人、ノロノロと帰り支度をする少年の姿が目に入った。

「おお、島貫。お前も花火大会行くのか？」

突然声をかけられた少年は、ビクツとするわけでもなく、帰り支度をするその緩慢な動作そのままに、億劫そうに顔を上げると、やる気のない目で教師を見つめ返した。

「…別に」

ボソツと一言だけそう呟くと、少年はまたノロノロと担任に背を向け、教室を後にした。

少年の骨ばって華奢に丸まった背中を見送りながら、新米教師はため息をついた。

陰気な生徒だ……。

この街の小学校に初めて赴任して来た時、子どもたちは若い男の担任に興味深々だった。口うるさい老いぼれた教師たちばかりでは子どもたちも身体ごとぶつかっていけず、フラストレーションが溜まる。だから、身体を張って遊んでくれる若い新米教師は、自分というのも何だが、人気の的だった。

しかし、そんな中で一人だけ、皆と様子の違う生徒がいた。内気で気恥ずかしさが先にたつて、教師に近づかない生徒もいる。しかし、彼はそう言った類の他のどの生徒たちとも違っていた。

簡単に言ってしまうえば、彼は無関心だった。

小学校4年生の男子生徒が興味を持ちそうなこと…漫画、野球カード、駄菓子屋…他の男の子たちが、ある一時期、喉から手が出るほど欲しがるような宝物たちも、彼の前にあつては、何の価値も見出せないような代物に成り下がるようだった。

彼はいつも、明らかにサイズの合っていないブカブカの運動靴を素足に引っ掛け、片方の肩紐が取れたランドセルをぶら下げて登校していた。

擦り切れたデニム地の短パンに、襟首のところに茶色の汗染みを浮かべた、着古したＴシャツかトレーナーといういでたちは、真冬でも変わることはなかった。

彼の目には、光がなかった。

子どもらしからぬ虚無感に満ちた様子を見て、心配した新米教師が親子面談を持ちかけても、彼の親は一度も学校へ顔を見せることはなかった。

前担任から受け継いだ彼の家庭状況についての書類には、小学校から川を挟んだ向こう側にある、貧しい長屋の集落の一角に、母と二人で暮らしていると記されていた。

汚れた上履きを脱ぐと、同じく煮しめたように茶色く汚れのこびりついた運動靴を下駄箱から取り出し、無造作に足元へ放った。

埃っぽい昇降口の床は埃を巻き上げ、大きな運動靴と、サイズの合っていない小さな素足を受け入れた。

少年は、ブカブカの運動靴が脱げないように、屈みこみ紐をキック結んだ。

「汚ったねえ」

その時、少年に向けられた悪意に満ちた言葉に顔を上げると、昇降口の入り口のところ、昼下がりの夏の日差しを逆光にして、三つの影が立ちはだかっていた。

「そんな汚ねえ靴で歩くなよ。学校が汚れる」

影の一つが吐き捨てるように言った。

三つの影はジリジリと少年の方へ近づいてくると、薄暗い昇降口の中で、その輪郭を露にした。

「やれ！ 没収だ」

リーダー核の小太りな少年の掛け声と同時に、寄り添うように立っていた二人の少年は、あっという間に運動靴の少年の背後に回りこみ、羽交い絞めにした。

「やめろよ！ やめろ！」

押さえ込まれた少年は、身体をメチャクチャに動かして抵抗したが、もともとがサイズの合っていない運動靴は、簡単に剥ぎ取られてしまった。

「うーっ、くっせー」

運動靴を剥ぎ取った小太りな少年は、汚いものを掴むように、わざと靴紐の端を掴んで、ブラブラと揺らしながら思い切り顔をしかめて見せた。

「返せよ！」

羽交い絞めにされたまま、少年は小太りな少年を睨んだ。睨まれた少年は、他の仲間と目配せしニヤニヤ笑うと、突然向きを変えて、そのまま昇降口の外へ駆け出した。

少年を押さえていた仲間たちも、勢いよく少年を突き飛ばすと、

走り出したリーダー格の少年の後に続いて走り出した。

「待て！」

突き飛ばされた衝撃で下駄箱へしたたか胸をぶつけ咳き込みながらも、少年は靴を奪って行った少年たちの後を懸命に追いかけた。

三人の少年は、グラウンドを横切り、校庭の外へ出ようとしていた。少年は素足のまま、焼けた校庭の砂がジリジリと足の裏を傷つけるのもそのままに、夢中で三人を追いかけた。

リーダー核の小太りの少年は、学校の前を流れるドブ川の土手の前で急に立ち止まると、手にしていたボロボロの運動靴の靴紐をグルグル振り回し、勢いをつけて川へ放り込んだ。

運動靴はゆっくりと放物線を描きながら、見事ドブ川の真ん中へ墜落した。

追跡空しく、その様子を目の前で見せられた少年は、同時に足の裏を抉った激痛にバランスを崩し、舗装されていない道路へ派手に身体を打ち付けて転んだ。

「汚いゴミは捨ててやったからな。母ちゃんに新しい靴買ってもらえよ」

小太りの少年は、転んだままの姿勢で悔しげに顔を上げた少年を見下ろしながら言った。

「貧乏すぎて買ってもらえないってよ」

仲間の少年の一人がケラケラ笑いながら言うと、小太りの少年は

大仰に肩をすくめて見せた。

「そんなことないだろ。こいつの母ちゃんは、この街一番の金持ちだぜ。街中の男たちからいっぱい金を巻き上げてるって、ウチの母ちゃんが言ってたもんな」

三人は、道路に身体を投げ出したままの少年の周囲をグルリと取り囲むと、口を揃えて言った。

「インバイ」

小太りの少年が屈みこみ、額から血の滲んだ少年の顔を覗き込んで更に付け加えた。

「お前の母ちゃんみたいな奴のこと、そう言うんだってよ。ウチの母ちゃんが言ってたよ」

少年は立ち上がると、他の少年二人を引き連れ、去っていった。

残された少年は、ズキズキと痛む右足を引き寄せ、恐る恐る痛みの原因である足の裏を覗き込んでみた。

足の裏には、ガラスの破片が突き刺さり、血が滲んでいた。

少年は歯を食いしばると、力を入れ、その破片を引き抜いた。

途端に、血が噴き出す。

痛む足を押さえながら靴が放り込まれたドブ川を見やると、哀れな運動靴は、ヘドロやゴミを蓄え悪臭を放つ川の中州に紐を引っかけ、腐ったゴミと共にユラユラと汚水に揺られていた。

ジャポ…チャポ…

歩いたびに、運動靴は腐臭を漂わせ、間延びした水音をたてた。又ル又ルした靴底は不快だったが、一足しかない運動靴を汚水の中へ捨ててくる訳にはいかなかった。ガラスで切った足の裏を思えば、素足で帰ることも出来なかった。

古びた木造の長屋が立ち並ぶ自宅までどうにか歩いてくると、既に太陽は西の空へと傾いて、粗末な長屋の群れを緋色に染めていた。近所の子どもたちが水浴びをした後らしく、長屋の集落の周りは、水を含みぬかるんでいた。

「きゃっ！」

その時、長屋の影から突然走り出てきた女が、ぬかるみに足を取られ、少年に思い切りぶつかつた。

少年は反動で思わず手を出すと、その華奢な身体を支えた。

「…びつくりしたあ。何だ、あんただったの」

少年の腕に支えられながら身体を起こした女は、少年の顔を見て一瞬微笑んだが、すぐに眉根を寄せて顔をしかめた。

「何？ その格好」

女は少年の泥まみれの姿を見て言った。そして、続けて鼻をヒクヒクさせると、少年の身体に顔を寄せ、次の瞬間、大げさとも思える動作で飛びすさつた。

「あんだ！ 何なの、この匂い！」

少年はふて腐れた様に、ボサボサの髪を掻きながら口を尖らせた。

「ドブ川に落ちただけだよ。遊んでたら、間違えた」

「間違えた？どこまでバカなのよ、あんだって子は。ちよっと、寄らないでよ。こんな匂い移されたら、店 から追い出されちゃう」

女は呆れ顔で少年から離れると、小さなハンドバックから取り出したアトマイザーを、熱心に胸元に吹きかけた。

「…これから、仕事？」

恨めしそうな少年の声に、女は自分のコンパクトを覗き込みながら、赤く引いたルージュを上塗りする手を止めずに答えた。

「そーよ。今日はお祭りでしょ。外からもいっぱい客がくるのよ。年に何回もない稼ぎ時！」

女はパチンツとコンパクトを閉じると、少年の額を、唇と同じく赤く塗られたツメで軽く弾いた。

「あんたは、花火大会行かないの？ 友達に誘われなかった？」

「…別に」

少年が目を伏せると、女はほんの少し哀れみを宿した目で少年を見つめて言った。

「おみやげ買ってくるわよ」

「別に、いらない」

「隆志の好きな焼きソバ」

「いいって」

「いい子にしてんのよ」

女は、自分の手が汚れるのも構わずに、少年の鳥の巣のような頭をグシャグシャと撫で回して言った。

「じゃーね」

女はヒラヒラと手を振ると、夕日に染まった長屋を後にした。

女の去った後には、いつまでも安物の香水の残り香が漂っていた。

初めてマッチを擦れるようになったのは、5歳の時だった。

預けられていた託児所は、寺の住職が片手間に運営しているようなお粗末なしろものだったが、むやみに他人に干渉しない気風を母は気に入り、隆志は生後間もない頃からそこで育てられた。

5歳にもなれば、一緒に育った仲間も皆、幼稚園や認可の保育園に移ってしまい、同じ年頃の子どもはいなかった。5歳の隆志は、一人ポツンと乳児に混じって、いつも一番最後まで母の帰りを待っていた。

隆志が火遊びを覚えたのは、丁度そんな頃だった。

昼間は寺の境内の一角に立てられた掘っ立て小屋の中に赤ん坊たちと一緒に閉じ込められるが、日が傾いてくると、一人また一人と母親に連れられ帰っていく。

昼間、赤ん坊の泣き声や笑い声が充満し、息苦しささえ感じるほどの空間が、徐々に温度を失い、黄昏に合わせて沈み行く様子は、子供心に何ともいいがたい寂しさ呼び起こさせた。始めはちよつとした冒険心だった。

託児所の園長である住職の妻は、隆志以外の子どもを保護者に引き渡すと、決まって託児所の外へ一服しに出かけた。

託児所の窓ガラス越しに覗いた、住職の妻の手の中で灯る小さな赤い炎と、吐き出される白い煙の光景は、幼い隆志の目に何とも魅惑的なものに映った。

ある日こつそりと、隆志は脱ぎ捨てられた住職の妻のエプロンから、小さなマッチ箱を抜き取った。

手の中にスッポリと納まるその魔法の箱を抱えて、隆志は夢中で託児所の裏の林の中に逃げ込んだ。

胸がドキドキしていた。

箱からマッチ箱を取り出し、見よう見まねで小さな箱と棒を擦り合わせてみる。何本かのマッチをダメにしてから、突然、シュツ…と鋭い音がして、隆志の手の中で火花が弾けた。

思わず声を上げて、マッチを箱ごと投げ捨てると、小さな命を持った火は、隆志の足元の乾燥した草をチロチロと生まれたての赤い舌で舐めて、消えた。

幼心に、魅入られて動けなかった。

それからは、ちよくちよく託児所の職員の間を盗み、母が迎えに来るまでの孤独な時間を、日暮れの薄暗い林の中でマッチを擦って遊ぶことでやり過ごしていた。

「隆志ちゃんは、一人遊びが上手で、手のかからないいい子ねえ」

昼中赤ん坊の面倒を見て疲労困憊の住職の妻は、無関心で助かった。誰も隆志の火遊びに気づいて、咎める者はいなかった。

その頃から夜の商売もスタートさせた母は、隆志を託児所から連れ帰ると、出来合いの夕食を食べさせ、寝かしつけてから、そのまま長屋に隆志を置いて、仕事へ出かけた。

目覚めると母がいない。

大声で泣いても叫んでも、暗い部屋の中には自分一人しかいない。やがて隆志は、家でもマッチを擦るようになった。

こっそり部屋を抜け出し、長屋の裏手にある共同の水汲み場の影にしゃがみこみ、小さく千切った新聞紙の欠片を並べる。

シュツ…という、マッチの擦れる音、ボウツと炎の燃えあがる音、千切った新聞紙が燃えて空中に溶けていく様は、隆志の心も暖かく溶かした。

小さな悪戯から生まれる小さな火は、母がいない不安な長い夜を癒してくれた。

ある日、ちよつとばかり得意になって、長屋の古いガスコンロの火をつけるのに苦戦していた母の手からマッチ箱を取り上げて、母の目の前でマッチを擦ってみせたことがあった。

母の度肝を抜かれたような顔を見て、「よく出来た」と褒められるものとはかり期待していた隆志の頭の上に、鋭い拳骨が飛んできた。

以来、「火遊び」は硬く禁止されていたが、もうその頃には、中毒のようになっていて、とても止めることなど出来なかった。母の目を盗み、この隆志の悪習は、四年生になった今でも続いていた。

隆志は耐えられない程の悪臭を放つ服を脱ぎ、下着のランニングシャツと、小さくなつてピチピチの短パンに着替えた。短パンは歩くたびに尻に食い込んで不快だったが、贅沢は言っていられなかった。

雨水を張った洗面器に汚れた運動靴を浸けると、玄関に放置されていた大きな雪駄を引つ掛けた。

二週間前まで母の男で、勝手に隆志たちの家に転がり込んでいた出稼ぎ労働者の置き土産だった。

母の半年分の稼ぎをすべて持ち逃げしたのだから、置き土産と言つても割りには合わないが、今の隆志には有難いものだった。

不快な服を着替えただけでも、少し気分は楽になった。

夏の夕暮れの風を受けながら、隆志はいつものように水汲み場の影にしゃがみ込んだ。

長屋の住人は皆、祭りに行つてしまつたのだろうか。

あたりはシンと静まり返つていた。

ピチピチの窮屈なズボンのポケットから、マッチ箱を取り出す。今ではもうすっかり慣れた手つきで、最初の一本を擦つてみた。

マッチ棒を垂直に立て、熱くて我慢できなくなるギリギリまで指で掴み、小さな炎を凝視した。

いつもは隆志の心を暖かく包んでくれる炎が、今日に限って心に響いてこなかった。

もう一本擦つてみる。

シュツと音を立てて短い一生を終える火を見ても、隆志の弾まない気持ちは同じだった。

風に乗つて、祭囃子が聞こえてくる。

原因はコレだった

隆志は観念して、マッチ箱を窮屈なズボンのポケットにねじ込むと、立ち上がった。

祭囃子が聞こえてくる方へ、ゆっくりと歩き出した。

沈む日と入れ替わるように、夜店は生き生きとその存在感を主張しだし、にわかには活気づいていた。

提灯の明かりの下で、色とりどりの袋に詰められた綿菓子や射的屋や輪投げ屋の景品は、影を帯びて揺れていた。はしゃぐ子どもや大人たちの声に混じって、客を呼び込む夜店の主人たちの声が飛び交う。

夜店から漂う醤油の焼ける香ばしい匂いに、隆志の腹の虫もギョルギョルと反応していたが、ポケットの中には小さなマッチ箱一つだけの隆志に、何一つ買えるわけもなかった。

その時、金魚すくいの夜店の中に、見覚えのある顔を見つけた。

隆志は咄嗟に、釣り下がる綿菓子の袋の陰に身を隠した。

金魚すくいの小さな桶の前では、先ほど学校で隆志に絡んできた三人の少年たちが陣取り、浴衣姿の少女たちを取り囲んでいた。取り囲まれた少女たちは、明らかに迷惑そうな顔で少年たちを追い払おうとしていたが、三人はめげずにしつこく少女たちにちよっかいを出し続けていた。

とうとう我慢できなくなった少女の一人が、小太りな少年の肩をトンツと軽く押し返したその時、少女の背後で無邪気に金魚すくいの網を動かす少女の横顔が見えた。

隆志は思わず、「あッ」と声をあげた。

同じクラスの、齋木穂子だった。

どうやら少年たちの目当ては、他の少女たちではなく彼女一人だったようで、相手にされずに、余計に執拗になつていようだった。

当の理穂子自身はそ知らぬ顔で、友達にガードされながら、金魚すくいに興じていた。

齋木理穂子は、隆志たちのクラスのマドンナだった。

クルクルとよく動く愛くるしい瞳と、透き通るように白い肌。この街で一番大きな家財道具屋を営む商家の若旦那の一人娘である彼女は、豊かに育つた子どもらしく、ヒネたところが一つもない、素直で明るく気風もよく、皆に愛される存在だった。

潔くたくし上げられた浴衣の袖から伸びた白く華奢な腕が、提灯の薄明かりの下で、淡い光を放つ。

クルンと丸まったポニーテールの髪の毛のほつれ毛が、浴衣の襟足でフワフワと揺れていた。

隆志はそっと、その場を離れた。

自分に絡んできたあの三人の少年たちよりも、理穂子に今の自分の姿を見られなくなかった。

一時間ほど夜店を冷やかしてブラブラしていると、花火大会の開始時間になった。皆が一斉に、より展望のよい場所を求めて移動を始める。隆志も人ごみに押されるようにして、河川敷の方へ降りていった。

自分より背の高い大人たちの頭越しに、青や赤や緑に燃える空の華を見上げる。

人ごみに息が詰まりそうになりながらも、隆志はその美しさに息

を呑み、爆発音にも似た激しい音に胸を振るわせた。

最後のラツシュのような打ち上げが終わり、夜空にシン　と静寂が戻ると、観客たちはまた散り散りに河川敷を後にして帰宅の途につき始めた。

母の帰りは朝になる。

このまま祭りの賑わいの中から、たった一人の暗い家に帰る気にはなれず、隆志は何とか時間を潰そうと、人の流れと逆行して、川原の方へ降りていった。人けの引いた川原には、いたるところに観客の残していったゴミが散乱して、隆志の折角の高揚した気分を興醒めさせた。

その時、隆志の目に、先ほど鮮烈に胸を焼いたばかりの浴衣の柄が飛び込んできた。早鐘を打つ鼓動を静めるために、隆志は自らのランニングシャツの胸元をキュツと押さえてから目を凝らした。

間違いなかった。

紺地に赤く可憐な金魚の絵をあしらった浴衣：斎木理穂子が、こちらに背を向けて、たった一人で川原の波消し用のブロックに腰掛けていた。

「……………斎木？」

隆志は恐る恐る声をかけた。理穂子が振り返った瞬間、自分で声をかけておきながら、隆志はビクツと飛び上がったしまった。自分の声に、理穂子が反応してくれるとは思わなかったから。

「島貫君？」

名前を呼ばれ、隆志は耳が熱くなるのを感じた。今の自分の顔は、きつと理穂子の浴衣の金魚よりも赤く染まっているに違いない。暗がりですぐ助かった。

「……………ど、どうしたの？　こんなところで」

隆志は詰まりながら言った。まともに理穂子の顔を見られない。

「みんなとね、花火見てる間にはぐれちゃって……………鼻緒も切れちゃって……………」

途中からは、涙声になって言葉にならなかつた。隆志は弾かれたように顔を上げ、そこで初めて理穂子が顔をクシャクシャにして泣いていることに気がついた。

しゃくり上げる理穂子の足元に目をやると、理穂子の言うとおり赤い下駄の鼻緒が切れ、素足からは血が滲んでいた。

「あ……………と……………えっと、ちょ……………ちょっと待ってて！」

隆志は言うなり、理穂子の足元にしゃがみこみ、鼻緒の切れた下駄を理穂子の足から奪い取った。

「え？　島貫君！？」

あつげにとられる理穂子の顔を、またしてもまともに見れないままに、隆志は赤い下駄を胸に抱えると、もう一度「待ってて」と言い残し、一目散に川原を駆け上がっていった。

祭りから帰る人の群れを掻き分けて、隆志は長屋に向かつて走った。胸にはしつかりと、理穂子の赤い下駄を抱いている。理穂子の形の良い、人形のように小さな足を思い出し、隆志はまた耳が熱くなるのを感じた。

息を切らせて長屋に帰り着くと、立て付けの悪い木戸を乱暴に開け、下駄を抱いたまま、母の寝室に駆け込んだ。

母が繕い物をする時に使う裁縫道具が詰まった箱を押入れから取り出し、適当な布切れを掴む。

ジジ……ジジ……と頼りない音を立てて、時々気まぐれに明かりの消える裸電球の下で、隆志は胡坐を組み、理穂子の下駄の鼻緒の修理に取り掛かった。

しかし、鼻緒の修理など経験があるはずもなく、焦る気持ちと裏腹に、汗で粘る手は思うように動いてくれない。あんなに暗い川原で、理穂子はたった一人で待っているのだ。どんなに心細いだろう。一刻も早く、戻らなければならぬ。

隆志は遂に観念して、下駄を放り出した。

その時、開け放した押入れから転がり落ちた母のサンダルが隆志の目に飛び込んできた。ピンクの派手なラメ入りのサンダルは、夏になると仕事の時に必ず履いていく母の気に入りだったが、いかにも「商売女」のようで、隆志は嫌いだった。

だが今は、そんなことは言っていられなかった。先週、修理に出し

て返ってきたばかりのその母のサンダルを抱え、隆志は長屋を飛び出した。

息を切らせてもといた川原に戻ると、理穂子は変わらず波消しブロックに腰掛けて、すすり泣いていた。

「…………ごめ…………。遅くなった」

隆志は膝に手をあて、身体を二つに折り曲げながら、息を整え終わる間もなく、ズイツと理穂子にピンクのサンダルを差し出した。

「どうしたの？ これ」

赤い下駄の代わりに毒々しいピンク色のサンダルを抱えて帰ってきた隆志に、理穂子は泣くのも忘れて目を丸くした。隆志は何も言わず、そのまま理穂子の足元にシャガミ込むと、理穂子の小さな白い足をとって、ピンクのサンダルをあてがった。

「…代わりに、履いて。きつと、痛くない」

隆志は身体の後ろに手をついて、夜空を仰ぎ、胸を上下させて息を整えた。やっとまともに空気を吸えたような気がしていた。

理穂子は呆気にとられていたが、足元のサンダルを恐る恐る手で確かめ、ようやく涙を止めた。

「…………ありがとう」

隆志が見上げていた、何も無い暗いだけの夜空に、突然、理穂子の笑顔が降ってきた。隆志は胸を射られたように動けなくなったが、ボソボソと口の中で「…別に」と呟いて、理穂子から目を逸らした。

「島貫君は、誰と来てたの？ 遅くなって、お家の人、心配するんじゃない？」

理穂子は泣いてクシャクシャになった顔を浴衣の袂で拭きながら、懸命に笑顔を作ろうとした。

「うちは、別に、平気だよ」

誰と来たのか…一緒に来る友達も親もいやしない。

そんな分りきったことが今更恥ずかしく、隆志はわざとぶっきらぼうに答えていた。

「折角の花火、見られなかったな」

理穂子は、花火の名残の煙もすっかり溶けた夜空を見上げて、寂しげに言った。

「さゆりたちとはぐれちゃって、慌てて、鼻緒まで切れちゃって…人もいっばいだし、花火見てる余裕なかった」
「大したことなかったよ」

隆志はしょんぼりする理穂子に力強く言った。

「全然、しょぼいもんだった。うん、皆言ってたよ。わざわざ出てきて損したって」

隆志が必死になってつく嘘に、理穂子はようやく少し笑った。

その時、ピチピチのサイズの合っていないズボンのポケットに押

し込められた、小さなマッチの箱が、隆志の指先に触った。

「齋木、花火…やる？」

咄嗟に口をついて出た言葉に、言った当の本人が一番ギョツとしていた。小首をかしげ、キョトンとした表情で自分を見ている理穂子に、隆志は急に恥ずかしくなり、身体中が熱くなるのを感じながら俯いた。

「…いや、花火って言ってもさ…いいんだ、忘れて」

「やりたいな」

屈託のない理穂子の声が、言い訳を探す隆志を遮って、明るく響いた。

「教えてよ、島貫君」

理穂子は浴衣の裾をクルツと器用に膝の裏にまとめて、隆志の傍にしゃがみこんだ。隆志は間近に迫った理穂子の顔を直視出来ずに、俯きながら、恐る恐るポケットから小さなマッチ箱を取り出した。

「島貫君、マッチ擦れるの？」

隆志が小さく頷くと、理穂子は感心したように言った。

「すごいねえ、私はダメ。火傷しちゃいそいで怖くって」

「これ…ただだよ」

「え？」

「俺の、花火…これだけなんだ」

そう言つと、隆志は潰れたマッチ箱の蓋をずらし、中にたった一本だけ残つたマッチ棒を理穂子に見せた。

「…よく、見てて」

隆志はマッチ棒を指先で丁寧に摘むと、理穂子の鼻先にかざして見せた。理穂子の大きな瞳がゆっくりと瞬きして、隆志の指先に集中する。

隆志はマッチ棒を擦つた白い跡がいくつも残る箱の側面に、そつとマッチ棒をあてがうと、手首を使ってシュツと勢いよく先端を擦りつけた。

一瞬、肩をすくめ思わずギユツと目をつぶつた理穂子だったが、閉じた瞼の裏をチラチラと照らす光に、固く閉じていた目を薄く開けてみた。

「…わぁ」

目を開けた理穂子の前には、チロチロと暖かいオレンジ色の炎、その向こうには、恭しく小さな炎を理穂子の前にかざす隆志の姿があった。

「熱くない？」

「全然」

理穂子は恐る恐る、先端に小さな炎を宿したマッチ棒を掴む隆志の右手を包むように、小さな両手を炎の周囲にかざした。

「きれい…」

理穂子は、自らの掌を内側から赤く染める火に、うつとりとしたため息をついた。

「さっきの空の花火よりきれいだね」

理穂子が首を傾げると、ポニーテールにまとめた栗色の髪がさらりと肩を流れた。長い睫毛が炎に照らされ、理穂子の色白の頬に濃い影を落とす。

「理穂子！！」

その時、土手の上から鋭い声がした。

「パパ」

振り返った理穂子は、隆志の右手を包むように火にかざしていた両手を離し、弾かれたように立ち上がった。

隆志の手から、もうすぐその一生を終えようとしていた小さな火が、こぼれて、落ちた。

息を切らせながら土手を駆け下りてきた若い男は、理穂子の前まで来ると、暗闇でもそうと分るほどの青ざめた顔で、理穂子を強く抱きしめた。

「…随分探したんだよ。さゆりちゃんたちが、お前とはぐれたって知らせてくれてね…心配させて、本当にお前って子は！」

「ごめんなさい、パパ」

理穂子が腕を回すと、若い父親はようやく、ホウツと深い安堵のため息をついた。

理穂子の肩に置かれた手は、男にしては華奢に骨ばっていて、袖口についたカフスボタンが鈍い光を放ち、隆志を弾いていた。

「…君は？」

その時、理穂子の父親は、マッチ棒の燃えカスを雪駄でもみ消しながらモジモジと立っている隆志に気がついて言った。

「島貫君だよ、同じクラス。足が痛いのを助けてもらったの」

隆志がモゴモゴと何事か答える前に、理穂子が父親の仕立てのよいシャツの裾を引っ張りながら答えた。

先代のこの街一番の家財道具屋を引き継いだ若き二代目は、父親というよりも、丸眼鏡をかけた童顔の、文学青年と呼ぶほうがピンとくるような風貌だった。

「助けてもらった？」

父親は、そう言われて初めて、娘の足に収まる毒々しいピンク色のサンダルに目を留めた。

「これ、君が？」

軟らかい口調だったが、一瞬、その整った眉根に浮かんだ嫌悪の色を、隆志は見逃さなかった。

どこからどう見ても「商売女」が履くようなその品のない色合いのサンダルは、粗末な衣類に身を包んでいるこの状況と合わせても、

自分の境遇を、いわずもがなに物語っていた。

「世話をかけたね。君の家はどこ？ 送っていくよ」

隆志はブンブンと大きく頭を横に振ると、理穂子たち父子にクルリと背を向け、一目散にその場を逃げ出した。

「あ、島貫君！」

理穂子の声が後ろで聞こえたが、隆志は振り返らずに構わず土手を駆け上り、長屋までの道のりをひたすらに走った。

理穂子との短い夢のような時間が終わった…

まだ青年とすら呼べそうな、若く育ちの良さを滲ませている理穂子の父親にまで、思わず嫌悪の表情を浮かべさせてしまう自分の存在が、たまらなく惨めだった。

翌朝早くに、理穂子の父親は、律儀にもピンクのサンダルと、高価な東京の菓子を持って、隆志たちの長屋を訪れた。

「齋木と申します。夕べは、娘が大変お世話になりました」

昨夜の客の相手をした酒も抜けぬまま、乱れた髪とネグリジェ姿のまま不機嫌に玄関先に出た母は、突然現れた、美しく品のよい顔立ちをした若い男に対して、見え透いた好色の眼差しを隠そうともしなかった。

「これ、隆志君が、うちの娘に貸してくれたものです。お困りだろうと思ひまして…持ってまいりました」

理穂子の父親が差し出したピンクのサンダルを見た途端、母の表情は一変した。

「ご丁寧にもどうも。確かに、夕べはこれを履いていなかったの、商売も上がったりでしたよ」

昨日化粧を落とさないまま寝入ったので、まだ紅の名残が滲む口元を皮肉気に歪めて、母は理穂子の父親の手から、ピンクのサンダルをひったくった。

「何のお構いもできませんで」

母はそう言うと、困惑したような理穂子の父を半ば強引に締め出すように、長屋の扉をピシヤリと閉めた。

「全く、商売女だと思って馬鹿にして！」

玄関にサンダルを綺麗に並べて置くと、母は奥の部屋にいた隆志のもとまで飛んでゆき、思い切り強く隆志の頭を張った。

「家財道具屋の娘にサンダルをくれてやっただっけ？まったく、色気付いて。このませガキ！」

「…ッてえ」

あまりの衝撃に涙が滲む。ジンジンと痛む頭を抑えながら、隆志は部屋の隅にふと目をやった。

「…へへ」

「人が怒ってるのに、何ニヤニヤしてんのよ！」

思わずこぼれた笑みに、容赦ない鉄拳が再び振り下ろされる。涙を滲ませながら、それでも隆志は笑みを抑えることができなかった。

部屋の隅には、返しそびれた赤い小さな下駄が、転がっていた。

あの時、たった一つしか持っていなかった小さな火種。

空に咲く花より綺麗だと、君が言ったから。

許されるなら僕は、調子に乗って、一晩中でも小さな火を焚き続けただろう。

君が笑ってから…

空の花より綺麗に、君が笑ってから…

(1)

「よし、最後にプリント配るぞ。一枚ずつとって、後ろに回せ」

終業のベルはもうとうに鳴り終わっていたので、担任教師は少し焦ったように、プリントの束を各列の一番先頭に座る子どもたちに配って回った。

「小学校最後の授業参観だからな。必ずウチの人に渡して来てもらうように。大事なお知らせだから、失くすんじゃないぞ」

ザワザワする教室で、担任教師は精一杯声を張り上げる。

子ども達が四年生の時、大学を出たてですぐこのクラス担任になったが、早いもので持ち上がりのこのクラスももう3年目。

子どもたちは小学校卒業を間近に控えていた。

「汚ねえから、触んなよ。菌がうつる」

前の席から、よく肥えた身体を捻って後ろの席の隆志にプリントを渡す時、伊藤健吾は指先で摘んだプリントを隆志の鼻先でヒラヒラさせて、「ウゲエー」と舌を突き出した。

隆志が目の前でヒラヒラするプリントを掴もうとすると、健吾は「おっと」と言って、プリントを床に散らした。

「何だよ、その目は」

健吾を睨みつけたまま、足元に散らばったプリントを拾うためにしゃがんだ隆志を、健吾はせせら笑った。

「おっと、わりい」

プリントに伸ばした隆志の手ごと、健吾が踏みつける。

隆志の手とプリントには、健吾の汚れた上履きの跡がクッキリと跡になった。

ガタッ！

「はい、挨拶するぞ。日直！」

思わず立ち上がり、健吾の胸倉を掴みかけた隆志だったが、担任の号令の声に遮られた。

「先生さようなら。みなさんさようなら」

「気をつけて帰れよ」

振り向きざまにニヤリと笑って、伊藤健吾は他のクラスメートと共に教室を後にした。

奥歯を噛みしめ、健吾の背中を見送る。

手の中で、汚れたプリントがグシャリと握りつぶされていた。

隆志が自宅の長屋に帰りつく頃には、日はもうすっかり暮れて、辺りは闇に包まれていた。

どこかの家の晩御飯の匂いが、隆志の鼻腔をくすぐり、腹の虫を

ギョルギョル鳴かせる。

「ただいま」

立て付けの悪い長屋の引き戸を開けた放した時、薄暗く埃っぽい玄関先で真つ先に隆志を出迎えたものに、隆志は落胆した。

(……まただ)

玄関には、ピカピカに磨かれた男物の靴が、几帳面に踵を揃えて居座っていた。

「ちょっと待ってて。息子が帰ってきたみたい」

奥の部屋からは、クスクス忍び笑いを漏らす母と男の声が聞こえてくる。

しばらくすると、母は安物の品のない下着の上に、毛玉がたくさん付着した古びたカーディガンを引っ掛けて、部屋から出てきた。

「隆志、あんたちよつとコレでどっか行ってな」

母は無無を言わず、隆志の手に小銭を押し付けた。

「いやだよー！」

「つべこべ言っていないで、少しは気を利かせなっていってんだよ」

頑なに拒む隆志の手を無理やりこじ開けて、小銭を握らせる母の手は、心なしか汗ばんでいて、隆志に本能的な嫌悪の感情を呼び起こさせた。

「しばらく、帰ってくるんじゃないよ」

ピシャン！

鼻先で、容赦なく扉が閉められる。

乱暴な音に反射的にギョツと目を閉じてしまう。

ゆっくりと目を開けた時、長屋の扉は完全に閉じられ、隆志は凍てついた寒空の下へ、たった一人閉め出されていた。

鼻をすすりあげながら、隆志は長屋の裏手に回った。

母が無理やり握らせた小銭では、夕飯らしい夕飯も買えはしない。何より空腹で、もう離れた店まで歩く気力もなかった。

ズルズルと地べたに座り込む。

冬でも半ズボンからむき出しの膝や肘は、カサカサにひび割れて粉をふいていた。

ガチガチと歯が鳴るのを何とか抑えようと、自分の骨ばった身体をきつく抱きしめるが、効果はなかった。

窓からは明かりとともに、母の睦言の声も微かに漏れている。

今夜の男は、客じゃない……

その位は、隆志にも分っていた。

耳を塞ぎ、隆志は闇の中で、一人小さくうずくまった。

6年生の教室には、黒板の前に金網で囲ったストーブが置いてあり、子どもたちはその上に、いつも持参した弁当を乗せて暖めている。

昼前は、色とりどりの弁当箱で埋め尽くされ、賑やかなストーブの上も、昼休みの終了と共に寂しくなる。六限目を終えて帰りのHRを残すのみとなった教室では、すっかり小さくなった火を囲んで、数名の女子がおしゃべりに興じていた。

その中には、齋木理穂子の姿もあった。

担任教師は帰りのHRで配布する資料を取りに、職員室へ戻ったきり、なかなか戻って来なかった。

始めは大人しく座っていた子どもたちも、次第に席を立ち、思い思いの場所にグループを作って陣取ると、話をしたり、突き合っつてふざけあったりしていた。

大人のいない冬の放課後の教室は、卒業間近の子どもたちの高揚と倦怠をない交ぜにして、どことなくけだるい空気に包まれていた。

「ねえ、理穂子はサイン帳誰に渡すの？」

お下げ髪の長田さゆりは、額に出来たニキビを気にしながら、隣でストーブに手をかざす理穂子に、そつと尋ねた。

「クラス全員よ」

「そっじゃなくってー」

キョトンと答える理穂子に、さゆりはじれつたそうに言った。

「ト・ク・ベ・ツ、なサイン帳だよ」

さゆりが身をくねらせながら「ト・ク・ベ・ツ」と強調する様子が可笑しくて、理穂子の対面でストーブに当たっていた萩原圭子が

思わず吹き出した。

「何、それ。さゆ、気持ち悪ッ！」

つられて、理穂子もクスクスと笑い出した。

「何よ、理穂子まで。分ってないなあ。私たち、もうすぐ卒業なんだよ。あんたたちはいないわけ？ 卒業前に思い出を残したい、大切な人」

理穂子と圭子はさゆりの言葉に顔を見合わせた。

「さゆは、いるの？好きな人」

「教えなーい」

立場逆転だった。

さゆりはなぜか勝ち誇ったように胸を張り、いつもは気にしている少々天井を向いた小さな鼻をツンと上げて、すました顔を見せた。

「教えなさいよ、誰なのよ！」

ストーブの向こうから、男勝りの圭子が手を伸ばして、さゆりのセーターの袖を掴もうとする。

さゆりは身を引いてそれをかわすと、悪戯っぽい目を輝かせて、圭子とストーブの周囲をクルクル回り、追いかけてこを始めた。

キヤーキヤー言いながら追いかけてこをする二人に盾にされて、理穂子は苦笑いを浮かべながら二人をたしなめた。

「やめなよ、二人とも。ストーブの周りでふざけて、先生来たら怒られるよ」

「だって、理穂子、さゆが白状しないから」

「圭子はガキなのよ」

「はあ？あんたに言われたくないわよ」

「はいはい、もうおしまい」

理穂子は二人の間に割り込んで、自分より背の高い二人の肩をポンポンと叩いた。

「特別なサイン帳の話はひとまず置いておいて、二人とも、先に私のサイン帳に書いてくれない？二人は、私の「トクベツ」でしょ？」

「理穂子」

そんな風にニツコリと微笑まれたら、男子でなくとも、逆らう気になんかなれない。

理穂子は人の心を掴むのがうまかった。

教室の一番後ろの理穂子の席に移動して、さゆりと圭子は理穂子からサイン帳の紙を一枚つつ手渡された。

「可愛い！ これ、どこで買ったの？」

ピンク色のウサギが跳ねるイラストがプリントされたサイン帳を見て、さゆりが歓声を上げた。

「パパが東京に商品の買出しで出張した時に、買ってきてくれたの」

理穂子が説明すると、さゆりは心底羨ましそうに頷いた。

「いいなあ、理穂子のパパは。若くてカッコいい上に、こんな可愛いものまで買ってきてくれるなんて。はあ、うちの親父と取り替えたいよお」

さゆりは左官屋をしている職人氣質の頑固一徹な自分の父親を思い出し、深いため息をついた。

「ああ、可愛いなあ」

よほど理穂子のサイン帳が気に入ったのか、さゆりは渡された紙を大事に手の中で包み、みとれている。

「そんなに気に入ったんなら、もう一枚あげるよ」

「え？ ホント!？」

理穂子の言葉に、さゆりの顔が一瞬でパツと輝いた。

「さゆ、あんた、でもそれ一枚は理穂子に書いて渡さなきゃダメなんだよ。折り紙みたいに溜め込んでたら、意味ないじゃん」

圭子にからかわれて、さゆりは口を尖らせた。

「分ってるよお」

「ふふ…卒業式までお願いね」

理穂子は笑いながら、さゆりのためにもう一枚サイン帳の用紙をバインダーから取り外して、手渡してやった。

「おい、お前ら、何やってるんだよ」

その時、楽しげにはしゃぐ理穂子たちを見ていた伊藤健吾が、突然、三人の輪の中に入ってきた。

「何でもないよ。伊藤には関係ないじゃん」

気の強い圭子が、真っ先に健吾に喰ってかかった。

いつもからかわれて、泣かされているさゆりは、眉をひそめて理穂子の袖を掴んだ。

「萩原には聞いてねえよ。斎木、それ何だよ？」

健吾は圭子を押しつけて、理穂子の前にズイッと突き進んだ。

「理穂子お」

さゆりは今にも泣き出しそうさ。

「サイン帳だよ。卒業の思い出に、みんなに書いてもらおうと思っ
て」

理穂子は、健吾の丸々太った顔の肉に埋もれた、小さくて眼光の鋭い目を見ても、全く動じずに、いつものようにニッコリと微笑んで答えた。

「サイン帳？」

健吾の眉がピクリと動いた。

「斎木の？」

「そつだよ」

すると、健吾は口の中で何事かモゴモゴ呟いたかと思うと、急に耳を真っ赤にして、うつむいた。

「……くれよ」

「え？」

「……俺にも、書かせてくれよ！」

拳を握り締めて一気に叫んだ健吾に、クラス中がギョツとして振り返った。

さゆりと理穂子、圭子はお互いに顔を見合わせた。

「何言ってるの、あんた。あんたなんか書いてもらつサイン帳なんかないわよ」

圭子が呆れたように言うと、健吾はムキになって答えた。

「何だよ、別にいいだろ！お前のサイン帳に書くなんて言ってないんだから。卒業の思い出なら、俺が書いたって、別にいいじゃんか！」

いつもの傍若無人な健吾からは想像も出来ないほど、顔を赤らめてうるたえながらも、健吾は救いを求めるように理穂子を見た。

「いいよ。最初から、クラスみんなに書いてもらつ予定だったから」「ちよつと、理穂子」

肘で小突くさゆりに「いいの」と目配せすると、先ほどさゆりに渡したように、理穂子は健吾にも、一枚サイン帳を手渡した。

健吾はそれを受け取ると、鼻の下を擦りながら、思わずほころんでしまいそうになる口元を必死に引き締めつつ、不自然にカクカクした足取りで、自分の席に戻った。

健吾と理穂子たちの一連のやり取りを見ていたクラスメイトたちは、らしくない健吾の様子を啞然として見送っていたが、健吾が自己に着くやいなや、今度は理穂子の元に殺到した。

「私にも書かせて！」

「何だよ、俺が先だよ」

「交換だよ、理穂ちゃんも私のに書いてよ」

理穂子の席の周りは、あっという間に人だかりになった。

「みんな、順番だよ。そんなに焦らなくてもクラス全員分あるってね、理穂子」

はしゃいで押し寄せる人波を制しながら、圭子が理穂子を振り返る。理穂子はただ笑いながら、ピンク色のサイン帳を気前よくみんなに配っていた。

隆志はそんな様子を尻目に、一人、理穂子とは遠く離れた自分の席で、丸くなった鉛筆の芯を削ることに意識を集中させていた。

ガタツ……

突然の振動で手元が大きく狂い、軽く指を切った。

「ッッ」

前の席の健吾が、思い切り椅子を後ろに引いて立ち上がったせいだ。

健吾は隆志を見向きもせず、先ほど手に入れたばかりのサイン帳を持って、真っ直ぐに、ようやく人だけが捌け始めた理穂子の席に向かった。

「斎木、失敗した。もう一枚くれ」

「は？バカじゃないの、あんた。理穂子、やることないよ。一人一枚だよ」

「しょうがねえだろ。わざと失敗したんじゃないんだから。斎木、もう一枚くれよ」

「あんたね！」

「圭子、いいよ」

放っておけば掴み合いでもしかねない二人を見て、理穂子は最後に一枚残ったサイン帳を健吾に手渡した。

「大事に書いてね。私の大切な思い出になるものだから」

「……うん」

理穂子の言葉にはしおらしく頷く健吾を睨みつけながら、圭子は溜息をついた。

「あーあ、最後の一枚あげちゃった。勿体ない。しかも、伊藤なんかにさ」

「うるせえよ！お前のサイン帳には、金もらっても書かねえよ！」

舌を出して圭子に大きくアツカンベーをした後、健吾は理穂子からせしめた二枚目のサイン帳を高々と掲げて、自分の席に戻っていた。

「あいつ、本ツ当にムカつく！」

「でも、理穂子、これでクラス全員に配れたよね」

怒りが収まらない圭子の隣で、さゆりが言った。

「……そうだね」

理穂子はほんの少し顔を曇らせて、空になったサイン帳のバインダーをパチンと閉じた。

ガコンッ！！

またしても机が大きく揺れて、先ほど切った指を口に啜っていた隆志は、今度はその衝撃で思い切り自分の喉を突いてしまった。

「……うっ！」

振り返った健吾は、今初めてその存在に気がついたというように隆志を見て、涙目になって咳き込む隆志を怪訝な顔で見つめた。

「何だよ？」

健吾は自分の手の中のものサイン帳を隆志が見ているのに気がつく、サツとそれを後ろ手に隠した。

「見てんじゃねえよ！」

乱暴に席につく健吾の頬は、赤く染まっていた。

(ああ、そういうことか……)

隆志には分ってしまった。

健吾は理穂子からもらった二枚目のサイン帳を、折れないようにそつとノートの間挟んで、勉強道具よりも、メンコやベーゴマがそのスペースの大半を占める机の引き出しの奥に、大切にしまった。ピンクの色彩がノートに挟まれ、健吾の机の奥にしまわれる様を、隆志はただ見ていた。

自分の手元には何も無い。

隆志は黙って、自分の何も持たない手を見つめ、まだ血が滲むその指を、静かに口に啜えた。

そのままそつと席を立ち上がると、誰にも気づかれずに教室を後にした。

片方の肩紐が外れたランドセルを、骨ばった背中引に引掛、隆志は俯きながらブラブラと校庭を横切り、いつも通る学校の裏門から帰路に着こうとした。

その時、不意に鼻を突いた独特の匂いに、隆志は足を止めた。思わず顔を上げると、古びた小さな焼却炉が、モクモクと黒煙を上げていた。

長年の風雪に晒され老朽化の著しい焼却炉は、校舎の裏手に忘れ去られたように置かれていたが、瀕死の人間が最後に吐き出す執念の祈りのように、絶え間なく、空へ黒い煙を吐き出していた。

それは、この焼却炉が未だ生きていることの何よりの証だった。引き寄せられるように、隆志は朽ちかけた焼却炉へ歩を進めた。重い扉に手をかける。グツと力を込める。

ギギ…ギギ…と金属の擦れる嫌な音がして、徐々に扉が開いていく。ある程度まで力を入れたとき、急に抵抗がなくなり、一気に扉が全開になった。

ブワッ……

熱風が隆志の頬を撫で、額の髪を揺らした。

隆志は、バランスを崩して、危うく炎の中へ転がり落ちてしまいそ

うになるのを、グツと堪えて踏みとどまった。

瀕死の焼却炉は、未だ消えることのない、生きた炎を内包して、隆志の目の前で赤々と燃えていた。

うねり、燃え上がる炎は、嫌なもの全てを呑み込み、焼き尽くしてくれらるうか。

隆志はしばし生き物のような動きを見せる炎に見惚れていたが、我に返ると、ボロボロのランドセルを肩から下ろし、自分もしゃがみこむと、ランドセルの中をガサガサと引つ掻き回し始めた。

錆ついたペンケースや、白紙のテストの答案用紙などを乱暴に鞆の外へ放り出すと、隆志は底から一枚の紙を取り出した。

『授業参観のお知らせ』

日付は明日だった。

結局、今日この日まで、母には渡せずじまいだった。渡したところで、あの母が来てくれるとは思えない。

それ以前に、十二歳になる隆志は、母の商売の意味するところを、いつの間にか肌で感じとっていた。羞恥だけではない、母への嫌悪感に似た感情を、まだ何と呼ぶのかは知らなくても、母を人前に出したくない理由には十分すぎる程だった。

隆志はその紙をギュツと握り締めると、大きく口を開ける焼却炉の扉の前で立ち尽くした。

炎は、隆志を誘うようにその手を扉の手前ギリギリのところまで伸ばしてくる。

キュツと口元を引き結ぶと、隆志は授業参観のお知らせの紙を、炎の中へ投げ入れた。

燃えてしまえ。

嫌なことは全て。

焼き尽くして、灰にしてしまえ。

最初から、何もなかったかのように……

あつという間に炎に吞まれて、跡形もなくその姿を消した紙の行方を見届けてから、隆志は焼却炉の重い扉に手をかけた。

「……見ちゃった」

その時、突然背後からかけられた声に、隆志は飛び上がらんばかりに驚いた。慌てて振り返ると、そこには斎木理穂子が立っていた。

「島貫君、いけないんだ」

理穂子は悪戯っぽく笑うと、ドギマギする隆志に構わずに、自分も焼却炉の扉の前まで歩いてきて、中を覗き込んだ。

「すごいね。焼却炉の中、見るのなんて初めて」

いつも掃除当番の際には焼却炉までゴミを運んでくるのは生徒たちの役割だったが、危険なので、ゴミを入れて火をつけた後は、必ず鎖と南京錠で扉を施錠するのが常だった。どうやら、今日はたまたま、学校住み込みの管理人が鍵をかけるのを忘れたようだ。

「……ど、どうして？」

こんなところに？……続きは言葉にならなかった。

学校の裏門へ通じるこの場所は、理穂子の帰路とは間逆の方向の
はずだ。

「帰りの会、終わっちゃったよ」

理穂子は隆志の質問には答えずに、炎を見つめたままで言った。
自分が帰りの会にいらなくても、担任は気づきもしないだろう。そ
れは、問題ではなかった。

「さつき、火の中に何を入れたの？」

「え？」

「当ててあげようか」

理穂子は微笑むと、黙って自分の赤いランドセルを地べたに下ろ
した。そして、先程の隆志の真似をするかのように、スカートの裾
から下着が見えないように気を使いながらしゃがみ込み、ランドセ
ルの中を探り始めた。

「これ」

理穂子は宝物を見つけて自慢する子どものように、隆志の目の前に
一枚の紙を突き出した。

それは、先程隆志が抹消した「あの紙」と同じものだった。

「私、多分、島貫君と同じこと考えてるよ」

隆志は訳が分らずに、理穂子の顔を凝視した。

理穂子は微笑を浮かべたまま立ち上がると、隆志から視線を逸ら
さずに、片手に持った「あの紙」を、何の躊躇もなく、ヒラリと炎
の中へ投げ入れた。

「あっ!!」

隆志が慌てて伸ばした手をすり抜けて、授業参観のお知らせは、炎の中へ吸い込まれていった。

「どうして?……」

先ほどから、隆志は同じセリフしか口にしていない。

目を丸くする隆志の顔を見て、理穂子は思わずプツと吹き出した。

「聞いてばかりだね。島貫君と同じだよ。私もパパたちに、授業参観に来てほしくなかっただけ」

理穂子はまだ啞然としている隆志の顔から目を逸らし、ゆっくりと炎の方へ視線を移した。

「……キレイだね」

隆志も理穂子につられて、炎に目を落とす。

「汚いものが、燃えているのにね」

「キレイにするんだよ」

隆志の初めてのまともな答えに、理穂子は少々面食らったように隆志を見た。

「汚いものも、嫌なものも、全部飲み込んで、キレイにするんだ。だから、燃えてる火は、こんなにキレイなんだ」

ふーん、と理穂子は感心したように頷いた。

「生まれ変わるんだね」

「うん、そう」

日の落ち始めた校舎の隅で静かに燃える火は、理穂子の白い額や頬を赤く染め、色素の薄い栗色の髪を金色に照らし出していた。

「……齋木」

「うん？」

隆志は炎を見つめる理穂子の横顔を眺めながら口を開いた。

「何か、あったの？」

理穂子は視線を上げずに、口の端だけに薄く笑みを作った。しかしその瞳は、笑ってはいなかった。

「島貫君、授業参観のこと秘密ね」

「え？ああ、うん」

ブオッ

その時、一際大きな炎が、空気をはらんで吹き上がった。

「危ない！」

隆志は咄嗟に、理穂子の肩を抱き、炎に背を向けて理穂子の身体をかばおうとした。

炎はすぐにその勢いをなくし、焼却炉の中へ戻っていった。

「う、ごめん…大丈夫？」

我に返ると、思わず理穂子の身体に触れてしまったことが恥ずかしく、隆志はおずおずと、理穂子の肩に置いていた手を離れた。理穂子は突然のことに目を丸くしていたが、小さな声で「ありがとう」と呟いた。

隆志は理穂子から離れた手の行き場に困って、意味もなく自分のズボンの尻の部分に、ゴシゴシと擦り付けたりしていた。

「島貫君」

理穂子は落ち着きを取り戻した声で、隆志の名を呼んだ。

「私たち、共犯だね」

理穂子は、二人分の「授業参観のお知らせ」を呑み込んで燃え上がる焼却炉の炎を見つめながら、そつと呟いた。

それから、地べたにおいたままにしていた自分のランドセルの中から、一冊のノートを取り出し、一番後ろのページを丁寧に破って

隆志に差し出した。

「これ……」

「え？」

「サイン帳。ごめんね、こんなので」

そう言うと、理穂子はクスリと笑いを漏らした。

「……トクベツ、かあ」

「何？」

「……うん、こっちの話」

理穂子はなおもクスクスと笑うと、隆志の手にノートの切れ端を握らせて、念を押すように言った。

「卒業式の日までに書いてね」

「……うん、分かった」

理穂子の強い眼差しに、隆志も真面目に頷いた。

この時はまだ、何も知らずにいた。

伊藤健吾は窓から身を乗り出し、次々と校舎の中に入ってくる親たちの顔を確認しては、あれは誰の親だ、これは誰の親だと騒いでいた。

今日の授業参観は、理科の実験だった。

親たちが実験室に入ってきて、後ろの方へ並び始めても健吾がまだ騒いでいたので、担任教師は大勢の親たちの前で健吾をたしなめた。

「このバカ！先生の言うこと聞いて、席に着きなさい！」

主人と二人で八百屋を経営する健吾の母親は、折角気合をいれてパーマを当ててきた髪を振り乱し、顔を真っ赤にして健吾の坊主頭に拳骨をくれた。

他の親たちから失笑が起こる。

健吾は拳固をくらったばかりの頭をさすりながら、しぶしぶ席についた。

席は教室の一番後ろ。

四人一組の班で、隆志も同じ組だった。

隆志は来るはずがない母のことを頭では分かっていても、チラチラと後ろを振り返っては、本当に来ていないか確かめていた。

姿が見えなくてホツとする気持ちと裏腹に、心のどこかでは、他のクラスメイトの母親たちから聞いて、「何で教えてくれなかったのよ！」と怒りながら、ひょっこり現れるのではないかと期待す

る自分もいた。

「おい、何ボーっとしてんだよ。手伝えよ」

隆志がソワソワしている間に、いつの間にか授業は始まっていたらしく、実験道具を手にした健吾が、隆志の足を軽く蹴飛ばした。

今日は「蒸留水の生成」をやることになっていた。

担任教師は予め決めておいた各班の当番を教卓の周囲に集めて、蒸留水生成に使うフラスコや、それを載せる金網などを順々に配っていた。

「火を使う実験だからな。くれぐれも慎重に。悪ふざけしながらやるんじゃないぞ」

担任教師は実験のやり方を一通り教えた後、生徒たちの気を引き締めて、実験に移るよう指示を出した。

「準備が出来た班から火をつける」

隆志たちの班も、既に実験の準備は終わっていて、後は机の中央に置いてあるマッチで、ガスバーナーに火をつけるだけだった。

「やろうぜ、健ちゃん」

班の一人が言った。

目立ちたがり屋の健吾の、何でも一番にやらねば気がすまわずに不機嫌になる性格を知り尽くしている仲間には、当然初めにマッチを擦るのも、健吾の役目であろうと考えて、健吾を見ていた。

しかし、いつもだったら真つ先に「俺がやる！」と言い出しそう

な健吾が、今日に限って大人しい。机の上のマッチ棒に、手を触れようもしない。

他の班はもう先に火をつけ始めている。

「健ちゃん？どうしたんだよ、早くやるうぜ」

焦れた仲間の一人が催促すると、健吾は怒ったように机の上のマッチ棒をひったくった。

「うるせえな！今やるうと思ってたんだよ！」

健吾は班全員の顔を睨みつけると、震える手でマッチ箱の蓋を開けた。

「や、やるよ！見てろよ。何だよ、これぐらい」

ブツブツ言いながら、不慣れな手つきでマッチ棒の先端を箱の端に押し当てると、目をギョッとつぶって、マッチ棒を擦った。腰が完全に引けている。

ポキッ……

頼りない音がして、マッチ棒は二つに折れた。

「な、何だよ、これ。古くなってるんじゃないか？へ！も、もう一回」

もう一本取り出すと、今度も同じように目をつぶってマッチを擦った。今度は、シュッと短い音を立てて、マッチ棒は小さな火を噴いた。

「ヒッ！」

ところがその瞬間、マッチ棒を握っていた健吾は、手の中で命を持った火に驚いて、短い叫び声を上げると、マッチ棒ごと放り出してしまった。

「あっつ！」

健吾が放り出した火は、隣にいた隆志のトレーナーを焦がし、隆志の足元に落ちた。隆志は素早くそれを足で揉み消した。

「何やってるんだ、そこ！」

騒ぎに気がついた担任が隆志たちの席まで飛んできて、焦げた床の痕を見て言った。

「健ちゃんが、火落としちゃたんです」

班の一人がそつと報告した。他の班の子どもたちも、皆実験の手を止めて、様子を伺っている。

「……健ちゃん、マッチ怖いんじゃない？」

その時、ヒソヒソと耳打ちしあうクラスメイトの言葉にキツとして顔を上げた健吾は、声のした方を振り返って怒鳴った。

「怖いわけねえだろ！」

「伊藤、いい加減にしろ！」

担任は、先ほど母親に殴られたばかりの健吾の頭に、もう一つ強烈な拳骨を食らわせた。

「火を使う実験だから、絶対にふざけるなって言っただろう！お前はもう実験する資格ない。廊下に立ってろ」

親の前ということがあっても、担任教師は躊躇することなく、健吾を廊下へ追いやった。健吾の母親は俯き、穴があったら入りたいという様子で小さくなっていた。

「さあ、実験の続きに戻るぞ。いいか、みんなもくれぐれも注意してやるように」

担任は何事もなかったかのように教卓へ戻ると、集中力の途切れた生徒たちに、もう一度気を引き締めて実験にあたるように促した。

「俺らもやろうか」

健吾がいなくなり3人だけになった隆志たちの班も、実験は進めなければならぬ。

「どうする？だれがやる？」

「俺は、いいよ。やだ」

「俺も……」

マッチの火を擦ることに及び腰になっている二人は、チラリと隆

志の方を伺った。

「俺がやるよ」

「あ、本当に？頼むわ」

二人はホツとしたように顔を見合わせると、机の上に放置されたマッチ箱を、隆志の方へ押しやった。

隆志はマッチ箱を拾い上げると、いつものように慣れた手つきで、シユツといとも簡単に火をつけ、仲間の一人が空気の量を調整したガスバーナーの上に火をかざし、点火した。

「すげ……」

隆志たちのグループを見守っていた他のクラスメイトたちからも、思わず感嘆のため息が漏れた。

隆志の手つきはあまりにも熟達していて、何の無駄もない滑らかな動きだった。

「島貫君」

隣で実験していた女の子だけのグループに入っていた理穂子は、そつと隆志に声をかけた。

「私たちの班も、誰もマッチ怖くて擦れないの。やってくれないかな？」

「うん、いいよ」

隆志は頷き、理穂子たちの机に向かった。今度も同じように、優雅な動きでいとも簡単に火をつけた隆志に、同じグループにいたさゆりや圭子も目を丸くした。

「ちよつとお、意外だあ」

「島貫つて、勇気あるのね」

隆志は照れくさそうに頭をかくと、無言で自分のグループへ戻った。

顔を上げたとき、理穂子と目が合った。微笑む理穂子につられて、思わず照れ笑いがこぼれた。

廊下からは、健吾が涙目で、恨めしげに教室の中の様子を覗いていた。

隆志の帰宅の足取りは軽やかだった。

壊れかけたランドセルが、北風を受けて背中ではパタパタと鳴っていたが、その音さえも、隆志の胸を小気味よく弾ませていた。

(島貫つて勇気あるのね……)

(ちよつと、意外だわ……)

クラスメイトの囁く声と、同時に浮かぶ理穂子の笑顔。

「…へへ」

先ほどの授業参観での光景が自然に頭の中で何度も何度も繰り返して再現され、その度に思わず笑みがこぼれる。隆志は寒さで赤くなりすりむけた鼻の頭を、得意げに親指の腹でこすりあげた。

「ただいまー!!」

いつもより大きな声を張り上げ、心なしか胸を張り、長屋の扉を勢いよく開けた。

浮かれていたので、いつもは母の男がまだ家の中にいるかどうか確認するために必ず見る玄関先の靴の有無も、気づかずに母親のいる奥の部屋へと向かった。

「母ちゃん、聞いてよ、俺今日ね…」

ドンッ!!

その時、突然部屋から出てきた大きな身体に体当たりされ、隆志はもんどりうって後ろへ転がった。

「あ、ごめん。大丈夫かい？」

ぶつかった大きな身体の持ち主も突然の隆志との衝突に驚いた様子で、転がった隆志に向かって、手を差し伸べてきた。

「痛えな！」

痛む尻をさすりながら、抗議してやろうと相手を見上げた隆志の目の前を、一瞬鈍い光が横切った。

仕立てのよいシャツに、行儀よく並んだ二つのカフスボタン。徐々に視線を上げていった隆志の目に、信じられない男の顔が飛び込んできた。

「……ナンで、あんたが？」

隆志は走っていた。

ただ闇雲に、息が切れてこのまま死んでしまっても構わないと思うほど、全力で走っていた。

気がつけば、また学校に逆戻りしていた。

もうすっかり日の暮れた、校舎の裏手の古びた焼却炉の前で、膝に手をつき、爆発しそうなほど鼓動を速めた胸を押さえながら、初めて息をついた。

「……見たんだ」

その時、誰もいないと思っていた焼却炉の裏から、小さな影が現れた。

隆志は息を切らせたまま顔を上げた。

「……知って、たの？」

小さな影はコクリと頷いた。暗くて表情は見えない。

「……いつから？いつから知ってたの？」

小さな影は今度は静かに首を横に振った。

「分らない。最近だよ。でも、ママも知ってる」

隆志は何が何だか分らなくなっていた。
酸素不足でクラクラする頭で視界が大きく歪み、思わずその場に
崩れ落ちた。小さな影が駆け寄る。

「大丈夫？」

隆志は俯いたまま、吐き気を堪えるのに精一杯だった。

「授業参観のお知らせ…渡してたって、きっと二人は来なかったよ。
パパの手帳覗いたの。毎週、木曜はあの人に会う日なんだよ」
「何で、何でこんなことっ！」

隆志は砂利だらけの地面を思い切り拳で殴りつけて叫んだ。

「…ゴメン、本当に…ゴメン」

「どうして、謝るの？」

小さな影は優しく首をかしげて言った。

「可笑しいよ、島貫君が悪いんじゃないのに」

小さな小指が、隆志の小指に絡められる。

「…共犯って、こういう意味だったの？」

隆志が問いかけると、影は寂しそうに小さく頷いた。

「今日はもう、火、見れないね」

影が焼却炉の方を振り向いて言う。今日はしっかりと南京錠がか
けられていた。

「俺、持つてる」

隆志はポケットを探った。先ほどの実験であまったマッチ箱をこ
っそりくすねていたのだ。

絡めた小指を離し、小さな火を灯す。

目の前の影が、ほのかな輝きを持って、見慣れた理穂子の顔に変
わる。

「……泣かないで」

理穂子はそつと、隆志の頬に手を伸ばした。理穂子に触れられて
初めて、隆志は自分の頬が濡れていることに気がついた。

「斎木こそ」

隆志もお返しに、火を持っていない方の手で、理穂子の頬を拭
いた。

拭っても拭っても、効果はなかった。

二人は小さな灯火を囲んで、堰を切ったように、とめどもなく溢
れる涙を、お互いに拭いあった。

「…島貫君」

やがて、理穂子は消え入るような声で小さく囁いた。

「私、この街を出て行くの。ママと二人で」

隆志の顔が不安に歪む。

「ごめんね、黙ってて。みんなには、まだ内緒なんだ」

理穂子は精一杯の笑顔を作ろうとするが、上手くはいかなかった。小さな炎に照らされて金色に輝く涙の跡に、新たな涙がまた一筋、静かに零れ落ちた。

急行電車を待つ国鉄の駅は、卒業式を終えたばかりの六年生の子どもたちで溢れかえっていた。

「理穂子のバカ！こんな大事なことずっと黙ってて。もう友達やめてやる」

萩原圭子は、目を真っ赤に泣き腫らし、困ったように微笑む理穂子に食ってかかっていた。長田さゆりはその横で、もはや言葉も紡げないほど泣いている。他のクラスメイトもほぼ同様で、ワンワン泣きながら、理穂子を囲んでいた。

「ごめんね。圭子、さゆり。みんなありがとう。でも、絶対また遊びにくるから。中学の文化祭には呼んでよ、ね？」

「理穂子ー」

「理穂ちゃん、そろそろ時間よ」

「うん、ママ」

理穂子は母親に促され、伊藤健吾がしっかりと持っていた自分の荷物に手を伸ばした。

「伊藤君、ありがとう。私、もう行くね」

健吾は無言で、理穂子の鞆をムンズと掴んだ手を離さない。

「伊藤君？」

「ヤダ！」

「え？」

健吾は理穂子の鞆を大事に抱いたまま、イヤイヤをする子どものように身体を左右に振って理穂子に鞆を渡さなかった。

「健ちゃん、やめろよ！斎木に鞆渡してやれって」

見かねたクラスメイトの男子何人かが体格のよい健吾を羽交い絞めにして、何とか理穂子の鞆を放させた。

「嫌だよ！俺は、嫌だからな！転校なんて、認めないぞ！」

健吾はグツと歯を食いしばって涙を堪えながら、憎まれ口をたたいた。

「健ちゃん、いい加減にしろよ」

「…ありがとう、伊藤君」

理穂子は優しく微笑んで、母親の待つ電車に乗り込んだ。

「理穂子、理穂子！ちゃんと、手紙ちょうだいね。絶対、絶対、遊びに行くからね」

窓際の席についた理穂子の元に駆け寄って、女子たちは理穂子と窓越しに最後の別れをした。

「うん。みんな、私のこと忘れないでね」

トウルルルルル……

発車のベルが鳴った。

「理穂子お……」

列車から離れた圭子やさゆりが涙を流す横を、理穂子に乗せた列車は静かに滑り出す。

「齋木ツー!!」

その時、人垣の中を掻き分けて、息を切らせた隆志が突然飛び出してきた。

「島貫君?!」

驚いた理穂子が、走り始めた列車の窓から身を乗り出す。

「理穂ちゃん、危ないわ」

隣に座っていた母親が、慌てて理穂子の身体を引き戻した。

隆志は徐々にスピードを上げていく列車を追いかけて走りながら、一枚のボロボロになった紙切れを差し出して叫んだ。

「卒業式までの約束！守ったから！」

理穂子の手にもメモ用紙が渡ると同時に、隆志はプラットホームの終わりに取り付けられていた策に激突し、コンクリートのホームに転がった。

見送る列車の窓から顔を出した理穂子が、隆志の渡した紙の切れ端を高く挙げて、隆志に向かって大きく振っているのが見えた。

列車の中で、理穂子はそっと、隆志に手渡された紙切れを開いてみた。ボロボロになった紙は、見覚えのある自分のノートの切れ端だった。

紙の中央には、不器用な字でたった一言綴られていた。

『秘密は、守るから』

理穂子はボロボロの紙切れを胸に抱いて、隣で眠る母親に気づかれないよう声を殺して、そっと嗚咽を漏らした。

君がいなくなった灰色の街に残り、君と共有した秘密を一人抱えて生きる。

幼い僕には、耐え切れない程の孤独だった。

それでも、幸せにしか縁がないような君を、理不尽な哀しみに追いやった女の息子が受ける罰には、まだ足りなかつたけれど。

でも、あの日君と囲んだ小さな灯火だけが、その日から僕の生きる糧になつたんだ。

〈 第3話「灯火」 > 完く 〉

初秋の朝は、高い空と澄んだ空気を予感させて白み始めている。日中はまだ蒸し暑いが、朝夕は凜と冷たく張り詰めた秋の気配が漂っている。

薄暗い地下のスナックから出てきた女は、肺の中の暗く淀んだ空気を全て吐き出すべく、大きく伸びをして深呼吸した。

「ふああああ！」

切れ長の目じりに涙が滲む。身体に密着するデザインの赤くケバケバしいスーツに身を包んだ、いかにも水商売といった風情の女だったが、ツンと尖った鼻先と、奥二重の眼差しは個性的で美しかった。

女はすっかり明るくなった街の中で、まだ弱々しい電飾の光を放っている、店の看板の電気を切ろうと屈みこんだ。

看板には『スナック 不知火』と書かれている。

「よいしょっと」

女が手を伸ばして灯りのスイッチに触れようとしたその時、グニヤリと奇妙な感触のものが手に触れた。

「ヒッ！！」

思わず小さく叫んで飛び上がると、電飾の看板の下に隠れるように座っていたスタジャンの少年が立ち上がった。

「何だよ、アカリさん。脅かすなよ」

「それはこっちのセリフよ！心臓止まるかと思ったじゃない。マサ、こんなところで何やってんのよ。あんた、とつくに帰ったんじゃないかっただの？」

マサと呼ばれた少年は、シンナーでボロボロになった歯を隠そうともせず、しまりのない顔で笑いながら、きつくパンチをあてた頭をボリボリ搔いた。

「いやあ、俺もさあ、帰ろうとしたんだよね。でもさあ、まいつちやうんだよね。この娘、伸びちゃって全然こつから動かないんだもん」

マサが顎でしゃくる方へ目を凝らして、女は本日二回目になる「ヒッ！」という叫び声をまた上げる羽目になった。

さっきまでマサが座っていたその場所に、二本の細い足がニユッと伸びていた。

「な、何よ？何なの、これは？」

女はわけが分らなくなつて、マサの擦り切れてボロボロのスタジオヤンの袖を掴んだ。

「俺に聞かれたつて分かんないよ。昨日さ、俺らの集会にロクの兄貴が連れて来た子でさ。可愛い顔してつから連れて回ってたんだけど、変な子でさ。全然笑わないし、しゃべらないし、つまんないから追い返そうとしたら、こんな風に出来上がっちゃって、テコでも動かねえんだ。こんなんじゃない、バイクにも乗せられないし。俺もっ参っちまって」

マサは本当に弱つたという顔をして、恨めしげに横たわる二本の

足を眺めていた。

すると、突然思い立ったかのように女の顔をまじまじと見つめ、名案が浮かんだと言わんばかりに顔を輝かせて言った。

「後は任せた！」

「は？ちよつと、マサ」

「俺んちのアパートは柄の悪い男共が五人も六人も雑魚寝してるんだぜ。そんな危険地帯に、こんなお姫様連れて行けるかよ。だろ？女は女同士、頼んだぜ！恩にきる、アカリさん」

言うが早いか、マサはさっさと道端に止めてあったオンボロの原付バイクに跨って行ってしまった。

「マサ！ちよつと、待ちなさいってば！この貸しは高くつくわよ！」

女は早朝の路地裏で声を張り上げたが、マサの安物の虎の柄が入ったスタジャンは、あつという間に角を曲がって見えなくなった。

白い布製の、中学校指定の肩掛け鞆をタスキ掛けにして、隆志は帰宅の途についていた。

別に急いでいるわけでもないのだが、隆志は歩くペースが早いらしく、同級生が小走りするのと同じくらいのスピードで歩くのが癖になっていた。

隆志が歩くたびに、鞆の蓋はパタパタと風を含んではためく。

長屋の前まで来て、隆志はふと足を止めた。鞆も一緒に口を閉じる。

隆志の家の前には、長身の男がたたずんでいた。

夕日に逆光になって顔は見えないが、隆志はその人物をよく知っていた。短い期間ではあったが、一つ屋根の下で暮らしたこともあった。

「……隆志君」

「また来てたの？」

隆志は男を振り向きもせず、制服の襟元をゴソゴソと探って、伸びきったゴム紐で首からぶら下げた、家の鍵を取り出した。

「母さん、今日も遅いよ」

鍵を差し込んで回した後も、立て付けが悪く中々開かないドアをガタガタと乱暴に揺すりながら、隆志が素っ気無く告げると、男は「そう」とだけ力なく呟いた。

「今日も、待つてる気？」

ガタンツ！と大きな音がして、ようやく扉が開いた。

一瞬の静寂の後、男は決まり悪そうに頭を掻きながら微笑んだ。

「あ、大丈夫だよ。君に迷惑はかけないから」

「……ご勝手に」

隆志はため息をつくつと、男を外に残して、自分は一人家の中に入った。

貧しい家の中にあつては、場違いとも思える重厚な作りの柱時計が、ボンボンと六時の鐘を鳴らす。

隆志は一直線に台所へ走って、昨日の夕飯の残りである焦げたこ

飯を漁った。しゃもじについている干からびた米の一粒一粒まで、口をつけて食べるように食べた。

ろくな栄養を与えられず、相変わらずガリガリに痩せてはいたが、なぜか隆志の背はグングン伸び、中学三年の今のクラスでは、背の順では後ろから三番目だった。成長期にあつては、当然腹も減る。

水道の蛇口をひねり、流れる水を横からゴクゴクと喉を鳴らして飲んだ。飛沫が、短く刈り込んだ髪に跳ね、夜露のような小さな玉ができた。

決して行儀がいいとは言えない夕食を終えて唇を拭くと、隆志は鞆を放り出し、それを枕にしてゴロンと横になった。

窓から差し込む夕日は、燃えるように赤い。

隆志は眩しさに目を細めるうちに、だんだんと瞼が重くなつてきて、そのうち本当の眠りに落ちていた。

ボーン、ボーン、ボーン

静寂を割る柱時計の音に慌てて目を覚ますと、辺りはもうすっかり暗くなっていた。

隆志は目を擦りながら裸電球のスイッチを探した。

ボウツとした薄明かりがだんだんとその濃さを増してきて、部屋が明るくなる。

時計を見ると、既に夜の9時を回っていた。

母はまだ帰っていない。珍しいことではない。

新しい男に熱を上げるときは、帰らないこともしばしばだ。そんなことは、隆志にはもう慣れっこだった。

ふと、暗い玄関の方へ目をやる。

(さすがに、もういないよな……)

隆志は埃だらけの床で寝たせいで汚れた制服のズボンの尻を叩きながら、何の気なしに玄関の方へ向かった。

その時、表の公道を走る車のライトが、擦りガラスになった長屋の玄関の引き戸を照らし、そこにもたれかかるように座っている影を浮かび上がらせた。

隆志は舌打ちをして、踵を返した。

台所まで戻って、落ち着きなく立ったり座ったりしていたが、やがて唇をキュッと引き結んで意を決すると、釜の蓋を開け、先ほどの自分の食べ残しの冷や飯をわし掴みにした。

ガラスと勢いよく玄関の引き戸を開けると、そこに体重を預けてもたれかかっていた男はバランスを崩し、危うく倒れそうになった。

「なんだ、隆志君か。ビックリしたなあ」

無様によるけながらも、呑気に微笑む男の鼻先に、隆志は無言で先ほど作ったばかりの大きな握り飯を突きつけた。

「くれるのかい？これ、隆志君が作ったの？」

「いいから、食ってさっさと帰りなよ。いくら待たたって無駄だよ」

隆志は無理やり、男の手に握り飯を押し付けた。

「じゃあ、ご馳走になるよ。どうもありがとう」

男はふわりと笑うと、手づかみでもどこか上品さを漂わせながら、隆志の握り飯を口に運んだ。

「お腹がすいている時に食べるものって、どうしてもこんなに美味しいんだろっねえ」

人の良さそうな笑みを浮かべながら、本当に美味そうに冷や飯を頬張る男を見ている内に、隆志は無性に腹が立ってきた。

「訪ねる相手、間違ってるんじゃないの？」

男は冷や飯を口に運ぶ手を止めない。ただ口の端に苦い笑みを浮かべただけだった。「暖簾に腕押し」のような男の反応に苛立って、隆志は先ほどよりも思わず声を荒げた。

「飽きられたんだよ。あんた、そんなことも分かんないの！？そういう女なんだよ。くだらない、アバズ……」

「君には、分らないだろうね」

隆志の言葉を遮って、男は悲しげに呟いた。

「……ごめんよ。君と理穂子には、それしか言えない。何を言っても言い訳にしかないけど、どうしようもないんだ」
「それ食ったら、さっさと帰ってよ」

ピシヤリ！と音を立てて、隆志は扉を閉めた。

車のライトが照らし出す男の細身の影と背中合わせになりながら、隆志はギリリと唇を噛みしめた。

そうしていないと、不覚にも涙がこぼれてしまいそうだった。

「ちょっと、そっち持ってよ！」

「ダメ、そこさつき色塗ったばかりなんだから、触らないでよ！」

放課後の三年生の教室は、本番まで残すところあと二週間となった文化祭の準備でんやわんやしていた。

夏を最後に部活を引退した三年生たちは、有り余るエネルギーと迫り来る高校受験からの最後の逃避手段として、遅くまで残って準備に精を出していた。

「島貫、ちょっとそこ押さえてて」

皆が忙しく駆け回る中をこっそり抜け出して帰ろうとしていた隆志は、タイミングよく、萩原圭子に捕まった。

「しっかり押さえててよね」

圭子は口に五寸釘を咥え、プロの大工顔負けの迫力で、隆志に押さえさせた立て看板に釘を打ち込んでいった。

その横では長田さゆりが、文化祭の呼び込みのための特大ポスターのペイントに励んでいた。

「オーライ、オーライ……あつ！」

その時、教室の中で元野球部の仲間とキャッチボールをしていた伊藤健吾が、ボールを取り損ねて、さゆりにつまずいた。

「きゃっ！！」

短い叫び声とともに、さゆりは健吾と一緒に、ペイントしたままでまだ乾いていないポスターの上に倒れこんだ。

体操着を着ていたさゆりの胸には、黄色いポスターカラーがべつとりと付着していた。健吾の方は、赤いペイント部分に顔からつつこんで、もつとひどい有様になっていた。

「バカ！伊藤のバカ！どうしてくれるのよ、こんなのひどい！！」

横にいた圭子は烈火のごとく怒った。さゆりは既にしゃっくり上げている。

「……俺のせいじゃねえよう。河合がさ、コントロール悪いからさ」

バチーンッ！！

ぶつぶつ言い訳する健吾に、圭子の平手打ちが飛んだ。

「痛ええええ！！！」

健吾の赤いポスターカラーの顔には、くつきりと圭子の手形が残った。

「うっさい！この水太りデブ！！」

「……元、デブだよ」

健吾が口を尖らせながら、小声で訂正する。

健吾は中学に上がった最初の夏に、入部した野球部の鬼のしごきにあい、別人のように痩せた。

大量に流した汗とともに、贅肉も落ちたのだが、健吾のこのひと夏での変身ぶりは、校内ではちょっとした騒ぎになるほどだった。部活をしている時は真っ黒に焼けていたが、元々が色白な性質なので、引退した今では色白な部分は戻ってきていた。

「このポスターのデザイン、小学校の卒業文集に理穂子が書いた絵をモデルにしたんだよ。折角、理穂子も呼んで見せようと思って準備してたのに、台無しじゃない。責任とってよ！」

「え？斎木が来るの？」

早口でまくし立てる圭子の剣幕に圧倒されていた健吾だが、圭子の口から「理穂子」という言葉を聞くや否や、現金にもパツと顔を輝かせた。

「さゆが声かけてるのよ。ね、さゆ？」

「え？ ああ、うん」

突然話をふられたさゆりは、キョトンとして、しゃっくり上げるのをやめた。

「理穂子、来るんだよね？あんだ、この前東京のおばさんの家に行

った時、ついでに理穂子に会って声かけてくるって言ったじゃない
い」

「……あ、うん。そうだったんだけど……」

さゆりの答えはどうも歯切れが悪い。圭子は少タイライラして言
った。

「何なの？さゆ。理穂子に会ったんじゃないの？」

「あ、会えなかったの。たまたま、あの子出かけてて……その、お
ばさんに伝言は頼んだよ」

「何よう。毎年誘ってるのに、一度も来られなかったじゃない。も
う中学最後なんだよ。絶対連れて来なきゃ」

「……うん、そうだね」

隆志は暗く沈んださゆりの顔に、何かひっかかるものを感じた。

「来たくても、来れねえんじゃないの」

健吾はわざと隆志から視線を外して、聞こえよがしに言った。

「この街から本当に出てかなきゃいけない奴は、他にいるのにな」

小さい街にあつては、人の噂はあつという間に広がる。理穂子た
ち母子が出て行った理由は、すぐに町中に知れ渡っていた。

「この教室から出て行かなきゃいけない奴は、あんたしかいないわ
よ」

圭子のキツイ一言に、健吾は顔をしかめて立ち上がった。

口では圭子に敵わない。いや、体力でも、バスケット部の元エースの

長身の圭子に敵うかどうかは、甚だあやしい。圭子は健吾の天敵だった。

隆志は一人もくもくと、健吾が汚したポスターの修繕に取り組んでいた。

帰宅すると、珍しく母がいた。

母のサンダルを端によけて部屋に上がると、隆志は、食卓の椅子に腰掛け、足の爪に熱心にマニキュアを塗る母を一瞥した。

「なんでいるの？」

「何よ、いちやいけないような言い草ね」

「何日ぶりか分ってるの？」

「んー、二、三日かな？」

「七日だよ」

マニキュアの揮発性の香りがツンと鼻をつく。母が初めて顔を上げた。

「何怒ってんのよ」

今年で三十三歳になるというのに、笑うと片頬にエクボができて少女のように若い表情になる。

「ゴメンってば。もっと早く帰ってたんだけどさ、色々今お店忙しくて、泊り込みなんてザラで……」

「店にも電話したよ。二週間前から出勤してないって」

母は、悪戯を咎められた子どものように「しまった」と舌を出した。

「敵わないなあ、隆志には」

椅子から投げ出した足をブラブラさせながら、唇を尖らせた。

「だって、あんた、もう何でも一人でできるじゃない。ご飯だって炊けるし、夜も一人で寝られるでしょ？手が離れちゃって、私は寂しいのに……」

「駅裏の工事現場の出稼ぎ男」

母の話を、隆志は冷たい声で遮った。

「そいつの宿泊所から出てくるの見たよ」

母はフンツと鼻を鳴らして、せせら笑うように言った。

「あんたが見たわけじゃないでしょ？」

椅子から身を乗り出し、挑発的な目を隆志に向ける。

「あの人からの入れ知恵ね。帰れなかった理由はそれだけじゃないわよ。私が留守の間も、ずっと家の周りをうろついてたでしょ。その前はお店にも押しかけてきたり、本当いい迷惑だわ」

「……迷惑なの？」

隆志は震える声で尋ねた。

「一緒に暮らしたこともあったのに？俺らみたいな親子に、あんなに優しくしてくれたのに？今更こんな風に捨てるなら、どうしてあの人を返してあげなかったの？俺たちみたいならくでもない人間に、

つき合わせるような人じゃなかったはずだろう」

「あの人が感じてるのは、「僕が何とかしてあげなきゃ」っていう優越感よ。愛とは違う。自分でも気付いていないだけ。つまらない男」

ガタッ

その時、勝手口の窓の外で不意に何かが崩れるような音がした。

隆志が窓辺に駆け寄り外を覗くと、足場にしたであろうビールケースがひっくり返って転がっていた。

家の裏手に向かって逃げていく足音。

「智之さん!？」

隆志は勝手口から飛び出し、足音の行方を追って駆け出した。

「待ってよ、待って!!」

隆志は必死に叫び、走った。走り去る足音は、長屋の行き止まりになった路地の方へ抜けていく。

ドンッ!!

何かにぶつかる衝撃音がして、続いてプラスチックケースの崩れる乾いた音が派手に鳴り響いた。隆志は慌てて路地を曲がり、音の出所を確かめた。

「智之さん!？」

積み上げられたビールケースが雪崩のように倒壊した中に、頭か

らつつこんだ形で人が倒れていた。

「だ、大丈夫？」

隆志が慌てて駆け寄りケースを取り払うと、中から出てきたのは隆志が想像していた人物ではなかった。

「な!？」

あまりのことに言葉を失う隆志を、その人物はキツと睨みつけると、素早く立ち上がり、立ちすくむ隆志に思い切り体当たりをして突き飛ばした。

壁にしたたか背中を打ち付けて咳き込む隆志を尻目に、サツと身を翻し路地裏を走り去っていく。

隆志の目の前をかすめた、燃えるように赤い髪。その苛立ちに燃える眼差しと、ギョツとするように奇抜な人工の髪の色をもってしても、この三年間、片時も忘れることのなかった面影を、隆志が見誤るはずがなかった。

「……………斎木」

走り去っていった路地の先に目をやる。

「……………どうして？」

誰も答えてはくれない質問を、隆志は口の端に力なく乗せて咳いた。

放課後の誰もいない教室で、長田さゆりは一人窓を開け、黒板消しをはたいていた。

息を止めていても、細かいチョークの粉はさゆりの制服を汚し、口や鼻から進入して息を詰まらせる。

「ゲホツ、ゴホツ……伊藤のバカア。日直の仕事、私だけにやらせてえ」

中学三年生にしては幼い舌たらずなしゃべり方で、さゆりは涙目になりながら不満を口にした。

両手に黒板消しを持ったままクルリと窓から振りかえった時、さゆりは思わず「キャッ！」と悲鳴を上げ、黒板消しを取り落としそうになった。

自分以外誰もいないと思っていた教室のドアのところに、長身の島貫隆志が一人たたずんで、こちらを見ていた。

「な、何よ、島貫。驚かさないでよ」

さゆりは跳ね上がった鼓動を静めるように胸に手をやりながら、綺麗になった黒板消しで、もう一度白く汚れた黒板を拭きに戻った。

「忘れ物？みんなとつくに帰ったのかと思ったよ」

試験期間に入ったので文化祭の準備もしばらく中断だった。

特大の看板やポスターその他諸々の飾りも、今は教室の隅に邪魔にならないように立てかけられて、次の出番を待っていた。

「私ももう帰るよ。最近日が短くなってきて怖いんだもん。圭子も先帰っちゃおうし……」

さゆりは先ほどから何もしゃべらない隆志を不信に思い振り返った。その時、自分のすぐ背後に迫っていた隆志に驚き、声にならない悲鳴を上げた。

「な、何!?!」

思わず身をすくめ黒板に張り付くさゆりの手から、隆志は無言で黒板消しを奪うと、さゆりの手の届かない黒板の高い位置にヒョイと手を伸ばして、拭き始めた。

黒板の端から端までいとも簡単に拭き終ると、隆志はさゆりに黒板消しを返した。

「ほら」

「あ、ありがとう」

さゆりは啞然として隆志を見ていたが、再度汚れた黒板消しを持って窓辺に走った。

「……長田」

「はい!?!」

さゆりの素っ頓狂な声に、隆志も当のさゆり自身も驚いた。

「あ、ご、ごめん。何?」

さゆりは頬を染めて、慌てて取り繕うように言った。隆志はさゆりの近くの机に腰掛け、じっとさゆりを見つめて言った。

「何か、隠してない？」

「何のこと？」

「斎木のこと」

途端にさゆりは隆志に背を向けて、一心に黒板消しを叩くフリをした。

「何か知ってるんじゃないの？東京に行ったとき、何があったの？」

「し、知らないよ。前も言ったじゃない。理穂子には会えなかったって」

うるたえるさゆりの横に回りこんで、隆志はさゆりの目を覗き込んだ。嘘は見逃さない。

「俺、見たんだよ」

隆志の一言に、さゆりの手が止まった。恐る恐る隆志を振り返る。至近距離で、二人の目が合った。

「……どうで？」

「この街に、帰って来てるんじゃないの？」

さゆりは、「まいった」という様にため息をついて、窓辺に寄りかかった。隆志もその横に並んで寄りかかる。

「理穂子がこの街に帰ってるかどうかは、今島貫が言うまで知らなかったよ。私が知ってるのは、東京の家から、理穂子がいなくなっただけ」

「いなくなっただけ？」

隆志の問いに、さゆりが神妙に頷く。

「夏休みの終わりに家を飛び出して、それっきり帰って来ないって学校の友達の家も思い当たるところは全部探したけど、見つからないうって。多分……ううん、置き手紙まであつたから絶対……家出だから、世間体もあつて、警察に届けることには理穂子のお祖父さんたちが反対してるらしいんだけど、もうそんなこと言つてられないって。おばさんは、すぐにでも搜索願を出す気ではない」「家出なんて……斎木が？信じられない」

啞然とする隆志に、さゆりは首を横に振る。

「それでもないんだよ。私の従兄弟が理穂子と同じ中学に通つてるんだけど、一学期の途中から、理穂子、ちょっとおかしかったって。学校も休みがちになって、成績もどんどん下がって……その子も、夜、街をウロウロしてる理穂子を何度か見たことがあるって」

さゆりは口ごもって俯いたまま、小さな声で付け加えた。

「その……よくない、人たちと、ね」

隆志は昨日の理穂子の、燃えるような赤に染められた髪を思い出していた。

「私や圭子の出す手紙にも、最近返事も来なくなつてたんだ」

さゆりは、教室の隅に立てかけられた、小学校六年生の時に理穂子が描いたという今回の文化祭の特大ポスターの絵柄を見上げながら、哀しげに呟いた。

「……本当に、今どこでどうしているんだろう」

隆志もさゆりに並んで、黙ったままポスターを見上げた。

さゆりの「よくない人たち」という言葉だけを頼りに、隆志は何の当てもなく、街に一つしかない国鉄の駅の裏手に広がる繁華街

母が勤める店もその中にある　を歩いていた。

母がここへ来るのを固く禁じていたことや、自分自身もこの歓楽街に対して母へのイメージと重なる生理的な嫌悪感を感じていたため、この年になるまで一度も足を踏み入れたことはなかった。

日が暮れてきて、薄暗くなる周囲とは対象的に、夜の街に灯りがあるとも。

制服姿の隆志はその場では酷く浮いている気がして、知らずに額から汗が噴出してくる。

隆志が連想する「よくない人たち」はそこら中の路地という路地にうづくまり、たむろしていた。

その時、ふいに斜めがけした布製の学校鞆を強い力で引っ張られ、隆志は薄暗い路地の一つに引きずりこまれた。

「ッー!!」

隆志が声を上げる前に、白く柔らかい手が隆志の口を塞いだ。

「あらん？なに、思ったより若いお兄ちゃんね」

隆志の口を塞いだ女は、きつい香水の匂いをさせて、壁に押し付けた隆志の身体にピッタリと自分の身体を密着させた。

「お客……には、ならないわねえ。でも、悪くない。好みの顔よ。お姉さんを楽しませてくれない？」

女の手が隆志の身体を這い回る。隆志は恐怖で声も出せず、歯がガチガチと鳴るのを止められなかった。女の手はそんな隆志の反応を面白がって、より卑猥な動きを増していく。

「リエちゃん、止めるよ！」

その時、路地に飛び込んで来た若い男が、女の肩を引いて隆志から引き離れた。

「何よ！いいところで、邪魔しないでよ」

女は憤慨して、若い男の破れたシーズスの脛に向かってピンヒールで蹴りを繰り返す。男は女の攻撃を器用に避けながら、女の肩を押さえつけて動きを封じた。

「アカリさんに言いつけて今度こそクビにしてみらうぞ！うちの店は売春宿じゃないって、アカリさんいっつも怒ってるだろ！」

「客じゃないわよ、よく見なさいよ。店は私の自由な男選びにも口出しするわけ！？」

食って掛かる女の肩越しに、男は初めて、壁に張り付き蒼い顔をしている隆志に気がついた。目を細めて、隆志をジッと見る。きつくパンチを当てた髪、ボロボロの虎柄のスタジャン、細めるとますます険を増す目に、隆志は射すくめられて動けなかった。

「……中学生か？」

男は女を振り返ると、思い切りよく、スコーンと女の頭を叩いた。

「犯罪だよ、リエちゃん!!」

「痛ーッ!! バカマサ!!」

女も負けずに、男の急所を蹴り上げる。今度は不意打ちだったの
で男も防げず、まともに入った。

「……痛……いよ、リエ……ちゃん」

男は声にならない声を絞り出すようにして、その場にうずくまっ
た。

「ふん、いい気味! あんただって、店に中学生の女の子囲ってるじ
やない。あんたが連れて来たの知ってるんだからね。人のことつべ
こべ言う資格なんかないんだから!」

女は舌を突き出すと、そのままクルリと背を向けて、路地から出
て行った。

残された若い男は、痛みに悶絶しながらも、壁に手をつき何とか
立ち上がった。

「………つたく、ガキに関わるとロクなことねえんだから」

「あ、あのー!」

涙目でヨロヨロと路地を出て行くところする男の背中に向かって、
隆志は思いきって声をかけた。

「あ？」

眉間に皺を寄せて、不機嫌に振り返る男。

「さっきの……中学生の女の子って」

「ちゅ、中学生じゃねえぞ。若く見えるだけで、あ、高校……いや、短大出で……えーっと、あと、それに、別に店で働かせてるわけじゃねえぞ」

聞いてもいないのに、男は慌てて弁解するように言った。そんな男に、隆志は詰め寄った。

「俺、人を探してるんです。もしかしたら、その子かもしれない。

会わせてくれませんか？お願いします！」

「え……いやあ」

「お願いします……！」

頭を下げて頼み込む隆志に、男は困ったように、パンチパーマの頭をボリボリ掻いた。

「ほら、ここだよ」

男は隆志を小突いて、薄暗い地下のスナックへの階段を顎でしゃくった。

薄ぼんやりした電飾で『スナック不知火』と書かれたそのスナックは、夜も更けたばかりだというのに、随分と賑わっている様子で、地下からお客たちの笑いざわめく声が漏れてきていた。

「ビビんなよ。来いって」

先に階段を降り始めていた男は、初めて二カツと隆志に向かって笑顔を見せた。笑うと歯がほとんど溶けて無くなっていて、間の抜けたスキッ歯になっているのが分かった。しかし、それが男の険のある顔に、何ともいえない愛嬌を与えていた。

隆志は思い切って、男の後についていった。

地下のスナックのドアを開けた途端、中からは隆志の聴いたこともないような音楽（ジャズというのだと、隆志は随分後になってから知った）と、安い酒の匂いが漏れ出て、隆志を包んだ。

「マサ、随分可愛い連れてるじゃない。また拾ってきたの？」

「人聞き悪いこと言うなよ。こいつは、そういうんじゃないの」

馴染みであろう客の一人が、男のスタジャンの袖を掴んでからかう。どさくさまぎれに、隆志の尻を掴んでピツと甲高い口笛を鳴らす者もいた。

すかさず、マサが客の手をピシヤリと撥ねる。

「はい、お手を触れないで下さい。大事なお客様ですよ」

「いいじゃないの、ケーチ！」

そう言つて舌を出す男は、小指を立てて、琥珀色のウイスキーを飲み干した。

「アカリさん、ただいま」

人ごみを掻き分けてカウンターまでたどり着くと、男は店の奥に向かつて大声で呼びかけた。

すると、中から緋かすりの着物に身を包み、黒々とした髪をアップにまとめた女が現れた。

「遅いわよ、マサ。リエは？」
「捕獲失敗」

女は切れ長の瞳で男を睨みつける。凄みのある美しさだった。

「全く……あんまり勝手なことばかりすると、クビにするって脅してやったんでしょうね」

「勿論だよ。怒らないでよ。リエちゃんは捕まえられなかったけど、代わりに面白いの拾ってきたよ」

男は隆志の襟首を掴んで、女の前にズイツと押し出した。

「何なの？この子」

女は怪訝な目で隆志を一瞥した。

「人探してるんだって。ウチのナナちゃんに逢いたっていうから、連れてきた」

「ナナちゃん？」

今度は隆志が怪訝な顔をする番だった。

「まあ、いいわ。マサ、とにかく早く着替えてらっしゃい。いつも言ってるけど、その格好で店ウロついたら、あんたもクビよ」

「ハイハイ」

マサと呼ばれた男は軽く舌を出して、トレードマークのパンチパーマの頭をボリボリ搔くと、カウンターに片手をつけて、ヒョイと飛び越えた。

女とカウンターの中ですれ違う際、軽く女の尻にタッチして、さっきの客の真似をしてピツと高く短い口笛を吹く。

「真つ赤なスーツもいいけど、やっぱりアカリさんは和服が一番！
今日もそそるねー」

「早く行きな！」

女にすげなく手を叩かれて、男は店の奥に消えた。

「さて、と」

女は両手を腰に当て、カウンター越しに隆志を見下ろして言った。

「ナナちゃんに会いたっていうあんたは、ナニちゃん？」

「……島貫隆志」

隆志はまるつきり子ども扱いする相手の態度に少々ムツとしながら答えた。

女の目に一瞬奇妙な光が走る。

だが、隆志には気付く術もなかった。

「立派なお名前」

女が赤いルージュの薄い唇を、笑いの形に引く。

「会わせて下さい、そのナナって娘に。俺が探してる娘かもしれないんです」

「会わせてあげたいのは山々なんだけど、もしナナちゃんがお兄ちゃんの探してる女の子だったら、未成年の子を堂々と働かせてる私

たちにも負い目があるわけ。そのリスクを考えたら、はいそうですね、と気安く差し出す訳にもいかないのよ。いつお兄ちゃんに警察駆け込まれるか分らないからねえ。ねえ、マサ？」

奥から白いシャツと黒いベストに着替えた、先ほどの男が出てきた。

「……だそうだ。この店ではアカリさんの言うことが絶対なんだ。悪いな、諦めな」

「警察なんか駆け込みません。俺は、ただ、斎木に会えればいいんだ。お願いします！」

隆志は思わず、カウンターの中に乗り出して、マサのシャツの襟元を掴んだ。

「おい！」

マサの顔色が変わる。瞳に鋭い色が宿り、臨戦態勢を取る。隆志が一步退いた。

「やるのか？」

身構えるマサの予想に反して、隆志は二人の前で、いきなり床に手をつき土下座をした。

必死の様子隆志に、冗談めいていた二人も呆気にとられて顔を見合わせた。

と同時に、カウンターの騒動に気がついた店中の客たちが、隆志たちのやり取りに注目しだした。

「いよっ！カッコいいぜ、兄ちゃん！」

酒に酔った客の一人が、からかって声を上げる。それにつられるようにして、店の客たちが口々に好き勝手なことを叫んで隆志の後押しをし始めた。

「会わせてやれよ、アカリさん。純愛だぜ。泣かせるじゃねえか」

「男が土下座だぜ！ここでイケズなことしたら、アカリ姉さんの女がすたるってもんだらう？」

「まったく、好き勝手なこと言ってくれるわね」

女が苦笑する。

「……負けたよ、少年」

カウンターの男も、構えを解き、オーバーに肩をすくめながら、スキツ歯を覗かせて笑った。老けて見えるが、本当は隆志とそう年の変わらない、まだ少年と呼べるような幼さが表情の端々に表れていた。

「わかったわよ。もうじき買出しから帰ってくるはずだから、ここで待ってなさい」

「そこなつくっっちゃ！アカリさん」

客の輪から歓声が上がる。

「……ナナちゃんていう名前は？」

騒ぐ客たちの声にかき消されないように、隆志が声を張り上げて尋ねる。二人は顔を見合わせて、クスツと笑いを漏らした。

「名無しの、ナナちゃん。私たちがつけたニックネーム」

少女は息を切らせながら、両手に下げたスーパーのビニール袋を、こらえきれずに地下へ続く階段の手前で下ろした。大きく息をつき、額の汗を拭う。

「あつ！ナナちゃんだ！」

その時、地下のスナックから出てきた客の一人が、階段の上にいる少女を見つけて声を上げた。

男は既に出来上がっている様子で、危なげな足取りで階段を登ってくる。

「源さん、大丈夫？」

見かねて少女が手を出すと、逆にその手を男にガツシリと捕らえられてしまった。

「ナナちゃんに面白いお客さんだよ。早く早く！おいだよ」

「私に、お客？」

少女が怪訝な顔で問い返すのも構わず、男はグイグイと少女を地下の店へ引きずり込もうとする。

「ちょっと、源さん！荷物、荷物！」

少女は地上に残されたスーパーの袋を振り返りながら賢明に訴えるが、男は聞く耳を持たない。男の吐く息からは、強い酒の匂いがして、少女は思わず顔をしかめた。

「ナナちゃんのご到着ー！」

店の扉を開けるやいなや、男が大声を張り上げて、少女を店の中へ押し出した。

「な、何?!」

店中の客の視線が、一斉に少女に注がれる。

次の瞬間、まるで『十戒』でモーゼが海を割ったように、カウンターまでの人垣が一斉に割れた。

「なっ!?!」

その先に現れたものに、少女は思わず声を上げた。

そこには、自分と同じように驚いた顔で立ち尽くす、長身の少年がいた。

少女はそのまま、素早く踵を返した。

ところが、その場から逃げ出そうとした少女に向かって、いくつもの腕が伸びてきて、少女を取り押さえた。

「待ってよ、ナナちゃん。あの兄ちゃん、ずっとナナちゃんのこと待ってたんだぜ」

「そーだよ、アカリさんに土下座までしてさあ」

「離して!離してよ!」

少女はもがきながら抵抗するが、どうにもならない。少年はその

様子を呆然と見つめていたが、やがて我に返ると、ゆっくりと少女に近づいて行った。

「……齋木」

少女は少年に背を向けたまま、ピクリと肩を震わせた。赤く染められた髪は、生まれつきの緩いウェーブがかかっている。肩のところでフワフワと跳ねている。

「齋木」

少年が少女の肩に手をかけた瞬間、少女は振り向きざまにピシャリと少年の腕を撥ねた。

「……何で、こんなところにいるのよ？」

憎々しげに低く搾り出した少女の声に、少年もまた、今まで我慢していたものがプツツと切れた。

「それは、こっちのセリフだよ！」

思わず少女の肩を掴み、声を荒げる。

「探したんだよ！長田が教えてくれた。東京の家、家出したって。皆が心配してるのに、こんなところで何やってるんだよ」

「関係ないでしょ！放つといてよ！」

三年ぶりに再会した少女は、薄っすらと化粧を施し、明らかに店の女のお古であろうと思われる、サイズの合っていない派手なデザインのミニのワンピースに身を包んでいた。

「関係ないなら、何でウチの前にいたの？智之さんに会いに来たんじゃないの」

少女の頬がカツと熱くなる。

思わず振り上げた手が頬を狙う前に、少年は素早くその手を掴んだ。

少女は歯を食いしばって逃れようとするが、少年はそれを許さない。華奢な手首は折れてしまいそうなほど細かったが、一度掴んだ手は離すまいと少年は力を込めるのをやめなかった。

「こんな髪して、こんな化粧して……こんな全然、齋木らしくない！」

少女は掴まれた手首の痛みで顔をしかめながら、少年を見上げた。

「……私らしい？」

少女の目が怒りでキラキラと輝く。

「私らしいって何よ、私の何を知ってるの？」

「知ってるよ！」

少年も負けずに言い返す。

「クラスで一番可愛かったのを知ってる。みんなが齋木を好きだったのを知ってる。幸せでいっぱいだったのを知ってるよ！」

それを奪ったのが、自分たち親子だったことも、よく知ってる。

少女は呆気にとられたように、少年の顔を見た。

「でも、今は違う。こんなの、全然斎木に似合わない」

そう言って、少女の赤い髪を指差す。

「すごい、可愛くない!!」

言った瞬間、自由な方の少女の左手が少年の右頬を強く打つ音が店中に響き渡った。

クルツと向きを代え、店を飛び出していく少女を、今度は誰も止められなかった。

「……あっちゃあ」

カウンターの中で様子を伺っていたマサが、人垣の中心で頬を腫らして立ち尽くす隆志に向かって言った。

「言っちゃいけない一言を言ったねえ」

マサは左手に持ったグラスを磨きながら、大げさに顔をしかめる。

「あれはマズイよ、お兄ちゃん。女の子に、すごいブサイク！なんてさあ」

「ブ、ブサイクなんて言ってないよ!」

隆志がムキになって反論する。

「まあまあ、でもマサの言うとおり。あれじゃ逆効果。失敗したね、

隆志君。まあ、いいわ。こっち来なさい。ほっぺた冷やしてあげるから」

アカリの言葉に、隆志は素直にカウンターの席についた。アカリが氷水で冷やしたタオルを隆志の頬に当てる。

「痛っつ……」

思い切り叩かれた反動で、口の中が少し切れていた。苦い鉄の味がする。

「さっき、面白いこと言ってたね」

アカリはカウンターの途中で客のために水割りの氷を砕きながら、痛みを歪める隆志に言った。

「え？」

「……らしい、なんて一体誰が決めるの？」

砕けた氷が、ガラスの器の中でカランツと音をたてた。

「人間がいかにかに『らしくない』行動する生き物が、面白い話をしてあげようか」

アカリは客の水割りを作る手を止めずに話し出した。

「このお店の名前にもなってる「不知火」って何か知ってる？」
「……八代湾の海上に出る火の玉のことでしょ？」

アカリがなぜこんな話をするのか理解できず、隆志は怪訝な顔で答えた。

「アカリさんは八代湾近くの漁港の出身なんだ。火の国、熊本の女だけ。だから、情が深いんだ」

「あんたは余計なこと言わなくていいの。ほら、手が止まってるよ！」

アカリにたしなめられて、マサは再びグラスを拭く手を動かし始めた。

「私は「不知火」を見ながら育つたの。父親が漁師でね。コノシロって魚を仕掛け網いっぱい取って父が帰ってくるのが楽しみだった」

「コノシロは美味いんだぜえ」とマサがまた横から話に割り込む。アカリは軽く無視して先を続けた。

「うちの漁港に、一人の若い漁師がいてね。誰よりも沢山のコノシロを取ってくる不知火海一の漁師だったけど、ものすごく堅物でね。他の漁師仲間たちが、海の男らしく港港に女をつくってる時も、彼だけは見向きもしないで、毎日毎日ひたすら海に出てはコノシロを捕ってた」

先程まで賑わっていた店は今は落ち着きを取り戻し、マサがグラスを拭くキュツキュという音が、やけに澄んで響き渡っていた。

「真冬のある日、そんな漁港に季節はずれの観光客の女がやってきたの。名物の『不知火』は夏にならなきゃ見られないし、『不知火』以外にこれといった見所もない貧しい漁港よ。女が何をしにやってきたのかは分からない。でも、漁港の人みんなが言ってた。あいつ

は、女鬼だつて」

「女鬼？」

突拍子もない話が続き、隆志の困惑は深くなる。しかし、アカリは気にせず続けた。

「火の玉のこと、鬼火とも言うでしょう？夏の海上に青い光で現れて、漁民を惑わす不知火は、美しい畏怖の対象であると同時に、禍々しく恐ろしいものでもあったのよ。太平洋戦争の時は本当に「原因不明の戦闘機墜落事故」が相次いで、百戦錬磨の軍のパイロットたちも「魔の不知火海」と呼んで恐れていたっていう逸話もあったぐらいなのよ。あの女は本当にそんな『不知火』みたいな女だった。まだ8つだった私でも、はつきり覚えてる」

アカリは当時を思い出すように目を細めた。しかし、それは過去を懐かしむ様な目ではなく、隆志には、辛い過去を直視することを躊躇う眼差しのように見えた。

「港中の男がその女に夢中になったわ。酒に酔った漁師同士が女を取り合つて殺傷沙汰になったこともあった。死人こそ出なかったけどね。でも、そんな女に港中で一人だけ、見向きもしない男がいたの」

「……それが、さっきの漁師？」

隆志の問いに、アカリが微笑んで頷く。

「そう。女の方が『らしくなく』躍起になつてた。振り向かない男なんて、それまでの彼女には信じられなかったんでしょね」

アカリは出来上がった水割りを、隆志と自分を隔てているカウン

ターの上に置いた。マサがそれを横から受け取り、客へ運びに行く。

「でもね、その男も『らしくない』ことをしたの。堅物で縁起を担ぐ無骨な男だったから、普段だったら絶対に自分の船に女を乗せたりしなかった。仲間の一人がふざけて「お前は海の女神に愛されるんだ。だから、一人だけそんなにコノシロが捕れるんだ」って言うてから、海の女神は嫉妬深いから、絶対に自分の船に女は乗せないって言うてね。でも、その日は女を乗せて船出したの。不知火が一行に並んで、青く燃える夜に」

「……それで？」

アカリは寂しげに微笑むと、小さくかぶりを振った。

「それつきり。朝になって港に戻ってきたのは、女一人だけだったわ」

(3)

「殺されたってこと？」

隆志がゴクリと唾を呑み込むのを見て、女はクスツと笑った。

「まさか。でも、惑わされた……のかしらね」

だからね、隆志君……アカリがそう言って、隆志の元に水割りのグラスの一つを押しやる。「飲め」ということらしい。

戸惑っていると、ジツと隆志を見つめている。それを飲まない限り、その先を話さない気らしい。隆志は思い切って目をつぶり、グラスを一気に煽った。

焼けるような熱さが喉を駆け抜けていく。

「『らしくない』ことをして、命まで落とす人間もいるってこと。でもね、それが本当に、その人にとって不幸なことかどうかは誰にも分からない。『らしくない』ことが、本当の『らしさ』かもしれないじゃない」

謎かけのようなアカリの言葉が、先ほど流し込んだ琥珀色の液体と相まって、隆志の酩酊を一層深めた。

「あら、強いじゃない」

アカリは倒れこまない隆志を見て、満足そうに微笑んだ。

「ナナちゃんより強いわよ」

「斎木を……探しに行かなきゃ」

「ナナちゃんなら今頃、店の裏路地で寝てるわよ。裏に積んである、お店のビールかつくらってね」

「道路で寝るのが趣味なんだよな」

キヒヒツと、給仕を終えて戻ってきたマサも悪戯っぽく笑う。

「……俺、行くよ」

ヨロヨロとカウンターから立ち上がり出て行くこととする隆志の背中に向かって、アカリは言った。

「ナナちゃんのお母さん、再婚するらしいわよ」

「え？」

隆志は振り返ってアカリを見た。

「数少ない、ナナちゃん情報。酔っぱらって、前に一度だけ話してくれたのよ」

アカリはそれだけ言うと、新たにカウンターに座った客の相手を始めた。

隆志はアカリの言葉通り、一度地下の店から出ると、そのまま店が入っている雑居ビルの裏手に回った。

野良猫が店の残飯を漁る横で、隆志が探す少女は、黄色いビールケースに身体を預けて、スヤスヤと寝息を立てていた。

横には空になったビール瓶が転がっている。

隆志がそれを足で蹴飛ばすと、ビール瓶は派手な音を立ててプラスチックのゴミ箱に当たった。猫が驚いて逃げて行く。

「齋木」

隆志は少女の肩を揺すった。少女は泥酔していて、一向に目を覚ます気配もない。

「バカ！本当に、知らないからな！」

そう言って少女の肩を押しやり、乱暴に離れようとした隆志の手が、不意に少女の頬に触れた。
濡れていた。

「……パパに……会いたい」

不意に漏れた少女の言葉は、隆志の動きを止めた。

しかし、少女はまた何事もなかったかのように、スヤスヤと規則正しい寝息を続けている。

「……齋木」

泣きつかれて眠る少女をじっと見下ろしていた隆志は、次の瞬間、有無を言わず少女の両手を掴んで、身体を引き起こした。

頭がガクンと後ろに倒れ、驚いた少女は、まだ酔いの最中にある目で隆志を見上げた。

「な……何？」

「行こう、齋木。今から智之さんに会いに行こう！」

「え？……ちよっと……キャッ！！」

少女の返事も聞かずに、隆志はグンツと強い力で少女の手を引っ張ると、足のもつれる少女にもお構いなしに、路地を駆け出した。

蔦の絡まる古びたアパートの前に、隆志は理穂子の手をしっかりと握り締めたまま立っていた。

「ここだよ」

隆志は理穂子に向かって顎をしゃくる。

「102号室、智之さんの部屋だ」

隆志が指差す腐りかけた木戸には、黄色く変色した紙に「齋木」と書かれただけの表札が貼り付けてあった。

「……こんなところに？」

「知らなかった？」

理穂子はコクリと頷いた。

「私たちの住んでた家を、追い出されたのは知ってたの。お祖父ちゃんとお祖母ちゃんが話してるの聞いたから。でも……」

理穂子は実際にこの目で見た、智之が置かれている現状にショックを隠しきれないようだった。

理穂子の父、智之はこの街一番の家財道具屋を営む「齋木家」の入り婿だった。地元の商業高校を出た後に就職した理穂子の祖父の

会社で、見込まれてその家の長女と結婚し、養子に入った。

智之の裏切りは、妻と一人娘のみならず、自分の身を立ててくれた恩人である理穂子の祖父母への裏切りでもあった。

智之に会社を譲った後、祖父母は一線から退き、次女の大学進学に合わせる形で東京へ移り住んだ。

一代で築き上げた家財道具屋の一切を、若い娘婿に託した形になっていた。

実際、智之の経営手腕は中々のもので、店も繁盛していたその矢先、あの信じがたい事件が起こったのである。

理穂子たち母子が東京へ身を寄せると同時に、智之は住む家も、ここまで情熱を傾けて育ててきた店の経営権も全てを失った。

隆志たちと短い期間を共に過ごした後は、今の粗末なアパートに移り、タクシー運転手をして日銭を稼いでいる。

理穂子たちが街を出て行ってからの智之を取り囲む状況は、隆志の方が詳しく把握していた。

隆志は木戸をノックして、智之の名を呼んだ。

理穂子が逃げようと身体を引くが、隆志は握った手を引き寄せてそれを拒んだ。

「智之さん？いないの？」

しばらくノックしても返事がない。

「風呂に行ったのかな？」

風呂なしトイレ共同のこのアパートの住人は、皆近所の小さな銭湯へ通っている。

隆志がそつと木戸のノブを回して押すと、簡単に開いた。

「あつ」

隆志と理穂子は顔を見合わせた。

「来なよ」

隆志は理穂子の手を引いて、暗くヒヤリとした部屋の中へそつと入った。

六畳一間の小さな部屋に、簡単な炊事場が付いただけの、簡素と
いうにはあまりにも寂しい部屋だった。

持ち物と言えば、一人用の小さなちゃぶ台が一つ、壁に立てかけ
られているだけだった。

しかし、窓辺に吊るされた仕事着であろうワイシャツには、几帳
面にアイロンが当てられ、その袖口には品のいいカフスボタンが並
んでいた。それは、この部屋の主の、どんなに身を落としてもそこ
に染まることのない、生まれもつての気品を言わずもがなに物語る
ものだった。

実際、智之はそういう男だった。

理穂子はおずおずと智之の部屋を見回し、流しの横に置いてある
煙草の箱に目を留めた。

「これ、まだ吸ってたんだ……」

蓋の開いた赤いパッケージを取り上げる。中から、一本取り出す
と、理穂子はそれを細い指の間に挟んで、そつと口の端に啜えた。

「齋木」

隆志が咎めるような視線を送ると、理穂子は苦笑して言った。

「フリだけだよ。私、マッチ擦れないの知ってるでしょ？小さい頃、煙草吸ってるパパにふざけて抱きついたら、パパの火でスカート焦がしちゃったことがあって。それから、火付けるの怖くなっちゃったの。見るのは好きなんだけどね」

煙草のパッケージを弄ぶ理穂子の横で、隆志はいつも持ち歩いて
いるマッチ箱を取り出して、火をつけた。

暗い部屋の中に灯る、小さなあかり。

隆志は何も言わずに、理穂子に向かって大切な火を手で守りながら差し出した。

理穂子もそつと、顔を寄せる。

煙草一本分の距離で二人の視線が出会い、その間に小さな火が点火されると、二人はまた無言で離れた。

「……パパの匂いだ」

理穂子は細く長い煙を吐き出しながら呟くと、慣れない煙にむせるフリをしながら、瞳に溜めた涙を拭った。

「斎木が煙草を吸うときは、俺を呼んでいいよ。いつでも、火つけてやるから」

「私、ヘビースモーカーかもよ？」

理穂子が笑う。

「……おばさん、再婚するって？」

隆志は言い出しにくい問いを思い切って投げかけてみた。
理穂子は自嘲気味に笑いながら頷いた。

「そう。ママの妹の結婚相手が養子に入ってくれることになったから、ママももう気兼ねせずに、お嫁にいけるってわけ。私も名字が変わるし、年の離れたお兄ちゃんもできる」

「嬉しくないみたい」

「嬉しいわよ。お祖父ちゃんもお祖母ちゃんも、また新しい跡取りが出来て、出戻り娘も片付いてくれる。やっと世間体を保てて、万々歳よ。再婚相手はまたお金持ちだから、生活能力のないママも、胸を撫で下ろしてる。お祖父ちゃんたちが死んじゃった後にも、頼るべき相手ができたってね」

「……斎木は、幸せじゃないみたいだね」

隆志の問いに、理穂子は答えなかった。無言で、自分が吐き出す煙の行方を追っている。

「名前……何になるの？」

「早川」

「これから、何て呼べばいい？」

理穂子は流しのへりで啜っていた煙草をもみ消すと、小さな声で言った。

「……斎木って、呼んで。島貫君が呼んでくれなかったら、もう誰も呼んでくれなくなっちゃう」

智之も離婚した後も「斎木」の姓を名乗り続けている。

隆志は何も言わなかったが、理穂子の気持ちはよく分かった。

「齋木……」

もう一度、確かめるようにそう呼ぶと、理穂子は小さく肩を震わせた。

文化祭当日は、多くの客が集まり盛り上がりを見せていた。

ファイナーであるキャンプファイヤーの準備に、文化祭の実行委員である生徒たちはてんてこ舞いしていた。

「島貫い！頼む、運ぶの手伝って！」

特大のキャンプファイヤーのポスターを貼った看板に押しつぶされそうになりながら、萩原圭子は瀕死の鶏のような声をだして、隆志に助けを求めた。

「何で今頃運んでるの？」

「伊藤のバカが、懲りずに昨日の夕方プロレスやって、看板の上に転んで真つ二つよ！信じられる？朝から校門前に飾る予定だったのに。修復に1日かかって、他のクラスの出し物、全然見られなかったんだからあ」

そう言いながらも本当に潰されてしまいそんな圭子を助けるために、隆志は慌てて看板の反対側に潜り込んで、片側を支えた。

「ありがと。助かる」

二人して力を合わせ、汗だくになりながら看板を運んだ。途中から何人かの生徒が加わり、ようやく校門前に運ぶことができた。

「いつせーの！！」

掛け声と共に、大きな看板が顔を起こし、校門の前に取り付けられる。

完成した特大ポスターを、隆志は初めて真正面から見た。理穂子が小学六年生の時に書いたというデザイン。

「すごいでしょ」

隣でポスターを見上げていた圭子が隆志に話しかけた。

「迫ってくるみたいでしょ」

隆志は無言で頷いた。

あの時、この街を去って行く直前、どんな思いでこの絵を描いたのか

「理穂子に見せたかった」

キャンプファイヤー開始の校内放送を遠くで聞きながら、圭子は肩を落として呟いた。

「連れてくる」

「え？」

「齋木、連れてくるから」

隆志はそう言つと、呆氣にとられる圭子を置いて駆け出した。

まだ、間に合う

智之のアパートに無断で上がりこんだあの夜、結局理穂子はそのまま智之の帰りを待たず『不知火』に帰ってしまった。

無理に引き止めることも、東京へ返してしまうことも出来ず、結局隆志は理穂子をアカリの元まで送り届けただけだった。

アカリは暫らくそつとしておいて、その間の理穂子の生活は心配ないと請け負ってくれたが、隆志にはどうにも歯痒い気持ちだけが残った。

すっかり覚えてしまった『不知火』までの道のりを、隆志はひたすらに走った。

地下の扉に体当たりするように店の中に飛び込むと、開店したばかりの店は相変わらず混雑していた。

「おっと！この前の少年！」

顔見知りになった客の妨害を器用に避けながら、カウンターに近づく。カウンターの中にはいつものように小粋な着物に身を包んだアカリと、ヘラヘラしながらグラスを磨くマサ、そして、カウンターに突っ伏して眠る理穂子の姿があった。

「あら、隆志君。どうしたの？」

アカリが隆志に気付いて艶やかな笑顔を見せた。

「走って来たの？ 駆けつけ一杯」

そう言っただけ押し出された琥珀色の液体を、以前の経験から学習した隆志は軽く押し返す。

「斎木を連れて行きたいんだ」

マサが面白そうに身を乗り出す。

「駆け落ちか！？ やるじゃねえか！」

間髪入れず、草履を履いたアカリの足がマサの脛を蹴り上げる。苦悶の声を上げるマサを無視して、アカリは尋ねた。

「ナナちゃんは一度眠っちゃったらかなかなか起きないけど、どうする？」

「背負ってく」

隆志はそう言っただけ、理穂子の手を自分の肩に回した。

「ふふ……」

「何？」

アカリのこぼす笑いに隆志が顔を上げた。

「『らしくない話』の続きを思い出したのよ」

隆志が怪訝に眉を寄せると、アカリは一層笑みを深くして続けた。

「一人で戻ってきた女鬼のその後……話してなかったわね。彼女が一番『らしくない』ことをしたのよ」

アカリはカウンターに肩肘をついて、隆志の耳元まで顔を寄せると、そつと囁いた。

「不知火の港町を離れた女は一人、遠く離れた自分の故郷で、漁師の子どもを産んだの。色んな男を惑わしてきた女が、たった一人の男の子どもをね」

隆志が困惑した顔で、すぐ傍にあるアカリの目を覗き込む。

「漁師には、まだ幼い妹が一人いたわ。妹は、大人になったら、不可解な死を遂げた兄の仇を討ってやるうって、ずっとその女鬼の行方を捜してた」

「アカリさん……」

「初めて見つけた時、あんたはまだ七つかそこらの、痩せっぱちの気弱そうな子どもだった。でもね……」

アカリは顔を離して、隆志を真正面から見据えて言った。

「その目は、兄さんの目だった。火の国の、頑固で無骨な男の目。それだけで、高校を出てから上京して、何となくこの街に店を開いて居ついちゃったんだから、私も相当『らしくない』わね」

隆志はあまりの告白に何と云っていいか分からず、ただアカリの顔をまじまじと見ているだけだった。

「さ、昔話はこのくらい。どこへ連れて行く気か知らないけど、行きなさい。自分が思う通りになさいな。それを『らしくない』なんて、誰も言わないわ」

隆志はアカリの言葉に頷くと、理穂子を背負って歩き出した。

隆志の背中 of 緩やかな振動に夢現に身をゆだねていた理穂子は、突然その振動が止まり、夢の世界から引き戻された。

「着いたよ、斎木」

隆志の声で我に返る理穂子。

「……ここは？」

そう言った瞬間、理穂子の目に、赤・黄・橙で塗られた、見る者を飲み込まんとするばかりにうねり燃え上がる、大きな炎の絵が飛び込んできた。

「覚えてる？」

隆志の言葉に小さく頷く。

「……『篝火』よ。私が、描いた……」

理穂子の瞳から、静かに涙が零れ落ちる。

「夜の漁獵の時に、船が道に迷わないように、魚を見失わないように、焚く火のことだって本で読んだの。私も、道も見失わないような、確かな何かが欲しかった。でも、それも叶わずに、大事なものを全て無くして、自分の居場所さえ分からなくなってたから、いつその炎で、何もかも焼き尽くしてしまえばいい……そう思いながら描いたのよ」

「道、見失ってなんかないじゃない」

隆志がそっと囁く。

「この『篝火』が、斎木をこの街に戻してくれたんだ。智之さんに会いたくて、ここまで来たんだろ？」

理穂子は小さく頷いた。

「ママの再婚が決まって、もう会えなくなるって思ったの。いてもたってもいられなくなって、東京で知り合ったロクさん　マサさんの知り合いだけど　ロクさんがこの街の出身だって知って、帰るっていう日に無理やり一緒にいて来たの」

その時、校門の前で佇む二人の姿を、通りかかった萩原圭子と長田さゆりが見つけた。

「理穂子!!」

「……さゆ、圭子……」

「あんた今まで手紙も寄こさないで!!」

さゆりと圭子は二人して、勢いよく理穂子に抱きついた。

「バカ、バカ!心配させて。何よ、この髪、この格好は!」

さゆりと圭子は、赤い理穂子の髪と派手な水商売風のワンピースを指して言った。

「ごめん……二人とも、ごめん」

三人は抱き合いながら、ワンワン涙を流していた。

「行こう、理穂子。みんな喜ぶよ。まだキャンプファイヤー間に合

うよ」

「うん」

さゆりと圭子は理穂子の手を取って促す。理穂子は躊躇いがちに隆志を振り返った。

隆志は軽く微笑んで、小さく理穂子に向かって手を振った。

行って来いよ

いつまでも隆志を振り返りながら、さゆりと圭子に押されてキャンプファイヤーへ向かう理穂子の背中を、隆志は黙って見送ってい

た。

「お！斎木だ！何で？何で？」

さゆりと圭子に連れて来られた理穂子の姿を目ざとく見つけた伊藤健吾は、例によってピョンピョン飛び跳ねながら、理穂子の周りをぐるぐる回りだした。

「俺と踊ってよ、踊って！」

「伊藤は引っ込んでなさいよ」

圭子ともめながらも、健吾は理穂子の元から離れようとしなない。他のクラスメートも久しぶりに会う理穂子の周囲を取り囲んで離さなかった。

クラスの男子ほぼ全員分の申し出を快く引き受けてダンスを踊った後、理穂子は不意に名前を呼ばれて振り返った。

「理穂子」

キャンプファイヤーの輪から外れた暗がりには、隆志と一緒に懐かしい智之の姿があった。

「……パパ」

目に涙をいっぱい溜めて、理穂子は智之の腕の中に飛び込んだ。仕事先から走って来たのである。理穂子が腕を回したシャツの背中が、汗で濡れていた。

「ごめんよ、理穂子。ごめん……会いに来てくれてありがとう」

智之も泣きながら、力の限り愛娘を抱きしめた。

「踊ってきなよ」

隆志に促されて、智之と理穂子は手を取り合って炎の輪へと加わった。

美しい親子二人のダンスを見ながら、隆志は一人離れた暗がりですっと目を閉じた。

ほんの少し物悲しさを感じさせる音楽に合わせて、炎が薪を弾く音が聞こえてくる。

『さて、今夜のキャンプファイヤー、最後の曲となりました……』

アナウンスの声が校庭中に響き渡る。

皆、最後のダンスは特別な相手と……と、にわかに活気付くのが分かる。

隆志はそっと、暗がりでもたれかかってきた木から背中を離し、帰路に着こうと踵を返した。

「隆志君」

その時、呼ばれて振り返ると、智之が立っていた。

「ウチの娘が、君にラストダンスを申し込みたいそうだよ」

智之がいつものふわりとした笑みを浮かべる。

「受けてくれないかな？女の子の方から、勇気を出したんだよ」

見ると、炎の輪から少し外れたところで、理穂子が恥ずかしそうにこちらを見ている。

「さあ、行って」

智之の笑顔に見送られながら、隆志はぎこちなく理穂子の元へ行った。

『はい、パートナーが決まったら手をとって。音楽スタート！』

隆志の緊張などお構いなしに音楽は鳴り出し、ラストダンスが始まった。

隆志は不器用に理穂子の手をとり、炎を囲んだ輪の中で静かに踊りだした。

「……あ……えーっと、その……」

しどろもどろしている隆志に、理穂子もうつむいて何もしゃべらない。

「もう、チビ！足踏まないでよ。何でこんなに下手クソなのよ、バカ！最後の相手があんたなんて、冗談じゃないわ」

「お前がデカイだけだよ、男女！俺だって、斎木と踊りたかったんだよ。何でお前なんか！」

隣で騒がしく踊る健吾と圭子のやりとりが聞こえてきて、隆志と理穂子は思わず顔を見合わせてクスツと笑った。

「……島貫君」

理穂子が小さい声で呟いた。

「……ありがとう」

小学生の時は、同じくらいの高さだったが、今は高い位置から理穂子を見下ろしている。

胸の開いたワンピースの襟元は、キャンプファイヤーの炎に照らされ、膨らみかけた胸を淡く彩っていた。

隆志はドギマギしながら視線を逸らし、ただそっけなく頷いた。

少しづつ大人へ近づき、道も別れて行く僕ら。

ただ、君が「もう必要ない」と言うまで、

君の行く道を照らす「篝火」になれるのならば、

僕は喜んで、自分の身を燃やすこともいとわない。

君と踊った奇跡のようなラストダンスの中で、僕はそう願ったん

だ……

）第4話「篝火」＜完＞）

(1)

僕は母の匂いが嫌いだ。

安物の甘い香水の匂い。

その匂いを嗅ぐと、母よりも女を生きたあの人の
全てが透けて見える気がするから……

星が出ている

学生服の襟元にマフラー代わりに巻いたボロボロの手拭に顔を埋めるようにして、隆志は油の切れた中古自転車を漕いで帰路に
ついていた。

高校へ上がったから一日も休むことなく続けている、街の片隅の
工場の機械を冷水で洗う早朝のアルバイトのお陰で、冬はあかぎれ
だらけになる手でハンドルを握り、寒さに長身の背中を丸めて走る。

長屋の前で自転車を止めると、キーキーと気弱な小動物のように
鳴いていたペダルの音が止まった。

「ただいま」

隆志が真っ暗な部屋の中に向かって声をかける。

返事はない。

サイズが合わなくなり、踵を踏んで歩いているスニーカーを玄関
先に脱ぎ捨てて、構わず家の中に入った。

誰もいない時でも「ただいま」と声をかけるのは隆志の長年の癖
なので、特に気にもせず、隆志は居間の扉を開けた。

部屋の中に足を踏み入れた瞬間、隆志は部屋の空気が異常に悪いことに気がついた。

見れば、部屋の片隅で石油ストーブが赤々と燃えている。部屋の窓は締め切られたままだ。

隆志は慌てて、窓に走り寄ると、鍵を外し窓を開け放った。途端に、澄んだ冷気が部屋に流れ込んでくる。

隆志はホツとして振り返ると、部屋の反対側の扉も開けに走った。たったこれだけの距離を走っただけで、頭に鈍い痛みが走る。どれだけ空気が淀んでいたかが分かる。

その時、隆志の足元の炬燵の布団が、モゾモゾと動いた。

「なあに？寒いじゃないのよ」

寝ぼけ眼を擦りながら炬燵から出てきた女は、座ったまま大きく伸びをして、瞳の端に滲んだ起きぬけの涙を拭った。

「寒い、じゃないよ。死ぬ気かよ？」

隆志は女を冷たく見下ろして言った。

「あはは、ごめん。昼過ぎに帰ってきてさあ、ついウトウトしちゃって」

「一酸化炭素中毒って言葉、知らないの？」

ちっとも悪びれる様子のない女に向かって、隆志は硬い声を出した。

「帰ってきたら、死んでました……なんて、俺ゴメンだけ。あんたが一人で死ぬのは勝手だけど、ウチには葬式出す金なんか無いし。」

まかり間違つて火なんか出して、隣家まで焼いちゃったら、どう責
任取るんだよ」

「はいはい……あー、怖い怖い。昔は「母ちゃん、母ちゃん」って、
泣き虫であんなにかわいい子だったのにねえ」

女は最近拾つてきた、炬燵の傍で添い寝していたブチの野良猫を
抱き上げて、言った。

「今の私の味方はお前だけよ。ねえ、たーちゃん」

「その呼び名、やめろよ」

隆志が苦々しげに顔をしかめて言う。

「猫と同じ名前なんて、気分悪いよ」

「いいじゃない。今はたーちゃんって呼ばせてくれないんだから。
猫くらい、私の好きな名前で呼ぶわよーだ!」

少女じみた仕草でアツカンベーをみると、女は猫を抱いたまま、
またゴソゴソと炬燵の布団の中に潜り込んだ。

「あー、お腹空いた」

力なく呟く声に、隆志が振り返る。

「食ってないの?」

「店が混んでてさ。タイミング逃しちゃった」

そう言われて、女が店の客から譲り受けた調理場の小さな冷蔵庫
を試しに開けてみても、見事なほどに何も入っていないかった。

「……玉子かけご飯でいい？」
調理場から振り返る隆志に、女は気の抜けた返事を返す。

「お金ないわよ」

隆志は居間へ踵を返すと、ぶっきらぼうにポケットをひっくり返して、畳の上に小銭を落として見せた。

「今日、バイトの給料日」

「うっそ！すごい、やるう」

女は寝そべった姿勢のまま、抱いた猫を『高い高い』して上機嫌だ。隆志は空気が入れ替わったのを確認すると、黙ってまた窓を閉め始めた。

「買い物してすぐ帰ってくるから平気だと思うけど、喚起は本当に気をつけるよな」

「分かってる、分かってるって」

女は嬉しそうに顔を輝かせながら、ヌクヌクと炬燵にもぐっている。

「ねえ、隆志。前にもこうやって、隆志が玉子かけご飯作ってくれたことあったよね。私が風邪ひいて、寝込んでた時」

「覚えてない」

素っ気無く言う隆志に構わずに、女は思い出すように目を細めた。

「うっん、私は覚えてるよ。まだ小さかったから、下手クソでさあ。

玉子上手に割れなくて、殻がいつぱい入ってたの。私、思わず怒っちゃって……あんたは、あんなに小さかったのにさ、一生懸命だったのに……あの時は、ごめんねえ」
「急に何だよ？」

怪訝な顔をする隆志に、女は照れ隠しのように笑った。

「何だろうね。最近よく、昔のこと思い出すのよ」
「年取った証拠じゃないの？」

隆志がわざと意地悪くそう言つと、女はちつとも年を感じさせない少女のような表情で「かもね」と微笑んだ。

「取りあえず、行つて来る」

隆志が背中を向けると、背後から女が声をかけた。

「……たーちゃん」

隆志が振り返る。

「俺？それとも、そいつ？」

隆志が女の抱いた猫を顎でしゃくる。

女は炬燵の布団の陰から、フツツと微笑んだ。

「……ガキみてえ」

隆志は呆れたようにため息をつくと、近くにあった膝掛けを取って、炬燵から出た女の肩に無造作にかけてやった。

「よし、鉛筆置け」

チャイムの音と共に教室中が深いため息に包まれる。

二学期期末試験最終日は、数学？の試験で締めくくられた。

一番後ろの席の隆志は、試験の途中からすでに諦めて、残り十分近くを睡眠時間に当てた伊藤健吾の背中をつついた。

「……んあ？」

健吾がマヌケな声を出して上半身を起こす。健吾の下敷きになっていたテスト用紙は、既にシワシワで涎の痕までくつきりつついていた。

「テスト、終わったよ。回してよ」

隆志がぶつきらばうに自分の答案用紙を健吾に押し付ける。

「嘘？マジ！？」

目の覚めた健吾は、自分の真っ白の答案用紙を見て今更焦りだし、隆志の答案用紙を引っつかんだ。

「ヤベ、島貫、見せる！」

そう言つと慌てて隆志の回答を自分のまっさらな答案用紙に写し

出した。

「先生！伊藤がズルしてます！」

斜め前の席に座った萩原圭子が真つ直ぐに手を挙げて、すかさず告発した。

「あ！萩原、てめえ！」

「伊藤！また、お前か！」

教師は健吾のところまで飛んでくると、小学生の男子にするように健吾のこめかみをグリグリ拳で攻めて、健吾に悲鳴を上げさせた。

「赤点でもカンニングでも落第させるからな！」

狭い街の中で、この公立高校には同じ中学から多くの者が進学した。

下宿して東京の学校や、私立の学校へ進む者もいたが、ほとんどの学生は経済的な理由から、街で唯一の公立の普通高校であるこの高校に進学した。

隆志もランクを相当下げて受験することになったが、電車賃がからず、自転車通学が出来るこの高校に進学することに何の迷いも不満もなかった。

隆志が愛用している自転車は、だいぶ錆付いてガタがきていたが、高校の入学祝に、智之がかつて家財道具屋を営んでいたときのコネを使って、廃品を手に入れ、綺麗に整備してプレゼントしてくれたものだった。

「まだ席から離れるなよ。これ、提出したやつから帰ってよし」

健吾を絞つてから教壇に帰った教師は、テストをみな回収したのを見届けると、新たなプリントを前から回した。

痛みに突っ伏している健吾を飛び越えて、二つ前の席の生徒からプリントを受け取るなり、隆志はその紙をクシャクシャに丸めてポケットの中に突っ込んだ。

『進路希望』

隆志が丸めた紙には素っ気無く、そう書かれてあった。

「三年になったら、それを元に進路別にクラス分けするんだからな。これは最終希望だから、必ず真剣に考えて出すように」

前の席では、健吾が鉛筆を口に咥えて唸っていた。

「……文系、英語嫌い。理系……数学分かんね……文理系、国立かあ、うーん、全部分かんね……就職なんて、まだ早いしなあ」

「伊藤、うるさい」

圭子にすげなく言われた健吾は、伸び上がって圭子の進路希望を覗き見した。

「は？何、お前。看護学校？お前が、ナース？」

「何よ、勝手に見るんじゃないわよ！変態！」

「お前なんかナースだったら、殺されちまうよ。人類のためにやめとけ」

「親の脛かじつて、アンポンタン大学に裏口入学しか道のないあんたより、私は将来、よっぽど人類のためになるわよ」

「裏口入学とは何だよ！？」

「あんたの偏差値で普通に入れる大学なんかこの世にないってこと」

相変わらずの二人を見ながら、隆志はこっそり教室を抜け出すタイミングを計っていた。教師が後ろを向いた瞬間、そ知らぬ顔で後ろの扉から出ようと準備する。

「伊藤、あんたも少しは人の役に立つこと考えなさいよ。さゆりはエスカレーターで付属高校から音大に進んでピアノの先生になるって言ってるし、理穂子は短大で保育士の免許取るって言ってるわよ」
理穂子　　の名前に、隆志の鼓動がビクンと跳ね上がった。

「オレ、オレ！オレもそこにする！斎木と同じ短大にする！」
「女子大だよ、バカ！」

中学の同級生たちは、未だに理穂子を小学校の時の『斎木』の苗字で呼ぶ。

その方が馴染みやすいのだ。
今の彼女の名前は正式には『早川理穂子』であった。

教師がこちらに背中を向けた。
今だ！と隆志が席を立ち上がった時、前の席の健吾が突然振り向き、隆志の腕を掴んだ。

「待てよ、島貫。一勝負、やってけよ」

健吾は細い目を更に細くして、ニヤツと笑う。
おもむろに学生服のズボンのポケットを探ると、子どものように目をキラキラ輝かせて、小さなマツチ箱を取り出した。

「今日は、負けねえ」

最近健吾が凝りに凝っているゲームだ。

何のことはない、マツチ棒をいくつも積み上げて城を作る。

交互に積み上げて行って、先に城を崩した方が負け。勝った者はそのマツチ箱ごと、全てのマツチ棒をもらえるのだが……

「俺、急ぐんだけど……」

隆志の迷惑そうな表情などお構いなしに、ジャンケンもしない内から自分が先攻と決めてかかり、健吾は勝手にゲーム開始を宣言する。

仕方なく隆志も椅子に座りなおして、イヤイヤながら小さい城を築きあげていく。

かなり積みあがってくると、それなりに緊張感がある。健吾の手もブルブルと震えていた。

「……うーん」

声にならない声を出しながら、かなり不安定に揺れる城に、健吾が震える手で一本落とした。

その瞬間

マツチ棒の城は、もろくも崩れ去った。

「ああー！！」

絶望に打ちひしがれる健吾は、悔し紛れに隆志に食ってかかる。

「島貫、お前今揺らしただろ」

「何もしてないよ」

いつものことに、隆志は冷め切った声で反論する。

「今のはどう見ても、あなたの鼻息ね」

圭子の冷笑に、健吾は耳まで真っ赤になって怒り出す。

「うるせえ！ズルしたから、この勝負は俺の勝ち」

無理が通れば道理引っ込むとは、まさに健吾のためにある言葉だった。

「あなた、ほんとガキね」

圭子の哀れみさえこもったため息に心の中で深く同調しながら、マツチ箱の一つや二つ別に惜しいわけでもないのに、隆志も呆れながら健吾にマツチ箱を押しやる。

「俺、帰るから」

「そこ！進路希望の紙出したのか？早くしろ！」

教師が教壇から檄を飛ばす。

「出しましたー」

隆志はシレッと嘘をつくのと、悠々と席を立ち、後ろの席から教室を出て行った。

(2)

繁華街から少し外れた裏通りに自転車を滑らせると、夜の帳が下り始めたばかりのその通りは、民家の夕食の匂いに似た、どこことなく懐かしい香りを漂わせて、学校帰りの隆志を出迎えた。

キユッ

タイヤとブレーキの擦れる音を同時に上げて、隆志の自転車が馴染みの店の前で止まる。

『スナック不知火』

今日も夜も更ける前から、賑わっている。

隆志は地下へ続く階段をトントンと軽い足取りで下り、店の扉を開けた。

「よ！おつかえりー」

入り口のすぐ脇の席の客に酒を運んでいたこの店のボーイ、マサが、真つ先に隆志に気がついて声をかけた。

お気に入りのスタジヤンは三年前と変わらないが、髪形はパンチパーマからスキンヘッドになっていた。

ユル・プリンナーのリバイバル映画を観て、今更ながら影響を受けたと本人は言う。アカリやその他の客には「出家でもする気か」ともつばら不評だが、本人はどこ吹く風で、休日はその髪型にレイバンのサングラスと、誰も寄り付かないような風貌に磨きをかけている。

「おかえり、隆志君」

奥のカウンターには、この場にそぐわない、だが一番リラックスした様子の細身の男が座っていた。

隆志を見つけて片手を挙げると、ふわりと微笑む。

「また来てたの？」

隆志は呆れた溜息をつくとき、両手をポケットに突っ込んだまま、カウンターに向かった。

「飲酒運転で捕まるよ」

「心配後無用。ねえ、アカリさん」

男に話を振られて、カウンターの中のアカリが微笑む。小さな空き瓶をカウンターの下から出して顔の横で軽く振ると、隆志に向かってウインクしてみせた。

「ぬかりはないわ」

空き瓶には『オレンジジュース』の文字。

「智之さん、下戸？」

隆志の遠慮のない物言いに、智之は苦笑しながら手元の可愛らしいオレンジ色の飲み物をおおった。

「なのに、毎日よく来るね」

「僕は雰囲気酔うタイプなんだ」

アカリが智之のグラスに、新たに開けたオレンジジュースのビンから酌をする。

「こんなに礼儀正しいお客なら、大歓迎よ」

智之は理穂子が世話になったことをきっかけに、ちよくちよく「不知火」に通うようになっていた。

隆志が学校帰りに『不知火』に寄ると、智之が先着でいることも珍しくない。

まるで家の者が出迎えるように、自然に「お帰り」などといいながら、アカリやマサたちと楽しげに談笑している。

「試験はどうだったんだい？」

「終わったばっかだよ」

隆志は智之の隣の席に腰を下ろしながら、ぶっきらぼうに答えた。

「今日は何の試験だったの？」

「数？」

「うえ、やめてくれ。その名前を聞いただけで、鳥肌たってくる！」

給仕を終えてカウンターに滑り込んできたマサが、隆志たち二人の会話を聞いて、思いきり顔をしかめながら舌を出す。

「隆志君の得意教科だよね」

智之が言うと、マサは大げさな仕草で天を仰いだ。

「隆志、お前絶対、変！」

「変なのは、あんたのアタマ！」

アカリはそう言うと、マサの光る頭をパチンといい音を立てて弾

いた。

「……別に、得意じゃないよ」

気恥ずかしそうにそっぽを向く隆志に、智之は何やらゴソゴソとポケットの中を探って、幾重にも折りたたまれた紙きれを取り出した。

「証拠があるよ」

そう言いながら、智之は小さな紙切れを丁寧に開いていった。

「あっ！」

紙切れに書かれた文字を見た瞬間、隆志は思わず声を上げていた。

「じゃーん！こないだの全国模試、ほら、見てよ。数学、全国14位！！」

「えー?!ウソ、すごいじゃない!!」

アカリもカウンターのの中から身を乗り出す。

「な……何で、あんたがこんなの持つてるんだよ!!か、返せよ!」

先日『不知火』に寄って夕飯を食べたとき、模試の結果を興味のない母親の元へ持って帰る気になれず、他のゴミと一緒に店のゴミ箱へ捨てたのだった。

まさか、それを智之が拾い、大事に持ち歩いているなどとは思ってもみなかった。

「拾ったものだから、もう僕のものだよ」

どこか得意げな智之をよそに、隆志は耳まで真っ赤になって俯いた。

正直、やられた　そう思った。

「進路、そろそろ聞かれる時期じゃないの？」

隆志はつまらなそうに、無然とした表情で軽く頷いた。

「大学は？もう志望校決めたのかい？」

「……俺、行かない」

「どうして?!こんなに出来るのに、勿体ないよ!」

珍しく智之が声を上げて、グラスの中の水を舌で舐める隆志に詰め寄った。

「やりたいこととか、ないの？」

「別に」

「ウソだよ!前、家建てるのとか、やってみたって言ってたじゃない」

隆志は智之の記憶力の良さに、心の中で舌を巻いた。

確かに、智之の言っていることはあながち外れてはいなかった。

駅周辺の再開発が進んでいるこの街では、ここ数年で競い合うようにして、駅ビルが乱立するようになった。

実際、味気ない鉄骨を組み合わせるところから始まって、最後はガラス細工の様に太陽の光に乱反射する、繊細な建物が生まれるのを見るのは楽しかった。

学校帰りにわざわざ自転車を止めて、工事現場を見上げることもあった。

智之に、それが好きだと漏らしたこともあったかもしれない。

しかし、自分のそんなほんの戯言を、まるで大切な告白でもあるかのように、いつまでも記憶に留めている。そんな智之の優しさが、嬉しくもあり、同時に苦しくもあった。

「齋木は、保育士になりたいんだろ？」

隆志は話題を変えたくて言った。

「ああ、あの子は子どもが好きなんだ。小さい頃からそうだったよ。この前も、いくつかの短大を見学しに行くって言ってたな」

「会ってるんだ？」

隆志が言うと、智之は少し恥ずかしそうに、しかし、嬉しさを隠し切れない様子で頬を染めて頷いた。

「本当にたまに……だけどね」

中学三年生の時、母親の再婚が決まる直前に智之に会いに来た理穂子は、その後すぐに東京の住まいへと戻って行った。

しかし、それをきっかけに、智之とも年に数回、理穂子の母や祖父母の目を気にしながらも、こっそり会うようになっていた。

「そうだ。今度の日曜、理穂子がこっちに来るんだよ。久しぶりだろう？会ってくれないかな。理穂子も喜ぶよ」

「……別に、いいけど」

隆志は一気に速度を上げた鼓動を智之に気づかれぬように、乱暴にグラスの中の氷水をあおった。

それでも、小さく手が震えていた。

確かに会うのは一年以上ぶりだが、中学三年生のあの日以来、隆志は理穂子と、日々の学校生活のことなどを中心に、細々とした手紙のやり取りを続けていた。

しかし、それは智之にも黙っていた。

例えままごとのような他愛のないやりとりでも、隆志にとっては、二人だけの、小さく大切な秘密であった。

週末、智之の設定した喫茶店で、隆志は理穂子を待っていた。

約束の時間よりも、一時間も早く着いてしまった。

店内では、少し前に流行った「ペドロ&カプリシヤス」の『ジョニーへの伝言』の哀切なメロディが流れている。

日頃、縁のない洒落た雰囲気店内に、隆志はなかなか落ち着かなかった。

低カロリーなダイエット食品として話題になっている、発売されただけの「シュガーカット」なる商品がテーブルの端に置かれていたので、隆志は緊張を紛らわすために、それをコーヒーの中に何杯も入れてかき回しては、むやみに甘いその飲み物を飲み下して時間を潰していた。

カランコロンカラン……

店の入り口に取り付けられた鐘がなり、隆志はビクツと肩を震わせて振り返った。

紺色のダッフルコートに赤い毛糸のマフラーを巻いた理穂子が、

頬を上気させてそこに立っていた。

「遅れてゴメンネ」

理穂子は真つ直ぐに隆志のいる喫茶店の一番奥の窓際の席までやってくると、まだ息を上がらせたまま、コートと長いマフラーを取った。

隆志は黙って、理穂子のコートを受け取り、自分の後ろの壁にかかっているハンガーを取り、そこへ吊るしてやった。

「待ってないよ。時間、ぴったりじゃない」

隆志がそう言うと、理穂子はホツとしたような顔をして「そう？よかった」と微笑んだ。

コートを脱いだ理穂子は、赤いタータンチェックのプリーツスカートに、ふわふわした白いセーター、黒いハイソックスと、女学生らしい可愛らしい姿だった。

もう昔のように、髪を赤く染めてもいない。

生まれつきの栗色の髪は肩の辺りまで下ろされていて、ふわふわと彼女の小さな顔の周りを彩っていた。

「智之さんとの約束は、何時から？」

「七時から。パパが仕事が終わったら迎えに来るから、夕飯一緒に食べようって。島貫君も連れてきなさいって言われてるよ」

「俺は、いいよ」

隆志は照れくさそうに首を横に振った。

「久しぶりだね」

腰を下ろし、ウエイトレスに差し出された氷水を一口飲んで落ち着いた理穂子は、改めて隆志を見て微笑んだ。

「みんなは元気？」

「うん、相変わらずだよ」

隆志は理穂子に質問されるまま、最近の圭子や健吾たちの様子について話した。圭子とは今でも連絡を取り続けているようで、隆志が知らない圭子やさゆりの話も交えながら、時間が過ぎていった。

そして、期末試験の話から、不意に理穂子が言った。

「そういえば、この間の全国模試の話、聞いたよ」

隆志の頬がカアツと熱くなる。

「智之さん？」

理穂子が悪戯っぽい目で笑いながら頷く。

「……まったく、あの人つてば」

短く刈り上げた頭を抱え込んで、隆志は真っ赤になって俯いた。

「島貫君は大学どうするの？やっぱり、理系選択？」

みんなそのことを聞くんだな

隆志は答えに詰まりながらも、小さな声で言った。

「……俺は、大学には行かないよ。そんな金ないし。高校出たら、働くよ」

「そんなのダメだよ！」

隆志の言葉に理穂子は目を丸くして声を上げた。

「島貫君、小学校の頃から成績は良かったじゃない。それに、前にもらった手紙にも建築の仕事に興味があるって書いてたの覚えてるよ。お金なんか、奨学金だって、なんだってあるんだから。簡単に諦めちゃだめだよ」

「俺は斎木みたいに、ちゃんとした目標があるわけでもないし、いいんだよ……でも、ありがとう」

しかし、理穂子は納得しない様子で更に重ねた。

「東京に、出ておいでよ」

「え？」

突拍子もない話だったが、理穂子の目は真剣だった。

「私も東京の短大に行くし、一緒に行けたらいいなって思ったから」

理穂子は頬を染めながらも、きつぱりと言い切った。これには隆志の方が面食らった。

「……何で、急にそんなこと」

「嫌？」

「い、嫌じゃないけど……東京なんて、思いもしなかったから、ちよっとビックリして」

「……ごめん、勝手に押し付けるようなこと言って」

理穂子も急に恥じ入ったように小さく俯いた。

「いや、そんなことないよ。ありがとう……ちょっと、考える時間をくれないかな」

理穂子は頷いたまま黙り込んだ。気まずい沈黙が続き、耐えられなくなった隆志は別の話題を探した。

「それ、自分で編んだの？」

隆志は小さく畳まれてテーブルの隅に置かれた、理穂子の赤い毛糸のマフラーを指差して言った。

以前の手紙に、手編みに凝っているという話が書かれていたのを思い出したからだ。

「あ、うん。これで、三作目なんだ」

理穂子が顔を上げ、救われたように、いつもの屈託のない笑顔で浮かべて言った。

「上手いじゃない。店で売ってるやつみたいだ」

隆志が言つと、理穂子は嬉しそうに笑みを深くした。

その時、理穂子はコーヒークップにかけられた隆志の手先が、酷く荒れていることに気がついた。

アカギレだらけの手は皮がめくれ上がり、血が滲んでいる。

「バイトのせい？……すごく、痛そう」

「ああ、これ？もう慣れたよ」

隆志は気恥ずかしそうに自分の荒れた両手を擦って、テーブルの下へ隠した。

その時突然、理穂子が視線を向けていた喫茶店の窓のところに、サンタクロースの扮装をした男が、鼻先をつけるようにして窓に張り付き、喫茶店の中にいる隆志や理穂子に向かって、おどけた顔を見せてみた。

「キヤツ！」

思わず驚いて悲鳴を上げた理穂子だが、その正体を知ると、自分の大げさな反応に、かえって声を上げて笑った。

窓の向こうのわかサンタも、自分の悪ふざけに今更少し恥ずかしそうな表情を浮かべて、丁寧にお辞儀をすると、手にした商店街のクリスマスセールの開催チラシを、また配るために通りへ戻って行った。

「ああ、びっくりした」

理穂子は胸に手を当てて、まだこぼれる笑いを止められないようだったが、そんな理穂子を見ていると、隆志までつられて笑みがこぼれた。

「もうすぐ、クリスマスだね」

ようやく呼吸を整えた理穂子の視線が、ゆっくりと窓の外へと移る。

にわかに活気付きだした街並みは、もうすぐ迎えるクリスマスの

色に染まって浮き足立っていた。

「クリスマスプレゼント、もう買った？」

「うちは、そういうのやらないから」

隆志の返事に、理穂子は聞いてはいけないことを聞いたのではと、顔を曇らせた。

隆志は慌てて付け加える。

「ウチは、ほら、無宗教だからさ。特別にキリストの誕生日を祝ったりしないわけ」

「それじゃあ、プレゼント交換もしたことない？」

隆志はぎこちなく頷く。

「じゃあ、やろうか？プレゼント交換」

「え？」

「二人で、やろうよ。クリスマス当日まで、プレゼントの内容は秘密だよ。でね、相手が一番欲しそうなもの、用意するの」

「……俺、そんなの分らないよ」

「ダメだよ、考えるの。それが、面白いんだから」

理穂子は大きな瞳をクリクリ動かして、躊躇する隆志を説き伏せた。

「だったら、ヒントくれよ」

「ヒント？」

隆志は苦しそうに眉間に皺を寄せ、真剣な口調で言った。

「そ、ヒント。例えば、斎木の好きなものとか、最近のお気に入りとか。そこから、斎木が欲しそうな物、考えるからさ」
「いいよ」

理穂子は面白そうに微笑むと、わざわざ姿勢を正して椅子の上に座り直し、隆志に向き直った。

「私の最近のお気に入りだね、ずばり『ある愛の詩』だね」
「何、それ？」

「知らない？ちよつと前に、大ヒットした映画だよ。アリ・マックグローの」
「……アリ？」

キョトンとする隆志に、理穂子はじれったそうに言う。

「主演の女優さんの名前。素敵だったんだあ」

理穂子はその映画の内容を思い出すかのように、机に肘をついた姿勢で両手の上にアゴを寄せ、ウツトリとため息をついた。

「すごく、愛し合っている恋人同士が、彼女が白血病になったことで引き裂かれるの。最後に彼が、誰もいない思い出のスケートリンクで一人、彼女と過ごした戻らない日々を想うところが、すごく切ないけど、大好き」

隆志は映画の筋よりも、夢見るように語る理穂子の方に見惚れていた。

智之は、木枯らし吹きすさぶ川沿いの道を歩いて、見慣れた長屋の集落へ足を踏み入れた。

ほんの数ヶ月の間、美しく軽薄な恋人と、まだ幼さの残る恋人の息子と共に過ごした苦い思い出の長屋。

それ以後も、もう愛しい女の心が戻りはしないことは百も承知でも、待たずにはいられなかった日々の、全てを見てきたこの貧しい集落。

訪れるのは、三年ぶりだった。

もう日は西の空に傾き、家々に明かりが灯り始めている。

立て付けの悪い引き戸に背中を預けて、智之は暮れてゆく空を見上げた。帰路を急ぐ鳥の群れが流れて行く。

パキッ

その時、足元の枯れ枝を踏む乾いた音が、やけに大きく智之の耳に響いた。

智之が空を見上げるのを止め、音の方向へ視線をやると、そこには黒いコートに華奢な身体を包んだ、巻き髪の女が立っていた。

「……やあ、久しぶり」

ぎこちなく片手をあげる智之に対して、女は大げさに鼻をならした後、冷笑を浮かべた。

「付け回すの、復活したってわけ？」

「君だけのためなら、来ないよ。約束したからね、もう君の側に寄らないって」

「じゃあ、何で今ここにいるわけ？」

「隆志君のためだよ」

「隆志のため？」

女の顔色が変わった。眉間に皺を寄せ、憎憎しげに智之を見据える。

「隆志君は頭のいい子だ。君は知らないかもしれないけど。学校の成績だって、すごくいい」

「あの子は私をバカにしてるから、学校の成績なんて一度も見せられたことないわ。通知表も、模試も、一回も……」

吐き捨てるように言う女に向かって、智之が厳しい口調で遮った。

「君が興味を示さないからだろ！」

「説教ならやめて！」

女の頬が怒りで紅潮する。

「『母親失格』『お前みたいなために母親は務まらない』みんなそう言って、勝手に私からあの子を取り上げていくのよ！淫売女、娼婦の子、勝手な名前で私たちを呼びながら、優しさを気取った優越感で、私たちを引き裂いてくのよ」

「誰もそんなこと言ってない。僕は、ただ、君や隆志君を助けたいんだ。力になりたいんだ！」

女の細い肩を掴みながら、智之は叫んだ。

「誰の入れ知恵？」

女は薄ら笑いを浮かべながら、必死の形相の智之を見上げる。

「知ってるのよ。隆志もあんたも、あの女のところに入り浸ってるのをね。性懲りもなく、また私からあの子を奪う気ね」

女は言葉に詰まる智之をあざ笑った。

「助けるが聞いて呆れるわね。自分の妻も娘も捨てて、愛人に走った男が。そう言えば、奥さん、再婚したそうじゃない。相手は羽振りが良かった頃のあなたと、対を張るくらいのお金持ちだそうね。もうあなたの手は必要としてないのね。生憎だけど、ウチも求めてないわ。差し伸べるべき手の行方を、手近なところで間に合わせるのはやめて。良心の痛みを、私たちで代用するのはやめて！」

女の肩を掴んでいた智之の手が、ダラリと力を失って垂れ下がる。

「……何を言っても、信じてもらえないかもしれないけど」

微かに肩を震わせて、消え入るような声で智之は呟く。

「妻や理穂子に僕がしたことは、一生かかっても償えることじゃない。でも、後悔は出来ないんだ。だって、僕は、もう一度あの日に戻れるとしても、きっと同じ道を選ぶから」

「そんなに私と寝たかった？」

女の好戦的な物言いにも、智之は静かに首を横に振って言った。

「……愛していたんだ」

「身体をね」

「……違う。心だよ。美華、君の淋しい心を、愛していたんだ」
「笑わせるわね」

女は新たな枯れ枝を踏む乾いた音を響かせながら、智之の脇を通り過ぎた。巻き髪から、甘くけだるい香りが漂い、智之の鼻腔をかすめた。

「隆志君が幼い頃、連れ去られそうになったことがあったと、いつか話してくれたことがあったね」

智之は女を振り返らずに続けた。

「……その時、君の心が本当はずっと長いこと、悲鳴を上げてきたのが分かった」

女は引き戸の前で立ち止まった。

「僕には……分かったんだ」

「……バカな男」

女は一言呟くと、ピシヤリと音をたてて引き戸を閉めた。

隆志はアカギレだらけの手で自転車のハンドルを握り、ボロボロの赤い手ぬぐいを巻いた首を亀のように縮めて、川沿いの道を飛ば

していた。

すっかり日が落ちて、寒さが肌を突き刺す。

その時、不意に目の前に、真正面から駆けてきたであろう長身の影が立ちふさがり、隆志の自転車と正面からぶつかってしまった。

隆志の自転車はライトが壊れて無灯火だったため、目の前にその人影が現れるまで気付かなかった。

弾き飛ばされた人影が前方に転がり、隆志もバランスを崩して自転車ごと横倒しになる。

「……痛つてえ！」

倒れた自転車の横で思い切りぶつけた腿を擦りながら、隆志を身体を起こした。前方で同じように転がっている人影に目を凝らした隆志は、思わず驚きの声を上げた。

「智之さん！」

男は隆志から顔を背け、暗闇の中で着ていたコートの襟の中に顔をうずめ、咄嗟に隆志から顔が見えないようにした。

「悪い！大丈夫か？」

隆志は自転車をそっちのけで、倒れている智之に駆け寄った。

「こんな所で何やってるの？」

「……ちよつと、ね。用事があった」

智之は鼻をすすり上げながら、くぐもった声でそう言った。智之の様子がおかしいことに気がついた隆志は、顔を背ける智之の襟首を掴んで、自分の顔の前に引き寄せた。

間近で見た智之の顔は、涙で濡れていた。

「……何か、あったの？」

智之は少し気恥ずかしそうに濡れた頬を拭くと、再び隆志から視線を外し、乾いた笑いをこぼした。

「何でも、ないよ。自転車、ライト壊れてるんだね。直さないと、危ないね」

「そんなことどうでもいいよ！この道……俺の家に行ったの？母さんに何か言われた？」

智之は小さく首を横に振った。

「この前、理穂子に会っただろう？いろいろなこと、話せたかい？」
「え？……うん、まあ」

智之は瞳を涙に濡らしながらも、いつものふわりとした笑みを浮かべていった。

「理穂子が残念がっていたよ。夕食に、君もくればよかったのにつて。僕も君と三人で食事がしたかった」

「……俺は、いいんだってば」

「君は、案外照れ屋さんだからな」

「……ほっとけよ」

唇を尖らせる隆志を見て、智之は優しく笑った。

「手を出して」

智之が突然、皮の手袋を脱ぎ、隆志の前に自分の手をかざして見せた。

「重ねて」

「え？」

「いいから」

怪訝な顔をする隆志を促して、智之は自分の右手に隆志の右手を重ねさせた。

「……大きくなったんだね。男の子は、ほんの何年かで大きくなるんだね。見てごらん。僕よりも、今は君の手の方が大きいよ」

そう言つと、智之は改めて笑顔を作ろうとしたが、上手くはいかなかった。

口元に手をあて、泣き笑いのような表情になりながら、必死に新たに溢れてくる涙を堪えようと唇を噛みしめた。

「智之さん、やっぱり何かあつたんだろ？ そうなんだろ？」

襟首を掴んだまま詰め寄る隆志の肩を、智之はそのままガバツと抱き寄せた。

「……僕は、君の父親にはなれないよ。でも、君たち親子を想つことだけは、許してほしい。自己満足だと言われても、それだけは、許してほしいんだ」

「……智之さん？」

隆志から智之の表情は見えない。隆志は智之の震える肩に恐る恐る手をかけた。

「……ただ、想うことだけは、許してほしい」

隆志は大の大人が泣く姿を初めて見た。

冬の凍てつく川沿いの道で、隆志は静かに涙を流す智之をぎこちなく支えていた。

スナック『不知火』の常連客の一人、季節労働者の通称「源さん」は、同じく出稼ぎ仲間の後輩「信さん」と連れ立って、いつものように仕事帰りに『不知火』で一杯引っ掛けようとやってきた。

「まったくさあ、あんなひどい現場見たことないよ。あのクソ親方……」

思う様、二人で最近になって東京から送られてきた若い現場監督の悪口を言い合いながら歩いていると、店の前に黒いコートに身を包んだ女が立っているのが目に入った。

「お、おい！源さん、見ろよ」

信さんは、隣にいる源さんを肘で突くと、小声で囁いた。

「……すっげえ、いい女だなあ」

信さんはポカンと口を開け、うつとりと女を眺めた。

「バカッ！」

「痛ッ！」

源さんは魂を奪われたように女を凝視する信さんの頭を、思い切り引っぱたいた。

「いい女で当たり前だ！知らないのか？ありや、この街で一番の有名な娼婦だよ」

「娼婦？……何だ、玄人か。どうりで、並外れていい女なわけだ。ああ、俺もいつぺん、お手合わせ願いてえ」

よだれを垂らさんばかりの信さんに向かって、源さんは先ほどよりも強烈な一撃をお見舞いした。

「痛えよ！！さつきから何なんだよ、源さん！」

頭を押さえて抗議する信さんに、源さんはピシヤリと言った。

「ありや、隆志の母親だ」

地下へ続く店の階段の前に立ち尽くす女は、モジモジと自分の前を通って店に入ろうとする二人の客を、甘い声で呼び止めた。

「お兄さんたち、この店の常連さん？」

二人の中で、年配の男の方が振り返って頷いた。

「……そうだが、あんたもこの店に用かい？」

女は薄く微笑むと、ヒールの踵を鳴らして、店の階段を降り始めた。

「スナック『不知火』? ……ふふ、あの女らしいわね」

女は独り言のように呟くと、さっさと二人を追い越して、店のドアを乱暴に開け放った。

夜も更け始め、既に活気づいていた店内の客は、荒々しくドアを開けて入ってきた美女を一齐に振り返った。

「八代アカリに会いに来たわよ!」

女は店の奥に向かって大声で叫んだ。

黒いロングコートを翻しながら、呆気にとられる客を蹴散らして、ズカズカとカウンターまで進んだ。

「お客さん、困ります!」

カウンターの中に平気で入ろうとする女を、中にいたマサが体でくいとめる。

「あの女を出しなさいよ!」

マサの大きな体に阻まれ、女は巻き髪を振り乱しながら、ヒステリックに声を上げた。

「一体、何の騒ぎなの?」

その時、店の奥から騒動に気付いたアカリが出てきた。

今日も紡ぎの着物に、黒々とした髪を鬘甲くわっこうのかんざし一本で、綺麗にアップにまとめている。

一方の女の方は、マサと揉み合った際にはだけた黒いコートの中からは、薄手で胸が大胆に開いたデザインのワンピースが覗いている。

対照的な姿の二人の女が、カウンターを挟んで対峙した。

「……美華さん」

アカリは驚きを隠しきれない声で呟いた。対する美華は、アカリに向かって、好戦的な眼差しを投げかけながら言った。

「今日は忠告に来たのよ」

「忠告？」

アカリの眉がピクリと吊り上る。そんなアカリの反応を見て、美華はカウンターに肘を付き、身を乗り出してアカリに顔を寄せた。

「前にも言ったはずよ。あんたが私たちを追っかけて、この街に住み着いた時。二度と、私の手から、隆志を奪うことは許さないって」「奪う？急に一体、何を言い出すのよ」

言った瞬間、美華からアカリに向かって鋭い平手打ちが飛んだ。

「アカリさんっ!!」

マサがすぐさまカウンターを飛び出して、美華に掴みかかる。店中が騒然となった。

「やめなさいっ!!」

アカリの一喝で、マサの動きが止まった。店中静まり返り、この美しい女二人の睨み合いの行く末を見守っている。

「ずっとぼけるんじゃないわよ。あの男がついさっき、家に来たのよ。偉そうに、隆志の「将来」について、一席ぶっていったわ。あんたがけしかけたんでしょ？隆志もこの店に通ってるの、随分前から知ったたのよ。今まで目をつぶってやってたけど、出すぎた真似をするなら、ただじゃおかないわ」

興奮してまくしたてる美華に対して、アカリは冷静だった。

「叩かれた上に濡れ衣まで着せられちゃ、割りに合わないわね。私のはあなたの息子をたぶらかして通わせてるわけじゃないわ。あの子ももう十八よ。一人で何でも判断できる年だわ」

「はっ！偉そうなこと言わないでよ。母親でも気取るつもり？自分は、子どもを持ってない身体だけ……」

美華が言い終わらないうちに、前方から美華の頬を張ったのは、マサだった。

美華は頬を張られた勢いで、カウンターに残るグラスを全て床に落としながら、後方へ倒れこんだ。

「アカリさんを侮辱したら、この俺が許さない！」
「マサッ！」

アカリが殴ったばかりで熱を持つマサの拳に軽く手を乗せて、首を横に振る。「落ち着け」と無言でたしなめていた。

「……ご立派なナイトをお持ちですこと」

乱れた髪の間から、キラキラ光る目で睨み付けると、美華は二人から視線を外さないまま立ち上がった。

こぼれた酒が、カウンターから細い滝のようになって床を濡らし、氷や割れたグラスの破片をキラキラと輝かせていた。

「招かれざる客は、退散するわ」

美香は吐き捨てるようにそう言うと、アカリに背を向け歩き出した。

帰る途中で、テーブルに残っていた他の客の飲みかけのブランデーを奪って、一気におおる。

白い手の甲で扇情的に濡れた唇を拭くと、美華はクルリと振り返り、アカリに向かって指を突きつけた。

「あんたがこの街に住むのを黙って許してやったのも、あんたはあんたの親が私にしたことを何も知らなかったから。でも、私は忘れないわよ。再び隆志を奪おうとしたら、殺してやる」

美華は低い声でそう呟くと、ドアの方へ歩き出した。

「不可侵の約束を、忘れないでね」

来た時と同様、乱暴に閉められるドアの間で黒いコートが翻り、一陣の風のように現れた、気性の激しい美女の幕引きを彩った。

「まったく、何て女だよ」

マサが怒りに頬を紅潮させたまま言った。アカリの手は、まだマ

サの拳の上に乗せられている。

「……仕方ないのよ」

アカリは濡れた床に視線を落としたまま言った。

「不可侵の約束って何なんです？」

マサはアカリが割れたグラスの破片で怪我をしないように、アカリを後方へ下がらせながら尋ねた。

「私が、高校を卒業してこの街に住み始めたとき、今後一切、お互いに干渉しないっていう約束よ。あの人は、私を異常に警戒していたから」

「どうして？だって、アカリさんは、仮にも隆志の叔母だろ？」
「だから、よ」

アカリは、乱れた黒髪を耳にかけながら呟いた。

「また、隆志君を奪われるのが怖かったのよ」
「また？」

台布巾を手にしたマサが振り返る。

「……ウチの両親は隆志君がまだ幼い時に、一度美華さんの手から、隆志君をさらったことがあるの」

カウンターに残った琥珀色の液体が、一筋、細い線を描いて床に落ちた。

学生鞆の他に、布製の小さなサイドバックを手に提げて、理穂子は自宅の玄関を開けた。

扉を開けた途端に香る、母のお手製のビーフシチューの香り。団欒を絵に描いて切り取ったような我が家には、似合いの香りだと、理穂子は少し自嘲気味に笑った。

その時、玄関に並べられた男物の革靴を見て、理穂子の心臓は、ザワツと波打った。

あの男が、来ている……

理穂子は慌てて靴を脱ぐと、一目散に自室目指して階段を駆け上がった。

理穂子の帰宅に気付いた母親が、階下から理穂子を呼ぶ。

「理穂ちゃん、帰ったの？ 手を洗ってきて。お夕食にするわよ」

理穂子は母の声を無視して、自室に勢いよく駆け込むと、急いでドアの鍵をかけた。階下から理穂子を呼ぶ母の声は、より一層強くなる。

「理穂ちゃん？ 聞こえてるの？ ご挨拶もしないで、失礼でしょう」

「いいんですよ、お母さん。理穂ちゃんも高校生だもの。恥ずかしい年頃なんですよ。僕にもそんな時期がありましたから」

甘く優しい声で、母親と話す声が聞こえる。

理穂子は耳を塞いだ。

「じゃあ、一足先に、僕らだけで夕食にしましょうか？ 理穂ちゃんには、後で僕が持つて行きますから」

しばらくすると、テーブルの椅子を引く音、カチャカチャと食器やスプーンの擦れる音が聞こえてきた。

理穂子は暗いままの部屋でうずくまり、ただひたすら、音が聞こえなくなるのを待った。

やがて、食事が終わると、母親が調理場で洗い物をする水音が聞こえてきた。

理穂子はまだ階下に神経を集中させながら、暗闇の中で息を潜めていた。

するとその時、軋んだ音をさせながら、階段を上がってくる気配があった。理穂子は飛び上がり、かけてあるはずの鍵を、もう一度念入りに調べなおした。

足音は理穂子の部屋の前で止まり、低いノックの音が聞こえた。

「理穂ちゃん？ 夕食を持ってきたよ」

理穂子はドアから後ずさりして、耳を塞いでかぶりを振った。

「食欲ないの？お母さんも心配しているよ。ここを開けてくれない？」

甘い声とは裏腹に、理穂子の鼓動はザワザワ波打つのを止めず、歯がガチガチと音をたてる。

「……仕方ないね。じゃあ、ここに置いておくから、気が向いたら

食べてね」

その言葉を最後に、足音は再び回れ右をして、階下へ降りて行った。

しばらく息を詰めていた理穂子だったが、恐る恐るドアの方へ近づいた。

「あ、そうそうー！」

ドアノブに手をかけたところだった理穂子は、ビクツとしてその手を離れた。

もついなくなったとばかり思っていた相手は、薄いドア一枚隔てたところにまだ潜んでいた。

「さつき、階段のところ、赤い毛糸の落とし物を拾ったよ。理穂ちゃんのかい？」

その言葉に、理穂子は血の気が引く思いがして、急いで学生鞆の横に放り出していた、小さなサイドバックの中身をかき回した。

ない

編みかけの、大切な赤い毛糸の手袋……

「……返して」

理穂子は震える声で、ドアの向こうに呼びかけた。

ドアの向こうの人物は、ふふつと軽く笑いながら、からかつように言った。

「もちろんだよ。夕食と一緒にここへ置いておくから、取るといい」
それだけ言うと、男は少し大げさな足音をさせながら、階段を降りていった。

ドアに耳をつけて、男の気配が完全になくなったのを確認すると、理穂子は恐る恐る鍵を回した。

細く開けたドアの隙間から、ビーフシチューの膳の横に、ちょこんと乗った赤い毛糸の手袋を見つけた。
ホッと息をついて、手を伸ばす。

その時 理穂子の細い手首を、横から出てきた手が強い力で掴んで引き寄せた。

「キャッ!」

理穂子は部屋の外へ倒れこむ形になり、バランスを崩した体勢のまま、腕を引いた人物の胸の中に抱き寄せられた。

「理穂ちゃん、二回目! ひっかかったね」

声の人物は楽しげに、勝ち誇ったように理穂子を抱く腕に力を込める。

「足音忍ばせるのは、僕の得意技だよ。全然、気がつかなかっただろっ?」

「……い、いや!」

もがく理穂子を悠々と抱きとめたまま、低い声で耳元に囁く。

「その手編みの手袋、誰にあげるの？妬けるなあ。僕には編んでくれないくせに」

「離してッ！！」

理穂子は渾身の力で相手を突き飛ばすと、毛糸の手袋を掴んで、自分の部屋のドアを閉めた。震える手で急いで鍵をかける。

「……ふふ、随分嫌われたもんだね」

締め出された男は、不敵な笑いを残して、階下へ消えた。

理穂子は胸を押さえて、その場にうずくまった。

荒い息をつきながら、まだ編みかけの小さな手袋を抱きしめる。

智之に頼んで、こっそり隆志の手のサイズを調べてもらってから、編み始めた手袋だった。

隆志のアカギレだらけの手を思い出したら、胸が苦しくなり、思わず涙がこみ上げてきた。

「……島貫君」

暗闇の中で、一人小さく呟く理穂子の涙が、編みかけの赤い手袋に吸い込まれていった。

長屋の部屋の中に置かれた、場違いなほどに大きく立派な作りの柱時計が、重厚な音色で午前0時を告げた。

ウトウトしかけていた隆志は、その音で目を覚ますと同時に、外から聞こえてきた、耳慣れた女の嬌声に立ち上がった。

「たっだいまー、たっかしー」

ガラツと玄関の扉が開いたと同時に、見知らぬ男に肩を回された美華が、その男もろとも玄関の踊り場に倒れこんだ。

三日ぶりの帰還だった。

「隆志、みつずー、お水持ってきてよう」

すっかり酩酊している美華は、回らぬ舌で水を要求しながら、隆志を手招きする。

「何だ？このガキ」

男は、家の中に予想外の邪魔者がいたことに腹を立てて、隆志を睨みつける。

「ふっふー、あたしの可愛い隆志君よ。ねー、隆志」

美華は上機嫌で、玄関先に現れた隆志の頬をピシャピシャと軽く叩いた。

「息子がいたなんて、聞いてねえぞ」

「あつたりまえじゃん、言っていないもん」

美華は何が可笑しいのか、腹をよじって笑い出す。男はあからさまに不機嫌な顔になって、隆志に向かって言った。

「おう、ガキ。しょうがねえな、いいところ邪魔すんなよ。朝まで外出てろよ」

「……出て行くのは、お前の方だ」
「んあ？」

暗闇で低く呟く隆志の声を聞き取れなかった男は、挑発的に隆志を見上げた。

その瞬間 男は無言を言わさぬ強い力で、胸倉を掴まれていた。

「出て行け！今すぐ、この家から出て行けっ！！」

隆志は男の体をそのまま玄関のドアに激しくぶつけると、ドアを開けて、勢いをつけて男を外へと突き飛ばした。

ピシャン！！

横開きのドアが外れるくらいの激しさで男を閉め出す。

突き飛ばされた男は、外で尻もちをついた姿勢のまま、呆気に取られていたが、やがて正気を取り戻すと、様々な罵声を浴びせながらドアを蹴り上げ、やがてそれにも飽きると、どこかへ消えて行った。

「なーに？随分、機嫌悪いのね」

隆志と男の様子を黙って見ていた美華が、苦笑しながら隆志を見

上げた。

「……智之さんに、何をした？」

隆志は拳を握り締めたまま呟く。

「あんたが家を出てつた三日前の夜、帰り道で智之さんに会ったよ。智之さん、泣いてた。あんたが何か言っただら？」

「覚えてないわね」

美華は冷たい声で答える。

「とぼけるなよ！それだけじゃない。アカリさんの店にも乗り込んで、恥知らずなことしたらしいじゃないか！何でだよ、何でそんな真似……」

「あんたを奪おうとするからよっ！」

美華はふらつく足取りで立ち上がると、隆志のシャツの胸を掴んで叫んだ。

「みんな、みんな！善人ぶって、あんたを連れて行くことするからよ！私のたった一つのアんたを、取り上げようとするからよ！」

美華の吐く息からは、甘い酒の香りがした。隆志は胸にすがる美華を突き飛ばして、怒鳴り返した。

「勝手なことばかり言うなよ！今まで一度も、自分の息子を気にかけたことなんかなかったくせに」

その時「ニヤァ」と、か弱い泣き声を上げて、美華の拾ってきた

猫の『たーちゃん』が、いつもと様子の違う飼い主の雰囲気におびえながら、狭い廊下の向こうから現れた。

隆志は『たーちゃん』を半ば強引に抱き上げると、美華の前に突きつけた。

「見るよ！ こいつに三日間、エサやつてたのは誰だと思ってるんだよ？ 猫だつて、エサやらなきや死んじまうんだぜ。そんなことも分からないの？ たまに帰ってきて、気まぐれな愛情を注ぐだけのおんたに、こいつを飼う資格なんかない！」

猫の『たーちゃん』は隆志に片手でつかまれ、苦しげに「ニャー」と声を上げる。

「俺だつて、同じだ」

『たーちゃん』は、とうとう堪らず、隆志の腕を引っかけて、廊下を逆戻りして部屋の奥へ走って消えた。手の甲の引っかき傷には、薄っすらと血が滲む。

「……………俺は、あんたの猫じゃない。あんたの気まぐれで、飢えて死ぬのはまっぴらだ」

「何、言ってるの？ 隆志……………」

美華が気まずさを隠すように、半笑いの表情を浮かべながら、隆志の血の滲んだ手を包もうと手を伸ばす。その手を、隆志はピシヤリと撥ねた。

「あんたは『女』であつて、『母親』じゃないよ。息子のことなんか、何一つ分かってない。あんたは、俺が初めて覚えた言葉さえ、知らなかったじゃないか！」

堪えていたものが噴出し、もう止められなくなっていた。

隆志は美華に背を向け、奥の部屋に入ると、後ろ手に部屋の襖を乱暴に閉めた。

襖に背を預け、ズルズルと座り込む。

短く切りそろえた髪を掻きむしりながら、隆志は闇の中で一人、持て余しがちな細く長い足の間顔に顔をうずめた。

僕は、言葉の遅い子どもだったらしい……

預けられていた無認可の保育所の職員は、母親とのコミュニケーションが少ないために、僕がなかなか言葉を覚えられないのだと、何度となく口すっぱく母に忠告したらしい。

しかし、そんな保育士たちの言うことを、素直に聞く母であるはずもなく、僕は二歳を過ぎても、一向に言葉を覚えぬままだった。そんな僕が、唯一覚えて口に出来た言葉。

『たーたん』

母は自分が僕を呼ぶときに「たーちゃん」と呼びかけていたので、それを僕が口真似で覚えたと思っただけらしい。

「まあ、自分の名前が言えりゃ、苦労はしないわよ」

周囲が自分の子どもの知能の遅れを気にしているのに、あっけらかんと言い放つ、母はそう言う人だった。

はっきりとした記憶はない

あれは酷く暑い夏の午後だった。

しかし、小さな保育所の裏林は燃えるような緑をたたえて、保育室の中まで心地よい涼風を運んでいた。

いつも最後まで残って母が迎えにくるのを待っていた僕は、その日も保育所の隅で、一人で遊んでいた。

僕の相手をするはずの保育士は、高齢のためか酷く疲れた様子で、その日は僕のお迎えに備えた連絡帳も開いたまま、窓から入るそよ風に誘われて、事務机の前に座ったままうたた寝をしていた。

その時不意に、少しだけ開いた窓から、誰かが僕を呼ぶ声があった。

「隆志ちゃん……隆志ちゃん……」

不思議に思っ、持っていたおもちゃも放り出して、窓の側に駆け寄った。

そこには、見知らぬおじさんとおばさんが立っていた。

「……まあ」

間近で僕の顔を見たおばさんの方は、そう言って口を押さえると、突然ポロポロと大粒の涙をこぼした。

「徹司にそっくりばい……」

今にも泣き崩れそうなおばさんの肩を支えながら、おじさんは僕に向かって手を伸ばしてきた。

「はじめまして。君のじいちゃんとはあちゃんばい。これ、隆志ちゃんのために買ってきたとよ」

そう言うと、おじさんは僕に、ピカピカの新しい消防車のミニカーを手渡した。今まで見たこともないようなカッコイイおもちゃに、僕はすぐに夢中になった。

しばらく好き勝手に遊ぶ僕を眺めているだけだったおじさんとおばさんだったが、うたた寝していた保育士が軽く身じろぎをすると、おばさんの方がおじさんの袖を引いた。

「……あんた」

「わあつとるばい」

おじさんは小さく頷くと、突然僕を抱き上げた。

「いい子やね、隆志ちゃん。一緒に行かんね。じいちゃんらと一緒に暮らそう」

そう言うなり、おじさんは僕を抱えたまま走り出した。おばさんも蒼い顔をして後に続く。

何かなんだか分からない僕は、泣くことさえもしなかった。

ただ、このおじさんたちが、悪い人には見えなかった。

車に乗って、船に乗って、見知らぬ海辺の街につれてこられた。

泣きはしない僕だったが、何度もおじさんやおばさんの袖を引っ張っては「たーたん、たーたん」と繰り返した。

それが、僕が話せる唯一の言葉であつたからだ。

「たーちゃん、わあつてるばい。あんたは、徹司の息子、たーちゃん」

その度に、おばさんは涙混じりに僕を見つめながら、チーズでできたお菓子やキャラメルの欠片を口の中に放り込んでくれた。

その海辺の街にどれくらい居ただろうか。

狭い保育所の中で少ないおもちゃを取り合いをすることも、お腹をすかせて泣くこともない。

様々なおもちゃは全部独り占めだし、おばさんは優しく毎日おいしいご飯やお菓子をお腹いっぱい食べさせてくれた。

一週間もしないうちに、ガリガリにやせていた僕の頬は、すこし子どもらしくふっくらしてきた。

綺麗な洋服も着せてもらい、夕方になったらおばさんと一緒に手をつないで買い物に出かけた。

そんなある日、いつものようにおばさんと買い物へ行ったその帰り道、家の前に制服を着た警官が二人、僕らを待っていた。

「……あつ」

おばさんが短い叫び声をあげる。

二人の警官の間から顔を出したのは、花柄の艶やかなデザインのワンピースに麦藁帽子をかぶった、少女のような姿の美しい女だった。

「たーちゃんっ!!」

女は手を繋がれた僕を見つけるなり、ものすごい形相で僕らの元に駆け寄ってきた。

「やっと見つけたわ! ひどいつ、ひどすぎるわっ! 返して、私のだーちゃんを返してよっ!」

女は泣きながら、おばさんに向かってめちやくちやに殴りかかった。おばさんはボコボコに殴られながらも、痛いほど強い力で僕の手を握り、決して僕を放そうとはしなかった。

「徹司の忘れ形見ばい、堪忍して……堪忍して……大切に育てよるよ、大切に育てよる……」

「何の騒ぎか!」

その時、漁から帰ってきたおじさんが、騒ぎを聞きつけて飛んできた。

「やめんね! 離れんかつ!」

おじさんは、半狂乱になっておばさんを殴り続ける若い女を力づくで引き離し、突き飛ばした。

「返してよっ! 泥棒!」

女は顔をくしゃくしゃにして泣き喚いた。おじさんは冷たい目で女を見下ろして言った。

「うちのやったことは、確かにようないこともしれん。けんどな、美華さん。悪いけど、調べさせてもろうたんよ。あんたに、子どもを育てるんは無理ばい。うちらやったら、隆志を幸せに育てやれる」

「勝手なこと言わないでよ！返せ、返せ、鬼！」

女は近くにあつた小石を拾うと、それを掴んでおじさんに殴りかかった。

側にいた警官二人が慌てて止めに入る。

「放して、放してよっ！ たーちゃん、たーちゃん！」

「裁判でも何でもしたらええ。隆志は、あんたには返さん」

警官二人に羽交い絞めにされて、女は髪を振り乱して泣き叫びながら連れて行かれた。

最後まで必死に僕の名を呼び続けていた。

夏の燃えるような赤い夕日の中へ、何度も振り返りながら消えていく女の後姿を見送りながら、僕の頭はぼんやりと、その女が母親であることを思い出していた。

どういう取り決めがなされたのか分からない。

色々な人が入れ代わり立ち代りおじさんたちの家に来て、色々なことを話し合っては出て行った。

おばさんは泣く時間が多くなり、おじさんは夕飯の後にたしなむお酒の量が増えた。

そして、何日かたったある日、あの女　母が現れた。

その日はもう、母は泣きわめいても取り乱してもいなかった。

最初に現れた日と同じワンピースに身を包み、麦藁帽子の影から覗く、薄化粧を施した顔は、子ども心にも花のように美しかった。

玄関先で僕を連れて母を出迎えたおばさんは、俯きながら小さな声で母に詫びた。

「……堪忍してね、美華さん、堪忍して……」

母は何も言わず、僕の頭の上に手を置いた。

「湿っぽいのは、嫌いな。性に合わないじゃない？」

しゃがみこみ、僕と同じ高さに目線を合わせて、母は言った。

「たーちゃんはおバカさんだから、すぐに美華ちゃんのことなんか忘れちゃうね」

「美華さん……」

おばさんの言葉を遮って、母は勢いよく立ち上がった。

「バイバイ、たーちゃん」

艶やかな笑顔を浮かべて、母はクルリと僕に背を向けた。

「……たーたん」

ジャリッ

足元の砂を踏んで、僕は一步を踏み出した。
母の背中が止まる。

「……たーたん」

僕はもう一度、今度は先ほどよりも大きな声で言った。

「自分の名前しか言えない、おバカさん。でも、許してあげる。美華ちゃんのこと全部忘れたら、許してあげる」

母は振り向かずに行った。微かに肩が震えていた。

「たーたんっ!!」

歩き出す母の背中に向かって、殆ど叫ぶように僕は言った。

「どうしたの？たーちゃん？」

おばさんが心配そうに僕の肩を掴む。僕はその手を振り払い、薄情で美しく哀しい女の背中を追いかけた。

「たーたん！たーたん！」

泣き叫びながら必死で追いかける。夕日の中へ消えていく背中との距離は中々縮まらない。

「あっ！」

僕は小石に躓いて、派手に転んだ。痛みと生まれて初めて覚えた訳の分からない悲しみに、喉が張り裂けそうなくらい泣き叫んだ。

「たーたん、たーたん、たーたん……！」

たーたん かあちゃん

女の足が止まる。振り返った女は、大きな目を見開いて、僕を見つめた。

「……たーちゃん、あんた、『かあちゃん』って、言ってるの？」

女の美しい顔が、見る見るうちに涙でグシャグシャに歪んだ。

女は足がもつれ、履いていた白いサンダルが脱げて転がるのも構わずに、転んだ姿勢のまま、わあわあ泣きじゃくっている僕の元へ駆け寄ってくる。殆ど倒れこむようにして僕の上に覆いかぶさり、力の限り抱きしめた。

「……いや、いやよ。離れられるわけない。たーちゃん、私のたーちゃん。誰にも渡せない。渡せない……！」

おばさんは遠くから、そんな僕ら親子二人の姿を、哀しそうに見つめていた。

「隆志？……起きてる？」

遠慮がちに、襖の向こうから声をかける美華に隆志は素っ気無く答えた。

「起きてるよ」

「……入っても、いい？」

「勝手にすれば」

襖を開けて、美華が入ってきた。酔いは覚めているようで、スウエットの部屋着の上下を着て化粧を落とした顔は、子どものように幼く頼りなげに見えた。

「期末テスト終わったのに、勉強してるの？偉いね」

「休み明けたら、模試があるから」

隆志は問題集のページをめくる手を休めずに言った。

「……何やってるの？」

「古典」

美華は隆志の横に顔を寄せ、隆志が目で追うページを覗き込んだ。

「この歌、何だか素敵ね」

美華が細い指で、ページの一部を示した。

「白玉か なにぞと人の 問いしとき 露と答えて 消えなましもの
のを」

ぎこちなく、美華が読み上げる。

「どういう意味？」

「『あれは真珠ですか？何ですか？』とあの人が聞いた時に『露です』と答えて、自分も露のように消えてしまえたらよかったの……って意味。好きな女をさらって逃げる途中に、女を鬼に喰われちまった男の嘆きの歌だよ。「芥川」っていう古典に載ってる」

「……ふーん、ロマンチックだね」

「どうかな」

隆志は軽く鼻で笑うと、また鉛筆を動かし始めた。

「……私も、消えてしまえば良かったって、何度も思ったわ」

「え？」

美華は、隆志の机に背中を預けながら、手にしていたマグカップの中でグルグル回るコーヒーの漆黒の中に目を落としながら言った。

「あの人のこと、話したことなかったわね」

「……あの人って、父さん？」

隆志の問いに、美華は静かに頷いた。

「不思議な光景だった。不知火の出る夜に、たった二人で船出して……海の上で揺れる青い炎を、二人で見たわ。その炎を見ながら、愛し合ったの」

美華は隆志の髪を撫でながら呟いた。

「……あなたは、炎を見ながら愛し合って、生まれた子なの」

マグカップを隆志の机の脇に置くと、美華は思い出すように目を細めた。

「……どうして、父さんだけ、帰って来なかった？」

隆志はアカリに聞かされて以来、ずっと心に引っかかって離れなかったことを思い切って聞いてみた。

美華は静かに口を開いた。

「この世のものとは思えないような、青い炎に見惚れて、指輪を落としたの。あの人に、その日もらったばかりの指輪よ。不知火を初めて見たとき、私はあの人に、『あれは何？』って聞いたの。あの人はずっと答えたわ。あれは、魂だって。死んだ人間の強い想いが炎になって、海の上で燃えているんだって。そして、こども言ったわ。この指輪が俺の魂だって。あの方は、私に魂をくれたの」

「父さんは、落とした指輪を取りに行って死んだの？」

「……止められなかった」

美華は俯き、手の中のコーヒーはもう既に熱を失っていた。

「ごめんね、隆志」

「何だよ、急に」

「あんたは、私とあの人の、魂だったの」

辺りはひっそりと静かで、隆志たち二人を、暗い夜の底に沈めていた。

次の朝、隆志が起きだすと、珍しく美華が先に起きていた。

居間には魚の焦げ付いた匂いと、かすかに味噌汁の香りが漂っていた。

「どうい風風の吹き回しだよ？母さんが朝食作るなんて」

居間を覗いた隆志は、仰天して尋ねた。美華は少し恥ずかしそうに頬を染めて、しかし嬉しそうに隆志を振り返っていった。

「私だって、やるときはやるのよ」

「良くないことの前触れじゃないだろうな？」

「失礼ね！」

味噌汁の味を見ながら、美華は舌を出した。

「……ちょっと風邪っぽいから、今日はお店休もうと思って。一日家にいるわ」

「飲みすぎだろ？」

「違うわよ、本当に失礼な子ね」

美華の作った、決して美味しいとは言えない朝食をかつ込んでから、隆志は鞆を肩から斜めがけにして立ち上がった。

猫の『たーちゃん』が喉を鳴らしながら、隆志の足元に身体を擦り付ける。隆志は食べ終えた鮭の骨を『たーちゃん』に投げてやった。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

美華は不思議なほど穏やかな表情で戸口に立って隆志を見送っていた。

その日、隆志が帰宅したのは夕方の六時を過ぎたあたりだった。辺りはもう闇に包まれていたが、長屋の明かりはついていなかった。

「風邪気味だつて言ったのに、出かけたのかな？」

いつもなら家の中からうるさいほどに聞こえてくる猫の「たーちゃん」の鳴き声も聞こえてこない。

首をかしげながら、隆志は家のドアの鍵を回した。

「うっ！」

その時、隆志は強烈に鼻を襲う臭気に気がついた。

制服の袖口で鼻と口を押さえ、土足のまま急いで部屋の窓を開けに走る。空気の悪さに吐き気がして、窓を開けながら、隆志は何度も嘔吐した。

調理場のコンロの上で、吹き零れた鍋をみつけて、隆志は急いでガスの元栓を閉めた。

「か、母さん！」

暗闇の中、美華の姿を探す。

「母さん、返事しろ！」

居間の炬燵の所で何かにつまずいて、派手に転倒する。

「痛え………」

振り向いた瞬間、隆志は言葉を失った。

『「たーちゃん」を腕に抱えたまま、美華は穏やかな笑みを浮かべ、そのまま眠るように息絶えていた。

僕は母の匂いが嫌いだ。
安物の甘い香水の匂い。
その匂いを嗅ぐと、母よりも女を生きたあの人の、全てを許して
しまいそうになるから……

何の前触れもなく、何の感慨もなく、死は突然に気まぐれに訪れる。

まるであの女の人生そのもののように、悪い冗談の続きでもあるかのように、呆気なく、あの女は逝った

死因は、一酸化炭素中毒。

夜に食べようと、タマゴ粥を作っていた際、つい火をつけたまま寝入ってしまったのだらうと、警察に言われた。

「……慣れないことするから、バカ」

猫の『たーちゃん』も、母の腕の中で仲良く寄り添うように死んでいた。

智之さんやアカリさんが何度も心配して電話をかけてきた。

葬式費用はアカリさんに世話になることにしたが、智之さんから電話は避け続けていた。

高校へは、退学届けを出した。

身の回りの必要なものを片付けてから、隆志は職員室へ挨拶に言った。

「……島貫、本当に考え直すことはないのか？ 今回のことは、本当に何と云ったらいいか分からないが、お前ほど成績も優秀なヤツ

なら、奨学金という手もある。何も、辞めなくても……」

「いえ、誰にも迷惑をかけるわけにはいきませんから。自分の生活は、自分で面倒見ます」

「……そうか。残念だ。しっかりやれよ」

隆志は比較的隆志に目をかけていた担任教師に深々と頭を下げると、職員室を後にした。

荷物と言っても、クラブ活動をやっていたわけでもないの、小さな手提げ袋にすべて収まってしまふような荷物しかなかった。

隆志は校庭を横切り、自転車置き場へ向かおうとした。

「おーい！鳥貫っ！」

その時、上の方から隆志を呼ぶ声がした。隆志が振り返ると、隆志たちの教室がある校舎の三階の窓から、伊藤健吾が顔を真っ赤にしながら、隆志に向かって叫んでいた。

「お前なんか、ずっと昔から大っ嫌いだったんだ！俺よりビンボーなくせに、俺より勉強できて、顔がよくて、女にモテて、足が長くて、生意気なんだよ！大っ嫌いだったんだよ……父ちゃんなんか、母ちゃんがいるのに、お前の母ちゃんのケツばっか追っかけててよう、母ちゃんが可哀相で、悔しくて、大嫌いだったんだ！」

「あんだ、さつきから何言ってるのよ！」

その時、健吾の横から萩原圭子が顔を出して、健吾の横顔を小気味良く引っぱっていた。

「伝えたいことは、そんなことじゃないでしょ」

圭子にたしなめられ、健吾は唇を尖らせながら、制服のズボンのポケットを漁った。

「島貫っ！受け取れっ！」

健吾は一際大きな声で叫ぶと、校舎の三階から、バラバラと小さな何かを大量にばら撒いた。

「七十四戦、七十四勝、お前の勝ちだ！」

健吾が投げたものは、大量のマッチ箱だった。

軽い螺旋を描きながら、いくつものマッチ箱がクルクル踊って校庭に落下してくる。

「勝ち逃げしやがって、バカヤロー！」

健吾はそう言うと、制服の袖口で乱暴に目元を拭い、窓に背を向けた。

「まったく、あんたは素直じゃないんだから」

圭子の叱責する声が聞こえてくる。

隆志は散乱したマッチ箱の一つを拾い上げると、校舎を見上げた。

「……ありがとう」

そのままその一つをポケットの中にねじ込んで、隆志は二年半通った高校を後にした。

涙が出ない。

暗い部屋の中で一人になり、遺影の女を見つめる。

春の日差しの中で、華やかな笑顔を見せる女は、不謹慎なほどに美しく、幸せそうに見えた。

元々留守がちだっただけに、美華のいない空間に違和感がない。そのうち、不意に酒の匂いをさせながら玄関の扉を開け「隆志ー、水ー」といいながら悪びれもせずに戻ってくるのではないか、そんな気がしてならない。

ニヤー

その時、勝手口の方から、猫の鳴き声が聞こえた。

「……餌の時間だ。忘れてた」

隆志は立ち上がって、調理場に残っていた冷や飯を、割れた小皿に盛った。

それを持ったまま勝手口に向かう。

そこには、誰もいなかった。

「ああ、そっか」

隆志は手にした小皿を地面に置くと、額に手を当ててうずくまった。

「……はは、バカみてえ、俺」

乾いた笑いをこぼしてふと窓の外に目をやると、長屋の裏手に広がる竹林の中を、小さな炎が揺れながら浮遊しているのが目に入った。

「……人魂？」

窓辺に駆け寄り、林の中に目を凝らす。

それは、確かに人魂のようだった。青白い光を放ちながら、頼りなげにユラユラと迷い子のよう浮遊している。

「……母さん？ やっぱり、成仏できないの？ 煩惱が多すぎるから、天国に断られたんじゃないの。相変わらずだな」

人魂は隆志の言葉に反応するかのように、二三次小さく明滅する。その時、玄関の扉を激しく叩く音がした。途端に、人魂は消えた。

「隆志君！ いるんだろ？ 開けてくれ！」

無視しようと思っていた隆志だが、玄関を叩く音はますます激しくなる。仕方なく、隆志は扉を開けに行った。

「ああ、やっと会えた」

隆志の顔を見るなり、智之は心からホツとしたような顔をして息をついた。その後ろにおずおずと控えていた小さな影を見た時、隆志は思わず声を上げた。

「……齋木」

「……パパに頼んで、一緒に連れてきてもらったの」

隆志は顔を背けると、そのまま理穂子たち親子に背を向けて、部屋奥へ向かった。智之が追いかけるように後から続く。

「心配したんだよ！ ずっと連絡も取れないで。さっき、高校に行つたんだ。驚いたよ、何で退学なんか……」

智之は余程気がかりだったのか、隆志の顔を見るなり、堰を切つたように矢継ぎ早に質問を浴びせた。

それは質問というよりも、水くさい隆志に対する、もどかしい怒りにも似た気持ちであった。

「あんたには、関係ないだろ」

隆志は背を向けたまま、冷たく吐き捨てた。

明かりも付けていない部屋の中で、美華の遺影の周囲だけが、近くの国道を通る車から漏れてくる明かりで、薄ぼんやりとその輪郭を浮き上がらせていた。

「……あの女はもういないんだから、あんたが俺に関わる理由もなくなつただろ」

「何バカなことを言ってるんだよ！ 君は君だろ。僕が君を心配するのは、美華のためだけじゃ……」

「勘違いするなよっ！」

隆志は振り返ると同時に薄いベニアの壁を殴りつけて怒鳴った。理穂子の体が反射的にビクッと震える。

「あんたは優しいよ。哀れな親子に施しをくれる。でも、所詮は他人だよ。あんたは知らないんだ。あの女は、あんたが夢見てるような哀しくてか弱い女なんかじゃなかった。狡猾で、根っからの男好きで、でも、間違えなく、俺の母親だったんだ。あんたらなんかには、分からない。でも、それで結構だ！ 所詮、インバイの息子はインバイ……」

バシッ

予想もしなかった強い殴打が、隆志の頬を襲った。

懇親の力を込めた、智之の一撃に、隆志の身体はちゃぶ台の上に倒れこむような形でふき飛ばされた。

「自分の大切な人に、そんな言葉使うもんじゃない」

智之は静かだが、凜とした強さと厳しさを込めた口調で言った。

「あの人は、君が使った言葉のような人じゃなかったよ。あの人は、とても不器用なやり方で、たった一人の人を愛していたんだ。隆志君、君のお父さんをね。あの人にとっては、彼でなければ、他の男はみんな同じだったんだ」

張られた頬がジンジンして、熱を持っている。唇を噛みしめていないと、意志に反して涙がこぼれてしまいそうになる。

そんな隆志の気持ちを察してか、理穂子が大きな瞳を潤ませながら口を開いた。

「……島貫君、何でも私に出来ることがあったら言って。パパと話

たんだよ。私たち、島貫君の力になりたいって……」

隆志は真つ直ぐな理穂子の目を見て、不意に唇の端から乾いた笑いがこぼれた。一旦こぼれた笑いは止められず、次第に大きくなって、仕舞いには隆志は腹を抱えて笑い出した。

「……島貫君？」

智之と理穂子は何か恐ろしいものを見るかのような怪訝な顔で、隆志を見守っている。

隆志は二人の視線を受けて、美華に良く似たキラキラ光る目を上げて理穂子を見やった。

「あんたら親子には叶わないよ。街中の侮蔑の的の親子相手にも、見上げた奉仕精神だな」

隆志は切れた唇の端を拭って立ち上がると、そのまま強い力で理穂子の腕を掴んだ。

「だったら、ヤラせろよ！何でもしてくれらんだろっ！」

「いやっ！」

「やめろっ！」

智之が二人の間に割って入ったのと、理穂子が反射的に隆志の腕を振り払ったのは、ほぼ同時だった。

咄嗟に手が出た智之に再び殴り飛ばされ、隆志は先ほど倒したちやぶ台の上へ、したたか胸を打ちつけて倒れた。

理穂子は荒い息のまま、まるで隆志が何か別の恐ろしい生き物に変わってしまったかのような目で、智之の肩越しに、倒れこむ隆志を見つめている。

「……ははっ！初めて、答えが出たじゃないか」

血の混じった唾液がたれて、豊を汚す。

「偽善なんだよ。あんたらと俺らとでは、最初から、住む世界が違う」

理穂子の瞳から、大粒の涙がこぼれて落ちる。

隆志は壁に手をつけて立ち上がると、理穂子たち親子に背を向けて、そのまま叩きつけるように玄関の扉を開けて出て行った。

「……パパ」

隆志が出て行った空間の中で、理穂子はこの恐ろしい状況から救いを求めるように、智之の袖にしがみついた。

智之はそんな理穂子の手を軽く握り、言い聞かせるように呟いた。

「大丈夫だよ。僕は、信じてここで隆志君を待つから」

「私も……」

「いや、理穂子はもう帰りなさい。ママが心配する。大丈夫だから、隆志君と話が出来て落ち着いたら、必ずお前をまた呼んであげるから」

理穂子は智之の袖口を握る手に力を込めた。

「約束よ、パパ」

「ああ、大丈夫。安心して、待っていなさい」

智之は理穂子を抱き寄せて、微かに震える肩を優しくさすってや
った。

最後の酔客を追い出してから、マサは「スナック不知火」の電飾の看板の明かりを消しに店の外へ這い出してきた。

「ふあああああ」

すきつ歯が丸見えになるのも気にせず大きな欠伸をもらす。夜は東の空から薄っすらと白み始めていた。

看板の明りのスイッチを切って顔を上げた時、長身の影が、店の階段の前にたたずんでいるのに気がついた。

「隆志っ！」

寝ぼけ眼をゴシゴシ擦ると、マサは隆志に飛びつくように駆け寄った。

「お前、心配してたんだぜ！ 店にもずっと顔見せないでよ。オフクロさんがあんなことになっちまって……アカリさんもずっと、眠れないくらい心配してたんだぜ」

「……ごめん」

「いいよ、それより早く中に入れよ。アカリさんが待ってるぜ」

マサは逃がさないように隆志の肩をガツシリと掴んで、店への階段を降りるよう促した。言われるまま素直に、隆志はマサに従った。

「……隆志君」

店の扉を開けた途端に、誰もいない店内で片づけをしていたアカ

りは、カウンターを拭く手を止めて、戸口に佇む隆志を呆然と見つめた。

「……ずっと挨拶も出来なくて、ゴメン」

隆志は気恥ずかしそうにうなだれて呟いた。

「何言ってるのよ！ こっちに來なさい。夕飯は食べたの？ マサ、残り物あつたわよね。すぐ用意して」

「任せとけ！」

マサは隆志の後ろで嬉しそうに飛び上がると、アカリのいう通り、隆志の夕食を用意すべくカウンターの中へ滑り込んだ。

「こっちいらっしやい、とにかく座って」

アカリは隆志の側まで来て手を引くと、強引にカウンターの席に座らせた。

「少し痩せたんじゃないの？ 顔色も良くないみたいだけど、ちゃんと眠れてる？」

アカリの細い手に両頬を挟まれて、隆志は少し赤面して、不器用に顔の前で手を振り、アカリから逃れた。

「……大丈夫だよ。心配かけて、悪かった」

その時、アカリと隆志の間に、マサが作ったばかりのタマゴかけご飯と味噌汁を滑り込ませた。

「こんなもんしか出来ないけどよ、食べよ。元気を出すには、食うのが一番」

マサのタマゴかけご飯は、つややかな黄身の色が立ち上る湯気の中で映えていた。飢えは感じていなかった筈だが、湯気に誘われるようにして、腹の虫がギューと鳴いた。

「ほら、食べなさい」

味噌汁の茶碗をアカリに押し出されて、隆志は遠慮がちに口を開けた。暖かい汁が喉を伝って、胃の腑を満たしていく。

「……うまい」

思わず呟いていた。物の味を感じるのは、随分と久しぶりな気がした。

「だろ？ もつと食べよ」

マサに促されるまま、隆志は流し込むようにタマゴかけご飯にも口をつけた。

「……うまいよ、うまい」

温かい食事を頬張るうちに、冷え切っていた体が温まり、それにつれて、凍えて張り詰め固まってた心が雪解けをするようにほぐれていくのを感じた。

隆志は茶碗に顔を埋めながら、いつしかしゃっくり上げて泣いていた。

「……うまいよ。ほんと……うまい」

美華の好物だったタマゴかけご飯。

貧しい自分たち親子のご馳走で、何か特別なことがある日は、決まってこのメニューだった。

そんな隆志を、マサとアカリは静かに見守り、隆志が落ち着くまで泣かせてやった。

「……これから、どうするつもり？」

隆志が少し落ち着いたのを見計らって、アカリは静かに尋ねた。

「隆志君さえよかつたら、この店で一緒に暮らさない？」

「そっだよ、楽しいぜ！ 間借りしてる俺の隣の部屋、空いてるんだしよ」

マサがアカリの後に、すかさず言葉を重ねる。

隆志は静かに、首を横に振った。

「……ありがとう。アカリさんたちには、感謝してる。でも、俺、もう決めたんだ」

隆志はゆっくりと箸を置き、アカリたちに向き直り姿勢を正した。

「……母さんを、還してやりたいんだ。父さんのいる海に。不知火の海に」

「熊本へ行く気なの？」

アカリは驚いたように眉を上げた。隆志が静かに頷く。

「父や母はとつくに亡くなってるわよ。知ってる人は誰も……」
「でも、俺の故郷だから」

隆志は唇を噛みしめながら、それでも笑顔に似た表情で言った。

「知ってた？俺は不知火の海で、愛し合った二人の子どもなんだ。
だから、不知火の海は、俺の故郷なんだ」

「美華さんの言葉なのね？」

隆志は無言で、「そうだ」と頷いた。

「……決心は固そうね」

アカリは少し寂しそうに微笑んだ。

「ナナちゃんたちには、言ったの？」

アカリとマサは、中学三年生で理穂子が出た時この『不知火』で面倒を見て以来、理穂子のことをずっと「ナナちゃん」の名前で呼び続けていた。

「美華さんが亡くなってから毎日、智之さんこの店に来て、隆志君から連絡がないか気にしていたのよ。ナナちゃんを連れて来たことも何度かあったわ」

隆志の顔が曇る。

「……別れを、してあげなさい」

アカリの一言が、静かな店内の中にポトリと落ちた。

「あーあ、辛気臭えなあ！ 男に旅は付き物だろ！」

マサは愛用のスタジャンの袖口で乱暴に涙を拭くと、有線放送のスイッチをひねった。

途端に流れる音楽が、店内に染み渡って行く。

聞き覚えのあるメロディ。

『ジョニーへの伝言』 理穂子を待つ喫茶店の中で聞いたのと同じ曲だった。

「葬式代は、少しずつ返して行くから」

「バカ！」

アカリは隆志の頬を軽く叩く真似をすると、着物の袂から、綺麗に折られた一万円札を出した。

「アカリ姉さんを舐めるんじゃないよ。 餞別、受け取りなさい。 恥かかせるんじゃないよ」

「……でも」

「大人しく言うこと聞いとけて！アカリさん怒らせたら怖いぜえ」

マサはそう言うと、カウンターのの上に置かれた一万円札を隆志のズボンのポケットに無理やりねじ込んだ。

有線放送の切なげなメロディは、サビに向かって盛り上がりを見せる。

「……ありがとう」

隆志は二人に向かって、静かに頭を下げた。

明け方の川沿いの道を歩いて、住み慣れた長屋への道を一人歩く。先ほど飛び出してきた道のりを逆に歩きながら、隆志は二度と通ることがないであろうこの道を、瞳に焼き付けた。

長屋の前まで行くと、智之がくれた愛用の自転車が静かに佇んで、隆志の帰りを待っていた。

そつと手を触れる。

冬の凍てついた空気を受けて、シン　とした冷たい金属の感触が、隆志の指先に触れた。

「……今まで、ありがとな」

さび付いた音を立てながらも、隆志の短い高校生活を支えてくれた相棒に、声に出して礼を言った。

玄関の鍵は自分が飛び出した時のまま開いていた。
靴を脱いでそつと上がりこむ。

旅の支度を終えたら、朝一番の始発でこの街を離れるつもりでいた。

居間に足を踏み入れたとき、隆志は思わずその場に立ち尽くした。

「……なんで、まだ居るんだよ」

そこには智之が一人、壁に背中を預けた格好で静かに寝息をたてていた。

「何で俺のことまで、待ってるんだよ」

中学生の頃、美華に一方的に捨てられた後の智之は、隆志が何を言おうとも毎日美華の帰りを寒空の下で待っていた。

今、愛用の眼鏡を外し、顔に疲労の色を浮かべながら眠る智之は、あの時美華を待っていた姿勢とまさに同じ姿で、隆志のことを待っていた。

隆志は智之の脇に崩れるように膝をつき、眠る智之に深々と頭を下げた。

「…………ごめん、智之さん」

体の横に無防備に投げ出された手は、人を殴ることなど滅多になり、華奢な手だった。

手の甲の部分には、先ほど隆志を殴った時に、隆志の歯にあたっ
て切れた傷口から血が滲んでいた。

「…………こうでもしなきゃ、あんたは聞かないだろ…………だって、あんたは、本当にバカみたいに優しいから、俺がいる限り、側にいようとするだろう？あんたの愛したあの女はもういないのに。だから、あんたを返してあげる。斎木の元へ、返してやるよ」

言いながら、智之と過ごした日々が、走馬灯のように隆志の脳裏を駆け抜けた。

智之を起こさないように声を殺しながら、隆志はこみ上げてくる
嗚咽を押さえるのに必死だった。

「俺は、強くなんかないよ…………優しい人が側にいてくれなきゃ、強くなんかなれないよ」

智之の手の甲に、隆志の流した涙が一粒落ちて、流れた。

「……パパ！　パパ！」

呼ばれて、智之はハツとして目を覚ました。
気付けば夜はすっかり明けていて、目の前には蒼い顔をした理穂子が立っていた。

「……理穂子、お前、帰らなかったのか？」

「途中まで行って、心配で戻ってきたの」

理穂子は智之の脇に座り込むと、ワイシャツの襟首にすがりつくようにして言った。

「パパ、島貫君は？美華さんの遺骨がないのよ。島貫君、どこへ行ったの？」

理穂子の指差す方向を見て、智之は初めて事態に気がついた。

居間に置かれた遺影の前から、美華の遺骨をいれた箱がなくなっていた。

「……何てこと……出て行ったんだ」

「……そんな」

理穂子は口元を押さえ、信じられないというようにかぶりを振った。

「まだその辺にいるかもしれない。理穂子はここで待っていないさい。探してくる！」

「パパ！」

智之は側に放り出してあった上着を掴むと、すぐさま長屋を飛び出していった。

残された理穂子は、人の気配が消えた部屋の中に途方にくれたまま座り込んでいた。

その時、智之が先ほどまで座っていた足元に、小さな紙切れが二枚落ちているのに気がついた。

そっと、拾い上げてみる。

『アイススケートリンク入場券』

理穂子の脳裏に、喫茶店で隆志とかわした会話が蘇った。

（クリスマス当日まで、プレゼントの内容は秘密だよ。でね、相手が一番欲しそうなもの、用意するの）

（ヒントくれよ。例えば、斎木の好きなものとか、最近のお気に入りとか。それから、斎木が欲しそうな物、考えるからさ）

（私の最近のお気に入りだね、ずばり『ある愛の詩』だね。すごく、愛し合っている恋人同士が、彼女が白血病になったことで引き裂かれるの。最後に彼が、誰もいない思い出のスケートリンクで一人、彼女と過ごした戻らない日々を想うところが、すごく切ないけど、大好き）

今日は、約束のクリスマスの朝だった。

「……島貫君」

理穂子は自分のポケットから、完成したばかりの赤い毛糸の手袋を取り出した。その上に、大粒の涙が零れ落ちる。

「……助けて」

世の中の誰からも忘れ去られたような小さな長屋の中で、搾り出すように呟やかれた理穂子の小さな声は、夜明けの切れるように冷えた空気の中に、溶けて消えた。

それきり、この街で理穂子が隆志に出逢うことはなかった。

あの時 君がこぼした小さな声を

聞き逃さずに 手を差し伸べていたら

僕らの未来は 何か変わっていたのだろうか？

どんなに考えても 答えが出ないんだ

僕は欠けた魂の欠片を 探すことに夢中で

君は悲鳴を上げる魂を 押し殺すことに必死だったから……

〈 第5話「不知火」 > 完く〉

【炎の中へ】第一部 終了

『白玉か なにぞと人の 問いし時 露と答えて 消えなましものを』

あれは、真珠ですか。

無邪気なあなたがそう尋ねた時、「ただの露ですよ」と答えて、いつそのこと、私も露のように消えてしまえばよかった。

例えあの時あなたが見たものが、この世のものではない「鬼火」だったとしても、あなたを失うこと以上に、怖いものなど、私には何もなかったのに……

『……本当に行くんね?』

「行く。行くも、なんも、もう着いてしもつたもん」

『兄さんらが知ったら、何ていうか』

「高校入学したら、夏休みに一人旅したいでずーっと言ってきて、ぬかりなく準備してきたばい。東京に転校した友達の家に泊まることになって、アリバイもバッチリや。大丈夫、おばちゃんが、ビビりなさんな」

受話器の向こうからは、聞き馴れた潮騒の音が聞こえてくる。

電話の主は、少し声を落として、ぼつりと呟いた。

『……徹っちゃんは、もう戻って来ないとよ』

「……そんなん、わあつとるよ」

でも、知りたい

「心配せんでも、ちゃんと三日で帰るばい。じゃ、あと頼むわ、おはちゃん」

まだ何か言おうとする受話器の向こうの声を遮って、半ば強引に受話器を置いた。

長話にならないように、予め十円しか入れていなかった公衆電話は、案の定何も吐き出しはしなかったが、ついクセで、釣銭返却口を指で触って確認してから、電話ボックスの扉を開けた。

ギリギリ照りつける太陽に向かって、大きく一つ伸びをする。

ふくらみ始めた胸に押し上げられ、伸びをした拍子に、今年四月の入学式前に購入したばかりなのに、既にサイズが追いつかなくなっている丈の短い制服の裾がめくれて、形の良いヘソが顔を覗かせた。

「東京の夏は、暑つついばい」

手をうちわ代わりにパタパタやりながら、都心の同世代の高校生から見たら少々「流行遅れ」とされそうな、野暮ったさの抜けない夏服のセーラーを着た少女は、足元に置いてあった大きな旅行鞆を肩に担いだ。

目指す街は、都心から更に電車を乗り継いで二時間程のところにある。

クシャクシャになったメモ紙をもう一度ポケットの中から取り出して確認すると、少女は大きく一つ頷いて、歩き出した。

八代アカリには、高校へ上がったら、絶対に「やる」と心に決めていたことがあった。

八年前 アカリがまだ八つの年、彼女のただ一人の兄、徹司は亡くなった。

アカリの育った漁港界隈では、右に出るものがないと評判の腕利きの漁師で、若い時分には漁で随分とその名を馳せた父でさえ、一目おくような才能溢れる兄だったが、まだ若干二十一歳であった。

海の事故である。

アカリたちの海には、夏になると海上に現れる、通称『不知火』と呼ばれる青い自然発光体があるが、その『不知火』が海上に一列に綺麗に並んだ夜、兄は真夜中にそっと船出した。

兄の隣には、その年の冬にフラリと現れて以来、アカリたちの街に住み着いていた若い女の姿があった。

そして、戻ってきたのは女一人だけだった。

アカリはまだ幼かったが、その女のことだけはよく覚えていた。

この世のものとは思えないくらい、美しい女だった。

海の女神は嫉妬深い

だから、女を船に乗せるのは厳禁

昔堅気で頑固者で、おまけに迷信深かった兄が、亡くなった夜だけは、なぜかその女を伴っていた。

魔性……街のだれかが噂したそんな言葉の意味も理解するには至らない年齢だったが、何となく、その女が兄をどこかへ連れて行ってしまったのではないかと、幼いアカリは疑っていた。

大きくなったら、兄の仇を討つためにその女を捜しに行く。
いつしかアカリは、そう心に決めていた。

そして、高校へ入学する前の春休みに、父の書斎を探る内に、あ
る「一人の女」に対する膨大な資料を見つけてしまった。

島貫 美華

アカリがこれから訪ねようとしている女、その人だった。

「確か、この辺やと思うちよるんやけど……」

電車を乗り継ぎ、工場の立ち並ぶ小さな街へやってきたアカリは、
手にしたメモ紙と、目の前にいくつも同じような姿で横たわってい
る貧しい長屋の群れを見比べて首をひねった。

メモに書かれている住所は確かにこの集落の一つを指していたが、
アカリが想像していたあの魔性の女 が住む家のイメージからは
あまりにかけ離れていた。

「ごめんくださーい」

長屋の前に立ち、声を張り上げる。

しかし、中に人の気配はない。玄関先には、錆付いた子供用の三輪
車が置かれていた。

アカリはそのまま家の裏手へ回ってみた。

するとそこには、アカリに背を向けた形で小さな子どもが一人う
ずくまり、一生懸命何かをしている最中だった。

アカリはそつとその子どもの背後に近づき、手元を覗き込んだ。

「あっ！」

「わっ！」

アカリが声を上げると、子どもがビクツと飛び上がるのはほぼ同時だった。

「何しちよる！ 危なかね」

アカリは子どもが手にしていたマツチ箱と火のついたマツチ棒を叩き落すと、それらが地面の雑草を焼く前に、急いでローファアの靴底でもみ消した。

「子どもがこんなもんで悪戯しよったらいかん。ほら、見てみんしやい。火傷しちよるやないの」

アカリにグツと手を掴まれて、子どもは啞然とした顔でアカリを見つめて言った。

「……姉ちゃん、誰？」

尋ねられ、アカリは初めて我に返った。

「ああ、ごめんごめん。怪しい者じゃなか。姉ちゃんは、ちよつと人探しにここまで来たんよ。僕は、この家の子？」

子どもはコクリと頷くと、黙って後方の長屋を指差した。

「鍵無くして、入れないの」

「それはいかんね。お家の人、帰ってくるのは、何時くらい？」
「……わかんない」

子どもと一緒に、アカリもため息をつく。

「僕、名前は？」

「たかし」

そう言った声も、体つきも、線の細い痩せた子どもだった。

地べたに投げ出されたランドセルはボロボロで、肩口のところに「たかし」ではない名前がマジックで書かれていた。きっと誰かのお下がりなのであろう。

ヨレヨレにくたびれたランニングシャツは胸元が大きく開いていて、子どものおもちゃのように華奢な鎖骨を際立たせていた。

「よし、たかし君。おウチの人が帰ってくるまで、姉ちゃんと遊んで待ってよ。ただし、その前に……」

アカリはキョトンとしている子どもの頭に、いきなりゴツンッと強烈なゲンコツをお見舞いした。

「子どもが火遊びなんかしたらいかん！ 火遊びする子は、神様のバチが当たって、おねしょタレになる言うてうちの母ちゃんも言うてたばい。『おねしょタレたかし』言われたい？」

子どもは、何が起きたのか一瞬把握できないような顔をしながらも、アカリの言葉に押され、ブンブンと力強く首を横に振った。

「よし！そんなら二度と火遊びはせんこと！いいね！」

「……はい」

「分かったらええ。ええ子じゃ」

アカリは満足げに、子どものイガグリ頭を豪快に撫で回した。

「さて、お説教はこのぐらいにして……たかし君、その辺の適当な小石集めんしゃい」

「何するの？」

アカリはニヤツと笑って答えた。

「ゲームじゃ。火遊びと違って、頭使う遊びよ。黒っぽい石と白っぽい石、同じくらいつつ集めんしやい」

こどもは首をかしげながらも、アカリの言うとおり、小石を集めた。だした。

だが、集まった小石ではどうしても黒っぽい石が足りなかった。

「仕方ない。たかし君、さっきのマッチ貸しんしやい」

「子どもが火遊びしたら、おねしょタレになるんでしょ」

子どもは口を尖らせて、アカリにマッチを貸すのを渋ったが、アカリがもう一発ゲンコツをお見舞いする構えをみると、いそいそとマッチを差し出した。

アカリが、つけた火で白い石の表面をあぶっては黒い小石の山に投げ入れると、白と黒の石が同じくらいの量で、子どもとアカリの間に積みあがった。

「さあ、始めるよ」

アカリは地面に木の枝で大きく碁盤の目を書くと、子どもを振り返ってニツと笑った。

「囲碁じゃ。たかし君は、白。私は黒。ええか、この目の上で交代で小石を打って行って、自分の小石で相手の小石を囲んだら、相手の分がもらえる。取った小石の数が多い方が勝ちや」

たった一回の説明で、アカリは無理やり子どもをゲームに引き入れた。

初めこそぎこちなかった子どもだが、ゲームのコツを覚えると、たまにアカリが目を見張るような動きを見せた。

「たかし君、ホントに囲碁やるの初めて？」

「また取った！ 姉ちゃん下手くそ」

生意気な物言いに軽くデコピンをお見舞いしながらも、アカリは先ほどから、詳細にこの子どもを観察していた。

賢い子だ

頑固さを感じさせる眉根のあたりが、確かに似ている。

兄も碁を打つのが上手かった。

でも、まさか……

「隆志っ！」

その時二人の前に、血相を変えた女が突然割り込んできた。

「隆志！ こっちに来なさい」

息を切らせてアカリと子ども間に駆け込んできた女は、白い小石を抱えて次の一手を思索していた子どもの手を掴むと、自分の背後に庇うように引き寄せた。

突然の出来事に、アカリは手にしていた黒い小石をポトリと取り

落としながら、呆然と女を見上げた。

「あなた、誰？」

キラキラ光る目でアカリを見下ろす女の顔を捉えたとき、アカリは弾かれたように立ち上がった。

「女鬼！」

「は？」

怪訝な顔をする女に構わず、アカリははっきりとした口調で言った。

「あなたを探して、熊本から出てきたとです。八代アカリ、言います」

「……八代？」

アカリは更にはっきりと、一つ一つ言葉を区切るようにして重ねた。

「海で死んだ、八代徹司の妹の、八代アカリです」

女は初め警戒するようにアカリの様子を隅々まで伺っていたが、やがて背後に隠した子どもの肩を押しながら、小さくアカリに向かって呟いた。

「……ひとまず、家に入りなさい」

女の肩越しに、子どもはいつまでも後方からついてくるアカリを振り返っていた。

女に促されるまま部屋にあがったアカリは、ちゃぶ台の前にチヨコンと正座をして女を見上げた。

女は流し場に背を預けるような格好で、腕を組み、アカリを見下ろしている。

「……姉ちゃん」

「隆志は向こうの部屋に行つてなさい！」

先ほどのゲームの続きをしようとアカリに寄ってきた子どもに、女はピシヤリと言い放つと、有無を言わず子どもを部屋から追い出した。

「それで、今更私に何の用があるって？」

女は組んでいた腕をほどいてウエーブのついた長い髪をかきあげながら尋ねた。フワリと花の香りが漂うような、美しい姿だった。

「用も何も、兄さんが死んだ日から、ずっとあんたに会いに来ようって決めてたとです」

アカリは昔から兄によく似ているとされていた切れ長の瞳で、真っ直ぐに女を見据えて言った。

「兄さんを、殺したのはあんたかもしれん。私は、ずっと疑つちよつたとです。今更、警察どつのは言いやしません。ただ、本当のことを知りたいとです」

「私が、殺した？」

女は目を丸くしてまじまじとアカリを見たかと思うと、急に腹を押さえて笑い出した。

「あははは！ 私があの人を殺したかもしれないって？ それで、兄さんの仇を討ちに、こんなところまで来たっていうのね」

女は笑いの発作が中々収まらない様子で苦しげに息を継いでいたが、やがてクルリとアカリに背を向けると、調理場で作業しながら、背中越しにアカリに語りかけた。

「思い出したわ。あんたのこと。あの人の側にずっとくっついて離れなかった、小さな女の子がいたわね。おかつば頭の、気かんきそうな娘だったわ。随分、大きくなったもんね」

女はコップを片手に、再びアカリの方を振り返ると、アカリの前に手にしていたコップを置いた。

乳白色のカルピスには、氷が三つほど浮かんでいて、女がちゃぶ台に置いた瞬間、カランツと涼しげな音を立てた。

「私があんたの兄さんを殺したりしてないわ、悪いけど。もっともあんたたち家族から兄さんを『奪った』ってことには、違いないかもしれないけど」

「どういうことですか？」

女は少し自嘲気味に笑うと、アカリから目を逸らし、窓の外に揺れる夏の木漏れ日を見つめながら言った。

「あんたの両親にあの子を奪われそうになって、初めて肉親を『奪われる』辛さに気付いたのよ。同時に、奪った者に対する憎しみに

もね」

「うちの両親に奪われそうになった？ あの子を？ 一体何の話しちよるとですか」

アカリの混乱を見て取って、女は肩をすくめて見せた。

「何も、知らないのね」

しかし、アカリは机の上に身を乗り出し重ねて尋ねた。

「あの子、あの子どもは、やっぱり、兄さんの？ 兄さんの子ども、あんたは、産んでたのですか？」

女は否定も肯定もせず、机の上に肘を乗せ、相変わらず外の木漏れ日に見入っている。

「子ども産むくらい愛しちよったなら、何で兄さんは死んだと？」

女はそれに答えず、アカリの元へ視線を戻すと、笑顔とも泣き顔ともつかぬ顔で、溶けてゆくカルピスの氷を見つめていた。

アカリは重い足取りで、駅前の公衆電話ボックスに入った。
何枚もの十円玉を積み上げて、のろのろと受話器を握る。

『……もしもし』

潮騒の音と共に、聞こえてくる故郷なまりの叔母の声。

『もしもし』

アカリが何も答えないので、向こうの声が高くなる。

「何で、隠してたと？」

アカリは低い声で、ボソリと呟いた。

『アカリちゃん？』

「あの人が兄ちゃんの子産んだの、叔母ちゃんは知ってたとやる？ 父ちゃんと母ちゃんが、あの人から子ども奪おうとしたって、何ね？ 私、何も知らなかったとよ。どういうことね！」

受話器の向こうの声は、黙ってアカリの言葉を聞いた後、ポツリと言った。

『……帰っておいで、アカリちゃん。全部、話しよるから』

潮騒の音に混じって叔母の声は優しく、そして少し寂しげだった。

美華は、さつきまでそこに座って飲んでいたアカリのカルピスのコップに残った氷の欠片を見つめながら、そっと目を伏せた。

長い睫毛が瘦せた白い頬に影を落とし、窓から吹き込むそよ風が

その上をなぶっていく。

(悪いが、調べさせてもらったとよ)

(あんたに、子どもを育てるんは無理ばい)

あの日の言葉一つ一つが、今でも美華の心を抉り、血を流させていく。

(子どものクセに、色目使って誘うような真似して。厭らしい子だよ、この子はっ！)

過去の別の女の甲高い声が、美華の記憶の逡巡に割りこんでくる。

「……勝手なことばかり、言うんじゃないわよ」

あの日も、そんなセリフを吐いた。

今のように投げやりではなく、ほとぼしる激情に駆られて、ほとんど叫ぶように言ったのだけれど。

隆志を取り返しに行った旧家で、愛しい男が生まれ育った封建的なあの家で、ひんやりと冷たい畳の感触を膝に受けながら、ひた隠しにしてきた自分の過去を突きつけられた。

痛みは今も消えない。

「悪いが、調べさせてもらったとよ」

自分が愛した男によく似た初老の海の男は、それでもその声音に微塵の勞わりも乗せずに言った。

ある日突然、息子が自分の前から姿を消した。

預けていた託児所に迎えにいくと、所内は騒然としていた。半狂乱になって探し回り、ようやく探し当てた犯人を知った時、美華は信じられない気持ちと共に、どうしようもない怒りで全身が震えた。連れ去ったのは、今は亡き最愛の男の両親だった。

男との間に子どもが出来ていたことは誰にも打ち明けなかった。

男の死と共に、そつと男と過ごした港町を離れ、一人誰も知らない街で子どもを産んだのだ。

美華の生涯の中で唯一大切だと心の底から感じられたものが、突然何の前触れもなく土足で踏みじられ、奪われた。

美華は憎しみに満ちた目で、目の前の初老の男を睨んだ。だが男は、少しも臆することなく、残酷な言葉を紡いだ。

「あんたが、東京で何をしてきたか、わしらは全部知つるとよ」

そう言うつと、男は分厚く膨れ上がった茶封筒を美華の前に投げ出した。

バサバサバサッ……

投げ出された拍子に封筒から飛び出た写真が、美華の膝の前に広がる。

写真に写る男の横顔を見た瞬間、美華は息を飲んだ。

「……あんた、自分の養父と、デキとつたばいね」

初老の男の言葉が、どこか遠いところで耳鳴りのように聞こえる。

「そんな女に、大事な徹司の忘れ形見ば、預けられん。あんたに、隆志を育てるんは無理ばい」

(……ねえ、美華ちゃん、これは美華ちゃんとパパの秘密だよ)

(憎い子だねえ。こんなに小さいのに、もう女の目をしているよ)

ネットリと厭らしい、本気で死を願った男の声が、時間を越えて美華の耳の頭の中で渦を巻く。

(自分の父親にまで色目使ったあ、おまえは本当に恐ろしい子だよ！)

浴びせられる罵声。

美華の母親のものだ。

戦後の荒廃した街の中で、母は自分を売って日銭を稼ぐ娼婦だった。

トウが立って働き辛くなると、反吐が出るような下衆な成金男を捕まえて所帯を持った。

美華が十二歳の時だった。

望むと望まざるとに関わらず、母ゆずりの美貌は、美華にとって命取り以外の何物でもなかった。

成金男が美華に手をつけるのに、時間はかからなかった。

母は助けてはくれなかった。それどころか、日々老いていく自分と、目に見えて美しく成長する娘の姿を重ねて、美華の方が男を誘ったのだと美華に辛く当たった。

高校卒業を待たずに、美華は家を飛び出した。行く当てなどない旅だったが、地獄のような家にいるよりマシだった。生きていく術はいくらでもある。

あの肥え太った醜悪な男に抱かれるのを息を殺して耐えるより、見も知らぬ男を相手にして生きていく方が幾分良いか知れなかった。

そんな気持ちで各地を渡り歩いて、辿りついた先がこの港町だった。

徹司に出会ったのも、この街だった。

「俺は、お前好かん」

徹司が初めて美華に吐いたのが、このセリフだった。

高校を中退して、色々な街を渡り歩いた末、気まぐれに立ち寄った港町で美華は徹司に出逢った。

街の飲み屋で働いたり、自分に色を仕掛けてくる男たちが落とすていく金でその日暮らしをしながら、何の目的もなく日々を過ごした。

美華が何もしくなくとも、自ら火に飛び込む夏の虫のように、男たちは勝手に美華の美貌に引き寄せられ、美華の思惑とは別の所で争いを始め、それを見た他の住人たちは美華を男を惑わす『魔性』『女鬼』と勝手な名を付け後ろ指を差し続けた。

敢えてそれを否定しようなどとは思わない。

美華が諸悪の根源であると思うなら、望む通りにしてやる。両親でさえ、自分をそう扱ったのだから。

その日も、美華を巡って二人の男が争い、一人が刃物を持ち出して暴れたため、事態は大きくなった。

美華が勤めていた一杯飲み屋に通いつめていた若い漁師で、始めは豪快な酒の飲みっぷりを美華も気に入るなど目には余る次第に独占欲を剥きだしにして、美華にも手を上げるなど目に余る行動が増えてきたために、美華自身、辟易へきえきしていたところだった。

だから、別れるために別の男を誘った。

それを知った男が逆上し、飲み屋に押しかけ暴れたのだった。

緊急事態に呼び出されたのは、その辺りの漁港の若い連中を束ねていた徹司だった。

刃物を持って暴れる男をねじ伏せて、子どものように泣きじゃくる男の肩を叩きながら、店を後にする際、美華を振り向きもせずと言ったセリフだった。

徹司は、他の男たちとは違っていた。

辺り一体で右に出るものがない程の腕っぷしの強い漁師だったが、普段は無口で無愛想で、美華に向かってニコリともすることがなかった。

「負け惜しみでしょ！ あんただって、チャンスさえあれば、私をモノにしたいと思ってるクセに。誰にでも自分を売る女だって知ってるから！」

去り行く背中に向かって叫んだ美華を振り返ると、徹司は心底哀れむように言った。

「つまらん女じゃ」

「何ですって？」

「他人に言われた通りの人間になってやる必要なんて、どこにもないよ。自分がどういう人間か、決めるのは自分ばい」

それだけ言うと、徹司は再び背を向け、二度と振り返らなかった。

い
他人に言われた通りの人間になってやる必要なんて、どこにもな

徹司の言葉は、いつまでも美華の心に残った。

(5)

(父親にまで色目を使う、恐ろしい子)

(生まれつきの淫売)

今まで他人に好き放題に言われてきた自分の評価。

あがいてもあがいても、それを拭えないのなら、いつそ他人が望むような人間になってやろう、そう開き直って生きてきた。

男たちが自分を巡って争う様を、嘲笑しながら見てきた。

だが、徹司の言葉で初めて、そうやって生きてきた自分自身が一番深く傷ついていることに気がついた。

その日から、徹司のことが気になって仕方なくなった。

「ちょっと、いい?」

帰港したばかりの徹司の船を見つけると、他の漁師の目を盗んで、美華は網をしまつ徹司に駆け寄った。

「女がチヨロチヨロしよったら怪我するばい。下がってる」

すげなく言う徹司に負けずに、美華は食い下がった。

「この間のこと、考えたの」

「ああ?」

「自分の生き方決めるのは、自分自身だつて」

「ああ、それが」

徹司は急に赤くなると、火に焼けた首の後ろをポリポリ掻きながら照れくさそうに言った。

「偉そうなこと、半分は俺自身に言った言葉でもあるんよ」

「え？」

「両親の期待背負って、言われるまま漁師になった。海のこと以外何も知らん男になった。俺は自分のこと、どんだけ自分で決めよつたか思ったら、あんたに偉そうなこと言える立場やない」

「これから決めればいいよ。私も、真剣に考える。自分がどう生きたいのか、今までそんなこと考えたことなかった。ううん、考えることなんか許されてないって思ってた。でも、違う。あんたが、教えてくれたから。自分で決められるって教えてくれたから」

その時、徹司は初めて美華に向かって笑顔を見せた。

大きな口を開けてニツと豪快に笑う姿は、真夏の太陽のように強烈な輝きを放って美華の心を捉えた。

二人が恋に落ちるのに、時間はかからなかった。

冬がすぎ、春を見送り、夏が巡ってくると、徹司は美華を夜の船出に誘った。

それまで決して女を船に乗せることはしないと断言していた徹司だったが、その夜だけは違っていた。

「お前に、特別なもん見せちゃるばい」

それだけ言うと、誰の目にも触れないように美華を船に乗せて、深夜に出港した。

大分船を漕いで、岸がもう見えないというところまで来た時、美華は水平線の向こうに一列に並ぶ、不思議な青い炎を指差して尋ねた。

「あれは何？」

「お前に見せたかった不知火しゐひばい。俺らの海では、死んだ人間の魂じゃて言われとる。強い思いを残して死んだ、人間の魂じゃて。小さい頃から、あの炎を見るたび、俺もいつかあの一つになれるんじやるかて思うちよった。怖いよりも、そんな強い思いを、抱いて死ねたら幸せじやるって、そう思うちよった。俺には、そこまで何かを強く思う気持ちなんぞなかったから」

徹司は、そつと美華の腰に手を回した。

「ここで、お前抱きよつたら、俺も不知火になれるんかの？」
「え？」

「お前が、俺のこの世での未練になれるんかの。俺は、ずっと魂の一部が欠けちよるって思うちよった。優しい親父やお袋、可愛い妹に囲まれながら、家族や周囲の期待に応えながら、俺だけが本気やなかった。ありがたいと思しながら、愛してくれる人らに、俺だけが本気になれんかった。だから、昔から、自分はどんだけ薄情な奴なんやると、ずっと居たたまれん気持ちやった」

美華は何も言わずに、そつと徹司の唇を塞いだ。

この人は、自分と同じだ。

ずっと欠けていた魂の欠片を、探し続けていた人なんだ。

生まれた場所も、生きてきた環境も全く違う二人だけど、自分は確かにこの男に出会うために生まれてきた。

徹司の筋肉で張った背中にそつと手を伸ばす。

徹司の肩越しに、遠くで揺れる青い炎を瞼の裏に映しながら、美

華は徹司の頭を掻き抱いて、そのまま甲板に身を横たえた。

「……………美華」

二人の熱情が去った後に、徹司はそつと美華の胸に冷たい金属の欠片を落とした。

「今日のこと、忘れんな」

美華は胸元に落とされた金属の欠片を握り締めると、コクリと頷いた。

何も纏まとわれない姿のまま、二人で甲板の先へ出て、遠くに揺れる不知火を眺めた。

「……………きれい」

不知火に見惚れて美華がそう呟いた瞬間、徹司がくれた金属の欠片 指輪が、美華の手の間を滑り落ちて、海の中へ消えた。

「あつ！」

美華は暗い海に身を乗り出して叫んだ。

「どっしりどっしり……………」

今にも泣き出さんばかりの美華に、徹司は優しく言った。

「心配せんでもええ。取ってきちやる」

「え？」

美華が返事をする前に、徹司はいきなり美華の肩を抱き寄せて耳元に囁いた。

「俺は死んでも、不知火になってここにずっとおる。お前のことだけ思つて、何よりも強い光で燃え続けちやる。忘れんな。ずっと、忘れんな」

それだけ言うと、徹司は渾身の力で美華を突き飛ばし、美華の目の前で暗く渦巻く海への身を投げた。

翌朝、一人残された海の上で半狂乱になっているところを通りすがりの漁船に助けられた。港についた後、街中の船が総出で徹司を探したが、ついにその姿を見つけることは出来なかった。

街中のものに「人殺し」と後ろ指を差されながら港町を出た時、初めて、自分の中に徹司の命が宿っていることを知った。

同時に、船出する前日に徹司が美華宛に送っていた手紙で、徹司が病に侵され、余命いくばくもなかったことを知った。

(子ども産むくらい愛しちよつたなら、なんで兄さんは死んだと?)

真つ直ぐな少女の目を思い出しながら、美華はそつと溶けかけた氷を入れたカルピスのグラスを指で弾いた。

それは、一生分の愛を、燃やしたから。
あの夜、あの船の上で、全てを燃やしていったから……

「隠しとつたわけじゃないとよ。けんど、アカリちゃんには、すまんこつした」

短い休暇を終えて故郷に帰ってきたアカリを、叔母の三波キヨは静かに迎え入れた。

腕には一歳になったばかりの孫娘の亮子を抱いている。

近所に住むキヨは、アカリの父親の末の妹で、アカリたち兄妹を幼い頃から可愛がってくれていた。

「徹っちゃんの子どもを兄さんが連れ帰って来ちよつた時、それを追いかけて来たあん人んこつは、今でもよう覚えとるばい。あん人は、一度は子どものことは、諦めたとよ」

腕の中の孫娘は、無邪気に笑い声を立てる。それをあやししながら、キヨは続けた。

「兄さんらも必死やった。それを責めたりできん。けんど、人として耐えられんような、一番知られたくない過去を、兄さんらはあんに突きつけて、あん人の尊厳を奪つたとよ。それで、徹っちゃん的身代わりば、手に入れようとした」

一番知られたくない過去

そう言われても、高校生のアカリには想像できるはずもなかった。

「子どもに別ればしに来よった時、あん人は花柄の綺麗なワンピース着ちよってなあ。まるで、映画の中に出てくる女優さんのこつあった。涙一つ流さんと、子どもに背を向けたばい。けど、あん人の背中を小さい徹っちゃんの子どもが必死に必死に追いかけてなあ。振り返った時には、あん人もグシャグシャに泣いちよった。その姿見せられたら、もう街のもんも何も言えんかった」

キヨは上機嫌で笑う孫娘の亮子をアカリの手に渡しながら呟いた。

「どげん親でも、子どもと引き離されるんは、死ぬより辛か」

亮子の両親　キヨの娘夫婦は、昨年春、生まれたばかりの亮子を残して交通事故でこの世を去った。

一人残された亮子を、キヨが引き取り世話をしている。
キヨの呟きは、自分の亡くなった娘に対する言葉のようでも、小さい愛娘を残して死んだ娘の気持ちを思っていることのようにも聞こえた。

亮子は赤ん坊らしい、ミルクと陽だまりの匂いをさせてアカリの胸を熱くする。

命が確かにそこにあり、呼吸して、生きている。

徹司の命も、確かにあの美しい女の元で、受け継がれている。

「……高校卒業したら、うち、あの街へ出るばい」

理屈ではなく、「血」という不確かで陳腐な言葉でもなく、アカリはどついうわけか、あの親子にどつしようもなく強く惹かれていた。自分を感じていた。

腕の中の亮子が、コロコロと笑い声を上げた。

高校を卒業した後、両親の反対を押し切り、アカリは上京し、言葉通り隆志たち親子の住む街で生活を始めた。

『不可侵』の約束

上京したアカリに美華が突きつけたのはそれだった。

お互いに全く干渉しないこと。それを守るなら、側で暮らすことにも目をつぶる。

しかし、この約束を最初に破ったのは以外にも美華の方だった。

上京したアカリは、小料理屋で給仕の真似事をしながら暮らしをたてていたが、そこで出逢った妻子ある男と恋仲になった。

その男はあちこちに女を囲っていることで有名な色好みの実業家だったが、まだ若く愚かなアカリには、そんなことは知る由もなかった。

やがてアカリは男の子どもを身ごもり、それを機に男に呆気なく捨てられた。

その時のショックで、子どもを亡くし二度と子どもを望めない身体になった時、冷たい病院のベットに付き添ったのは美華だった。

実家の両親には、口が裂けても言えるはずもない悲しみに押しつぶされそうだった時、美華は慰めも同情の言葉もなく、ただ淡々と側にいてくれた。

それが、当時のアカリにとって、どれだけありがたかったか知らなかった。

後に、アカリを捨てた実業家が、街外れの小路に引きずりこまれ

半死半生の目にあつたという噂を耳にした。
それも、犯人は当時美華に夢中になっていた、街のヤクザ者であつた。

美華は何も言わない。
そういう女だつた。

「ほんなこつて、叔母ちゃん。ウチもたいがい忙しいとよ。うん、うん。分かつた。盆には一回、帰るばい。うん、叔母ちゃんも、体大事にしんしゃい。もう、ええ年なんじゃから」

チン……と受話器を置いたアカリの横顔を、マサは店のカウンタ―に腰掛けてニヤニヤ笑いながら見ている。

「何笑つてんのよ、あんたは」
「いやあ、アカリさんのお国訛り、新鮮だなあと思つて」
「バカ！」

アカリに軽く額を小突かれ、マサはすきつ歯をのぞかせて「ヒヒッ」と笑つた。

「熊本、お盆に帰るんですか？」
「さあね、分からないわ」
「……隆志の奴、今頃どうしてるのかな」

マサの一言で、二人の間に沈黙が下りる。

不知火の海に帰る

と言いついて隆志が一人この街を去ってから、半年が過ぎていた。

「大丈夫でしょ、あの子なら」

アカリは気を取り直すように顔を上げると、マサの頭をポーンと軽く叩いて言った。

「さ、辛気くさい顔してないで、開店準備よ！ マサ！」
「おっす！」

マサも立ち上がり、カウンターの中へ滑り込んだ。

夕暮れと共に、今夜も『不知火』には、一日の疲れを癒しにくる客たちを迎え入れるべく、暖かい灯がともる。

朝霧の中、真っ直ぐに伸びた線路はどこまでも続いていく。

プラットホームから身を乗り出し、果てしなく続く線路の先を目を細めて確認した男は、汚れたナツプザックを肩から外しホームに置くと、自分はヒラリと線路に飛び降りた。

飛び降りた後、先ほど肩から外したナツプザックを取り上げ、再び骨ばった肩に引つ掛ける。

長く伸びた髪が耳にかぶり、無精ひげが薄く鼻の下を覆っている。ヒョロリとした長身に相応しい、破けたジーンズに包まれた細く長い足を踏み出して、男は線路の上を歩いて行く。

足元で、線路に敷き詰められた小石が、男に踏みしめられてジャリツと音をたてる。

昨日の晩、終電に乗って目的の街を目指したが、一つ前の駅で降りてしまった。

春先とは言え、まだ野宿するには寒すぎるホームの待合室で、ナツプザックを枕に一晚を明かした。

はつきりとした理由があったわけではない。

ただ、始発が走る前の線路を、まだ胸を満たす冷たい空気が満ちた時間の中を、一人歩くのも悪くはないと思った。

いや、それは言い訳だ。

男は自嘲気味に首を横に振った。

伸びかけた髪が頬をかすめ、再び耳の上に落ち着く。

正直、あの街に早く着いてしまうのが、怖かった。

五年前、逃げるように、今とは逆の方向に走る列車に乗って、住

み慣れた街を後にした。

クリスマスの朝だったが、まだ夜明け前の凍てつくような寒さが、今よりも年若い彼の胸の奥深くまで入り込み、涙さえも氷らせた。

二度と帰ることはないであろうと思っていた街に向かって、自分は再び歩を進めている。

自分の人生の中で、心から大切だと思えたただ一人の人を、置き去りにしてきた街へ。

男が歩く側から、徐々に夜は明けていき、やがて工場が立ち並ぶ街の輪郭が白々と露わになりだした。

灰色がかつた町並みは昔と変わらないはずなのに、今は何となく小さく薄汚れて見える。

この五年の間に三センチ伸びた、自分の身長のせいだけではあるまい。

男は線路から外れて、懐かしい街の中に入った。

まだ目を覚ましてはいないが、あと三時間もすれば、街は起きだし、工場の機械の音、そこで働く人々の声が、賑やかな洪水のようになつて街全体を満たすだろう。

男は街の表通りからは外れて、川沿いの細い道を歩き出した。

幼い頃を過ごした、長屋の群れを目指して。

その長屋の一棟は、朝日を背景にして静かにたたずんでいた。

目を細めれば、日の光の中をキラキラと細かい埃が舞いながら、反射しているのが分かる。

男は戸口の横の、風雪にさらされ黄色く変色した表札に目をやっ

た。

『島貫』

インクは滲んでいたが、確かにそう書かれていた。

男は思い切つて、引き戸に手をかける。

周囲の長屋の住民たちを起こさないように、細心の注意を払ってソロソロと力を入れると、扉はあつけないほど簡単に開いた。

「……なんだよ、これ」

開けた途端に、埃がバサツと音をたてて舞い上がるような様を想像していた男は、部屋の内部の状況を見て思わず呟いていた。

部屋は、五年前に男が出て行った時のまま、いや、もしかすると出て行った時以上に小奇麗に磨き上げられ、チリ一つ落ちていなかった。

履きつぶしかけたボロボロのスニーカーを脱いで、男は玄関にある。

居間に入ると、部屋の片隅では、ご丁寧に三折りに畳まれた布団が二組鎮座し、隆志を出迎えていた。

五年間も空き家だったとは思えない、今でも誰かがそこに住んでいるかのような部屋の様子に、男は急に不安になり、急いで玄関を飛び出してもう一度表札を確認した。

間違いない。

表札には確かに『島貫』と書いてある。

男は首をひねりながら再び室内に戻ると、今度は部屋中をくまなく点検していった。

かつての自分の部屋は、出て行った日に開いていた参考書のペー

ジそのまま、分厚い埃が被っていた。

男は部屋の柱に手をかけながら、軽く咳き込む。ギザギザした感触に、柱に残された傷を目を細めて見やる。

数センチの幅で、それは丁度今の男の肩の高さになる位まで、一年毎に、同じ日付、同じ文句が几帳面にマジックで書かれていた。

『隆志、十二歳』と書かれた所から急に柱の文字の筆跡は変わり、十三歳と十四歳の二つの傷の横に書かれた字は、それまでの丸みを帯びた女のような字ではなく、生真面目そうな固い字に変わっていた。柱の傷はそこで途切れている。

男は柱の傷を一番下から一つ一つなぞっていき、やがて今の自分の目線の先にある、無傷の柱までくると、そこに額を付けて息を吐き出した。

十四歳で止まった柱の傷と、今額が当たるところまでの無傷の間、間に、実際にはどれだけの時間が流れ、何を失い、何を得てこまできたのか。

答えの代わりに、一瞬の眩暈に襲われる。

男はかつての自分の部屋を出て、居間に戻った。

急に、ドツと疲れがこみ上げてきた。

男は部屋の隅に積まれた布団の側に膝をつき、半分だけ倒れこむような形で身体を預けた。

布団は適度な弾力をもつて男を受け止め、男の体重を包み込む。

鼻先には、日の光をいっぱいに浴びた、よく干された布団特有の、明るい太陽と埃のおいが踊っていた。

男は思い切りその匂いを吸い込むと、そっと目を閉じた。

幸福な陽だまりの匂いに包まれながら、男はいつしか深い眠りに落ちて行った。

どれほどの間、眠ってしまっていたのか。

男が再び目覚めた時、既に太陽は西の空に傾きかけていて、部屋の中には燃えるような西日が差し込んでいた。

「……いてて」

妙な体勢で寝てしまったので、体が軋むように痛む。

顔をしかめて身体を起こしたとき、男は居間の戸口に佇む人影を見た。

逆光になって顔はよく見えないが、その人影も、男の姿に驚いたように戸口に立ち尽くしている。

「……あ、あなたは」

人影が手にしていた買い物袋を取り落とした。

ゴトリ　と音がして、中からネギや割れたタマゴが顔を覗かせた。

「……隆志……君？」

こぼれたネギやタマゴにお構いなしに、人影は一步、隆志の方へ近づいた。

逆光になっていた顔の角度が変わり、一人の男の輪郭があらわになる。

「隆志君！」

男はいきなり、座り込んでいた隆志の胸に飛び込んできた。

足元にタマゴの黄身が飛び散る。

「おかえり！おかえり……帰ってきたんだね、やっと帰ってきた！」

隆志の耳元で鼻を嚙りながら、その男はしゃっくりあげるように泣き出した。

「……なんで、あんたがこんなところにいるんだよ……智之さん」

隆志は抱きしめられた気恥ずかしさから、男の肩を押し返しなが
ら、ぶっきらぼうに言った。

「まさか、あんた、ここに住んでるの？」

智之は鼻の下を擦りながら、あのフワリとした笑みを浮かべた。

「君が出て行ったすぐ後、ちょうどアパートの契約も切れる頃だっ

「たんだ。次のいい物件探してたから、転がり込めて調度良かったよ」
「ちやつかりしてんのな」

隆志は智之の笑みに、苦笑を返した。
でも、嘘だ。
分っていた。

契約が調度切れる頃だったなんて作り話で、本当は五年もの長い間、隆志の帰りを待ちながら、この家を守ってくれていたのだ。
布団を干して、綺麗に掃除をして……

「智之さんて、大食いなんだな」

優しい人。

「え？」

「その量、いつも一人で食べてんの？」

隆志が床に投げ出されたままの、食材がいっぱい詰まった買った買い物袋を顎でしゃくる。

「あ、ああ。これでも肉体労働者だからね。食欲だけは若者並なんだ」

優しい嘘の下手な人。

いつ帰るともしれない俺を待つて、バカみたいに毎日、食べきれない二人分の食事を作って待つていた。
いつでも、俺を迎えられるように。

「今日はお祝いだよ！何が食べたい？隆志君の好きなもの、何でも作ってあげるよ」

「智之さん料理なんか作れたっけ？」

「一人暮らし歴の長い男をバカにするなよ！」

智之は笑いながら、腕まくりをした。

「もうひとつ走り、店まで行ってくるからさ。何が食べたい？焼肉？ハンバーグ？」

そう言いながら、智之はもう今の扉から身体を半分出して、飛び出して行くこうとしている。

隆志は少し考えてから、智之の背中に向かって言った。

「……タマゴかけご飯が、食いたい」

智之が振り返って隆志を見る。

「……タマゴかけご飯？」

そんなものでいいの？ と、智之は目を丸くする。

隆志は恥ずかしそうに俯いてボサボサの頭を掻いた。

智之はしゃがみこむと、黄身を染み出させて畳を汚しているタマゴの袋をそっと取ってみた。

タマゴが三つ、まだ割れずに残っていた。

「よし！じゃあ、とっておきの作ってあげるよ」

智之は隆志に向かって親指をたててニッと笑うと、早速夕食の支度を始めるべく、台所へ消えた。

隆志は智之の背中を追いかけながら、またボリボリと頭を掻いた。ふと部屋の片隅に目をやった時、懐かしい女の顔が飛び込んできた。

永遠に老いることもなく、若く奔放で美しいまま、時間を止めた女。

大輪の牡丹のように艶やかに微笑む女の前には、その微笑みとは対象的な小さな菊の花が、それでも美しく慎ましげに供えられていた。

「さあ、出来た！」

智之は隆志のリクエスト通りの山盛りのタマゴかけご飯に加えて、小さなちやぶ台には乗り切らないほどのおかずを用意して並べた。

「五回分の誕生日と成人式をお祝いしなきゃいけないんだからね！とりあえず、第一夜目はこんなところで許してくれよ」

そう言うと智之は、新聞紙をくるくるっと三角に丸めて、隆志のボサボサの頭の上に被せた。

「なんだよ、これ？」

外そうとする隆志を制して、智之は可笑しそうに笑った。

「誕生日の主役が被る帽子だよ。よく、ハリウッド映画のホームパーティーのシーンなんかで、子どもがよく被ってるじゃないか」

「……俺、もう子どもじゃないよ」

口を尖らす隆志に、智之は言った。

「子どもの時の分もまとめてだよ。ロウソクがないから、えーっと、美華ゴメン！ちょっと借りるよ」

そう言うのと、智之は美華の遺影の前にあるロウソクをロウソク立てごと奪って、隆志の前に置いた。

「縁起悪いよ、智之さん」

隆志が顔をしかめると、智之は悪びれもせずに言った。

「いいからいいから。雰囲気出るでしょ。美華も君の帰りを喜んでるに決まってるから、ロウソクくらい気持ちよく貸してくれるよ」

部屋を暗くすると、智之は手持ちのジッポで隆志の前のロウソクに火をともした。

小さく瞬いた火花が命を持って、隆志の前で燃え上がる。

「ハッピーバースデー、隆志君」

智之が手拍子とともに歌いだす。

「ハッピーバースデー、ディア隆志君」

いつのまにか、智之の頭の上にも新聞紙で作った三角帽が乗っている。

「ハッピーバースデー、トゥーユー！」

歌が終わったとたんに、隆志も頬を赤らめながら目の前の炎を勢いよく吹き消した。

「五年分の誕生日と成人式、おめでとー！」

めちやくちゃだ、と思わず頬が緩んだ。

歌が終わるやいなや、二人して、智之が作った料理を貪るように平らげた。

「隆志君、ちよっとこっちへおいでよ」

食後、折りたたまれた布団を背に、膨れた腹をさすっていた隆志を智之が手招きする。

智之が手招きする先は、隆志の部屋があつた場所だった。

「この部屋、もう見たかい？」

「うん。すごい埃被ってた」

「……この部屋にだけは、ずっと一度も入ったことがなかったんだ」
「何で？散らかつて、片付けるのが面倒だったんだろ」

わざと茶化す隆志に、智之は少し悲しそうな目で微笑んだ。

「この部屋だけは、主を待っていたからね。他人がズカズカ入って
いっていい場所じゃないだろう」

「こんな部屋、何もないよ。汚いだけだよ。そんなに気を使うこと
なかったのに」

そう言うと、隆志はドアを開けて、部屋に入ってすぐの傷だらけ
の柱に手をかけた。

「背比べ」

智之が隆志の手のすぐ下の傷に自分の手を添える。

「懐かしいね。覚えてるかい？」

隆志は手を離し、部屋の中をぶらつきながら素っ気無く頷いた。

十三歳

母に代わって、一緒に生活し始めたばかりの智之が刻んでくれた。

十四歳

とうに母に捨てられていた智之。

しかし、毎日のように一目美華に会おうと長屋に通い詰めていた。

何度目かの恋人が出来て、その男の元へ通うようになった美華に、取り残されたもの同士、ぎこちない親子の真似事をしながら、二人で祝った隆志の十四歳の誕生日、その記念に刻んだ傷だった。

そこで、傷は途絶えている。

「こつちにおいでよ、隆志君。背比べ、やってあげるよ」

「やめるよ、ガキみてえ」

「いいから、おいでって」

智之は嫌がる隆志を無理やり柱のところまで連れて行くと、柱の根元に隆志の足をピタリと揃えさせ、カッターナイフで新しい傷をつくった。

「隆志、二十二歳つと！」

「やめろって、恥ずかしいなあ」

気付いた隆志が慌ててマジックを奪おうとしたが、もう後の祭りだった。

「本当に、大きくなったんだねえ」

柱の傷を目で数えながら、智之はポツリと呟いた。

小さい頃から隆志の成長を刻みつけていた柱は、今、等身大の隆志を映して、過ぎさった時間を静かに物語っていた。

隆志が物心つく前からこの長屋にあった、古い柱時計の音が、十二時を差して低く響き渡った。

居間に隆志の分と自分の分、二組の布団を敷きながら、智之は終始嬉しくて仕方ないような顔をしていた。

「さあ、どうぞ。昨日干したばかりだからフカフカだよ」

智之が今さつき敷き終えたばかりの布団をポンツと叩くと、蛍光灯の明りの下で小さな埃がキラキラと舞った。

隆志は智之に言われるまま、目を吸ってよく膨れた布団の中に身体を滑り込ませた。

智之がその足元から、湯たんぽを差し入れる。

「温かいだろ」

「……うん」

隆志が両足を擦り付けるようにすると、湯たんぽの熱がジンワリと伝わってきた。

「さあ、寝よう」

智之が天井から垂れ下がった蛍光灯のスイッチを引くと、辺りは闇に包まれた。隣の布団に智之がすかさず潜り込んだのが気配で分かった。

「おやすみ」

「……うん」

布団にしみこんだ太陽の匂いが隆志の鼻先をくすぐる。

明るい健康的な匂いは、智之そのものを連想させた。

母と二人の暮らしの時は、年中湿った布団が居間に敷きっぱなしであった。

真冬でも冷たいせんべい布団にしか寝たことがなかった。

湯たんぽの暖かさもあいまって、隆志は思わず目頭が熱くなった。

「……智之さん」

「……うん？」

半分寝ぼけたような智之の声が、隆志に反応する。

「何だい？」

「……どうして、何も聞かないの？」

「え？」

隆志は智之の方へ寝返りをうつって暗闇の中で智之の顔を覗き込んだ。

「この五年、俺がどこで何をしてたのか。どうして聞かないの？」

智之はクスリと、鼻を吸るような音で笑った。

「……君が、話したそうだったから」

「俺が、話したそう？」

隆志は暗闇の中で怪訝な顔で聞き返した。

「話したくなさそう、じゃなくて？」

「そうだよ。準備の出来た人間を、急かす理由なんかどこにもないだろう？」

智之は布団の中から手を出して、隆志の肩をさすりながら言った。

「僕が急かしたら、せっかく話そうとしてたことも、話せなくなってしまうだろう。君は、昔からそういう子だったもの。いつも心の中をいっぱいにして、でも口にはしないでじっと抱えてる子どもだった」

隆志は口の端を歪めて、またゴソゴソと布団にもぐりこんだ。

「……あんたは、いつつも考えすぎなんだよ」

「そうかい？」

智之は涼しい顔で微笑んだ。

「他人のことなんかほっといて、もっと自分のこと考えろよ」

「僕ほど自分のことを考えてる人間はいないと思うよ。僕は利己主義だからね、自分が好きなようにこの家に住んで、自分が君にまた会いたかったから、ずっと待っていたんだ」

「それじゃあ、俺が何のために出て行ったのか、分からないじゃないか！」

隆志は乱暴に寝返りを打って、智之に背を向けた。

「……せっかく、斎木に返してやったのに」

消え入るように呟いた隆志の声を、智之の耳はきちんと捉えていた。

その後が続いた、小さく鼻を吸る音も。

智之は何も言わず、隆志の背中を布団越しにポンポンと優しく叩いた。

「明日、『不知火』へ行ってみようか。アカリさんたちも、喜ぶよ」

隆志は返事をせず、寝入ったフリを決め込んだ。

静かな夜の中で、自分が涙で枕を濡らしているのを智之に知られたくなくて、懸命に息を殺して、唇を噛みしめた。

智之は優しく、気付かずフリをしてそつと寝返りをうつた。表の道路を走るトラックの明かりが、二人が沈んだ夜の底を流れては消えて行く。

夜は二人を包み、静かに更けていった……

翌日の夕方、智之は隆志の背中を押しながら「不知火」への道を歩いていた。

寂れた店の電飾の看板はそのまま、地下の店内へ続く階段の上に立ったとき、隆志は五年間の歳月を一瞬忘れた。

高校の制服のまま、毎日のように寄っていた「不知火」。

店の扉を開ければ、いつでもアカリやマサ、常連客の日雇い労働の男たち、そして途中からは智之も加わって……

かけがえのない場所だった。

今隆志の目の前に迫っているその場所が、その扉を開けた時、あの親しんだ空気が変わっていたらどうしよう。そんな不安にかられるのも事実だった。

智之はそんな隆志の心中を察してか、そつと隆志の肩を叩くと「大丈夫だ」と言うように軽く頷いて、自分から先に店への階段を降りて行った。

「あら、智之さんいらっしやい」

智之が扉を開けると、開店前の準備に追われていたアカリはすぐに振り返って声をかけた。

智之の肩越しに聞く、五年ぶりのアカリの声は、相変わらず澆刺としていて、気風のいいものだった。

「マサくん、今日は一段とキマツてるね」

「おうよ！ほら、聞いたかよ、アカリさん。やっぱり智さんは分つてるよなあ」

すきつ齒から空気が抜けるように話すマサの声も相変わらずだった。マサはカウンターを軽く飛び越えると、店の中央に躍り出て、店内に流れている『ステイルアライブ』の曲に合わせて軽妙に腰を振り出した。

「ちよつとマサ！店でその妙な踊り踊ったら首だつて言ってるはずでしょ！智之さんも笑つてないで止めてよ。その服もその頭も、見てるほうが恥ずかしいわよ」

マサは上下白いスーツに、ポマードでガツチリとキメたリーゼントの髪を揺らしながら、唇を尖らせて懸命に腰をくねらせている。

「どうして？マサくん、ジョン・トラボルタにそっくりだよ。イカしてる」

智之は笑いをかみ殺して、踊るマサに片目をつぶって見せた。

今年大ヒットしたアメリカ映画「サタデー・ナイト・フィーバー」を観てから、マサのヒーローはジョン・トラボルタになった。

「もう、智之さんが甘やかすから。マサ、踊ってないで準備手伝いなさい！」

「俺のことは、マサじゃなくて、トニーって呼んでくれよ」

「『サタデー・ナイト・フィーバー』の主人公の名前なんだ」

智之が隆志にそつと耳打ちする。

その映画なら、隆志も既に観ていたので知っていた。

「いいから、早く手伝いな！」

アカリの逆鱗にふれ、マサはしぶしぶ踊りをやめてカウンターへ戻った。

智之の背中であいを堪えていた隆志だが、とうとう堪えきれずに噴出した。

アカリとマサが一斉に智之の背後に目をやる。

智之は肩をすくめて、横へ身体をずらした。

「めずらしいお客さん。つれてきたよ」

智之という盾がなくなった隆志は、気まずそうに咳払いしながら、軽く会釈した。

「……隆志……君？」

アカリとマサは呆気にとられたように、隆志を見つめていた。背も伸び、微笑鬚を生やしたこの青年が、本当に自分たちが長い間待っていた人物なのか確認するように、しばらくの間沈黙が流れた。

しかし、次の瞬間、アカリとマサは殆ど同時に飛び上がるようにして隆志の元へ駆け寄ってきた。

「隆志、隆志じゃねえかよ！このやろ、オマエ、心配させやがって！」

「そうよ！この五年、何の連絡もくれないで。ひどいじゃない。私たちがどれだけあんたのこと心配してたか！」

アカリとマサにもみくちやにされながら、隆志はボサボサの頭をかきながら小さい声で「ごめん」と詫びた。

アカリとマサは隆志をカウンターに押し付けるように座らせると、矢継ぎ早に質問を浴びせた。

今までどこに居たのか。

ちゃんと食べていたのか。

どうして帰ってきたのか。

ずっとここにいられるのか。

それらの質問の全てに、隆志は曖昧に微笑みながら、黙って頷い

たり首を傾げたりしていた。

「ナナちゃんのこととは？聞いてる？」

アカリが発したその一言で、隆志の顔から笑みが消えた。

隆志の顔色を見て取ったアカリが、隣でオレンジジュースの瓶を開ける智之に視線を移した。

「……智之さん、教えてあげなかったの？」

咎めるような口ぶりのアカリに、智之は肩をすくめて言った。

「聞かれてないもん」

智之はワザと少々意地悪く眉をひそめて、オレンジジュースのコップを持った右手の人差し指を立てて、隆志に突きつけた。

「君から聞いてくれるのを待ってたんだけどね。あんな風に、僕らを置いていった君を、僕も理穂子もまだ怒っているんだよ」

「……智之さん」

アカリやマサも智之に加わって、恨みがましい視線を隆志に送る。

「女を泣かすなんて百年早いぜ、隆志」

「ナナちゃんに百回謝っても足りないわね」

「……今更、だよ」

俯く隆志の横面に、アカリの軽い平手が入った。

「意地っ張りめ！　そういう頑固なところだけ、兄さんにそっくり

よ

言うなり、アカリはカウンターの端においてあった未記入の伝票を掴んで、その裏にいきなり何かを走り書きして、隆志の胸元に押し付けた。

「ナナちゃんの今の住所。東京で民間の保育所に勤めててね、その職員寮に入ってる」

隆志はその紙切れを握り締めて、智之の方を振り返った。

智之は口元に笑みを浮かべながらも、わざとそ知らぬ顔で、オレンジジュースをすすった。

その時、店の外で何者かが争うような大声がしたかと思うと、いきなり勢いよく扉が開かれた。

「ちょっと、離しんしゃい！　こんな怪し気なところば連れ込んでウソだったら承知せんばいね」

「ウソも何も、あんたが『不知火』っていうスナックはどこにある？　って言うから、連れてきてやったんじゃないか」

現れたのは、この店の常連客の一人源さんと、まだあどけなさの残る高校生くらいの少女であった。

少女の方は興奮した様子で、腕にかけられた源さんの手を邪険に振り払おうともがいている。

「何の騒ぎ？」

いきなり現れたこのマメ台風のような二人に、アカリが冷たい視線を投げた。

その時、少女の視線が初めてアカリを捕らえ、更にカウンターに座る隆志の背中を捕らえた。

「隆志っ！..!」

「りよ、亮子!？」

驚いて椅子から転げ落ちそうになる隆志にも構わずに、少女は叫ぶように隆志の名を呼ぶと、迷わず隆志の背中に駆け寄り後ろから羽交い絞めにした。

「やっと見つけた。見つけたばい……」

隆志の背中に額をすりつけ、少女は声を上げて泣き出した。

「……これは、どういうこと?」

突然の事態に、そこにいた全員の視線が隆志に注がれる。

「いや……その……」

しどろもどろになる隆志に、マサが小指を立てて見せた。

「コレか?お前も、結構やるじゃねえか」

すかさずアカリに頭を叩かれて、マサは舌を出す。

「ちゃんと説明してよ。隆志君。その娘は誰なの?」

「隆志の許婚ばい」

今の今まで泣き濡れていた顔を上げると、少女は勝気そうな太い

眉を上げてアカリに向かって宣言した。

「将来を誓い合った仲ばい」

「俺、知ーらねっ。ナナちゃんに言いつけてやる」

マサはカウンターの中にしゃがみこんで、テーブルから目だけを出して隆志を伺っている。

好奇心にキラキラ輝く目を、隆志は思い切り睨みつけてやったが、ますますマサの笑みを深くするだけだった。

その隣では、カウンターを挟んでアカリと少女が火花を散らしている。

「聞き捨てならないわね。お嬢ちゃん、名前は？」

「三波亮子」

「三波？」

その名前を聞いた瞬間、アカリは目を丸くした。

「あんだ、叔母ちゃんのこと……？」

「何？アカリさん、知り合いなの？」

アカリがマサに答える前に、少女はアカリに向かって言った。

「ばあちゃんから、あんだのことは聞いたばい。隆志がウチの元から消えた時も、ここやってすぐ検討ついたらばい」

「隆志、何、オマエ。この娘と同棲してたわけ？」

目を丸くするマサに、隆志は耳まで真っ赤になりながら激しく首を振って否定した。

「ど、同棲って、違うよ。ちょっとワケがあって……」

「一緒に暮らしてたんは本当のことばい。五年前から、ウチは隆志のお嫁さんになるって、決めとったばい」

「亮子！いい加減にしろ」

「何で？ばあちゃんも認めてくれとったやないね」

「ちょっと待ちなさい！」

収集のつかなくなった事態に、アカリが割って入った。隆志の首に自分の腕を巻きつけたままの少女は、唇を尖らせてアカリを見た。

「なんね？おばちゃん」

「あんたにおばちゃんなんて呼ばれる筋合いはないわよ」

アカリは凄みの利いた声でピシヤリと言いつつ放った。

「隆志君、あんたハル叔母ちゃんのこと……三波ハルのところにいたの？」

隆志は気まずそうに目を伏せながらコクリと頷いた。

「そんな……叔母ちゃんとは何度もこの五年の間に何回も電話で話してるのに、そんなこと一言も聞いてないわよ」

「……俺が、ハル婆に黙っててくれって頼んだんだ」

隆志は申し訳ないというように頭を下げた。

三波ハルは、アカリと徹司の父親、徹太郎の姉だった。

徹太郎も母親のエイも、アカリが上京してしばらくの後に、病に倒れ亡くなっている。熊本に今も残るアカリたち兄弟の親戚は、この三波ハルのみだった。

アカリは小さい頃から世話になっていたハルと、上京後も何かと

いと連絡をとって気にかけていた。

ハルが交通事故で亡くなった娘夫婦の忘れ形見である孫の亮子を、一人で育てているのは知っていたが、今日まで対面したことはなかった。

まして、五年前に美華を亡くし一人姿を消した隆志が、ハルの元で生活しているなどとは思ってもよらなかった。

「とにかく、そんなにひつつかれてたんじゃ、話も出来ないわ。隆志君から離れて、あんたも座りなさいな」

「いやや！ 折角探して見つけてやっと会えたんじゃもん。うちは離れんばい」

亮子はイヤイヤをするように、隆志の首にかけた腕にますます力を込める。

「仕方ないお嬢ちゃんね。マサ！」

アカリの命を受けたマサは敬礼ポーズをとると、店の奥に向かって声を張り上げた。

「ヒロ！ 出番だ！」

マサがそう言った途端、店の奥からノツソリと黒い大きな影が現れた。

前掛けをかけたその大男は、眉間に深い刃物傷があり、短く刈られた頭は板前のようだった。

ヒロと呼ばれたその大男は無言でカウンターを越えて亮子の腕を取ると、ヒョイツと捻りあげて、隆志の隣の椅子に亮子を押し付けた。

「痛い！ 何するんね、このアホ！」

亮子は驚いて叫び声を上げたが、男の圧倒的な力の前には叶わなかった。男は最初から最後まで無言で、涼しい顔をしたまま亮子を椅子に押さえつけている。

「俺の弟分なんだ。よろしくしてやってくれよ」

マサが隆志に向かってウインクを投げる。

「亮子、早く熊本に帰れ」

隆志はようやく離れた亮子に向かって厳しい口調で言った。

「いや！」

「いやって、高校はどうするんだよ。今は冬休みだからいいけど、ずっと休むわけにはいかないぞ」

「高校なんか、辞めてきたばい」

「何だって？」

今度は隆志が驚く番だった。

「ウチは隆志と暮らせれば、学校なんか何の未練もないばい。隆志の行く場所が、ウチの行く場所ばい」

「ふざけるなよ。卒業まであと一年じゃないか！帰れ！今すぐハル婆のところへ帰れ！」

「いや！絶対にいや！」

「アカリさん、すぐハル婆のところへ電話して。亮子、力づくでも帰らせるからな」

「いやや、隆志のバカ！！絶対に帰らんもん。隆志の側におるもん！！！」

亮子は泣き叫びながら、ヒロに押さえつけられて自由が利かない腕にイライラして、床をドンドンと踏み鳴らし暴れた。

「ちよつと、落ち着きなさいよ」

アカリが呆れ顔で、涙で顔をグシャグシャにした亮子を見つめた。

「あなたの気持ちはよく分かったわ。熊本に帰りたくないなら、帰らなくてもいい」

「アカリさんっ?!」

咎める隆志を制して、アカリは続けた。

「ただし、ここにいたいなら条件があるわ。まず、この夜はこの店を手伝うこと。そして、昼間は近くの高校へ通って必ず卒業すること」

亮子がポカンと口を空けてアカリを見ている。

「いくら親戚だからと言って、年頃の娘が、隆志君と二人で暮らすのは、ハル叔母ちゃんに代わる保護者代理として、絶対に許可できないわね。あなたに選択肢は二つしかないわよ。隆志君の側にいたいなら、私の条件を飲むか、イヤならすぐごと熊本の田舎に帰るかね」

亮子は唇を噛みしめて俯いた。どうすべきかを思索しているのだ。やがて決意したように顔を上げると、口を真一文字に引き結び頷いた。

「……分かった。あんたの条件、飲むばい」
「アカリさん」

困惑する隆志に向かってアカリは無言を言わせぬ調子で言った。

「隆志君も、それでいいわね？ この娘の面倒は、私が責任をもつて見るわ」

「でも、そんなら約束して！ 隆志、もう黙っていなくなったりせんって。その約束は守ってくれんかったら、ウチ、このおばちゃんと言つ通りになんかせんもんね」

「……この娘には、一から目上の者に対する礼儀を教えなきゃね」

アカリのコメカミがピクピクと震えるのを見て、マサはアカリに気付かれないように、隆志に向かって「おっかねー」と首をすくめて見せた。

「……分かったから亮子。ちゃんとハル婆に連絡しとけよ。あんまり、心配かけるな」

亮子はウンウンと素直に頷くと、また隆志の腕に寄り添いピタリと張り付いて離れなかった。

客も引き、人気の消えた店内で、隆志はカウンター越しにアカリと向き合っていた。

智之やマサ、マサの弟分のヒロは、とっくに店の裏にある従業員用の控え室で酔いつぶれて眠ってしまった。

隣では、ビール瓶を何本も開けた亮子が、あらかた胃の中身を吐き出し終えた後、青ざめた顔をしてテーブルの上に突っ伏し酄をかいている。

「……悪い、アカリさん。面倒かけて」

アカリは隆志の持つグラスにビールを注ぎながら、鼻を鳴らして笑った。

「久々にいい刺激になるわよ。それにしても、気の強い娘ね。誰かさんの若い頃にそっくり」

そう言つと、アカリは苦笑まじりに肩をすくめた。

「これから、どうする気？」

隆志の酌を受けながら、アカリは五年前にも、旅立つ隆志を前にこんな質問をしたことがあるのを思い出した。

思えば、自分はこの子を見送ってばかりだ。そう思った。

「……東京に、出ようと思う。亮子との約束、破ることになるけど」

ナナちゃんに会いに？

アカリはあえて口に出しては聞かなかった。

隆志は深々とアカリに向かって頭を下げた後、寝息をたてる亮子のクセのないショートのを優しく撫でた。

「……こいつのこと、よろしくお願いします。ワガママで意地っ張りでうるさい奴だけど、寂しがり屋で無理しちまう奴だから」

「火の国の女は強いから、心配いらんばい。任せんしゃい」

アカリがそう言つて胸を叩くと、隆志はようやく寂しげな微笑を浮かべて、店の出口に向かって踵を返した。

コートの襟を立てて外の凍て付く寒さの中へ消えていった隆志を見送ると、アカリは改めて、カウンターの前に突っ伏して眠る亮子に視線を移した。

幼さの残る丸い頬には、涙の跡が光っていた。

「……女はね、男の背中を見送る運命なの。そう決まってるの。だから、いつまで待っていてあげられるか、それが大切なのよ」

隆志が注いでくれたビールを煽る。

ほろ苦い味が喉を伝っていく。

「……なんてね、まだネンネのあんたに、そんなこと納得できる筈もないのにね」

アカリは客のための膝掛けを取り出し、寝息を立てる亮子の肩にそっとかけてやった。

亮子が目を覚ましたのは、もうすっかり朝になってからだだった。冷え込む店内の空気に大きなくしゃみを一つして、身体を起こした。

頭が割れるようにズキズキ痛む。

目を開けるのもやっとだった。

肩にかかっていた膝掛けが床に落ち、一気に襲ってきた寒さに自分の肩を抱いて大きく身震いした。

「……隆志？」

薄暗い店内をグルリと見渡す。

雑然とした店の中に人の気配はない。

「隆志？」

今度は先ほどよりも一段大きな声で呼びかけた。

急に不安がこみ上げ、痛む頭を押さえて椅子から立ち上がった。

「隆志！どこにおると？ 返事せんね」

カウンターの奥へ進み、マサとヒロ、智之が雑魚寝する部屋にツカツカと入っていく。

「隆志ッ！？」

「……ん？何だよ、うるさいなあ」

ムクリと身体を起こしたマサが、眠い目を擦りながら蛍光灯の光

に逆光になった亮子の姿をとらえる。

だが、亮子はすぐに目的の人物がここにはいないことを悟ると、不安に顔を歪め踵を返した。

「おい！ ちょっと待てよ、アカリさん。アカリさん！」

マサは更に奥の部屋で眠るアカリに向かって声を張り上げた。

亮子はそのまま店を飛び出すと、朝霧に煙る路地裏を隆志の名を呼びながら一心に駆け抜けた。

「隆志ッ！！ こんウソつきが！！ 許さんとよ。約束したばいね。傍におつてもええって、昨日約束したばっかやないとね！！ 隆志、隆志……」

息を切らせて、亮子はその場に崩れ落ちた。

悔しくて、哀しくて、涙がとめどなく溢れてくる。

冷たいアスファルトを拳で叩きつけて、駄々っ子のように泣き喚いた。

華奢な拳からはあつという間に血がにじみ、アスファルトを赤黒く汚したが、亮子は拳を叩きつけるのをやめなかった。

「もう止めなさい」

その時、振り上げられた拳を、後ろから掴まれた。

亮子はキッとその方向を振り返った。

アカリが亮子の手を押さえつけ、厳しい顔をして首を左右に振った。

「隆志君には、隆志君の道があるの。あんたにはあんたで、ここでやるべきことがあるように。信じなさい。隆志君が好きなら、信じ

「待ちなさい」

亮子の黒目がちな大きな目から、大粒の涙が零れ落ちた。

寒さと涙に鼻を嘍ると、亮子は一際大きな声を上げながら、アカリの胸に身体を預けて、泣きじゃくった。

アカリはそんな亮子の細い肩に腕を回しながら、その背中をいつまでも優しく擦ってやった。

「アカリさん、どうっすか？あの子の様子は」

マサが亮子を寝かせた店の奥の部屋を覗き込みながらたずねた。

「今はぐっすり眠ってる。長旅の疲れと、興奮して泣いたり喚いたりしたから、体力も限界だったんじゃないかしら」

「……こんなところまで追っかけてきて、あの子、本当に隆志のことが好きだったんだな」

マサが珍しく神妙にうつむくと、アカリは苦笑してマサの肩をポンと叩いた。

「……火の国の女は情が深いのよ」

「あ、それよく分かる」

「納得するんじゃないわよ、バカ」

アカリはマサの額を小突いて、朝のコーヒーを入れるために店内に戻っていった。

亮子は夢を見ていた。

初めて隆志に出会った頃の夢だ。

あの時、亮子はまだ十三歳だった。

港の近くに不審者が出る

そんな噂話を聞いたのは、昼休み、亮子が一緒に暮らす祖母に作ってもらった弁当にちょうど箸を付けた時だった。

「すごい、気味悪かったと」

小学校から一緒の仲良し四人組で、窓辺の日当たりの良い席を陣取りながら、話を切り出した友は大げさに眉をしかめて見せた。

「何か小さい箱、手に持つとってな、あーとかうーとか言いながら、ウチの方寄って来たと」

「それで、あんたどうしたん？」

別の少女が促すと、聞かれたほうの少女は、心なしか目を輝かせて続けた。

「いやー！ 痴漢っ！ 言うて、突き飛ばして逃げたわ」

その先もいかに自分が大変な思いでその場を逃げ出したかについて延々と語っていた少女は、ふと目の前で佃煮の欠片を唇の端につけたまま、弁当を貪っている亮子に目を留めて言った。

「ちょっと、亮子。あんた、人の話聞いとるんか？」

咎められた亮子は、親指で唇の端の佃煮の欠片を拭くと、片目でチラリと熱弁を奮っていた少女を見上げた。

「聞いたるよ。で、あんた、いつ痴漢されたと？」

「は？」

「おっぱいでも触られた？ それとも、目の前で脱がれた？」

亮子の問いかけに、周囲の少女もザワザワし始めた。

「……そ、それは……」

やり込められた少女は、耳まで真っ赤になりながら言い返した。

「これから、触られそうやったんよ！」

「残念やけど……」

亮子は水筒の茶をゆっくり啜りながら首を横に振った。

「そんなべったんこの胸、触られそうになるには、十年はかかるな」

顔から今にも火を噴きそうになる少女とは裏腹に、周囲からはドツと笑い声が上がった。

「自意識過剰やわあ！」

「ホンマは触られたかったのと違うかあ？」

「気味悪いとか言うて、本当はええ男やったんやろ？ 白状しんしやい」

周囲の揶揄の声に最初は必死になって抵抗していた少女だが、隣の少女に突かれると、薄っすらと頬を染めて頷いた。

「……ちよつとだけな」

指で『ちよつと』の仕草をする。

「……背えが高くて、汚いカツコしとるけど、ええ男やった……かな？」

亮子は鼻を鳴らして、水筒の残りの茶を全て飲み干した。

帰り船で賑わう漁港を横目で見ながら、亮子は帰路に着く。

気の置けない仲間と別れて、自宅までの距離を一人歩くこの時間が、亮子の一番好きな時間だった。

幼い時分に両親を交通事故でいっぺんに亡くした亮子は、母方の祖母であるハルに育てられた。

文字通り母親代わりを努めてくれたハルは、それこそ無償の愛情を孫娘に注いでくれたが、亮子はこの年になるまで、父親のぬくもりを知らずに育った。

幼い頃は近所に住む祖母の弟夫婦も随分可愛がってくれたそうだが、二人とも亮子が物心着く前に病で急逝している。

元来『男』という存在に免疫がないせいか、亮子は中学校に入ってから、急にソワソワと気になる男子の噂話をしたりするクラスメイトについていけずにいた。

だから、今日みたいなことがあると、つい皮肉って遣り込めてやりたくなるのだ。

それは亮子本人にも気付かないところに芽生えた、自由に恋の予感やトキメキを口にする彼女達への微かな嫉妬心だったかもしれない

い。

学生鞆を肩の上に放り上げて、右手に広がる夕日の燃えるような朱を写す海へ目をやった。

その時、潮風に頬を張られてふと海から目を逸らすと、こちらへ向かって歩いてくる人影に気がついた。

夕日に逆光になり黒い塊にしか見えないその影が徐々に近づいてくると、その手の中に大切そうに抱えられた、小さな陶器の箱のようなものが目に入った。

港の近くに不審者が出る

昼間の友の声が頭を亮子の頭をよぎった。

亮子は近づいてくる人影に向かつて走り出した。人影のすぐ脇を一気に駆け抜けようとしたのだ。しかし、亮子がすれ違う瞬間、突然声をかけられた。

「待って！」

五メートルほど行き過ぎた亮子は、学生鞆を胸に抱いて恐る恐る振り返った。無意識にまだ膨らんでもいない未発達の胸を守る。

「……不知火の海はこの辺りですか？」

しかし、男から出てきたのは予想外の言葉だった。「胸を触らせてくれますか？」と来たら、間違いなく手に持った鞆を男の顔面にぶつけてやろうと身構えていた亮子は、拍子抜けしながらもまだ警戒の色を解かなかった。

「不知火？」

亮子が怪訝な顔を見ると、男は決まり悪そうにうつむいた。

「不知火は、夏にちゃんと見られんよ。この辺りじゃ常識ばい」

亮子の不信に寄せる眉間の皺が深くなった。

「こんな時期に観光？ あんた、土地の人間には見えんもん」

男は曖昧に視線を逸らすだけで、亮子の問いには答えようとしな

い。

「……変な人」

亮子は思わず呟くと、踵を返してとつと男から離れようとした。しかし、その時思いがけず、男はもう一度亮子を呼び止めた。

「何？」

胡散臭そうに亮子が振り返ると、男はズボンのポケットから何やら紙切れのようなものを取り出し、クシャクシャの皺がよつたままのソレを亮子に突きつけた。

「じゃあ、この人の家知らないですか？ この辺りだと思っただけ」

その紙の切れ端に顔を近づけてそこに書かれた文字を読み取ったとき、亮子の顔色が変わった。

「……あんだ、何の用でこの家探しとると？」

亮子の切れ長の瞳に下から覗きこまれてたじろぎながらも、男はしどろもどろに『親戚だ』と呟いた。

「親戚？」

亮子の疑いの眼差しはますます鋭くなった。

「祖母ちゃんは親戚一同ほとんど亡くなつたつて言うつた。あんたみたいな親戚があるなんて、聞いたことない」

「祖母ちゃんって……君、三波ハルさんの？」
「孫ばい」

間髪入れずに答えた亮子に、今度は隆志が驚く番だった。

「親戚なら、証拠見せんしゃい」

「証拠？」

亮子は鼻の先をピンと上に向け、心もち高飛車に言い放った。

「そう。あんたが祖母ちゃんの親戚や言う、動かん証拠ば見せんね」

男は顎の下に手をやり、しばし考え込むような仕草を見せてから、やがて顔を上げていった。

「証拠はこの顔だよ。だから、ハルさんに会わせてくれ。会えば、分かる」

男のキツパリとした物言いに、亮子は少々面食らった。最初に会った時の印象とまるで違う、強い光が目に宿っていた。

「……会わせてやってもええけど、ウチの隣はすぐに交番があるんやから。変なこと考えよったら痛い目見るとよ？」

男は笑いながら、安心してくれと肩をすくめた。

亮子は男に付いてくるようにと顎で示すと、早足で男の右前方よりに少し離れて歩きながら、時折振り返っては横目で男の様子を観察した。

首に巻かれたマフラー代わりの赤い手ぬぐいは、汗染みが浮き出

て首周りを汚していた。着ている物も何となく薄汚れていて、これでは不審者と間違えられても無理はなかった。

しかし、耳を覆うほどに長く伸びた髪が顔の半分を隠していても、男の精悍な顔つきは、無精髭を伸ばし放題にした顎のラインからも伺い知ることが出来た。

(……背えが高くて、汚いカッコしとるけど、ええ男やった……かな?)

友の言葉が突然頭の中でこだまし、亮子は小さな咳払いを一つすると、足を早めて家路を急いだ。

「祖母ちゃん、ただいま！」

玄関のドアを開けるなり、亮子は大声で部屋の奥に向かって声をかけた。

「あんた、遅かったやないかね。どこで道草しとった？」

奥からは、足腰のしっかりした老婆が転がるように玄関へ出てきた。

「……この人は？」

老婆は孫娘の後ろに立つ長身の男に気がつくくと、急に不安げに声を潜めた。

「祖母ちゃんの親戚や言う、怪しか男やったから連れてきたとよ。お祖母ちゃんが自分の顔見れば分かるち言うて」

老婆の視線は、男に釘付けになった。

頭の上から足の先まで、よくよく男の姿を眺める。その間、男は決まり悪そうにしながらも、老婆から視線を外さずに、先ほど亮子に見せた紙を老婆にも差し出した。

「……この字は」

「八代アカリの店から勝手にくすねてきた」

男の言葉に、老婆の顔色が急変した。

「アカリ？ あの子のところから来たとね？」

老婆の手が男に向かって伸びる。

水つけの全くない干からびた手が、男の無精鬚だらけの頬をゆっくりと行き来する。

「……あんだ、もしかして、徹っちゃんのこと？」

男がコクリと頷くと、老婆の手がにわかに震えだした。

「信じられん。徹っちゃんの若い頃にそっくりばい。徹太郎もエイさんも、生きとつたらどんなに喜んだか」

そう言いながらも、老婆の目からはポロポロと涙が溢れ出す。

「祖母ちゃん、話が見えんのやけど。この人は、何者ばい？」

老婆はこぼれる涙を割烹着の袖口で拭いながら、亮子に向かって言った。

「祖母ちゃんの弟の、徹太郎じいちゃんの孫ばい。あんたの『はとこ』になるんよ」
「はとこ?」

初めて耳にする言葉と、免疫のない『男』が家の中にいることで、亮子は落ち着かない気持ちになりながら、隣に立つ男にもう一度視線を向けた。

涼しげな奥二重の瞳とシャープな顎の輪郭は、なるほど自分と似ていなくもない。

「お母さんは、どうしたん? あの、綺麗な女の人はず?」

老婆が尋ねると、男は黙って腕の中に抱えたままの陶器の壺に視線を落とした。

「……まさか」

息を呑む老婆に、男はコクリと頷いた。

「だから、帰しに来たんです。母が一番帰りたがってた場所に」

老婆は神妙に頷きながら鼻を噉り上げると、玄関先に立ったままの男を家の中に招きいれた。

「何にせよ、長旅は疲れたじゃろ。上がりんしゃい。そんで、まずは風呂でも入ってからご飯食べんしゃい……ええつと、えつと……」

老婆は額に手をやり、考え込むポーズをとった。

「た……」
「たあちゃん！」

男が言い終わるより早く、老婆は突如として思い出したように大きな声で男の名を呼んだ。

男は言われた途端、頬を染めて俯いた。

「亮子、たあちゃんに着替え持って行ってあげんね。じいちゃんの若い時のばい、入るかしらんけど」

居間に寝転んで流行の歌番組を見ていた亮子は、好きなアイドル歌手の歌の時に用を言いつけられたので、ふてくされながら身体を起こした。

「ばあちゃんが行けばええやない。男一人の部屋になんか、危のうて行けん」

「何バカなこと言っちよるか。たあちゃんは、あんたの兄さんみたいなもんばい。早く着替え持って行ってあげんしゃい」

ぶーぶー文句を言う亮子に隆志の分の着替えを押し付けると、ハルは厳しい顔で早く行くように亮子に向かって顎をしゃくった。

死んだ祖父の箆笥から引っ張り出した時代遅れの古びた寝巻きは、樟腦しょうのうの匂いがツンと鼻をついた。

「ねえ、お祖母ちゃん？」

「何ね？」

「あの人が持ってた壺ん中って、本当に人の骨が入つとると？」

亮子は先ほど祖母の肘をつついて聞いた話の真意を、怖る怖る尋ねてみた。骨壺を見たこともなければ触れたこともない亮子にとって、突然現れた不審な男が持つ、人の骨が入っているというなぞの壺の存在は、おどろおどろしくも興味惹かれるものだった。

「バカッ！ 不謹慎なこと言うて、このバチ当たり娘が。早く、行きんしゃい！」

ハルの逆鱗に触れた亮子は、すすすごと居間を後にした。

亮子が隆志にあてがわれた和室の戸を開けたとき、隆志はこちらに背を向けて寝息を立てていた。

よほど疲れていたのか、隆志の呼吸は深く、側で聞いていると亮子まで心地よい眠りに引き込まれそうだった。

亮子はハルに託された樟脳臭い寝巻きを一揃え寝ている隆志の脇に置くと、押入れを開けて、薄いかげ布団を隆志の上にそっとかけてやった。

春はまだ浅く、夜ともなればまだそれなりに冷え込む。

ふと脇に寄せた文机に目をやった亮子は、その上に乗る小さな壺を見つけた。

先ほどの祖母とのやりとりが頭を過ぎる。

本当に、人の骨が入っているのか

亮子は一度頭を振って沸きあがってくる好奇心を締め出そうとしたが、結局「見てはいけない」ものほど見たくなる心理には抗えず、スルスルと文机の前まで膝を進めた。

息を止めて、そっと被さっていた白い布に手をかける。

陶器の蓋に手をかけ、食器がこすれるような音がしたその時……

「わっ!!」

「ッヒ!!」

亮子は腰を抜かささんばかりに驚いて、思い切り後ろに尻餅をついた。

「……クツクツク、アハハハハ」

後ろでは先ほどまで寝入っていたはずの隆志が、腹をよじりながら苦しそうに笑いを堪えている。

「な、何よ！ 何笑つとると！」

亮子が真つ赤になって怒ると、隆志はとうとう堪えきれずに大声で笑い出した。

「アハハハ！ さっきの顔。そんな驚いた？」

「何やの、いじわる！」

「ハハハ、悪かった。でも、人のモノ、勝手に見ようとするからだぜ」

そう言われると、圧倒的に立場が弱いのは亮子のほうだった。

「……ごめんなさい」

亮子が俯きながらも素直に謝ると、隆志は笑ってポンポンと亮子の頭を撫でた。

「ま、いいって。でも、見なくて正解だよ」

そう言つと、隆志はそのまま亮子の脇から腕を伸ばして、亮子がずらした蓋を元の位置に納める。

「開けたら最後、お化けが飛び出す魔法の壺だから」
「なっ?!」

亮子の頬がカツと熱くなり、隆志の背中を叩いた。

「子ども扱いせんでよ！ そんなん嘘に決まっとする」

ポカポカ背中を殴る亮子を笑いながら、隆志はそっと骨壺の白い布を元に戻した。

隆志はその後しばらくしてから、近くの漁港で働くようになった。ハルの家に世話になることを、始め頑なに拒否した隆志だったが「おい先短い年寄りの最後の頼みだと思って」の言葉に、渋々ながら頷いた。

しかし、ただで厄介になるのは嫌だと言い張り、数日もしない内に自分で漁港の仕事を見つけてきた。

学校帰りに海岸線を眺めながら一人歩く、亮子の一日で一番好きな時間に、隆志はもう何年も前からそうしているかのように、自然に加わった。

制服のまま隆志の働く漁港を覗いてみると、港での一日の仕事を終えた隆志がいつも船着場のへりに腰掛けて煙草をふかしながら海を眺めていた。

そんな時、亮子はすぐに声をかけるのをためらった。隆志の背中が夕日を受けて燃えるような輪郭を浮かべながらも、そのまま燃え尽きてしまうのではないかと不安になるような、見るものに焦燥に似た気持ちを抱かせる影をはらんでいた。

家ではいつも亮子をからかい、ハルを気遣いながら陽気に振舞う隆志だったが、一人で海に向かっていて背中が深い孤独を宿してい

た。

「隆志！」

亮子が声をかけると、隆志は手にしていた煙草を長靴の底で揉み消して振り返った。

「何だ、亮子か。今帰り？」

その顔はいつも通りの笑顔を浮かべている。足元には、いつもあの骨壺が一緒にある。

亮子は隆志の隣に腰を下ろして、一緒に暮れゆく波の彼方に目をやった。

「何、見てたと？」

「別に何も」

「不知火は、夏にならんと出んよ」

隆志は苦笑しながら「分ってる」と頷き、もう一本煙草を取り出した。

「私にも」

亮子は人差し指と中指でピースの形をつくり、隆志の前に突き出した。隆志は新しく取り出した煙草を悠々と自分の口の端に加えると、煙草を挟んでやるかわりに、亮子の指を掴んでクイツと後ろに捻った。

「痛っ！」

亮子は悲鳴を上げて、隆志の手から逃れた。

「煙草は二十歳になってから」

隆志は口の端を曲げて笑うと、亮子の前で美味そうに煙をくゆらせて煙草をふかした。

「子ども扱いしてえ」

亮子は悔しげに齒噛みする。

並んで座りながらも、隆志に追いつけないのが悔しかった。

季節は巡り、海の上の太陽が出航する舟の甲板を焼き、男たちを炙る夏がやってきた。

隆志は何枚も皮膚が剥がれるほど日に焼かれ、髪も潮焼けですっかり茶色く色が抜けてしまった。

「隆志！ 今日あたり、鬼火が出るかもしれんぞ」

コノシロがいったばいに詰まった網を引き上げながら、同じ舟に乗る漁師の男が言った。

「鬼火？」

「お前がずっと気にしちよる『不知火』のことばい。やっぱり、血は争えんの」

男は短く刈り上げた髪に汗の玉を光らせながら、白い歯を見せて笑った。亡き父の親友だったというこの男は、隆志が港で働くようになってからずっと、何かと隆志を気遣ってくれた。

「徹司も『不知火』に魅せられて命ば落とした。やっぱり俺は、あん光は何か人間のものとは違う、力が宿っとるんやないかと思う」

網を引く手を休めずに、隆志は黙って男の言葉を聞いていた。

夕方近くなり船着場についた隆志たちを、学校帰りの亮子が出迎えた。

「亮子、ホラ！」

亮子の顔を見るなり、隆志はビニール袋を二重にしてくるんだ何かズシリと重いものを亮子に向かって投げて寄こした。

生臭い匂いがプンと鼻を付き、亮子が思わず顔をしかめた。

「何？ これ」

「魚のアラだよ。今日昼飯に大輔さんの奥さんがアラ汁作ってくれたんだよ。美味いって言ったら、その余りくれてさ、ハル婆に作ってもらおうぜ」

隆志の後ろから、大きな体躯の大輔と呼ばれた先輩漁師が顔を出して微笑んだ。

「見た目は悪かけど、本当に旨いとよ。騙された思つて、食つてみい」

日に焼かれ、陽気な海の男たちと過ごすうちに、亮子は、隆志が始めからこの海の街で育ったのではないかと錯覚しそうになる。

それほどこの海に馴染んできた隆志に安堵すると同時に、この時間を失いたくないという切なる思いも、亮子の心の奥深く、まだ本人さえも自覚していないところで少しずつ芽生え始めていた。

その日の夜、隆志たちがハル婆に作ってもらったアラ汁に舌鼓を打っていると、突然隆志の先輩漁師である大輔が飛び込んできた。

「おい、隆志！ 出よつたで。『不知火』が沖合いに出よつた」

隆志はアラ汁につけていた箸を思わず取り落とした。

「来るか？ 俺の船、出しちやる」

「はい！」

大輔の言葉に勢いよく立ち上がると、隆志は大急ぎで奥の部屋へ向かうと、胸にあの骨壺を抱いて大輔の後に続いて玄関へ走った。

「たあちゃん？」

「ハル婆、心配しないで。ちょっと、行ってくる」

オロオロするハルをチラッと振り返ったきりで、隆志はサッと身を翻した。

「ちょっと、待って！ 私も行く！」

「亮子？ 危ないから、やめんしゃい」

ハルは次いで立ち上がった亮子を制止したが、亮子は聞かず、転

げるように家を飛び出し、隆志たちの後を追った。

「一列に並んで、海の上に並ぶんじゃ。気を抜いちゃいかんぞ。バミューダトライアングルって聞いたことはあるじゃろ？　この海も同じばい。大戦の時は、アメリカの飛行機がこの海の上空で幾つも行方不明になつとる」

船のエンジンをかけながら言う大輔の言葉に、亮子は軽く身震いした。

海風は生暖かく、漕ぎ出す海は漆黒の闇に包まれていた。

亮子は隣にいる隆志をチラリと見やった。額に汗を浮かべながら大輔を手伝い船出の準備をする隆志の横顔は、何か強い思いが張り詰めていた。

「よし！　行くぞ」

ハリのある大輔の声が夜の港にこだまする。

小さな漁船に乗り込もうとする隆志の服の裾を掴んで、亮子は言った。

「本当に行くの？」

隆志は亮子の手を掴み、そつと元へ戻した。

「亮子はここで待ってる。大丈夫だよ。すぐ帰ってくるから」

「隆志、早くせい！」

船の上から大輔が叫ぶ。

「今行く！」

「お嬢ちゃん。あんたは留守番しちよったほうがええ。海の神さんは、焼き餅妬きの女なんじゃ。だから、漁に行くときは女は絶対船に乗せん。こいつの親父は、頑なにそんな迷信を信じて守っちゃった。けど、ちようどこんな風に不知火が出た晩だけ、女を連れて船出した。それっきり、帰ってこんかつたんじゃ」

大輔の言葉に亮子は唇をギュツと噛んでから、やがて意を決したように大声で怒鳴り返した。

「それなら、今度こそウチが着いていつて、海の神さんなんかに隆志んこと取られんように見張ってるばい！」

亮子は無理やり隆志に自分の手を取らせ、足場の悪い船着場から小さな漁船に飛び移った。

ピュツと大輔が口笛をならし、隆志に目配せする。

「氣いの強か娘ばい」

隆志が苦笑で返すと、大輔は額に撒いたタオルをもう一度締めなおして、夜の海へと漕ぎ出した。

船を出して暫らくすると、大輔は海の真ん中で突然エンジンを止めた。

「ほら、あそこ見てみい」

大輔は甲板に出て、沖の向うを指差した。大輔の示す方向には、綺麗に一列に並んだ青い炎が、海面に浮かぶようにユラユラと震え

ながら燃えていた。

「……あれが、不知火？」

亮子は船出の前に大輔から聞いた話に身震いした時以上の悪寒が走るのを感じながら、恐る恐る口を開いた。

目の前で広がる光景は、美しすぎて恐ろしかった。

「……隆志？」

亮子が心配そうに見上げる横で、隆志の視線は遠くの炎に吸い寄せられたまま動かなかった。

「徹司も、そこにおるかもしれん」

大輔は甲板の上に胡坐をかいて座りながら言った。

「おーい！ 徹司」

突然大声を出して、波の彼方に向かって声を上げた大輔に、亮子はギョツとして振り返った。

「お前の大事な女と息子が会いに来よつたで」

大輔は隆志に目をやって、照れくさそうに頭を掻いた。

「若い頃な、今の母ちゃんに出会う前じゃから、もう時効ばい。俺は、お前の母ちゃんに惚れちよつた。いや、俺だけやない。この辺の海の若い連中は全員と言つていいほど、突然現れたお前の母ちゃんに夢中じゃつた。酒場で酔つた勢いで、他の若いモンの切つたは

ったやりおうたこともある。それを、止めたんは、徹司じゃ。あんたの母ちゃんは、そんな徹司にだけ、自分の本当の心ばやった。俺は、どんだけ羨ましかったかしれん」

「……大輔さん」

大輔は照れ隠しにフンツと鼻を噉った。

隆志は甲板を照らすライトの下で、静かに胸に抱いた骨壺の蓋を開けた。

陶器のこすれる澄んだ音が、静寂に包まれた夜の海にこだまする。

「……やっと、帰れるよ。母さん」

隆志は骨壺に向かって語りかけると、次の瞬間、勢いよく壺の中身を海の上にばら撒いた。

「あッ！」

思わず声を上げた亮子の目の前で、隆志が撒いた小さな骨の粉は、漁船のライトに照らされてキラキラと輝きながら夜の海へと舞い落ちていく。

「……ええの？」

思わず尋ねる亮子に、隆志は微笑みで返した。

「あ！ あれ見る、隆志」

その時、大輔は甲板の上に立ち上がって、不知火の群れを指差した。

そこには、先ほどまで並んで燃えていた不知火に、新たに小さな

火種が一つ加わり、青々とした炎を立ち上らせていた。

「徹司の隣に加わったんじゃな」

大輔が隆志の頭をポンポンと叩いた。大きな手のひらの温もりを感じながら、隆志はこみ上げてくる思いを抑えきれずに、喉の奥からくぐもった声をもらした。

涙が自然に溢れてきた。

「綺麗じゃのう……」

大輔はわざと、そんな隆志の涙を見てみぬ振りをしながら、しみじみと噛みしめるように海の彼方で燃える炎を見つめた。

亮子は、その夜に見たキラキラと光を浴びて舞い散る粉と、並んで燃える青い炎、そして、その時初めて亮子の前で頬を濡らした隆志の横顔を、一生忘れないと思った。

不知火の海に美華の遺骨を撒いてから、隆志は何か吹っ切れたように、亮子がよく知る陽気な海の男たちの仲間として溶け込んでいった。

中学を卒業し高校二年生になるまでの五年間の間に、亮子にとって隆志は隣にいて当たり前前の存在になっていた。

そんな隆志の様子が変わってきたのは、今年の秋に入ってからだった。

亮子の家に、無言電話が頻繁にかかってくるようになっていた。

昼間亮子や隆志が学校や漁に出かけている間は、家にはハル一人きりになるので、ハルは随分と気味悪がっていた。

しかし、その無言電話がかかってくるようになったのと時期を同じくして、隆志は一人物思いに耽ることが多くなった。

隆志がまだこの港町にやってきたばかりの頃、学校帰りに、波止場で煙草をふかす隆志の後姿を見て焦燥に駆られたあの時の気持ち思い起こし、亮子の胸にも不安が募っていった。

そして、亮子の不安は的中した。

ある朝目覚めると、何の前触れも別れの言葉もなく、隆志は忽然と姿を消していた。

電車の揺れに身を任せながら、座席の背もたれに身体を預ける。

まだ暗い街中を行過ぎる始発電車は、窓辺に移った男の瘦せこけ

た顔を反射しながら、色褪せた街の明かりを次から次に映しては、後方へと投げ捨てていく。

隆志はそっと目を閉じて、熊本を去った夜のことを思い出していた。

頻繁にかかってくるようになっていた無言電話を、隆志が初めて取ったのは秋も押し迫った晩のことだった。

日中かかってくる電話には出るなどハルに言い含めていたが、その日たまたま帰りの早かった隆志は、悪質な悪戯を繰り返す相手を懲らしめてやろうと、電話口に向かうハルを制して、自分が受話器を取った。

出た瞬間に、乱暴な言葉で威嚇してやろうかと身構えた時、隆志の耳にふと奇妙な音楽が聞こえてきた。

オルガンの単調なメロディに合わせて、小さな子どもたちが声を張り上げて歌う、そんな音が、風の音に混じって微かに聞こえていた。

「……………あんだ、誰だ？」

隆志が低い声で囁くと、受話器の向うで息を呑む気配が分かった。そのまま、電話は切れた。

それからしばらく電話はかかって来なかったが、隆志が最初に電話に出た夕方の時間帯に、以降もまるで遠慮するかのように、しかしそうせずにはいられないように、たびたび無言電話は続いた。

何度目かの電話の時は、ハルは近所の老人会の仲間と日帰り旅行に行ってしまった、亮子は部活動、家には隆志しかいなかった。

受話器を取った隆志は、相手の不意について呟いた。

「……………斎木？」

電話の向うで息を呑む声がいつもより大きく響いた。

「切るなよ！ 斉木なんだろ？」

隆志の叫びも空しく、通話はそこで途切れた。

隆志には分っていた。

息を呑む音に混じって微かに聞こえた、鼻をすすする音。

助けて

理穂子の声にならない声は、隆志の元に痛いほど伝わっていた。

何もかも忘れようと、全てを捨てて行った熊本でさえ、こうして五年の歳月を隔ててさえ、ただ一つの言葉もなく、簡単に自分の気持ちを呼び覚ましてしまう理穂子を、隆志は初めて憎いと思った。

自分の中でもとうとうに消してしまえたと思っていた小さな火種は、たったこれだけのことで簡単に命を吹き返し、一度燃え上がった炎は消えるどころか、五年の歳月をかけてようやく馴染んだこの海の街や唯一の肉親たちとの生活も、いともたやすくなぎ倒してしまっ

た。

ハルには、別れの言葉を言った。

自分の胸の内に巣食う、炎の正体も明かした。

ハルは何も言わなかった。隆志の中に、かつての美華や徹司の魂を見たかもしれない。

そして、ハルは一つだけ隆志に約束をさせた。

亮子が寝ている間に出て行ってくれと

隆志は言われたとおり荷物をまとめると、部活動でくたびれてクウクウと寝息を立てる亮子の傍らに膝をついた。

目覚めた時、亮子のことだから、ハルを困らせるくらい怒って泣いて暴れるのだろう。

そんな風に考えていたら、苦笑を浮かべながらも目頭が熱くなってきた。

亮子の気持ちは知っていた。

こんな風に素直な愛情を向けられたことはなかった。

愛おしく思う。幸せにしてやれたと思う。

この胸の奥の、炎さえなければ。

隆志は亮子の額に、最初で最後の軽いキスをすると、そっとその場を離れた。

電車の中で再び目を開けた隆志は、外の景色が徐々に白み始めていたことに気がついた。

電車は一路、東京へ向かう。

胸の奥をチリチリと炙り続ける、炎の正体が暮らす街を目指して。

初めて訪れる東京は、モザイクのように太陽の光に乱反射する高層ビルが立ち並び、その合間を縫うようにして新たなビルが成長していく途中だった。

隆志は電車の窓からそれらを眺めながら、隆志は手のひらの中の小さな紙切れを広げた。

アカリに渡された住所を頼りに、理穂子が勤めるといふ民間の保育所を探しすつもりだった。

東京駅についてから、路線図で自分の目指す駅を確認した後、隆志は都内をグルリ一周するこの電車に乗り込んで、まだ空いている早朝の電車の窓に鼻先をつけるようにして、流れていく景色を堪能した。

やがて目指す駅のホームに電車が滑り込むと、隆志は慌てて粗末なスポーツバック一つを抱えて電車から飛び降りた。

理穂子が住むという街は、これまで隆志が見てきた冷たいビル郡が成長する一角と、昔ながらの下町の街並みが同居したところだった。

隆志は一つしかない改札を出ると、浮浪者が惰眠を貪る高架下を潜り抜け、駅から続く商店街の通りに足を踏み入れた。

シャッターの開く音が通りに響き渡り、これから始まる一日を予感させる。

隆志はそのまま歩を進め、手元の紙とにらめっこをしながら、理穂子の勤める保育所を探した。

理穂子の勤め先は、ビルとビルの隙間に挟まるようにして建った、小さな木造二階建ての古びた建物だった。

表に保育所の看板が出ていなければ、そこが子どもたちを預かる施設だとは到底気付かない。

シン　とした佇まいに、隆志は思わず腕の時計を見やってため息をついた。

現在、朝の七時。

保育所が開いているはずがない。

苦笑して踵を返そうとした時、保育所の扉が開いて子どもが一人飛び出してきた。

隆志は驚いて、慌ててビルの陰に身体を隠した。

「今、音がした！　パパだあ！」

飛び出してきたのは小さな男の子で、さっきまで隆志が立っていた場所まで駆けてくると、キョロキョロと道路を見渡した。

「あれえ？」

舌足らずな声で首を傾げながらも、懸命に道路の先へ目を凝らす。

「実君！　勝手にお外出ちゃダメだよ！」

そんな男の子の後を追うように、中から慌てて一人の女が飛び出してくる。

ピンクのギンガムチェックのエプロンをかけたその女の姿を見た時、隆志の鼓動がビクンツと跳ね上がった。

「理穂ちゃんせんせい、パパの音がしたんだよ。本当だよ」

男の子は唇を尖らせて、女のエプロンの端を掴んだ。

女は男の子のやわらかそうな髪に優しく手を置くと、男の子の視線の高さまで身体を屈めて、優しく言った。

「パパはお仕事だよ。でも、今日の夕方にはお迎えに来てくれるって言ってたから、それまで先生と遊んで待つてようね」

男の子は不満そうに膨れながらも、女の優しい言葉にやがてコクリと頷いて、女に手を引かれて再び古びた保育所の中に戻って行った。

隆志は二人が完全に建物の中に入るのを見届けた後に、ようやく息を継いだ。

まるで呼吸の仕方を忘れてしまったかのように、胸元が苦しい。隆志は汗染みが浮き出したシャツの襟元を掴むと、大きく深呼吸を繰り返した。

幼い時から変わらない生まれつきの薄茶色の髪を、細いお下げ髪にしていた。

色白の頬は少しこけたようにも見える。五年の月日を経て尚、隆志の心を捕らえて離さない、理穂子がそこに立っていた。

早朝の街をブラブラしながら、やがて朝食をとり古びた定食屋に入った。

カウンターとテーブル席が二つしかない粗末な店だったが、隆志が注文した定食は安いながらも美味かった。

味噌汁を啜りながら店の隅に置いてあるテレビを見上げると、アナウンサーが無表情に朝のニュースを伝えていた。

その日のトップニュースは、児童擁護施設の児童殺害事件で容疑者とされた保母が再逮捕されたというニュースだった。

保母　の言葉に、隆志の箸が止まる。

先ほどの理穂子の青い顔が蘇る。

恐らく、仕事で迎えにこれない父母に代わって、あの保育所では夜間からの子どもの預かりもやっているのだろう。

認可の保育園ではカバーしきれない部分を、理穂子たちのような施設が支えている。

考えるだに過酷な労働条件の中、あの華奢な身体でただ一人頑張っている理穂子を思うと、隆志は目の奥がジワリと熱くなってくる。隆志は店の主人に気取られないように、慌てて味噌汁の残りを流し込んだ。

この街で、理穂子に気付かれないように理穂子の側に居よう。

隆志はそう決めていた。

店の隅に置かれたマガジンラックに、黄色く変色した漫画雑誌と折り重なるようにして積み上げられた求人誌を持ってきて、隆志はテーブルの上で捲って見た。

どれも古い求人広告だが、すべていっぱいになってしまったとは考えにくい。

隆志が適当にページをめくっていった時、いいところに気がついて手が止まった。

新聞配達員募集

住み込み。三食賄い付き。

住所を見ると、すぐ近くだった。

隆志はカウンターのの中にいる店の主人を盗み見て、そつと雑誌を膝の上に隠すと、そ知らぬ顔で目的のページをピリピリと破いて、ジープンのポケットにねじ込んだ。

新聞配達、タクシー運転手　　は、流れ者にはもってこいの仕事、とは誰に聞いた言葉だったか。

年老いた新聞配達所の所長に、しごく簡単な契約書まがいのものを書かされて、拇印を押すために朱肉で汚した親指をシャツの裾で拭いながら、隆志は苦笑した。

今の自分に、これほどぴったりの仕事があるだろうか。

身分も資格も、保証人さえもいらぬ。

住む家と食事には困らず、影のように理穂子を見守るだけの生活には、本当にもってこいだった。

それから先に、何か目標があるわけではない。

東京に出てきたからと言って、そこで何かをしようという夢もなければ野心もない。

理穂子の側に気付かれないように寄り添っていても、それが何になるか、今の自分には分からない。

それでも、今はそうしなければならぬ気がしていた。

隆志は今年で二十三歳になる。

原付バイクに朝刊を載せ、新聞の重みに軋むタイヤの音を聞きながら、早朝の下町を飛ばす。

まだ日も昇らない真冬の早朝は、切れるほどの寒さが身にしみる。隆志はヘルメットの中に押し込んだタオルを両耳の脇から垂らして、首筋から口元を覆う。そうすると、わずかでも冬の凍て付く空気が身を守る気がするのだ。

隆志に任された配達ルートの中には、理穂子が勤める保育所もある。

配達が一番ラスト、全ての新聞を配り終わった最後の一件が、目的の場所だった。

ブスン……

という情けない音をまだ眠りから覚めない静かな下町に響かせて、隆志は理穂子の保育所の前で原付バイクを止めた。

夜は東の空から少しずつ白み始めてはいたが、保育所は玄関先の古びた電灯が一箇所明かりを灯すだけで、中は暗く静かだった。

隆志は新聞の一束をつかみ出すと、跨っていたバイクをそつと降りた。

鉄製の古い門扉の前の小さな郵便受けに手にした新聞を投げ込もうとしたその時、保育所の玄関が軋んだ音をたてながら、細く静かに開いた。

咄嗟に身を隠そうと構えた隆志は、扉の隙間から覗く小さな影に気がついて動きを止めた。

見ると、玄関のわずかな隙間から抜き足差し足で、小さな男の子

が出てくるところだった。

男の子は玄関の扉の隙間から完全に顔を出すと、隆志の姿を認めて嬉しそうにニカツと笑うと、一目散に隆志に向かって駆け寄ってきた。

「ライダーだ！ 仮面ライダーだ！！」

男の子はそう叫ぶと、困惑する隆志にお構いなしに、隆志の乗ってきた原付バイクの周りを嬉しそうにクルクルと回った。

世情に疎い隆志でも、子どもに大人気のドラマ『仮面ライダー』の存在くらいは知っている。主人公の乗るバイクとは似ても似つかない中古のオンボロバイクだが、男の子にとっては同じらしい。

「悪い奴、やつつけに行くんだろ？ ボクも連れてってよ！」

男の子は、この前穂子と一緒にいた子だとすぐにわかった。

少し上を向いた鼻がやんちゃそうな様子をかもし出していて、その鼻の頭にはいくつかの薄茶色いソバカスが散っていた。

「ボクずっと待ってたんだぜ！ 仮面ライダーのおじちゃん来るの」

白い息を吐きながら瞳をキラキラ輝かせる男の子に気圧されながらも、ここは男の子の話にあわせた方がいいと判断して、隆志は男の子のかたわらに膝を付いて視線を合わせた。

「そっだよ、ボク。俺が仮面ライダーのおじちゃんだ。暗いうちに、気付かれないように悪い奴らを倒しに行くんだ」

「やっぱり」

男の子はうつとりしたため息を漏らすと、隆志の答えに満足そうに頷いた。

「でもな、これは誰にも秘密の作戦なんだ。こうやって新聞を配るフリをして、敵を油断させなきゃいけない。だから、ボクもおじちゃんのこと、秘密にしてくれないかな？」

隆志が男の子の肩を掴む手に力を込めると、男の子は神妙に頷いた。

「分かった。ボク、誰にも言わないよ」

なぜか声までヒソヒソ声で、男の子は固い決意を込めたような目で小指を差し出した。

「ボクとライダーの秘密だね」

「ああ」

隆志も男の子に合わせて小指を差し出す。

小さな軟らかい小指に自分の指を絡めると、隆志は思わず自然に笑みが零れて来た。

「ねえ、ライダー？」

男の子は原付バイクに跨る隆志の背後から声をかけた。隆志が振り向くと満面の笑みで言った。

「明日も来る？」

隆志は微笑み、男の子の頭を軽くポンポンと叩いて言った。

「今すぐ、暖かい部屋の中に入っていい子にしてたら、また来るよ」
男の子は自分の鼻をすすり上げて笑うと、一目散に出てきた時と同じように、細い玄関の隙間へ身体を滑り込ませて消えた。

その日からこの珍客は、本当に毎朝、隆志が原付バイクで現れるのを玄関の向こうで待つようになった。

「なあ、そんなに毎日出迎えてくれなくてもいいんだぜ？」

隆志は、毎日飽きもせず、バイクの音が近づいてくると同時に保育所の玄関を開けて飛び出してくる男の子に、少し困ったような顔で言った。

だが、男の子の方はそんな隆志にかまわず、郵便受けに新聞を投函する隆志の傍らでしゃがみこみ、膝の上に頬杖を付いて隆志の原付バイクを眺めている。

「お姉ちゃんも理穂ちゃん先生も寝てるもん。秘密はバレないから大丈夫だよ」

訳知り顔の男の子に苦笑しながら、隆志はそれ以上は何も言わなかった。

男の子は自分の名を実と名乗った。年子の姉も同じ保育所に通っているらしい。

仕事が深夜にまで及ぶ忙しい両親が、実たち兄弟と一緒に夜間保育もしてくれるこの民間の保育所に入れたことが、実の拙い会話からも見て取れた。

最近では夫婦共働きの家庭も増えてきたとはいえ、宿泊を伴う預

け入れは、この保育所の中でも実と姉だけのようだった。

その時、実が細く開けっ放しにしていた玄関の向こうの部屋で明かりが灯り、すり硝子を隔てて人の動く影が揺れた。

「理穂ちゃん先生！ 実がまた一人で道路に出てってるよ」

中から女の子の尖った声が聞こえてくる。

玄関の扉が開けられた瞬間、中から実よりも一回り大きな女の子と、理穂子が顔を出した。

理穂子は以前見た時同様、ピンクのギンガムチェックのエプロンを下げていた。

「実！ いけないんだ。理穂ちゃん先生にしかつてもらうからね」

女の子の言葉に実は唇を尖らせながら反論した。

「だって、ライダーが来てたんだもん。秘密のお話してたんだもん」

「……ライダー？」

尋ねる理穂子に、実は上機嫌で答えた。

「仮面ライダーのおじちゃんだよ。毎朝、ここから秘密のお仕事しに行くんだ。理穂ちゃん先生にだって教えられないよ。だって、男と男の約束だもん。ね、ライダー？」

そう言つて実が振り返つた時、隆志の姿は既になかった。

「あ、あれー？」

実は困惑した顔で、辺りをキョロキョロと見渡す。

「ウソつき。いけないんだー」

女の子がバカにするように鼻を鳴らした。実は自分よりも若干上背のある女の子に悔しそうに言い返した。

「ウソじゃないやい。本当に、さっきまでここに……」

その時、エンジンをふかす渴いた音が路地に響き渡った。

理穂子はハッと顔を上げ、突っかけてきたサンダルのまま、保育所の前の細い車道に飛び出した。

「あー！」

原付バイクがこちらに背を向けて、通りの向こうへと消えるのが見えた。

「まさか……」

長く緒を引くバイクのエンジン音を聞きながら、理穂子はいつまでもバイクの消えていった先を見つめていた。

朝より大分カサの少ない夕刊の束を配り終えて綺麗に空にした原付バイクの前カゴには、賄いで作ってもらった朝の握り飯の残りが積んである。

隆志は片足をついて、この界限では比較的小奇麗なアパートの前でエンジンを止めた。

理穂子の住むアパートだった。

勤め先の保育所から歩いて5分ほどの距離のこのアパートで理穂子は一人で暮らしていた。毎日理穂子と勤め先に新聞を配って理穂子の様子を覗っているうちに、隆志は知らず知らずのうちに、理穂子の「日勤」「夜勤」の生活スケジュールまで把握するようになっていた。

理穂子にばれたら、さぞ気味悪がられるだろうと、隆志は一人寒空の下で鼻を嚙りながら苦笑した。しかし、自嘲しながらも止めることが出来ないのは自分でも百も承知していた。

今日の理穂子は「日勤」の勤務だった。

午後7時には帰宅の途に着く。

隆志がすっかり冷め切った握り飯を頬張りながら二階にある理穂子の部屋を見上げていると、軽快にトントントンと階段を登る足音が聞こえ、大きなバックを方から斜めがけた理穂子が帰って来た。三編みにした薄茶色の髪は、少しほつれてうなじに垂れていた。

理穂子がジーンズのポケットから鍵を取り出して部屋に入るまで、隆志は息をつめて理穂子を見守っていた。

電信柱の影になって、理穂子から隆志の姿は見えない。

この死角を見つけてからは、隆志は朝・夕の配達の行き帰り、必ず理穂子のアパートの前に立ち寄り、アパートの様子を覗っていた。やがて部屋の中に電気が灯り、微かだが薄暗いアパートに生活の気配が満ちてくると、隆志は片足をバイクに戻して、エンジンを捻ろうとした。

その時、隆志は不意にアパートを駆け上がってくるもう一つの足音を聞いて振り返った。

理穂子より重い音を響かせて一段一段階段を上がってくるのは、遠目にも高価そうなトレンチコートを羽織った大柄な男だった。

隆志はエンジンにかけていた手を止めて、男を凝視した。

男は理穂子の部屋の前で立ち止まると、ためらう素振りもなく呼び鈴を押した。

沈黙が続き、理穂子はなかなかドアを開けようとしなない。

男は焦れたように、幾度も呼び鈴を押し続ける。

隆志が思わずバイクから腰を浮かせようとしたその時、アパートのドアが勢いよく開いた。

男は理穂子の開けたドアに危うく弾き飛ばされるところだったが、器用に身を引いて、逆に大きく開かれたドアの隙間に身体を割り込ませて、理穂子に扉を閉めさせないようにした。

理穂子が目に涙を溜めて、何事か大きな声で抗議するように口を開いたのが見えた。

ここからでは、二人の間にどんな会話が交わされているのか聞き取れない。

腕を振り上げ男の胸を叩こうとする理穂子の細い手首を、男は逆に強い力で掴んで、理穂子を自分の胸に抱き寄せた。

理穂子は尚も抵抗しようともがいていたが、やがて男の胸の中で大人しくなり、静かに肩を震わせて泣き始めた。

男は理穂子を抱いたまま部屋の中へと滑り込んだ。

パタン……

と小さな音をたてて閉じられた扉が、部屋の中の温もりと一緒に、隆志を締め出した。

後には冬の凍て付く寒さの中で、一人電柱の影に身を潜めた隆志だけが取り残された。

隆志は乱暴にバイクのエンジンをかけると、そのまま180度方向を変えて、理穂子のアパートを後にした。

めちやくちゃにスピードを出して、夜の下町を駆け抜けた。

一刻も早く、その場から離れたかった。

理穂子と別れてから五年がたっている。

十八歳から二十三歳。

自分が離れた五年の月日の間に、理穂子は大人になったのだ。

そして、女になった。

隆志には、預かり知らぬところで。

「あ！ おはよう。ライダーのおじちゃん!!」

隆志のバイクが到着すると、いつものように実は保育所の玄関から飛び出してきた。

隆志は無言でカゴの中の朝刊の束を一つ摘み上げると、無造作に実に手渡した。

「じゃあな」

軽く手を上げると、実に一瞥もくれず隆志は行こうとした。いつもとは違う隆志の様子に、実は目をパチクリさせて隆志の袖を掴んだ。

「もう行っちゃうの？ 今日ライダーのバイク、触らせてくれないの？」

「……忙しいんだよ」

隆志は実の腕をそっと振り払った。実は頬を膨らませて、顔を赤くしている。

冷たい隆志に怒っているようだ。

「そんな目で見ろなよ」

隆志は気まずそうに実を振り返った。

「また明日、な？ 今日には本当に急いでるんだよ」

「おじちゃん、何か怒ってる」

「怒ってないよ」

「怒ってるから、バイク触らせてくれないんだ」

「怒ってるのは、お前だろ」

隆志は実の膨れたままの頬を見て、困ったようにため息をついた。出来れば早くこの場を立ち去りたい。昨日のことがあったばかりで、理穂子の側には居づらかった。

「なあ、機嫌直せよ」

そう言って、隆志が実の額に手をかけたとき、隆志は実の額のあまりの熱さに驚いた。

「おい、お前熱あるんじゃないのか？」

隆志がバイクから降りて実の前に膝を着くと、実は真っ赤な顔のまま、隆志の腕の中でヘナヘナと崩れ落ちた。赤かったのは怒っているからではなく、熱のせいだったのだ。

「おい！　しつかりしろよ、おい！」

隆志は実の小さい身体を揺すったが、実はもうぐったりとしていて、荒い息をつくだけだった。

「ああ、もう。しょうがないな！」

隆志は実の身体を横抱きにすると、急いで保育所の中へ入った。つた。

玄関の扉を叩きながら、大声で叫んだ。

「すみません！　こいつ、熱があるんです！　早くあけてください！」

部屋の明かりが灯り、すりガラスを通して中で人の動く気配がした。慌てて開かれた扉の向こうで、エプロン姿の理穂子が立っていた。

「あ……あなたは……」

声も出ない様子の理穂子から目を逸らし、隆志は腕の中の実を突き出した。

「門の前で倒れたんだ。すごい熱だから、急いで見てやってくれ」

隆志の一言でようやく我に返った理穂子は、慌てて隆志の腕から実を受け取ると、思わず声を上げた。

「実っ?! 大変!! しっかりして!」

理穂子は実をしっかりと抱きしめると、部屋の中に声をかけた。

「葵!! 大変よ。実がお熱なの。急いでママに電話して」

慌しく部屋の中に戻ろうとしたとき、ふと理穂子は隆志を振り返って気まずそうに肩をすくめた。

「ありがとう。とにかく、あがって」

「いや、俺はこれで」

「島貫君!」

理穂子の真剣な瞳にみつめられ、隆志は動けなくなった。

「……お願い。少しでもいいから、上がって行って」

隆志は理穂子から視線をそらしたまま、やがて小さく頷いた。

実を寝かしつけた狭い事務室兼医務室の中で、隆志は目の前でシンシユンと音を立てるやかに目をやったまま、小さくなっていた。

理穂子は先ほどから手際よく氷嚢の氷を割ったり実の汗を拭いたり甲斐甲斐しく動いている。

手伝うことも話しかけることも出来ずに、隆志はただモジモジと所在なげに座っていた。

やがて理穂子が実の頭に氷嚢を乗せ、肩まで毛布を引き上げて一息つくくと、初めて顔を上げて隆志を見た。

「……ありがとう、この子を助けてくれて」

視線が合うと、隆志は気まずそうに頭をかいた。

「……別に。たまたま通りかかったただだよ」

見え透いた嘘に、自分から頬が熱くなる。

知っているはずなのに、理穂子は敢えてそれ以上聞いてこようとはしない。それが余計にもどかしかった。

「どうして、帰って来たの？」

「え？」

隆志は一瞬、目を丸くした。

(どうして、帰って来たの?)

そのセリフを、他の誰でもない、理穂子が言うのか。

「どうして？」

隆志は同じセリフを理穂子に返していた。

「俺を呼んだだろ。斉木こそ、どうして？」

隆志の言葉に、理穂子は一瞬鼻白んだように隆志を見返したが、やがて軽く鼻を鳴らすと、隆志が初めて見るような加虐的な笑い方をした。

「私が島貫君を？ いつ？ だって、五年間も音信不通だったんだよ。黙って出て行ったあなたを、何で今になって私が呼んだりするの？」

「無言電話」

隆志は静かに、しかしはっきりと言った。

「無言電話？」

理穂子の眉が上がる。

「かけただろ？ 九州に」

「へえ、島貫君九州にいたんだ」

理穂子はまともに隆志の問いに答えず、茶化すように隆志の言葉の後を受けた。

「その誰ともしれない無言電話を私だと思って、わざわざ東京へ出てきたの？ 五年もたってるのに？ 私じゃないかもしれないの？」

理穂子はやがてケラケラと声を上げて笑い出した。

「島貫君も、冒険するね」

腹を抱えて笑う理穂子だが、目は笑っていなかった。それは、隆志にも分っていた。

「……助けてって、聞こえたんだよ」
「え？」

隆志は再び二人の間でシュンシュンと音をたてるやかに目を移して言った。

「無言電話の向こうで、助けてって……声が聞こえた気がしたんだ。別に誰だって構わない。だけど、助けにいかなきやって思ったんだ」
「……島貫君」

「理穂ちゃん先生！」

その時、狭い医務室の扉を勢いよく開けて、小さな女の子が飛び込んできた。

「あのね、ママね、お仕事で来られないんだって。だからね、葵ね、パパにお電話したの！」

女の子は癖のないサラサラした髪をおかっぱにしている、腕には

大分年季がはいって来た様子の子のクマのぬいぐるみを大事そうに抱えていた。

「そしたらパパね、理穂ちゃん先生のおうちにお泊りしなさいだつて！ パパもママも昨日の夜から徹夜でお仕事で、お迎えにいけなからって」

それを聞いた途端、理穂子の顔色が変わった。

「そんな！ だめよ、葵。パパと話すわ」

言うなり、理穂子は医務室を飛び出して行くと、廊下においてある電話機の元へ向かった。

女の子とたつた二人部屋に取り残された隆志は、自分に無遠慮に真っ直ぐな視線を投げってくる女の子を見返した。

少し上を向いた、ソバカスの散った鼻が実によく似ている。

一目で、実が言っていた、年子の姉であろうことが検討ついた。

「パパがお迎えに来るまで、理穂ちゃん先生のおうちに行くの」

女の子は隆志から視線を外さないまま言った。

「困ります!!」

その時、廊下の向こうから、電話口でもめる理穂子の声が聞こえてきた。

「それこそ、公私混同だね。確かに私は今日は夜勤明けでこのまま上がりだけど、梓さんの了解はとってるんですか？ 私は一人暮らしなのよ。夜、あなたが一人で私の部屋にくるなんて……ちよつとねえ……」

理穂子にしては珍しく声を荒げている。

「義兄さんっ!!」

理穂子の最後の一言で、電話は切れたようだった。

チン……と、力なく戻される受話器の音が、冷たい廊下に響き渡

った。

スリッパをズルズルと引きずりながら、理穂子が再び隆志たちのいる医務室に戻った時には、心なしか顔が青ざめていた。

「大丈夫か？」

思わず声をかけた隆志に、理穂子は力なく頷いて無理に笑みを作った。

「この子たち、連れて帰るわ。丁度、私も非番だし」

理穂子は葵の癖のない髪の中に手を入れて言った。

「この子たちね、義兄の子どもなの。葵と実。私の甥っ子姪っ子。保育所では他の子どもたちと同じように扱っけど、時々こうやって両親の帰りが遅いときや、熱を出してどうしても見れないときは、私のアパートで見たりしてるんだ」

理穂子は氷嚢を頭に乘せて寝息を立てている実の身体を起こそうとかがみ込んだ。

隆志はそんな理穂子の横からスツと手を伸ばし、実の身体を抱きかかえた。

「アパートまで、運ぶの手伝っよ。一人じゃ大変だろ？」

隆志の腕の中で、実の身体が熱い。熱が上がってきているかもしれないなかった。

「そんな。悪いよ、島貫君」

戸惑う理穂子に、隆志は冗談めかして言った。

「こんな口実でもなきや、女の人一人暮らしの部屋に入る機会なんてないから」

隆志の似合わない冗談に、理穂子が隣で苦笑するのが分かった。

隆志は荒い息を継ぐ実に見線をやったまま、何気ない調子を装ったまま更に言った。

「でも、誤解されたら斉木の方が迷惑だよな」

「え？」

葵と手をつないで、隆志たちの後に続いて廊下を渡る理穂子が怪訝な顔で聞き返した。隆志は勤めて明るく聞こえるように言った。

「いい人、いるんだろ？ 俺、たまたまこの前見ちゃったんだ……結婚するの？」

その途端、理穂子の歩みが止まった。

「理穂ちゃん先生？」

葵が不信に思っけて理穂子の袖を引っ張る。

「……相変わらずだね」

うつむき眩く理穂子の表情は見えない。

理穂子は絞り出すように、乾いた声で言った。

「……島貫君は、何も分かってない」

無意識のうちに力がこもってしまったのか、理穂子に手を握られた葵が顔をしかめる。

「……理穂ちゃん先生、痛いよう」

その言葉で、理穂子はフツと我に返って葵の手を握り返した。

「ごめん、行こうか」

理穂子はもう元の優しい笑みに戻っていた。

隆志は実を腕に抱いたまま、理穂子の後に続いた。

「どうぞ」

外からは見慣れた理穂子のアパートに足を踏み入れるとき、隆志は実を抱いたまま一瞬躊躇した。

理穂子の部屋は冷たく、女の一人暮らしとは思えないほど殺風景だった。

理穂子が手を伸ばしてつけた蛍光灯の明かりが室内に満ちると、ようやく人の住んでいるような気配も感じられたが、少女の頃の理穂子を知る隆志からしてみれば、今の彼女の生活観のない部屋は意外な気がした。

「何にもないけど」

隆志の心を見透かしたように、理穂子が苦笑しながら部屋に入る。手を引いていた葵が玄関に綺麗に脱いだ靴を並べるのを見て頭を撫でてやると、理穂子はもう一度隆志に向かって部屋に入るようにと頷いて見せた。

隆志が上がったりリビングには、本当に必要最低限のものしか置いていなかった。まるで、今すぐ主がどこかへ消えてもおかしくないという風情だった。

「実、預かるわ。ありがとう、島貫君」

そう言うと、理穂子は隆志の腕から眠る実を受け取って、奥にある自分の寝室へ運んだ。

理穂子に実を手渡すとき、一瞬理穂子の手に自分の手が触れて、隆志は思わず頬を熱くした。理穂子の髪は甘い香りがした。

実の姉の葵は、よく躡けられた子どもらしく、理穂子に言われずとも自分から洗面所で手洗いウガイを済まし、隆志の目の前のソファにちよこんと腰を下ろしている。先ほどから目をしばたかせながら、しきりに眠気と戦っているようだ。

「葵も疲れたでしょ。ご飯食べたら、実と一緒におネンネしようね」

実をベッドに運び終えた理穂子は、戻るなりウツラウツラと船を漕ぐ葵を見て、クスリと笑いをこぼしながら言った。

葵に適当な夕食を取らせた後、実と同じ部屋で葵を寝かしつけると、理穂子は隆志のいるリビングに戻ってきた。

「コーヒーでも入れようか」

隆志は先ほど葵が腰掛けていた粗末な布張りのソファで、細く

長い足を不器用に折り曲げて座った格好のまま、ぎこちなく頷いた。

キッチンに消えた理穂子が、マグカップにコーヒー用の熱湯を注ぐ音だけが、静かなリビングに響き渡る。

「ねえ、島貫君」

リビングと台所を隔てる簾越しに、理穂子が不意に声をかけた。

「なに？」

隆志は突然のことにビクツと肩を震わせて、簾越しに理穂子の後姿を見つめた。

「さつき、私にいい人がいるみたいだねなんて言ってたけど、島貫君はどうなの？」

「え？」

「五年もたってるんだもの。いい人ぐらい、いたんでしょ？ ううん、今も待つてる人いるんじゃない？」

背中を見せたまま決して振り返らない理穂子だが、陽気さを取り繕いながらも声は震えていた。

「……いないよ」

隆志は短く、しかしキツパリと言った。

「また、そんなこと言って。知ってるよ、高校のときだって結構人

「気あつたんだって圭子が……」

「いないよ、そんな奴！」

理穂子の言葉を遮って、隆志は思わず声を荒げた。

ソファを立ち上がり、理穂子の元へ向かう。初めて理穂子が振り向いた。

簾越しに、至近距離で二人の視線が絡み合う。

「……島貫君」

息をつめて呟いた理穂子の肩に隆志が手を伸ばそうとしたその時、インターホンの無機質な音が、二人の間に割って入った。

一瞬、理穂子の目が怯えたように隆志を捉えた。

隆志は思わず、玄関先の方を振り返った。

「……ごめん、ちょっと出てくる」

理穂子は隆志から視線を外すと、力ない足取りで玄関に向かった。

「あっ！ おい！」

覗き穴から外を見ることもせず、扉を開けにいく理穂子の背中を、隆志は呼び止めようとしたが、理穂子は初めから訪問相手が誰であるか分っているようだった。

隆志の鼓動が早くなる。

ザワザワと全身の皮膚を内側から逆撫でるような胸騒ぎを覚えた。

カチャ……

理穂子が玄関の鍵を開ける音が隆志のいる静かな室内に響き渡った。

冷たい外の空気が室内に流れ込んでくると同時に、細く明けられた扉の隙間から、隆志の見覚えのあるトレンチコートの端が垣間見えた。

理穂子は細く開いたドアの隙間から素早く自分の身体だけを外に出して、後ろ手にドアを閉めた。

乱暴に閉めたせいで、アパートの部屋全体がその衝撃に揺れる。

やがて、扉の向こうから理穂子と男の口論する声が聞こえてきた。隆志はたまらず玄関先に走り寄って、扉越しに二人の会話を聞いた。

「ここにはもう来ないでって、何度も言ったでしょ！」

「話し合わなけりゃいけないだろう」

「話し合うことなんて、もう何も無いわ！」

感情的に叫ぶ理穂子の声は、涙に濡れていた。

男の低く甘い響きを含んだ声は、隆志の脳裏に、彼の社会的地位に裏打ちされる落ち着き払った人物像を浮かび上がらせた。

それは、今隆志がジャンパー代わりに羽織っている漁師時代に買った粗末なスタジアムジャンパーと、男の身に纏ういかにも質の良さそうなトレンチコートとの差にも表されていた。

隆志は自分のジャンパーの擦り切れた袖口を見つめて、唇を噛みしめた。

「帰って！ 帰ってよ！ 実も葵も後で送り届けるわ」

「お願いだ、理穂子。中に入れてくれ。中で話そう、な？」

「いや！ 帰って！」

バンツと理穂子がドアに激しく背中をぶつける音がした。

身体をはって、男が部屋の中に入るのを防いでいるようだった。

「……理穂子」

「触らないでよっ！」

理穂子は金切り声を上げて泣きじゃくった。苦しげにしゃくり上げる声がドア越しに聞こえる。

「……落ち着いてくれ、頼むから」

そう言った男の声に続いて、理穂子のしゃくり上げる声がかくもって聞こえてきた。

隆志はこれ以上早く打てないと思うほどの鼓動を繰り返す胸を押さえて、そこに広がる光景に恐怖しながらも、抑えきれない欲求に抗えず、そつとドアの覗き穴から二人の様子を覗いた。

そこには、良質のトレンチコートの腕に抱かれた理穂子の背中が見えた。

理穂子は抵抗する気力も失くしたかのように、男の腕の中でグツグツと力を失っている。

隆志は目を瞑り、次の瞬間、勢いよくドアを開け放った。

突然理穂子の部屋の中から現れた予想もしない男の登場に、トレンチコートの男は、一瞬あっけに取られたように隆志を見つめた。

男に抱かれた理穂子が、その姿勢のまま隆志を振り返る。

隆志は理穂子から顔を背け、そのまま二人の前を横切ってアパートを後にしようと一歩を踏み出した。

もうこれ以上、ここに居てこんな茶番を見せられるのは真つ平だった。

その時、予想もしない強い力で隆志は腕を引かれた。

隆志がハツとして振り向くと、先ほどまで男の腕の中で力を失っ

ていた理穂子が、男を突き飛ばし隆志の腕を掴んでいた。

「この人、私の恋人よ」

理穂子は隆志の腕をつかんだまま、目の前の男に言い放った。

目には未だ涙の痕が残っていたが、声は冷酷な響きをはらんでいた。

「話し合うことなんてない理由は、コレよ。分かったでしょ？」

トレンチコートの男は、訝しげな目で隆志を睨んでいる。隆志が何も言う間もなく、理穂子は隆志の腕を更に強く引いて、そのまま男の目の前で、隆志の唇に自分の唇を重ねた。

隆志は、一瞬何か起きたのか分からずにいた。

理穂子の甘い髪の香りが鼻腔をくすぐったが、そのまま理穂子は隆志の胸の中に倒れこむような形で、隆志の背中越しに部屋のドアを開け、アパートの部屋の中に雪崩れ込むと同時に思い切りドアを閉めて鍵をかけた。

ドアを外から激しく叩く音と、男の罵声が響き渡る。

理穂子は鍵をかけたドアの上から更に背中全体でドアを押さえ込んで、男が中に入ってくるのを拒絶しているようだった。

隆志は無様に玄関先に尻もちをついた姿勢のまま、理穂子を見上げていた。

泣きはらした目でしゃくり上げながら、扉に背中をピタリとつけて男の罵声に耳を塞ぐ理穂子は、あまりにも小さく頼りなく見えた。男はひとしきりドアを叩き叫び終わると、諦めたように大きなため息を一つ残し、革靴の底が古いアパートの床をコツコツと叩く音を響かせて帰っていった。

「……斉木」

隆志は立ち上がると、そっと理穂子の肩に手をかけようとした。

理穂子はビクッと身体を震わせて、一瞬隆志から身を引いた。伸ばしかけた隆志の腕が、虚空を掴んでそのまま行き場を無くして力なく落ちる。

「……ごめ……ごめん……島貫君」

理穂子は自分の腕で自分を抱きしめてガクガクと震え始めた。そ

のまま玄関先にずると座り込むと、理穂子は組み合わせた両手の親指の爪を噛んで嗚咽を漏らした。

隆志はなす術もなく、理穂子に視線をあわせてしゃがみこんだ。

「……無言電話は、君だろうか？」

理穂子は爪を噛んだまま顔を上げない。

「何から、助けて欲しかったの？」

隆志は涙で顔にはりついた理穂子の細い薄茶色の髪の毛をそっとかき上げてやった。

理穂子はくぐもった声で、何事かを呟いた。

「え？」

隆志が顔を寄せると、理穂子は涙に濡れた目で恨めしそうに隆志を見上げた。

「……本当に助けて欲しい時に、島貫君はいなかった……この五年で、私の人生はメチャクチャになった」

「……斉木」

隆志は戸惑いを隠せずに、理穂子が爪を噛む腕を取った。

「何が、あったの？」

次の瞬間、理穂子の顔から血の気が失せ、隆志に取られた腕を凄じい力で引き戻すと、口元を抑えて立ち上がった。

もう一方の手で腹を押さえながら、理穂子は身体を二つ折りにし

て、よろめきながら玄關の右手にある洗面所に向かった。

勢いよく蛇口からほとばしる水音の合間から、激しく嘔吐する理穂子の苦しげな息遣いが聞こえてきた。

「斉木！」

急いで洗面所に飛び込もうとした隆志だが、ハツとしてそこで足を止めた。

洗面台に顔を埋める理穂子の背中を見ながら、隆志の鼓動がまたも早鐘を打ち始めた。

「……斉木、まさか……」

ピタリと動きを止めた理穂子の背中が、隆志にそれ以上の言葉を紡ぐのを許さなかった。

勢いよく洗面台を濡らす水音だけが、二人の間を冷たく流れる。

「……心配しなくても、自分でどうにかするわ。もう、大人だからわざと皮肉気に鼻を鳴らして笑ってみせる理穂子に、隆志は言った。

「……あの男を、愛しているの？」

隆志の言葉に、理穂子の肩がビクツと震えた。理穂子は勢いよく振り返ると、隆志に向かって大声で叫んだ。

「愛してなんかいない！ 殺したいほど憎いわ！」

キラキラと燃えるような色を宿した瞳を見た時、隆志は全てを悟

った。

(人間の感情の中で一番強いものは?)

高校時代、変り種で有名だった倫理の教師が、ある日授業の合間に気まぐれに生徒たちに向かって投げかけた言葉を、隆志はなぜか思い出していた。

「愛」だともっともらしく答えた生徒の一人に、その教師は悪戯っぽく人差し指を顔の前で左右に振って見せて、続けた。

(「憎しみ」だよ、残念ながらね。「愛」はその次。だから、「憎しみ」をはらんだ「愛」は、一番強いんだ)

理穂子のギラギラ燃える強い瞳は、憎むのと同じ強さで「愛している」と語っていた。

あてつけのように押し付けられた、最初で最後の君の唇が
焼け付くような「恋」の火種を 僕の心にハッキリと自覚させた。
そして同時に、僕は気付いてしまったんだ。
憎むのと同じ強さで

君は、恋をしていた

〈第6話「火種」〉完く〉

どこか遠くの方から、ピピピピ……と無機質な目覚まし時計の音がする。

瞳の裏を指す淡い陽光がまぶしくて、思わず伏せた瞼の上から手をかざすと、隆志は「うーん」と一声唸り、寝返りをうった。

その途端、果てしなく下まで落下していくような錯覚に囚われて、隆志はギョツとして目を覚ました。

「痛っ！」

時すでに遅しで、気付いた時には隆志は毛足の短い絨毯の床にたたか頭をぶつけた後だった。

「あ！ ライダーのおじちゃん、おはよう」

その時、先ほどまで隆志が寝ていたであろうソファアの陰から、実が飛び出してきた。

理穂子のものを借りたのか、着ているパジャマの手足はブカブカで床を這っていたが、顔色はすっきりと健康な様子を取り戻していた。

「お前、熱下がったのか？ ちょっと、来い」

隆志が手招くと、実は素直に隆志の元にちょこちょこやってくる。

隆志が実の秀でた額に手をやると、熱はキレイに引いていた。

「ねえねえ、おじちゃん。俺、いいもの見せてあげようか？」

実は熱で皮のめくれた唇を不器用にしきりに舐めながら、好奇心いっぱい顔をして隆志を見上げた。

「ちよつと、来て」

実は小声でそう囁くと、小さな手で隆志の右手を握った。

体温の高い実の手がじんわりと温かさを伝えてきて、隆志は胸の奥がジンとした。

実は隆志の手を引いたまま、寝室らしきところへ入っていく。

「あ、おい！　ここは……」

理穂子の寝室にとまどいながら抵抗を試みようとした隆志だが、実の手は意外に強い力で握られていて、隆志がまごまごしている間に振りほどくことが出来なかった。

隆志は思わず両目をギュッと瞑ってその部屋に入ったが、隆志の思いとは裏腹に、中央に置かれたベッドは、主の身体の形を残しながらも、もぬけの空となっていた。

先ほど隆志が夢の中で聞いた目覚まし時計の音は、この部屋から聞こえているらしかった。

隆志はベッドの横に置かれたサイドテーブルの上で鳴り止まない目覚まし時計を、そっと止めた。

ベッドの向こうでは、実の姉の葵の癖のない黒髪の頭が覗いている。

「何してるの？」

不思議に思っただけで隆志が尋ねると、手をつないだ実が肩をすくめて

「えへへ」と笑った。

「理穂ちゃん先生のペットだよ。俺たち、友達なんだ」

葵も顔を上げて、ベッド越しに隆志を見て微笑んだ。

「おじちゃんも、餌あげる？」

そう言った葵の手にはキャベツの欠片が握られている。

隆志がベッドを挟んで向こう側に回りこむと、葵の前に小さな鉄製の檻があり、その中に小さなウサギが一匹、大人しく座って葵のやったキャベツを食んでいた。

「キキって言うの。男の子だよ。かわいいでしょ？」

檻を覗き込む隆志の横から、葵が説明する。

ウサギはまだ子ウサギと呼んでもよいくらい小さく、怯えたような黒目勝ちの瞳は、どことなく理穂子に似ていた。

その時玄関の開く音がして、隆志の手を握っていた実は、サツとその手を離して玄関に飛んでいった。

「理穂ちゃんせんせー、お腹すいたよー！」

「ごめんごめん、朝ごはん何もなかったから買いに行ってたんだ。実、もう起きて平気なの？」

ガサガサとビニール袋を玄関に置く音が響いている。

隆志は理穂子の寝室に無断で入っていることに対する気恥ずかしさから中々顔を出すことに躊躇していたが、思い切って葵と一緒に廊下へ出て理穂子を出迎えた。

「……あ、その……勝手に入って、ゴメン」

頭を掻きながら決まり悪そうに立ち尽くす隆志に、理穂子は何の屈託もない笑顔を向けた。

「島貴君、起きたんだ。よく眠れた？　すぐに朝食作るからね」
「え？」

まるで昨日のことなど何もなかったように、理穂子はいつぱいに中身が詰まった買い物袋を手にリビングに入っていった。

理穂子はそのまま台所に立ち、手早く朝食の用意を整えた。
居間でウサギのキキを抱きながら遊ぶ葵と実の傍らで、隆志は複雑な気持ちで理穂子の背中を追った。

穏やかな朝である。

少しずつ日差しには春の陽光が混じり始めている。
まるで幸福な家庭の朝の一場面を切り取ったかのような光景に、理穂子の作る味噌汁のかぐわしい香りが色を添える。
絵に描いたような「幸福らしさ」が、隆志には何とも表現のつかない違和感として残った。

昨夜からたった一晚明けただけでの、理穂子のこの変わりようは、隆志には底知れない不安を植え付けた。

「さあ、出来たわよ。実、葵、お手伝いしてね」

台所の暖簾をめくって理穂子が遊んでいた二人に声をかけると、二人は素直に台所に入っていき、手を洗ってから、理穂子に渡された台布巾でテーブルをきれいに拭いた。

「島貫君は座ってて、お客さんなんだから」

理穂子は所在なげに立ち尽くしたままの隆志に、クスリと笑いを漏らした。

「いただきます」

テーブルに朝食がそろい、皆が席につくと、実と葵は両手を合わせて大きな声で食前の挨拶をした。

よく躡けられた子どもらしい仕草に、思わず隆志と理穂子の頬も緩む。

温かく炊かれたばかりの白米と、大根と豆腐の味噌汁は味が染みていて美味かった。

熊本のハル婆のところを出てきてから、久しぶりに味わう手料理だった。

「……昨日はごめんね。みっともないところ見せちゃって」

朝食が終わり、食器を流し場に運んでいる時に、理穂子は俯きながら小声で詫びた。

実と葵は再びウサギのミミを撫でながら居間で遊んでいる。

「……別に」

隆志は食器の上に勢いよく水を出して、気まずい雰囲気緩和しようとした。隆志が分からないのは、昨夜の理穂子ではない。むしろ、まるで何事もなかったかのように振舞える、今朝の理穂子の方だった。

「今日、保育園が終わったら、葵と実はピアノのレッスンがあるの。私を送って行くんだけど、よかつたら一緒に来ない？」

「え？」

隆志は洗物をしていた手を止めて、理穂子を見た。

「ピアノの先生は、島貫君もよく知ってる人だと思うよ。小学校の時、一緒だった長田さゆり、覚えてない？」

「え？ 長田？」

隆志は曖昧な過去の記憶を引っ張り出した。

お下げ髪にして、いつも理穂子たちと一緒にいた泣き虫の少女の面影が、薄ぼんやりと浮かんでくる。

「さゆりも喜ぶと思うな。夕方4時からなんだけど、どうかな？」

隆志は一瞬、自分が勤める新聞配達所の所長の顔を思い浮かべた。初老の人のよさそうな男だが、今朝無断で朝刊配りをすっぽかし

てしまった上、夕方の夕刊配りまで休ませてくれとは言いにくかった。

「……行くよ」

だが、口から出てきた言葉は裏腹だった。

理穂子の晴れやかな笑顔は、隆志の胸の奥にチクリと刺さる棘のようなものを残しながらも、幼い日に理穂子に寄せた淡い想いに似た感覚を呼び起こさせてもいた。

隆志は昼の間に散髪に行き、伸び放題になった髪を整えた。

一張羅のジャンパー姿は代えられなくても、せめて少しでも身綺麗に装いたかった。

昨夜の理穂子の相手の男が着ていたような上質そうなトレンチコート影が、昨日から頭の隅にこびりついている。

今、理穂子やさゆりが生きる世界は、小学生の時に自分が感じた彼女たちとの差以上に開いている気がしてならなかった。

待ち合わせの時間に遅れた隆志は、先に理穂子たちに行ってもらい、さゆりのピアノ教室で落ち合うことになっていた。

探して行ったさゆりのピアノ教室は、閑静な住宅街の中にあった。既に結婚して家庭に入っていたサユリだが、音大出身の彼女は、自宅のスペースを一部開放して、裕福な家庭の子どもたちにピアノを教えていた。

実と葵の自宅もその高級住宅街の一角にあり、たまたま叔母である理穂子の同級生が開いているピアノ教室ということで、二人の両

親は幼い子どもたちをその教室に通わせることに決めたのだった。

手入れの行き届いた庭の中には、陶器で出来た天使の置物が花壇の脇に置かれ、この場違いな客人に睨みを利かせているような気がして、隆志は何となく居心地の悪い想いのまま、呼び鈴を押した。屋敷の外まで漏れ聞こえていた拙いピアノの旋律が止み、しばらくすると中から扉の鍵を外す音が続いた。

「はい」

思わず隆志がのけぞるくらい勢いよく開いた扉の中から、眼鏡をかけた若い女が顔を覗かせた。

「やだ！本当に、島貫君？」

女は隆志を一目見るなりそう言っていると、歓声を上げて後ろを振り返った。

女の後ろには、理穂子が悪戯っぽい笑みを浮かべて立っている。

「高校辞めてからどこか遠いところに行っちゃったって聞いてたけど、いつ戻って来たの？相変わらず、背高いね。なんか、野性味が増したってどうか……うん、カッコよくなっちゃって。あ、結婚してるの？もう」

「さゆり」

矢継ぎ早に質問するさゆりを、理穂子が苦笑しながら止めに入る。

「とにかく、中に入ってもらってからにしたら？」

「あ！そうだね、ゴメン、島貫君。そうぞ、今レッスン中で散らかってるけど」

そう言つと、さゆりは身体をずらして、扉の奥に続くピカピカに磨かれたフローリングの廊下の先を示した。

さゆりの機関銃のような話しぶりに気圧され気味だった隆志は、ようやく一息つき、軽く咳払いをしながら頷いた。

玄関で靴を脱ぐとき、隆志は自分の煮染めたように土やドロの垢が染みこんだなボロボロのスニーカーが、顔から火が出るくらい恥ずかしかった。

塵一つ落ちていない新築の家庭の玄関で、その薄汚れたスニーカーは、どうしてもこの場に馴染むことの出来ない、異端者としての自分の象徴のように感じられた。

そう言えば、幼い日にも、まるきりサイズの合っていないスニーカーを突っかけて登校していた。

伊藤健吾やその他の悪ガキたちに、そのみすばらしい一品をドブ川に投げ捨てられたことも、一度や二度ではなかった。

どうせ投げ捨てるなら今まさにこの場で、目の前のこの靴を美しい玄関から投げ捨てて無き物にして欲しい。

そんなことを考えている自分に、隆志は思わず苦笑した。

先に立って廊下に行く理穂子とさゆりの後ろで、踵の部分を無造作に摘んで、隆志はそつと彼女たちの目につかないように、このみすばらしい靴を玄関の隅に寄せた。

「あ！ おじちゃんも来たんだね！！」

部屋に入ると、ピアノの前に葵と並んで座っていた実が隆志を見つけて振り返った。

葵も実も、ピアノの下までまだ足が届かず、椅子に腰掛けたまま足をブラブラさせている。

「遊ぼうよ、遊ぼう！ ね、おじちゃん！」

「こーら、実君、まだレッスン終わってないよ」

眼鏡を光らせたさゆりにたしなめられると、実は口を尖らせて、また鍵盤に向き直った。

隆志は理穂子と顔を見合わせて笑った。

「レッスンは終わったら、島貫君を連れて行きたいところがあるの」

理穂子は、ふて腐れながらピアノに向かう実の後ろ姿を見つめたまま言った。

「どー？」

「ひみつ。でも、きっと島貫君、驚くと思うよ」

理穂子の話を聞いて、さゆりも振り返る。

二人は目配せをして、可笑しそうに肩をすくめた。その仕草は、二人が女学生だった頃と何ら変わりなく、つられて思わず隆志まで笑顔を漏らした。

理穂子が実と葵を二人の自宅まで送り届けている間に、さゆりは最近購入したばかりという日産ブルーバードを玄関の前まで回し、隆志を助手席に案内した。

「これ……旦那さんが？」

いくら世情に疎い隆志でも、新車のブルーバードがどれ程値が張るものか、知らないはずがなかった。

さゆりは「そう」とも「違う」とも言わず、ただ軽く肩をすくめて、ポケットから取り出したジッポに火をつけると、窓を細く開けて煙を吐き出した。

「旦那様は奥さんにどんなものを買ってやるか、着せてやるか、いかに自由にしてやってるっていうのをアピールできるか、そういうことが、すごく大切なんだって。こういう世界の存在は知ってたけど、まさか自分が結婚して、その仲間入りをするなんてね」

さゆりは指に煙草を挟んだまま、エンジンのキーを回した。

小刻みな振動から、やがて車体が命を持って息を吐く。

「くだらない」

さゆりは鼻で笑うと、窓の隙間から指に挟んでいた煙草を投げ捨てた。

「今時、身分の差なんて流行らないよ、島貫君」

さゆりは真つ直ぐ前を向いたまま、アクセルを踏み込む。

「理穂子に会うために、戻って来たんでしょ？」

隆志は何も答えられず、黙って助手席で俯いた。

「……あの子を……理穂子を、助けてあげてね」
「助ける？」

眉根を寄せる隆志に、さゆりはそれ以上何も言わず首を横に振った。

「……いまに、分かるよ」

隆志とさゆりを乗せたブルーバードは、無言で都会の中を疾走していった。

さゆりに連れられて行った先は、高級ホテルのラウンジだった。オフィス街からは少し外れたその周囲は、似たような高層ホテルが立ち並び、美しく着飾った男や女が黒塗りの車から出てきては、ホテルまでの短い道のりを、ベルボーイらに付き従われて闊歩していた。

さゆりも慣れた調子でホテルの前に車を横付けすると、隆志を下ろした後、迎えに出てきた馴染みのボーイに車のキーを渡し、面食

らっている隆志を手招きしてホテルの中へと入って行った。

「驚くことないから」

さゆりが肩をすくめて苦笑する。

「友達と会うときでも、私はお店さえ選ばないの。どこで誰が見てるか分からないから、私はプライベートな時間でも、旦那に見合う「それなり」のところへ行かなくちゃならないんだって」

さゆりはわざと茶化すような口調で言いながらも、その目は少しも笑っていないかった。

「私が外で今でも会うのは、理穂子とこれから来るサプライズゲストだけよ。こんな気詰まりなところにしかいられないなら、せめて自分の好きな人たちだけに会いたいって思わない？」

隆志はこちらを振り返ったさゆりを、改めて見つめなおした。

眼鏡を外し、髪をアップにして上質のベルベットのコートを羽織った彼女は、隆志の記憶の中の、中学・高校時代のどことなく垢抜けないお下げ髪の少女と比べたら、別人のように美しく洗練されていた。

しかし、内気そうでいながら、いつも好奇心いっぱい、目をキラキラ輝かせて理穂子たちとはしゃいでいた彼女の方が、今よりも遙かに生きる力に満ち溢れ、幸せそうに見えた。

「サプライズゲストって、何だよ？」

「だから、それはお楽しみ……あ、理穂子が来てる！」

ラウンジのボーイに羽織っていたコートを手渡すと、さゆりは伸び上がって一番奥の窓際の席に向かって手を振った。

向こうのテーブルからも手を振り返してきた。隆志が目を細めてその席を見やると、黒いパンツスーツ姿の理穂子がこちらに気付いて、照れくさそうに軽く肩をすくめて微笑んだ。

「……驚いた」

隆志はぎこちなくテーブルまで近づくと、頬杖を付き無邪気にこちらを見上げる理穂子に言った。

「パンツなんか、履くんだ」

「一張羅だけど、似合ってる？」

おどけて笑う理穂子に、隆志は耳まで赤くなりながら曖昧に頷いた。

「私もパンツなんだけど、私にはお褒めの言葉はないの？」

見ればさゆりも、コートの下は理穂子と似たりよつたりのパンツスーツ姿だった。

図つたような二人のいでたちに、隆志は困惑の色を深くした。そんな隆志を見かねて、さゆりがペロリと舌を出した。

「今夜の主役はね、実は私たちじゃないの。これからくるゲストが本当の主役。島貫君も一緒に祝ってあげて」

「祝うって何を……？」

隆志が言い終わらないうちに、理穂子が先ほど隆志たちが入ってきたラウンジの入り口を指差して声を上げた。

「伊藤君！」

「おーい、こっちこっち！」

さゆりも理穂子に続いて、伸び上がって入り口に現れた青年を手招きする。

「伊藤って……」

戸惑う隆志の前を素通りして、青年は真つ直ぐに理穂子とさゆりの元へやってきた。

「何だよ、お前ら。こんなところに呼び出すなら、着替える時間くらいくれよ。緊急の用だって言うから、仕事の途中でこんな格好で来ちまったよ」

青年は着古して汗染みの浮き出た作業着の上下を着ていた。

「格好なんてどうだっていいからさ、とにかくこっち座ってよ。お誕生日席ね」

さゆりはそう言うと、上座に二つ並べた椅子の一つを引いて、青年を導いた。

「なんなんだよ、一体。分けわかんねえな」

青年は怪訝な顔をしながらも、さゆりに薦められるまま、素直に

席についた。

「ねえ、伊藤君。今日は珍しいお客さんと呼んでるんだけど、分からないかな？」

理穂子は、椅子に座った途端に、首に巻いたタオルで汗を拭いた青年に向かって言った。

「珍しい客？」

汗が目に入って染みるのか、青年は片目をつぶったまま理穂子を見やった。理穂子はそのまま身体をずらして、背後に立つ隆志を示した。

青年は眉根を寄せて隆志を見つめる。

「あっ！！」

その時、青年は椅子から立ち上がり驚きに目を見開いて隆志をに向かつて指を指した。

あまりにも勢いよく立ちすぎたために、椅子が後ろへひっくり返り、静かなラウンジに椅子の倒れる音が響き渡った。

上品に装った客たちから、非難の視線が向けられる。

「あ、すみません」

さゆりが青年の倒した椅子を起こしながら、肩をすくめて周囲に頭を下げる。青年はそんな状況を無視して、構わずツカツカと詰め寄るように隆志の元へ寄ってきた。

「お前！ お前、島貫かつ！」

「……久しぶり」

隆志がボソツと返答すると、青年はガツと強い力で隆志の肩を掴んだ。

「本物か？ 幽霊とかじゃねえよな。お前、生きてたのかよ！」

荒っぽい再会の挨拶に、隆志の口の端が思わず緩む。

かつて本人が気にするほど、男にしては色白で血色の良かった肌は、長年肉体労働に従事してきた者が放つ独特の土色を染み込ませ、精悍さを帯びていたが、笑うとなくなってしまうような細い目は昔の面影のままだった。

「伊藤、また痩せた？」

「俺は昔から痩せてるよ！」

青年 伊藤健吾は、隆志の肩をボソツと勢いよく叩いて抗議した。背後で二人の様子を見ていたさゆりと理穂子も、思わず笑いを漏らす。

「お前、いままでどこにいたんだよ？ 高校辞めて、急に街出てっで、今までどこでどうしてたんだよ？」

「はい、ストップ！」

隆志に詰め寄る健吾を押さえて、さゆりは言った。

「積もる話は後でゆっくりするとして、二人とも席について。今日の本当の主演が、そろそろ到着する時間よ」

さゆりは理穂子に目配せをして、健吾と隆志を座らせた。健吾は

まだ会得のいかない顔で、隆志を質問攻めにしようと思身乗り出している。

「あ！ 来た！」

その時、理穂子が先ほど健吾が入ってきたラウンジの入り口を振り返って声を上げた。

「なっ！ なんだよ」

健吾は、現れた最後の来賓を見てサッと頬を赤らめた。
ラウンジの扉の向こうから現れたのは、大きな腹を抱えた萩原圭子だった。

「圭子っ！ こっちよ」

さゆりが声をかけ、理穂子が圭子に駆け寄り手を取る。

「あんた、何でこんなところにいるのよ？ 仕事は？」

テーブルに着いた作業着姿の健吾を見た途端、圭子は驚いて口を開いた。

「お前こそ！ おい、これどうなってるんだよ、斎木？」

健吾は自分の隣の席に圭子を導いて椅子を引く理穂子に、狼狽して助けを求めるような目をして言った。

「結婚式だよ、二人のね」

理穂子はさゆりと目を合わせ、優しく微笑んだ。

「結婚式？」

圭子と健吾が同時に理穂子を振り返る。理穂子は笑みを浮かべたまま、隆志の隣の自分の席に着いた。

「二人とも、素直じゃないんだから」
「まったくだ」

理穂子の言葉にさゆりも大げさに頷いて笑う。

「お金ないからって、式も挙げないつもりだったんでしょ。こんなむやみにリッチな友達がいるのに、二人とも水くさいんだから」

さゆりは悪戯っぽくウインクをして、隆志に視線を向けた。

「……こういうことなんだ。驚かせちゃった？」

隆志は目の前の健吾と、大きく突き出した圭子の腹を交互に見比べて言った。

「……伊藤と、萩原の……？」

「そっぴいこと」

さゆりの言葉に、圭子の頬がカッと赤く染まる。

「圭子、島貫君だよ。小学校から高校まで一緒だった、覚えてるでしょっ。」

理穂子の言葉に、圭子は大きく頷いた。

「もちろん。でも、どうしてここに？」

「島貫君への質問タイムは後でゆっくり取るとして、あんたたちの馴れ初めを聞かせてあげなさいよ。あんなに喧嘩ばかりかしてたあんたたちが、大恋愛の末結ばれた話をさ」

「さゆりっ！」

圭子が真っ赤になってさゆりの肩を小突く。

「伊藤、大学行かなかったのか？」

健吾の格好を見て口を開いた隆志に、健吾は決まり悪そうにソツポを向く。

「行ったわよね。正確に言うと、まだ現役大学生」

「二十三歳で」

「大学三年生」

「二浪したから」

「長田っ！ 斎木っ！」

漫才の掛け合いのように自分の恥ずかしい過去を披露するさゆりと理穂子に、健吾の顔が羞恥に染まる。

「……私、結婚なんてしないわよ」

その時、俯いていた圭子が言った。

「そうやって、二浪もしてやっと入った大学なのに、簡単に辞めるなんて言うんだから、このバカは」

圭子は顔を上げ、隣の健吾に向かって言った。

「子ども一人くらい、産んで育てられるわよ。あなたと違って、私は高校出てから一人で働いて来たし、蓄えもある。あなたが心配して大学辞めることなんか……」
「うるせえ！」

健吾はテーブルの上を叩いて、圭子の言葉を封じた。

先ほど椅子を倒して周囲から冷たい視線を浴びたばかりのこのテーブルに、またも訝しげな視線が集まる。

「もう決めたんだよ！ バイト先の社長に、前から社員にならねえかって誘われてたんだ。俺様は筋がいいから、建設現場でも引ッ張りだこなんだよ。泣いて頼まれたから、就職してやるんだ。お前のためじゃねえよ」

「あなたが大学卒業するのを楽しみにしてたあなたのお母さんに、何て言えばいいのよ」

「男が一度決めたことなんだよ。誰にも文句は言わせねえ」

「そうだよ、圭子」

黙って二人のやりとりを聞いていた理穂子がそつと口を開いた。

「伊藤君、真剣に圭子のこと考えてくれてるんだよ。子どもが出来

たつて知った時、伊藤君、本当はすぐ大学に退学届け出してたんだ。生まれてくる子どもと、圭子、あんたと暮らすために」

「齋木！」

理穂子は咎めるような視線を送る健吾に向かって、首を横に振った。

「ごめんね、伊藤君。ないしょにしてろって言われたけど、ちゃんと直接、圭子にも言っておいて」

健吾は頭を掻きむしりながら、その場で俯いてしまった。耳まで赤くなっている。

「……伊藤」

圭子は不安げに健吾を見つめる。

「あー！ もっつ！ うるせえ！」

健吾はガバツと身体を起こし、大声で早口にまくしたてた。

「しのごの言わずに、俺と結婚すればいいんだよ！ お前はっ！」

言ってしまった後、健吾は頭を抱えて、再びテーブルに突っ伏して真っ赤に染まった顔を隠した。

「……バカ」

圭子は口元を押さえて呟いた。目尻には薄っすらと涙が滲んでいる。

「よかったね……圭子」

さゆりが席を立ち、後ろから優しく圭子の肩に手を置く。理穂子も立ち上がると、鞆から白いレースで編まれたベールを取り出し、そつと圭子の頭に載せてやった。

「私たちからのプレゼントだよ」

「おめでとう、圭子」

圭子の目から堪えきれずに、大粒の涙がこぼれる。

「理穂子……さゆり……」

幼馴染の女三人は、固く肩を抱き合いそれぞれの涙をこぼした。気まづくなつた健吾が席を立つ。

何となく、隆志もその後を追い、席を立った。

「何だよ、着いてくんなよ」

男性用手洗い所の中で、鏡に向かい埃まみれの顔に残った思わず零した涙の痕を拭う健吾は、後から入ってきた隆志に相変わらざる悪態をついた。

隆志は健吾の隣に立ち、鏡越しに健吾を見やった。

日に焼けた素顔は、少年時代よりも逞しく思えた。

「……子どもが出来て、幸せ？」

顔を上げた健吾は、尋ねた隆志に直接視線を向けて言った。

「好きな女と自分のガキだぞ。嬉しくないバカがいるかよ？」

そう言い切った健吾の顔には「何を分かりきったことを」と言わんばかりの憮然とした表情が浮かんでいる。

「……そう、だよな」

隆志は思わず頬を緩めた。

揺ぎ無い想いを宿した健吾の目は、強い光を放っていた。

守るべきものが出来た、人間の目だった。

二人して洗面所を出ると、ラウンジの扉の影から、話に花を咲かせる三人の姿を遠目に眺めた。

「伊藤、大学行きながらバイトしてたんだな」

健吾は隆志の言葉に鼻をこすりながら答えた。

「田舎じゃ多少金があるって言ったって、東京出てきたらそんなもんだかが知れてる。仕送りばっかしてもらうわけにもいかねえし。だいたい、さつきも言ったろ？俺様はどんな仕事したって人並み以上に出来ちまうから、のんびり卒業まで大学生やってないで、さつさと社会に出て働いたほうが、世のため人のためなんだよ」

そう言う健吾の手は荒れていて、血が滲んでいた。田舎にいた頃の、甘やかされた商人の倅であった彼のイメージが強い隆志には、今の健吾は別人のように強く逞しく映った。

「今だったら、お前に負けねえよ」

健吾は隆志が自分の荒れ果てた手を見ているのに気がつく、拳を握って、ニヤツと笑って見せた。

「お前昔から貧乏なくせに、俺より足長くて、顔良くて、頭良くて、女にモテるなんて生意気なんだよ！ だから、俺お前のこと大っ嫌いだったんだよ」

健吾は握った拳を、隆志の胸にドンツと押し付けた。

「でも、今は俺お前に負けねえくらい貧乏だし、カツコいいし、モテねえけど、女いるし、ガキも出来るし、絶対負けねえよ」

隆志は不敵な健吾の表情に思わずつられて笑みを零した。

「ああ、お前は誰にも負けなないよ」

健吾はフンツと鼻を鳴らして、二人は顔を見合わせて笑った。

「お前が戻ってきたのは、齋木のせいだろ？」

ひとしきり笑い終えた後、健吾は不意に真面目な顔になり、理穂子たち三人が座るテーブルに目を向けた。

理穂子は三人の中でも一際はいやいで、輝くような笑顔を浮かべている。

「齋木に男がいるの、知ってるか？」

健吾は低い声で呟いて、隆志を見つめた。

トレンチコートの幻影が、健吾の言葉とともに隆志の脳裏をかすめる。

「……注意しろよ」

健吾は目を細めて厳しい表情を浮かべる。

「早川洋介 あいつは、悪い男だ」

悪い男　　という健吾の表現に幼さを感じて可笑しな気持ちになりながらも、隆志は初めてトレンチコートの男の幻影が実態として現れたような気がした。

ハヤカワ　ヨウスケ

理穂子の今の名前は「早川理穂子」である。

「斎木の義理の兄貴だ。早川グループは元々悪どいことやって成り上がってきた企業だけど、その黒い部分を一手に担ってるのが、早川洋介だって言われてる。俺のバイト先の建設会社の親会社でもあるんだけど、ヤクザまがいのことやってるってウワサだ」
「何で……」

伊藤が理穂子と早川の関係を知っているのか？　そう問いかけて
ようとした隆志より早く、健吾は答えた。

「萩原も長田も心配してる。この五年間、斎木はずっと悩んでた」

五年

隆志が理穂子と別れていた期間だ。

「お前なら、何とかできるかもしれないだろ。俺じゃあ、無理だったけど」

健吾は顔を赤らめ、プイッと横を向いた。

少年時代から、幼い憧れを理穂子にストレートにぶつけてきた健吾の姿を思い出し、隆志は胸の奥がジンと暖かくなるのを感じた。

「……専務、早川専務」

呼ばれて、書類の束に落としていた視線を上げる。

右隣に席を構えた第一秘書の村瀬が、受話器の口を押さえてこちらを見ていた。

「お電話が入ってます。お子様、葵様からです」

村瀬の言葉に、書類と対峙するためにきつく引き結んでいた早川の唇が緩む。

「ああ、回してくれ」

早川のデスクに置かれた電話が、内線ランプを点灯させながら鳴り出す。早川はそれを取ると、耳に当てた。

「あ！ パパ？」

途端に、弾むような娘の声が耳に飛び込んでくる。

「葵か？ よく来たな。今どこだ？」

「下のロビーだよ。実もいる」

電話の向こうからは、息子の実が自分にも電話を回せと騒いでいる声がもれ聞こえてくる。

早川は受話器を押さえ、クツクと笑い声を漏らした。

「ねえ、パパ。お仕事まだ終わらないの？ 葵、お腹ペコペコだよ」

今日は早川は午前中で仕事を切り上げて、子ども二人を昼食へ連れて行く約束をしていた。

現在の時刻は午前十一時三十分。

楽しみにすぎた子どもたちは、約束の時間よりも三十分ほども早く来ていた。

「ごめんごめん、すぐ降りていくよ。ところで、理穂ちゃん先生はそこにいる？」

早川が尋ねると、葵は少々困ったような声で言った。

「うん……だけどね、理穂ちゃん先生、今日はもう帰るって。大事なご用があるから、葵たちとご飯食べないで帰っちゃうって言うてるよ」

それを聞いた早川は、思わず席から立ち上がって、葵の後ろの理穂子に聞こえるくらい大きな声で言った。

「葵！ パパはすぐ降りていくから、理穂ちゃん先生に必ず待ってもらおうように言いなさい。ね、すぐ行くからね」

それだけ言うと、早川は自席にかけてあったカルバンクラインの背広を引っ掛け出て行こうとした。

「専務？ まだ仕事が……」

「今日はこれで切り上げる。明日、朝一番で打ち合わせよろしくな」

そう言うと、早川は急いで専務室を飛び出していった。

村瀬は早川の父の代から、第一秘書として、この早川グループを見守ってきた。

早川グループを一代で築き上げた早川惣介の一人息子である洋介のことは、彼が生まれた時から知っている。

一人息子でありながら、一大企業グループにつきものの複雑な姻戚関係の犠牲者でもある洋介の生い立ちが、決して傍目に写るほど恵まれているわけではなかったことは、村瀬が一番よく知っていた。彼の冷徹なまでの仕事ぶりは、そうした不幸な生い立ちの上になりたっていると理解している村瀬にとって、洋介がある時期を境に時折見せるようになったこついつた表情に、未だに戸惑いを覚えてしまう。

息を切らせてロビーへと降りていく男は、愛情に飢えた冷徹な若き企業王ではなく、まるで初恋に胸を躍らせる高校生のようだった。

「葵っ！ 実っ！」

エレベーターホールから息せき切って走り降りてきた早川は、ロビーのテーブルに腰掛け遊んでいる二人に駆け寄った。

「あ！ パパー！」

早川の胸を目指して飛び込んでくる二人の子どもを抱きとめながら、早川は素早く二人の頬にキスの雨を降らせた。

「わあ、パパ、いい匂い」

抱きしめたりキスしたりするたびに、葵はいつもウツトリとこつと言うのがお決まりになっていた。

早川が好んでつけている、甘いムスクの香りだった。

その時、二人の子どもを抱え下ろした早川は、キョロキョロと辺りに目を配った。

「ねえ、葵。理穂ちゃん先生は？」

葵はクセのない切り下げた前髪を揺らして、心なしか不満げに唇を尖らせて言った。

「あのね、葵ね、待っててって言ったんだよ。だけど、理穂ちゃん先生ね、すごく急いであるからって、行っちゃったの」

早川の顔がみるみる子供のよつに曇る。

「なあんだ、そっかあ」

早川はそのまま先ほどまで葵たちが腰掛けていた椅子に座り、身体を沈み込ませた。

「オレも止めたんだぜ！」

実が早川の手を握って、訳知り顔で頷く。その様子が可笑しくて、早川は思わず顔を緩めた。

「ありがとな、実」

父親に髪をクシャツとやられて、実は得意げに胸を張った。

「あ！ まだいる！」

その時、葵が早川の腕を掴んで、伸び上がりながらロビーの出口を指差した。

「え？ どこ？」

「あそこ！ 早く追いかけて、パパ！」

葵の指差す方向に、早川は確かに理穂子の線の細いワンピースの背中を見つけた。

「ちょっと待ってる、二人とも」

早川はそう言うと、理穂子の元へ駆け出していた。

「待って！ 理穂子！」

有無を言わず後ろから細い手首を掴んだ。

振り返る女の顔が、手首を掴まれた痛さとそれだけではない、強い憎しみの色を宿して振り返る。

「……離して」

「昼食、一緒にしてくれるって約束してくれたら離す」

「ふざけないで」

理穂子は早川の今年三十六歳になる男とは思えない「あどけない」と呼んでもよさそうな顔を見て、イライラと唇を噛む。

早川はまだ理穂子の手首を掴んだままだ。

「昼食なんか、義姉さんといけばいいじゃない。私はあの子たちの母親でもないし、あなたの奥さんでもないわ」

ピシヤリと言っただけの理穂子にも、早川は肩をすくめただけだった。

「子どもたちも、君と行きたがってるんだよ」

「二人をダシに使うのは止めて！ 卑怯者！」

すれ違う会社の関係者に奇異な目で見られたら、少しは早川も怯むのではないかと、理穂子は大声で叫んだ。

周囲の視線は集まったが、とうの早川は周囲のことなど目に入らないというように理穂子を見つめたまま視線を外さない。

「……なんて言われたっていいよ。君の側にいるためなら、何だっ
て使ってやる」

手首を掴んでいた早川の手が上に上がり、指の痕がつくほど強く
理穂子の二の腕を掴んだ。

「……親父が、そうしたみたいに」

早川の声が暗くこもり、理穂子は思わず目を逸らした。

「……それに、今日は特別な日なんだ。君に付き合ってもらえたら、
俺も嬉しい」

「特別な日？」

不審の目で見上げる理穂子に、早川はフツと微笑んで見せた。

「……オフクロの命日なんだ、今日は」

微笑みながらも暗い影が過ぎる早川の瞳に、理穂子はすでに抵抗
する気力を失っていた。

「頼むよ。ね？」

幼い子どものように、理穂子の顔を下から覗き込む早川に、理穂
子は堪らなくなって目を逸らした。

「……分かったわよ。昼だけだからね」

早川の顔がパツと輝く。

人目も気にせず、まるでどこかの国の騎士のように、恭しく理穂子の手を取って歩き出す。

間近に寄せられた早川の顔が離れた時、一瞬、理穂子の鼻腔を甘い香りがくすぐった。

初めてこの香りを嗅いだ時、理穂子はまだ十五歳だった。

甘いムスクの香りは理穂子の胸を締め付け、取られた手の熱もあいまって、理穂子は苦しさに息を止めた。

風が温かい。

二月とは思えない春のような陽気の中、早川の両の手にぶら下がるようにして歩いている葵と実は上機嫌だった。

親子の後ろから重い足取りで着いていく理穂子は、暗い表情で風に遊ばれる自身の薄茶色の髪を耳の後ろへかき上げた。

早川の会社から車で約四十分、東京の郊外に目指す墓地はあった。少し高台になっているその場所は、息を切らせて上まで上がると、遠い都心のビルの群れが望めたりもする。

子どもたちはちよつとしたピクニック気分を味わえるこの場所がお気に入りだったし、理穂子も重い足取りとは裏腹に、この場所の眺め自体は悪くないと思っていた。

両手が塞がっている早川に代わって、理穂子が墓を清めるための水を桶いっぱい汲んで運ぶ。

手には早川が来る途中で寄った花屋で買った、生前早川の母が好きだったと言うサルビアの見事な花束が抱かれていた。

「……よく似合うよ」

子どもたちの手を握ったまま、肩越しに振り返った早川が口を開く。

理穂子はむせ返りそうな香りを放つ花束の中に顔を埋め、早川の言葉が聞こえないフリをした。

耳が熱い。

たったこれだけの気まぐれのような言葉で、心臓をわしづかみにされたような気持ちになる自分が嫌だった。

「さあ、着いた。葵、実、ちゃんとおばあちゃんに挨拶するんだよ」

墓標に大きな字で『早川』と彫られた墓の前に辿りつくと、早川は子どもたちの手を離して、その背中をそっと押した。

子どもたちは父親の言葉に素直に頷き、墓の前にちよこんと座り込み手を合わせる。

「おばあちゃん、葵です」

「実です」

声を揃えて言うその姿が可愛らしくて、側で見ていた理穂子は、憂鬱な気持ちも忘れて思わず微笑んだ。

手に抱えたサルビアの花束を置いて、座り込む二人の頭を撫でる。

「理穂ちゃん先生もだよ！」

実に手首を掴まれて、理穂子もその場に座らせられる。

理穂子は頷いて、目を閉じ、両手を合わせた。

一度も会ったことがない、早川の母親は、早川が高校生の頃に亡くなったと聞く。

「……やっぱり、似ているね」

頭上から降ってくる早川の声に、目を閉じていた理穂子が思わず振り返る。

「可笑しいね、血も繋がってないのに」

早川はそう言うと、理穂子の髪に手を伸ばした。

ビクツと身を縮める理穂子の前で、早川はそつと理穂子の髪についでいたサルビアの花びらを風に飛ばした。

昔、母に同じことをしてやったことがある

何も出来なかった母。

ただ泣くことしか出来なかった、哀れで愚かで、

美しいだけの、あの女に……

俺の記憶の中の母は、いつも消毒液の匂いがしていた

幼い頃、父に手を引かれて、月に一度のペースで白いお城へ行った。

そのお城のてっぺんには、真っ白なシーツの上で半身を起こして微笑む、長い髪のお姫様が住んでいた。

父はいつも決まって、両手に抱えきれないほどのサルビアの花束を抱えてお姫様に会いに行く。

一月前にもそうやって父が運び込んだ花が、お姫様の横の花瓶で無残な姿になっているのを、父は気にも留めない風情で、簡単に花瓶から抜き出し、足元のゴミ箱へ放り投げる。

お姫様は、いつもそんな花の様子を、少し寂しげな微笑を浮かべて見守っていた。

俺が小学校に上がる頃から、父の月に一度のお城への訪問が、二ヶ月に一度になり、三ヶ月に一度になり……半年も平気で顔を出さないようになっていた。

俺は父が寄り付かなくなったお城に、それでもせつせと通い続けた。

その城に住むお姫様が、自分の『母親』だと知ったのは小学校を卒業する頃だった。

俺の家には、他に『母親』と呼ぶ人がいた。

父親の秘書をしていたというその『母親』は、影で『鉄の女』と

あだ名されるようなクールな女だった。

だが、俺はそんな『母親』が嫌いではなかった。

不器用なその女は、まるで教科書を読んで理解するように、求められる母親像を想像し、俺のために演じていたように思う。

そう言えば、城に住む『お姫様』のところへ、父親が顔を出さなくなってから、俺の『母親』も何度か城へ訪れたことがある。

お姫様は『母親』の顔を見るといつも決まって涙を流し、何度も額をシーツに擦り付けるようにして、ポロポロと綺麗な涙を流した。

「……坊っちゃん」

お姫様は、俺のことをそう呼んだ。

「坊っちゃんは、学校の成績がいいんですってね。「お母様」から聞いたわ。きつとお父様に似たのね」

フワリと微笑むお姫様に気を良くした俺は、学校の成績表をもらうと、いつもすぐにお城へ飛んで行った。

お姫様はいつでも、嬉しそうに小さな珍客を迎えてくれた。

しかし、俺の頭を撫でるその白い腕は、年を追うごとにやせ細り、ツンと鼻を突く消毒液の匂いも強くなっていった。

「……ねえ、坊ちゃん？」

中学に上がってしばらく経った頃、入部したバスケット部の練習や何やらで、すっかりお姫様の元へ通う頻度も少なくなり、久しぶりに

病室を訪れた俺に、お姫様は相変わらずの淡い笑みを浮かべながら、少し遠慮がちに切り出した。

「……今度の日曜日、お父様に何か予定は聞いていない？」
「父さんに？」

怪訝な顔で首をかしげる俺に、お姫様は「やっぱり、何でもないの」と言っつて、頬を染めてうつむいた。
その仕草は愛らしくて、哀れになるほど少女っぽかった。

「今度の日曜、何かあるの？」

お姫様は頬を染めるだけで、それ以上口を割ろうとはしなかった。

帰宅してから、俺は家にいる『母親』に、今日の病室でのお姫様の様子を話して聞かせた。
母は眉間に深く刻まれた皺をほんの少し弛めて「ああ」と短くため息を漏らした。

「……結婚記念日なのよ。美紗緒とお父様の」

美紗緒　とは、お姫様の名前だ。

お姫様にぴったりの、綺麗な名前が俺は気に言っていた。

「結婚記念日？　だって、父さんと結婚してるのは、母さんでしょ？」

俺のもっともな質問に、生真面目なその人は再び眉間の皺を深くして、下がった眼鏡をかけなおした。

「……美紗緒は何か言ってた？」

「何も」

「……そう」

母はもう一度ため息をつくとき、そのままその話を打ち切った。

次の週末までは、母の意味深な言葉の意味や、父の様子を探りながらソワソワした日々をおくった。

父からは『結婚記念日』のけの字もなく、俺はこのままお姫様が忘れられたら、可哀想で見えていられないと思った。

しかし、金曜の夜 父親の留守に、大量の花が自宅に届いた。

大量のサルビアの花束……

昔父が、まだお姫様の元へ足しげく通っていた頃、毎週のように惜しげもなくお姫様へ捧げていた、あの花だ。

俺は胸が躍った。

父さんもなかなかやるじゃないか。

俺には何も言わずに、お姫様をこっそり驚かせるつもりなんだ。

忍び込んだ父の書斎の机の上には、小さな宝石ケースに収められた真珠のネックレスも用意されていた。

父がお姫様の元を訪れるのは、本当に数年ぶりだ。

嬉しくなった俺は、日曜日まで黙っていたいようと思ったものの、この吉報を早く知らせてあげたくて、病院へと走っていた。

白い空虚な搭の上に囚われながら、何年も少女のように愛する男の訪問を待ちわびていた、哀れな女の元へと。

それが、彼女をより深い哀しみの淵に沈ませることになるなんて、知りもせずに。

「ねえねえ、内緒だよ？」

病室のお姫様の耳元に、幼い俺は唇を近づけて、世界の秘密を話すみたいに高揚した気持ちを押さえ込んで囁いた。

「……サルビアの花がいつぱいなんだ」

俺の言葉に、お姫様の頬が染まる。

「父さん、美紗緒さんに内緒でサルビアの花用意してるんだよ」

俺は得意満面に続けた。

「真珠の首飾りまであるんだ」

お姫様は、これまで俺に見せたどんな表情よりも幸せそうな顔をして、目尻には涙まで浮かべて俺の頭をかき抱いた。

「……へへへ、楽しみにしててね」

「ありがとう、坊ちゃん」

俺はお姫様に頭を撫でられて、何か特別なことをやり遂げた英雄のような気持ちにさえなった。

日曜日は折角だから、父親とお姫様を二人きりにしてあげたい。

俺は病室へ行くのは遠慮しよう。

お姫様の幸せそうな笑顔を守るために気を利かせる自分が、少し

大人になったような気がして、誇らしくさえあった。

日曜日、お姫様が父親から抱えきれないほどのサルビアの花束と真珠のネックレスを受け取る日。

俺は二人の邪魔をしないために、日が暮れるまで友達と遊んで帰って来た。

お姫様と父親は、どんな一日を過ごしたのだろう。

父親はちゃんと、優しい言葉をかけてやったのだろうか。

お姫様の白い肌を飾る真珠は、さぞ綺麗だろう。

幸せな想像を膨らませながら家のドアを開けた時、信じられない光景が目飛び込んできた。

あたり一面に千切られたサルビアの花。

嵐が通りすぎた後のように、無残な亡骸をさらすサルビアの群れが、俺の視界を埋めた。

「早く！ 早く救急車を！」

家の中が騒然としている。

俺は履いていた運動靴を脱ぎ捨てて、家の中へと走った。

「奥様！ 奥様、しつかりしてください！」

金切り声を上げる家では古株の家政婦が、腕に真っ青な顔で横たわるお姫様を抱いていた。

「……………美……………紗緒さん？」

お姫様は口の端から泡を吹き、完全に血の気を失っていた。すぐ側で、舌打ちする声が聞こえ、俺は驚いて振り返った。

そこには、今日お姫様を喜ばせるはずの張本人、お姫様に幸せを与えられる唯一の男が立っていた。

「……………父さん？」

俺が見上げていたことに気がつく、父は苦々しい顔をして踵を返した。

ドアを閉めて二階へと消えていく足音を、俺は呆然と聞いていた。その時、強く腕を引かれ、俺は体勢を崩しその場に横すわりになった。

「……………美紗緒に、何を言ったの？」

俺の腕を強く掴んだ母は、厳しい表情で俺を見つめた。

「何って……………サルビアのことだよ！ だって、美紗緒さん、すごく楽しみにしてたじゃないか！ ずっと待ってたのに、これ以上待た

せるなんて可哀想じゃないか。父さんが、プレゼント用意してるよって、早く知らせてあげたかったんだ」

叫ぶうちに、俺は知らずに涙が溢れてきていた。

そんな俺を見て母親は深いため息を吐くと、掴んでいた俺の腕をそっと離した。

「凜子さん、救急車が来ました！」

家政婦の呼ぶ声に、母親は「今行く」と言って立ち上がり、哀しい目で俺を見下ろした。

「美紗緒を病院に連れて行ってくるわ」

短くそう告げると、お姫様を抱く家政婦と一緒に、静かに部屋を出て行った。

残された俺の肩の上に、千切られたサルビアの花びらの残骸がそっと舞って落ちた。

明かりの消えた病室の中で横たわるお姫様の身体からは、消毒液の匂いと一緒に、サルビアの甘い香りが漂っていた。

俺はお姫様の傍らに寄り添い、そんな俺の隣には母が立っていた。

「……何があつたの？」

静寂に包まれた病室の中では、自分の声が思いのほか響いて、俺

はお姫様が目を覚ましてしまっんじやないかと心配になった。
しかし、お姫様は相変わらず深い呼吸を繰り返し、目覚める気配はなかった。

「家に、美紗緒が来たの。車を呼んで、私にも内緒でね」

母はかけていた眼鏡の淵に手をやると、心底疲れたように息を吐き出しながら言った。

「……自分への花だって、勘違いできたら良かったのに」

母のその言葉は、俺にと言うより、自分自身に向かって言った言葉の様だった。

「父さんの花は、お姫様のためじゃなかったの？ 真珠のネックレスも？」

母は俺の質問には答えずに、ベッドのお姫様のタオルケットをそっと掛け直してやった。

「美紗緒は昔から、感の強い子だったから」

俺は、口から泡を吹いて倒れていたお姫様の姿を思い出していた。そこら中に散らばった花の残骸。髪を振り乱しながら花を千切っているお姫様の姿は、痛ましすぎてそれ以上考えたくなかった。

俺は黙って、病室を飛び出した。

家に帰れば、すっかり花は片付けられていて、いつものように取り澄ました空間が広がっていた。

俺はズンズン足音を響かせながら、父の書斎に向かった。

明かりはついていないのに、父の姿はなかった。
俺は構わず書斎に入ると、父の机の引き出しを片っ端から開けて
いった。

サルビアの送り先を突き止めたかった。

その時、ひっくり返した机の中に収められた英和辞典の中から、
ヒラリと一枚古びた写真が落ちてきた。

拾い上げたその写真の中には、髪をお下げにした高校生くらいの
愛らしい少女の姿が映っていた。

薄茶色の髪の後れ毛が、うなじの辺りで踊っている。

すると、英和辞典の隙間から、もう一枚何かがひらりと落ちてき
た。

グリーディングカードだった。

そこには父親の字で、こう書いてあった。

『 出産、おめでとう。女の子とのこと……きっと、あなたに似
て、美しい女性に成長されることでしょう』

俺は無意識のうちに、その写真とカードを自分のポケットの中に
ねじ込んでいた。

理由は無い。

ただ、息子の直感だった。

父の花の送り先は、この女だ。

親父が愛しているのも、この女だと。

白い塔の上に閉じ込められたお姫様は、哀しく寂しい鬼になった。たった一人で、枯れ果てた花の残骸を握り締めて。

その夜は、嵐だった。

九州に上陸した台風は、関東目指して驀進を繰り広げ、庭の木々は狂ったような唸りを上げていた。

母が長年勤めてくれた家政婦と一緒にあって、屋敷中の雨戸を閉めて回る。

びしょぬれになりながら、俺も必死になって手伝った。

「……こんな天気の日には」

母がうつむき、薄い唇を噛む。

「美紗緒が心配だわ」

遠くの方で鳴り響く雷鳴に俺が震え上がると、母は一瞬びっくりしたような顔をして俺を見て、それから不器用に笑った。

「やっぱり親子ね。美紗緒にそっくり。あの子も、小さい頃から雷が苦手だった。今の洋介みたいに、雷の音を聞くたびに震えてたわ」

母の骨ばった手が俺の肩にかけられ、ぎこちなく俺の肩を撫でる。

鉄の女

そんな見も蓋もない言い方で陰口を叩かれていたこの「お堅い」女は、見え透いたリップサービスもしない代わりに、裏表もウソもなかった。

「……母さん！」

「なに？」

俺は突然説明のつかない不安に襲われ、その女の骨が突き出ていそうなほど細い肩を掴み返した。

「怖いのか？」

母には俺の不安が伝わらず、クスツと笑いをこぼした。

「大丈夫よ。音はまだ遠い。この屋敷に落ちたりしないから」

そうではなかった。

確かに雷は苦手だったが、俺の不安はもつと説明の付かない、心の底から湧き上がってくるような不安だった。

「もう寝なさい」

母はそう言うと、俺を寝室へ促した。

「お姫様のところへ行くの？」

「そうね、ちょっと様子を見てくるわ」

俺をベットに寝かせるとタオルケットを俺の肩まで引き上げて、母は踵を返した。

「母さんッ！」

母はゆっくりと振り返った。

何でそんな気持ちになったのかは今でも分からない。

それでも、その時俺の口について出た言葉が、あの人に告げる最後の言葉になった。

「ありがとう、母さん」

母は一瞬怪訝な顔をして、それからぎこちなく微笑んだ。

『酷薄そうだ』と言われていた薄い唇は、笑みの形に曲がれば、丹精で美しかった。

母は何も言わずに、ドアへ向かった。

暗い部屋の中から、細く明かりがもれているドアの隙間に向って歩いていく母の背中が、頼りなく消え入りそうなほど細かった。

「昼間はあんなに晴れていたのに……」

高層ビルの最上階、VIP専用のスイートルームの窓から都会のネオンの海を見下ろしながら、早川は荒れ狂う風の音を聞いていた。ビルの隙間を吹きすさぶ風は、人間の悲鳴のように、細く長く哀れな声音を響かせる。

「君は雨女ならぬ、嵐女？」

振り返った早川は、年齢に似合わぬ幼い笑顔を浮かべる。

普段は男性用ヘアートニックでバツクに撫で付けた髪を、シャワーの後はさらりと前髪をたらししている。

そのせいで、風呂上りの早川は、いつもまるで理穂子と同世代かそれ以下の少年のように見える。

それがまた、理穂子の胸を締め付ける。

理穂子はベッドの端に軽く腰掛けたまま、忌々しげに窓辺の早川を睨みつけた。

「そんな怖い顔しないでよ。理穂子に会う時はいつも嵐だったなあって、思っただけ」

早川は屈託なく笑うと、また荒れすさぶ街の様子に目を移した。

「初めて会った時も、嵐だった」

覚えてる？

そう尋ねるように、早川はガラス窓に映った視線越しに、理穂子に向かつて首を傾げる。

理穂子は舌打ちをすると、ギョツと手元のシーツを握り締めた。

覚えているか、なんて。

どんな恥知らずな顔をして今更尋ねてくるのか。
忘れられる筈がなかった。

自分は初めてこの男に会った時から、囚われていたのだ。

どんなに抗っても抗っても、自分の意思さえも押し流して、運命はこの男を連れてきた。

嵐とともに。

理穂子に逃げる術などなかった。

今日のように、墓参りの後、実や葵を早川の自宅に送り届けた後、なじりながらもホテルに誘う早川の後を付いてきてしまった。

この男が寂しそうな顔をするのは、狡猾さ故なのだと思えないわけではない。

理穂子を意のままに操るための作戦で、自分はまたしても体よく遊ばれているだけなのだ。

それは、理穂子の自尊心をスタスタにするのに十分な仕打ちであるのに。

分かっている。

分かっているのに。

なぜ今なお自分はこうして、都会から遠く離れた天上の隠れ家で、この男と向かい合っているのだろうか。

「シャワー浴びてきたら？ シーツまで濡れちゃうよ」

早川が苦笑しながら理穂子が腰掛けているベッドを指差す。

確かに、このホテルに逃げ込む前に雨に降りこまれた理穂子と早川は、全身濡れねずみになっていた。

早川はいち早くシャワーを浴びたが、理穂子は頑なにベッドに入らばりついていた。

春はまだ遠いこの時期、雨で濡れた身体は徐々に冷えてきて、やせ我慢をしても、理穂子の唇は色を失ってきていた。

「風邪引くよ、ほら」

見かねた早川が自らの首にかけていたタオルをとって、理穂子の濡れた頭に乗せる。

咄嗟に振り払おうとしたが、それより早く、早川がタオルの両はじを持って、理穂子の頭をすっぽりと覆った。

間近に近づいた早川の顔に、無意識に理穂子の呼吸が止まる。

シャワーを浴びた後なので、あの理穂子をいつも悩ませる胸が詰まるムスクの香りの代わりに、仄かな石鹸の清潔な香りが漂ってくる。

この匂いの方が早川には似合っている

咄嗟にそんなことを考えてしまう自分を、理穂子は心の中で大きく叱責した。

「理穂子はいつも、タオル持ってないね」

早川の瞳が優しく緩む。

「雨はいつ降るか分からないんだから、いつ濡れてもいいように準備しておかなきゃ」

そんなことできっこない。

もし、そんなマネが出来たら、自分は早川と会おう前に様々な予防線を張れただろう。

決して墮ちないように。

囚われたりしないように。

なのに……

突然の嵐のように、この男は現れた。

理穂子が濡れないための傘も、濡れた痕を拭い去るためのタオルも、用意できないうちに。

パンツッ！！

乾いたピストルの音とともに、陸上部員達は一斉に100メートルのコースに吐き出されて行く。

三年生が引退した後の秋、まだ残暑の厳しさが残る放課後のグラウンドで、新しく部を引つ張ることになった中学二年生の理穂子たちは、張り切って練習に励んでいた。

「斉木、お前いいタイム出すようになったな。この分じゃ、新人戦かなり期待できるな」

「はい、頑張ります！」

顧問の教師の言葉に、肩まで届くか届かないかの薄茶色の髪を一つにまとめた理穂子は、ダッシュの後の大きく波打つ胸を押さえながら元気良く返事をした。

絶好調で何本かスタートダッシュの練習をしているうちに、今までカラッと晴れ上がった秋の青空が、見る見る東の空から雲行きが怪しくなってきた。

「おーい、雨が降る前に上がるぞ！」

顧問の一声に、理穂子たち部員は少し早めの帰り支度を始める。理穂子が等間隔に置かれたハードルを両肩に一つずつ引つ掛けて立ち上がるうとしたとき、ついに雨粒がポツリと理穂子の頬を打った。

「あ！ 振り出した！」

グラウンドのあちこちで悲鳴が上がる。

一つ大きな雨粒が落ちた後は、まるで堰をきったようにあつという間に土砂降りの雨が降り注いだ。

部室棟まで走る間に、理穂子たちはあつという間にずぶ濡れになった。

「ひー、まいった」

「理穂子、あんた傘持つてる？」

「持ってない。私自転車だから、ダッシュで帰るよ」

濡れた練習着をぬぎながら大騒ぎする部員でこつた返した部室を、理穂子はいち早く抜け出した。

雨宿りするという手もあったが、折角部活が早く終わったこの貴重な日を、雨宿りごときで潰してしまうのは勿体ない。

どうせここまで濡れているのだから、今更家に着くまでに濡れたって変わりない。幸いまだ空気は暖かく、すぐに帰ってシャワーでも浴びれば、風邪を引くほどのことでもないだろう。

理穂子は部室裏に止めてあつた自転車に跨ると、勢いよく校門を飛び出して行った。

校門を出てから大通りに入るまでには、小さな信号が一つある。

赤を灯すその信号の前で止まると、ツイてないなあと理穂子は軽くため息を吐いた。

自転車を漕ぐのをやめた理穂子の肩には、今まで後方に吹き飛ばしていた雨の雫が遠慮なく理穂子を濡らして行く。

その時、スツと音もなく自分の横に大きな外車が止まった。

ピカピカに磨き上げられたその高級外車は、この近所で拝めるような代物ではなく、理穂子はマジックミラーになったその窓に、濡れねずみになった自分の姿を映して思わず肩をすくめた。

母が離婚して実家のあるこの街に越してくる前は、卸問屋の一人娘としてそれなりに裕福な暮らしをしていた理穂子だったが、それでもこんな高級外車を乗り回すような身分ではなかった。

きつと一生自分には縁のない世界の代物であろうそれを、好奇心も手伝って横目でチラチラと見ていると、不意に後部座席の窓が静かに下がった。

ギョツとした理穂子が思わず掴んでいたハンドルのバランスを崩し転びそうになると、後部座席に座っていた男は窓から身を乗り出し、理穂子の自転車を支えてくれた。

「あ！ す、すみません」

理穂子はがチラチラ見ていたことがばれたのではないかと、真っ赤になって俯くと、男は笑いながら言った。

「いや、こちらこそ、驚かせてしまって悪かったね。大丈夫？」

仕立ての良いスーツに身を包んだ男は、後部座席の扉を開けて車の外へ出てきた。

男の高そうなスーツの肩が、容赦なく雨粒で濡れる。

「ずぶ濡れだね、部活の帰り？ 汗をかいたあとにこんな雨に濡れ

たら、風邪を引くよ」

理穂子が何も答えないうちに、男は車の中から洗いたてのタオルを取り出し、理穂子の頭の上に放った。

洗剤の匂いに混じって、微かにだが男の身体から発せられるのと同じ香りがした。

甘いムスクの香り。

理穂子の父の智之も香水をつけるような男ではなかったので、理穂子は生まれて初めて嗅ぐ芳香に頭の芯がジンと痺れるような感覚を受けた。

「……あ、すみません」

理穂子は正気を取り戻して、慌てて手にしていたタオルを男に返そうとした。

男は両手を軽く上げて、それを受け取らないポーズをとって笑った。

「君にあげるよ。傘の代わりにはならないけど、被っていけば少しは濡れなくてすむんじゃない？」

理穂子は赤くなって俯くと、軽く会釈を返して自転車のペダルを強く踏んだ。

信号はいつの間にか青に変わっていた。

気恥ずかしさから素早くその場を立ち去った理穂子の後姿を、男は雨に打たれた肩も気にせずに、じっと見送っていた。

口元から笑みは消え、代わりに冷たい光が目の奥に宿る。

「……洋介様、今の方が……」
「言われなくても、分かっているさ」

男の声は冷たく、アスファルトを叩く雨の音に吸い込まれて消えた。

あの雨の日が、理穂子と早川洋介の初対面の日だった。

雨の中、仕立てのよいスーツの肩が濡れるのも構わずにタオルを放った男と、理穂子は思いがけず、すぐに再会を果たすことになる。

小学校六年生で父の故郷を飛び出してきた理穂子たち母子は、理穂子の母の実家に身を寄せていたが、母はある日突然に「再婚する」と言ってみ知らぬ初老の男と若い男を連れてきた。

母がそんなことを言い出す少し前、もともと華美に着飾らなくとも少女のように美しかった母が、薄化粧を施し出かける機会が多くなった。

それでもまさか、母が簡単に「再婚」を口にするとは、理穂子には思ってもみないことだった。

止むにやまれぬ事情で父の智之と別れた母だったが、理穂子は未だに母は智之を愛しているのだと何の根拠もなくも信じている節があった。

しかし、降って沸いたような「再婚相手」を伴って現れた母は、これまで理穂子が見たこともないほど、幸せそうな表情を浮かべていた。

事業をしていた理穂子の祖父母の会社と取引があったという惣介は、理穂子の母がまだ幼い頃からこの家に入りし、理穂子の母の成長を見てきたということだった。

「お母さんの若い頃によく似ているね」

そう言つて目を細めた惣介は、一代でありあまる財を成した、冷徹な企業家ではなく、まるで初恋を知つたばかりの少年のような、恋に酔つたような目で理穂子を通して昔の母の面影を追っていた。

母もそんな惣介の言葉に頬を染める。

理穂子は母が智之意外にもこんな表情を見せることを、初めて知つた。

「今日から君の兄になる、洋介だ。十三も年が違うから、話し相手にはならないだろうけど、仲良くしてやってくれよ」

そう言つて紹介されたのは、紛れもなくあの雨の日にムスクの香りを立ち上らせながら、理穂子にタオルを貸したあの男だった。

理穂子の心臓が、またゾクリと粟立つ。

穏やかな笑みを浮かべ手を差し出す男に、理穂子はなぜか自分の右手を差し出すことを躊躇した。

今思えば、この時すでに予感があったのかもしれない。

囚われる、予感が。

これからこの男と堕ちていく、深い闇と狂おしい痛みばかりの恋の予感が。

畏だ。

不意打ちの。

シーツを噛みしめ目の端から涙を零しても、身体を感じる以上の激痛を心に刻まれる、この世で一番残酷な畏だ。

畏に落ちて血を流した打ち回る自分を、あの男は上から見下ろして嘲笑っているんだと思っていた。

自分は傷一つ負わず、余裕の笑みを浮かべて、傷ついた自分を眺めて楽しんでいるのだと。

いつそ、そうであれば良かったのに。

そうしたら、何も迷わず、あの男への憎しみだけで立っていられたのに。

立ち尽くすあの男の足元に歯を立て、引きずり倒すことに躊躇などなかったのに。

どうして、同じ痛みを分かち合おうとするのか。

あの男はいつもそうだった。

私をめちゃくちゃに痛めつけながら、自分も好んで血まみれになった。

私が追った傷以上の傷を自分で自分に刻んで、これ以上ないほど幸せそうに微笑んだ。

それに気がついた時、畏は完成された。

囚われて、抜け出せない。

何も知らずに蹂躪されていた少女の頃の方が、心はよっぽど自由でいられた。

純粹な憎しみが、心を支えてくれていた。

あの男の傷になど、気づきたくなかった。

それは私を癒すどころか、より深い傷となって心の深淵を抉るのだから。

理穂子は隣で横たわる早川の裸の胸を見つめていた。

浅い呼吸に伴って、鍛えた胸板が規則正しく上下する。

事の終わりに、こんな風に冷静に早川に視線を向けられる自分を、理穂子は心の中で嘲笑した。

初めてこの胸に抱かれた時、理穂子はまだ十四歳だった。

中学二年生、急遽部活がなくなり早く帰宅した理穂子を、その年の秋に再婚し新しく兄になるという早川洋介が、一人待ち構えていた。

祖父母も母も出かけていて不在であるのに、新しく家族になるとはいえ他人の早川が一人上がりこんでいるのが理穂子には引っかけだったが、紳士的な笑顔で、用があつて理穂子の家に寄つたら、少しの間留守を頼まれた説明する早川に、それ以上疑問は持たなかった。早川と二人きりの家の中は、静か過ぎてお互いの鼓動と呼吸の音しか聞こえないような、不自然な静寂に包まれていた。

会話もなく張り詰めた均衡を破つたのは、早川の方だった。

何の説明も、弁解も、労わりもなく。

意味など何もないように。

早川は簡単に理穂子の手を引いた。

そして、理穂子は簡単に落ちたのだ。
抵抗する術も知らぬ間に。

早川の腕の中、一生囚われて抜け出せない、牢獄に。

「泣いてるの？」

ふと気づけば、眠っていると思っていた早川が目を覚ましてこちらを見ていた。

理穂子は言われて初めて、自分の枕が濡れていることに気がついた。

しかし、早川にそれを悟られるのが嫌で、シーツの端で乱暴に涙を擦った。

「赤くなってる」

早川はそう言うと、理穂子の目元に人差し指を伸ばした。

男にしては華奢で細長い指だ。早川は器用に理穂子の目の端に残った涙の雫を拭い取った。

「……私は、泣いたりしない」

憎憎しげにつぶやく理穂子に、早川は少し寂しそうに笑った。

「今までにいっぱい泣いたからね」

俺のせいか……そう言って肩をすくめるこの男を、理穂子は心底

憎いと思った。

「君は、泣いてばかりいたね」

早川は寝返りをうつて、頭の後ろで手を組むと天井を見上げた。

ただ泣くことしか出来ない幼い少女。

早川の理穂子に対する想いはそれだけだったはずだった。

復讐の矛先として選んだ、この少女を、自分は一体いつからこんなにも愛するようになったのだろうか。

理穂子の無知と弱さは、自分にとって恰好の餌食だった。

何も非のない幸せに満ち溢れた少女を、あの日自分は蹂躪した。

何の前触れもなく、何の意味も与えることなく。

欲望ですらない。

痛めつけられる意味も分からぬままに、理穂子は泣きじゃくった。

その日から何度も何度も繰り返し、理穂子を抱いた。

理穂子が誰にも相談できぬことも全て計算ずくだった。

自分がされることの意味を与えてやることさえ拒んだ。

何もかもが、全て意味のないこと。

傷つけられる理由のよりどころなど、与えてやるものか。

お前に、意味などないんだよ。

あの人に、意味などなかったように。

だが、そんな状況の中でも、理穂子が少女らしい恋をしていることにも気がついていてた。

部下に調べさせた理穂子の恋の相手は、まだこの街に越してくる

前、理穂子がまだ父親の元で暮らしていた時からの幼馴染の少年だった。

後をつければ、喫茶店で楽しそうに少年と談笑する理穂子の姿を目にした。

自分との地獄のような関係を結びながらも、理穂子は決して汚れないことを見せ付けられた気がした。

少年のために男物の手袋を編む理穂子が憎らしかった。

少年の母親が不幸な事故で死に、少年が理穂子の前から姿を消したことを知った時、また一人で残された理穂子に暗い満足感を覚えたのと同時に、心のどこかで安堵したのも事実だった。

理穂子は、俺の籠の鳥だった。

誰にも触れさせず、痛めつけるのも、気まぐれに慈しむのも俺の気持ち一つだった。

吐き気がするほど憎んだ父親とそっくりの生き方を俺もなぞっていた。

そんな時、理穂子が俺の子どもを身ごもった。

高校二年生の終わり……。

友はみな将来の進路を決めるような時期であり、何もしなくても、若さがキラキラと輝きを放つような年頃だった。

その中で、理穂子だけが突然の闇に八方を塞がれた。

俺が仕組んだ、巧妙な罠にはまって。

身体の異変に気がついた時、既に私は何が自分の身に起こっているのか確信した。

年端もいかない少女の頃から早川との誤った関係を続けてきた私は、見た目とは裏腹に、同世代の少女たちよりもずっと気持ちが悪く感じていた。

そんな私にとって、幼い頃から抱いていた島貫君への淡い想いは、早川の闇に抵抗し、普通の少女でいられるための唯一の砦のようなものだった。

島貫君が私の前を去ってから、私は闇に抵抗する術を全く持たなくなっていた。

「助けて……」という私の叫びは、誰にも届かず、抛りどころのない私は、闇を生み出した張本人に気持ちをぶつけられしかなかった。妊娠を告げた時の、あの男の言葉を今でも覚えている。

(君は、産まないよ)

驚きでも労わりでもなく、顔色一つ変えずに、あの男は言った。

(俺の子だから、産まないよ)

だったら、なぜ？

本当に、ただ何の意味もなく、少女の頃から繰り返されてきたあ

の行為は、自分が憎まれるため、そしてその憎しみに私が苦しむのを見るためだけのものだったのだろうか。

何のために？

何の生産性もない、愛の真似ですらない私たちの関係は、一体何なのか。

罪深い私たちが悪戯に作ったこの命の代償も払わずに、私たちはこれからのものごとこんな意味のない関係を続けて行くのだろうか。

雪が降っていた。

病院には、早川本人ではなく、彼にいつも影のように付き添っている初老の側近の男が着いてきた。

その男から何か聞けるわけでもなく、高校二年生だった私は、自分の罪深さと、もう後戻りできない領域に足を踏み入れたことを感じた。

もう、島貫君と無邪気に年相応の恋を夢見ていた自分とは違う。早川との関係が始まったばかりの頃、幼いながらの抵抗として、髪を赤く染め、父や島貫君が住む町へ帰った。

スナツク『不知火』に置いてもらい、優しい人たちに囲まれた。あの頃から、もう随分と遠くに来てしまった気がした。

白い雪道を影のように陰気な男と連れ立って歩きながら、私は自分の足跡が刻まれる様を見つめながら、暗い決意を固めていた。身勝手に奪った命の報いを受けよう。

罪深い、私とあの男、二人で報いを受けるのだ。

その物語の結末を思い出せない。

幼い頃、何がそんなに気に入ったのか、私は寝る前に母にせがみ、その話ばかり飽きもせず繰り返して聞いてきたと言うのに。

海に住む、無知な人魚の末娘は、陸の上の薄情な王子の寝室に忍んで行った。

胸に、姉たちが多大な代償を払って海の魔女から譲り受けた短剣を抱いて。

私が今胸に抱いている短剣は、目の前の薄情な王子と私自身が、無責任に奪った命の代償で出来ている。

あの男は、カーテンすら閉めずに、ベットの上で無防備に寝ているから、顔を見ずにひと思いにあの男の胸に突き立ててやりたかった私の決意をグラグラと揺さぶる。

こんな時まで、本当にずるいのだ。

青い月の光が、狡猾なああの男の顔を、無邪気な少年のように惑わして私に映すから。

汗で滑る手を履いていたスカートの脇で拭いて、もう一度刃物の柄を握りなおす。

静かな夜の底では、目の前の男の規則正しい寝息の音と、うるさいぐらいに耳の奥で脈打つ自分の鼓動の音しか聞こえない。

音を立てないように、男の傍へ歩を進める。
握った刃物の刃が、窓の外に行く車のライトに照らされて、鋭利な光を反射する。

知らずに、涙が溢れてきた。

十四の年から囚われてきたこの牢獄を開く扉が、今日の前にある。

この手を振り上げて、目の前に突き立てれば、長かった私の地獄が終わる。

人魚のように、海にはもう帰れないだろうけれど。

細く開いた窓から入り込んできた夜風が、男の額の髪をさらさらと撫でて揺らした。

男が軽く身じろぎをする。

息を吸い込んで、目をつぶり、思い切り刃物を掴んだ両手を振り上げた。

もう、何もかも終わり。

その時、振り下ろした手首を強い力で掴まれた。

涙で歪んだ視界の隅で、ベッドの中から、私を見上げる男の顔が見えた。

防ぎきれず、刃先は男の胸を浅く刺し、ゆっくりと薔薇の花が開くように、真紅の血が男の胸を汚していった。

薔薇を胸に咲かせた男は、驚きでも怯えでもない奇妙な表情を浮かべていた。

こつという表情を何と呼ぶのだろうか。

ああ、そつだ。

それは、「歓喜」の表情だった。

「また、俺を殺しに来たの？」

早川は、胸を汚す血の痛みに表情を歪めることもなく、理穂子に言った。

また？

震える理穂子の手首を握りこんだまま、早川はゆっくりと身体を起こした。パジャマに染み込んだ薔薇が、一筋の線を描くように早川の下腹に伸びてゆく。

「俺も、連れて行くつもりだった。ねえ、そうだろう？」

胸を押さえていた早川のもう片方の手が、理穂子の色を失った頬に触れた。至近距離で目を合わせると、理穂子の瞳から大粒の涙が溢れ出した。

「嬉しいよ」

早川は、ハッキリとした口調で言った。

嬉しい

理穂子は意味が分からず、早川に触れられたまま涙を流し続けた。

「昔ね、一人のお姫様がいたんだ」

早川は理穂子から目を逸らすことなく、淡々と言葉を紡ぐ。

「一人の王子を愛しすぎた、哀れなお姫様が。お姫様は、白い塔に閉じ込められている間に、王子はとつくに、別の女を好きになっていった。いや、違う。本当はお姫様をもらう前から、王子には好きな女がいたのさ。身分違いで結婚できなかったその女を愛し続けるには、頭の弱い綺麗なお姫様を奥方として迎えるのが最適だったんだ」

早川の表情は変わらない。むしろ、穏やかな笑みさえ浮かべていた。しかし、理穂子の手首を握る力はどんどん強くなる。

「王子様はね、白い塔にお姫様を幽閉して、随分長い時間、お姫様を騙すのに成功したよ。サルビアの花を贈られるくらいで、王子様の愛を信じて疑わないような、馬鹿なお姫様だったから。だから、自分が愛されていないと気づいた時、お姫様の小さな世界も終わった。長い間見続けた夢の代償は、お姫様一人には背負いきれないほど、大きかったんだ」

それは、嵐の晩だった。

こんな夜には、美紗緒が心配だ　　そう言って、『母さん』は嵐の中を出て行った。

つい先日、狂乱して家に押し入り、サルビアの花をメチャメチャに散らせていったお姫様を心配しての行動だった。

『母さん』が出て行ってから、雷の音に怯えながら布団を被って

寝てしまった俺は、真夜中に玄関の開く音で目が覚めた。

外は相変わらぬ雨と風で、窓ガラスをガタガタと不気味に揺らしていた。

『母さん』が帰ってきたと思いホツとした俺は、再び布団の中にもぐりこみ、目を閉じた。

暫らくすると、ミシミシと階段を登る音が響いて、俺の部屋の前で止まった。そのまま、ドアが開く音。

開け放されたドアの方から、外の湿った雨の匂いが流れてきた。

俺は顔を上げようと思いつつも、眠気には勝てず、その足音が近づいてくるのを夢現の中で聞いていた。

やがて、俺の頬に、ポタリと冷たい水滴が落ちた。

片目を上げて水滴の先を見上げると、そこには全身濡れねずみになったお姫様が、俺を見下ろしていた。

水分を含んで重くなった腰まで伸びた長い髪が、俺の首を絞めるようにまとわりついている。

いつもの優しいお姫様とは違う、悪鬼のようなその有様に、俺は魔法をかけられたように動けなくなった。

「…………お、ひめ…………さま？」

ようやく絞り出した声の先で、お姫様の手に握られた銀色のナイフが、鈍い光を反射した。

「何…………してるの？」

絞り出した俺の声は、みっともないくらいに掠れていた。窓の外で光った稲妻が、お姫様の顔を一瞬映した。

それは、もう『お姫様』などではなかった。

瞳孔が開いたような血走った目で俺を見下ろし、病的に痩せこけた頬に濡れた髪を張り付け、閉まりなく呆けた口の端からは唾液

を垂らしながら、お姫様は両手に持ったナイフを振り上げた。

「やめてっ!」

「美紗緒っ!」

俺の悲鳴と、その女の声はほぼ同時だった。

戻ってきた『母さん』が、僕の部屋のドアの前に立ち尽くしていた。

一瞬、動きを止めたお姫様に『母さん』は体当たりするように挑んで行った。バランスを崩したお姫様が、俺のベッドの上に奇声を上げながら倒れこむ。

「美紗緒っ! 止めなさい。洋介よ。この子は、あなたの息子の洋介! 惣介さんじゃないわっ!」

ベッドの上を悪鬼のような顔をして転げ回るお姫様にのしかかるようにして、骨と皮ばかりの痩せぎスの『母さん』は、今尚俺の命を脅かそうとしているお姫様の、手の中のナイフを離そうと必死だった。

「あー! あーっ、あーっ!」

「美紗緒っ!」

その時だった。

暴れるお姫様の手の中のナイフが、何かの魔法のように、スッと音もなく『母さん』の胸に収まった。

時間が止まる。

何が起きたのか分からない。

ナイフは、元からそこにそうしてあったとでも言わんばかりの自

然さで「母さん」の胸に突き刺さっていた。

「……………か、母さん？」

あまりにも静かなその空間に、最初に手を伸ばしたのは俺だった。安い映画のスローモーションのように、そこにいる三人が三人ともこの陳腐な芝居のオチを着けかねている、そんな妙な感覚が俺を支配していた。

早く終わらせなくちゃ。

馬鹿みたいな悪夢。

『母さん』の胸のナイフ。

危ないなあ、もう。

冗談だよって言わなくちゃ。もう、お芝居は終わりだよ。真に迫った演技だったね。お姫様、もしかして女優に向いてるんじゃない？ だけど、両手を打ち鳴らして劇の終幕を告げても、誰もその芝居を止めなかった。

止めてくれなかった。

やがて、『母さん』はゆっくりと崩れ落ちた。

ベッドで呆けているお姫様の上に、上半身を折り曲げて、真っ赤な薔薇が咲いた胸から倒れこんでいった。

「……………あ……………あ……………あ……………」

お姫様の雨に濡れた白いネグリジェも、『母さん』の薔薇を吸ってもう一輪、滲んだ花を咲かせる。

「……………姉さん……………」

お姫様は、ほんの一瞬正気に戻った目をして、もう息をしない
い『鉄の女』 俺の『母さん』の肩を掴んだ。

「母さんは、姉妹で早川家に嫁いだようなものだったんだ」

早川は胸から血を流したまま、理穂子の手首を握り続けた。

「俺の父と『お姫様』は会社のための政略結婚だったけど、『お姫様』は小さい頃から、父を見つめて育って来た。年上の憧れの幼馴染だ。親にもいつか、姉か自分があの男に嫁ぐのだと言い聞かせられてきた。それは、母さんも同じだった」

理穂子の手首を掴む力は、弱くなるどころか、もう決して外れないのではないかと思うほど強さを増している。

「母さんは、昔から癪の強い、病弱な妹に、自分の恋を譲ったんだ。女としての幸せも。結婚もせずに、『お姫様』の代わりに俺を育てて……俺を助けて……死んだ」

理穂子の瞳から知らず涙が一筋零れ落ちる。

哀れんでいるのではない。自分が受けた仕打ちを思えば、早川に同情などできるはずもなかった。

だから、この涙には意味がない。

そう思いながらも、理穂子の瞳は次から次に涙をついで、心とは裏腹に止まる気配を見せてくれない。

「母さんを死なせた『お姫さま』は、狂ったまま、俺が高校一年の春に死んだ」

早川は手首を掴んでいた手を離し、そのまま理穂子の濡れた頬へと伸ばした。

「ねえ、君は……」

早川の言葉が詰まる。

理穂子是对峙する早川の姿を、まるで鏡で見ている自分の姿のようだと思った。

いつから二人は、こんなにも似るようになってきたのか。

「お姫様が、母さんが……二人がかりでも得られなかったあの男の愛情を、その身にいと簡単に得ていった女の娘だから……」

早川の頬もいつのまにか濡れている。

鏡を覗き込むように、二人はお互いの目に映るびしょ濡れの自分自身を見つめていた。

「俺には、生きてるだけで、罪だったんだ」

二人の女の報われない気持ちを負った早川の告白は、身勝手に理穂子を打ちつけ、そして釘付けにした。

もう、無理だ。

こんなに、対峙する鏡のように自分と似ている男。

心と身体と、飽きもせずに捕え捕らわれ続けてきた男。

もう、離れられるはずが、ない

理穂子はそつと、早川の胸に手を伸ばした。

早川の胸を覆っていた真紅の薔薇のような血が理穂子の指先を汚したが、傷口が浅かったためか、今ではもう新たな血を噴出してはいなかった。

早川の赤く染まったシャツの胸元を掴み、理穂子は搾り出すような声を上げた。

「……あなたが……あなたさえ……いなければ……」

こんなに人を憎いと思う気持ちなど、知らずにすんだのに。

「……離してよ。いい加減、私を、離してよ……」

そう言いながら、早川の胸を掴んで離さないのは、理穂子の方だった。理穂子は早川の胸にすがりながら、頼むから離してくれと、泣いた。

「……ゴメン」

早川は理穂子の背に手を回す。

離してくれと懇願する理穂子の腕と同じくらいの力を込めて、理穂子の背中を抱きしめた。

「……もう、後には引けないんだ」

この手を離せるくらいなら、こんなところまで来たりしない。
早川の胸を刺した理穂子のナイフが、床に転がり鈍い光を放っている。

早川は理穂子を抱きしめながら、心の中で神に感謝した。
今まで、ただの一度も神に祈りを捧げたことなどなかったのに。

理穂子は、来てくれた。

闇の中に、たった一人で何年もの間囚われていた自分の元に。
罠に嵌めて、捕まえたこの脆弱とばかり思っていた小鳥が、今は自分の胸を強い力で捕らえ、自分を立たせてくれている。

それが罠から始まった恋でもいい。

苦しみばかりが支配する感情でもいい。

この地獄を、共に歩んでくれるただ一人の同士の手を、もう離せるはずがなかった。

身勝手だと罵られても、自分の傍にいる地獄を選んでくれた理穂子に、早川は歓喜し、暗い涙を流し続けた。

そしてその時、早川は生まれて初めての、恋を知った。

僕が無くした、空白の五年の中で

君と彼の間に灯った、宿命の烽火は、

僕の手の届かないところで燃え上がり、君を焼き尽くしていたんだね。

炎に焼かれる君が、救いを求めて伸ばした手の先を、
本当に掴んで欲しかったのは誰だったのだろう。

第6話「烽火」ほつか 完

死んだ恋の行く先を、照らす炎があつたなら
誰も迷わず、静かに彼岸へ辿り着けるのに。

小さな箱舟のようなものを持つ祖母と手を繋ぎながら、隆志は危
なっかしい足取りで夜の川へと降りる。

岸边では既に多くの人々が、祖母が持っているのと同じ箱舟を手
にして並んでいる。

祖母はそつと川辺の砂利の上にその箱舟を下ろすと、着物の袂か
ら蠟燭を取り出して、その中に立てた。

続いて同じように袂から取り出したマッチを擦って、先ほど箱の
中に立てた蠟燭に火を灯した。

「……あ」

祖母の着物の袖を掴んでいた隆志の口から、思わず声が漏れる。

小さな箱の中で灯された火は、箱の周囲に張られた和紙を通して、
淡く優しいオレンジ色の光を放っている。

気が付けば、周囲の大人たちが持つ箱にも次々に明かりが灯され、
先ほどまで、ただただ闇に包まれていた川原は、無数の淡い火玉で
埋め尽くされていた。

祖母は自分の着物の袖を掴んだまま火に見とれている隆志に気が
付いて、隆志の小さな手を上から優しく握りしめて言った。

「さあ、たーちゃん。この灯籠さんを持ちんしゃい。あそこに並ん
で、川に流すんよ」

祖母は自分の手を添えながら、隆志に火のついた箱の船を持たせた。

隆志が手に持った箱の中を覗き込むと、チラチラと燃える小さな炎が鼻先で揺れる。

「吹いちゃいけんよ」

誕生日ケーキの蝋燭よろしく、フツと吹き消してしまいそうな様子の隆志に笑いながら、祖母は箱に手を添えたまま、岸边に向かって隆志を誘う。

見ると岸边に集まった人々は、火の付いた箱の船を、川に向かって次々に流しているところだった。

隆志の番が来て、祖母が背中を押す。

隆志は闇の中をとんとんと音を立てて流れている川の水面と、箱の中の火を見比べて、祖母に促されても箱を手放せずにいる。

こんな水の中に入れたら、折角の綺麗な火が消えてしまうのではないか。

隆志の後ろの列がつかえ、祖母は苦笑しながらも更に隆志の背中を押す。

「たーちゃん、そのお船、流してあげんね。そうせんと、ご先祖様が帰り道が分からんようになって、困ってしまうばい」

祖母はしわしわの手を隆志の小さな手に添えて、そっと川面に船を浮かべた。

「ええ子やね」

祖母に頭を撫でられながら、隆志は小さな炎を乗せた無数の船が

川面を滑っていく光景を見ていた。やがて自分たちが離れた小船も、流れる火の列に加わった。

「この火は道しるべなんよ。お盆で帰ってきたご先祖さまを、あの世にちゃんと帰してあげる、道しるべばい」

祖母は流れていく舟を見つめたまま静かに言った。

「徹司も見とるばい。たーちゃんの焚いた道しるべに沿って、帰れるばい」

魂の帰るべき道を照らす「送り火」を、隆志が初めて目にしたのは、九州の祖父母の家でのことだった。

母の美華の元からさらうように連れて来られたこの遠方の地で、初めて見た死者のための火は、幼い隆志の胸の中に、美しく燃える炎への憧憬を確かに植えつけた出来事でもあった。

顔も知らぬ父のために、祖母に促されて灯した供養の火だったが、その荘厳な光景に癒されていたのは自分の方だったと、隆志はそれから大分時を隔てて思い知ることになる。

後に美華にもこっぴどく怒られながらも、なかなか止めることの出来なかつた隆志の『悪癖』である火遊びは、この幼少期の灯籠流しの光景を目にしたことに端を発していたのである。

火が『供養』になると言うのなら、隆志は幼い頃からそれこそ幾度でも、自分の孤独な魂の『供養』のために火を焚いてきた。

ある時は、母の美華の店のマツチで。

またある時は、美華の元を訪れる幾人も男の胸ポケットからくすねた百円ライターで。

だが、そんな瑣末な炎で救われた自分の魂の『供養』を、いつの日か他の人間にもやることになるうとは、その時の隆志には知る由もなかつた。

「どうしたって言うのよ。あんた、私の家に日向ぼっこでもしに来たわけ？」

窓辺に腰掛けて、埃の浮いたアルミサッシの窓からただジッと外を見下ろす理穂子に、座布団を持って行ってやりながら、圭子が呆れた声を出す。

朝早く工事現場の仕事へ出かけていった健吾と入れ替わるように、何の前触れもなく訪れた理穂子は、午前の間ずっと、飽きもせず窓の外ばかりを眺めている。

「何かいいものでも見える？」

呆けたような理穂子の頭上の窓ガラスに手をつけて圭子が問いかけた時、理穂子は初めて我に返ったように振り返った。

「……圭子」

「圭子……じゃないでしょ。ここは私の家。私が居るのは当たり前。突然やって来て、フラフラ窓辺で何時間も座りこんでる変な客なのはあんたの方よ」

「……ごめん」

理穂子は恥じ入るように、小さく呟いて俯いた。

「別にいいけどね。私も死にそうなくらい暇なわけだし」

「気安く笑うと、理穂子に手にした座布団を薦める。」

「だから、折角来たなら相手してよ。」

茶目つ気たつぷりに肩を竦める圭子に、理穂子は初めて少しだけ微笑んだ。

「子どもたちの、声がするなあって思ったの。」

理穂子は再び、窓の外へ視線を移して呟く。

「ああ、向かい側が保育園だからね。お陰で昼間は煩くって適わないけど。」

「あんだなんか、毎日子どもに囲まれてるじゃない。たまには離れたいと思わないの？ 休みの日まで子どもの声に反応するなんて、私には理解できないわ。」

昔から“子ども嫌い”を自称している圭子だが、その実、彼女は年の離れた弟や妹が大勢いる大家族の長女で、厳しいながらも“小さな母親”として、幼い時から兄弟の面倒を良く見てきたことを理穂子は知っている。表現がぶつきら棒なだけで、本当は人情に熱いそんな圭子の性格に、健吾が惹かれていった気持ちも良く理解できた。

「さて、あなたが相手してくれないなら、私も一人で自分の仕事に没頭するとしますかね。」

ヨイシヨ の掛け声とともに、圭子はもうかなり大きく目立つようになってきたお腹を抱え込むようにして、壁に背中を預けて座った。

傍らに置いた裁縫道具を引き寄せて、大きな腹の上でぎこちなく針を動かしている。

「……それは？」

「“おくるみ”よ。暇に任せてやり始めたら、意外にハマッちゃってね」

ペロリと舌を出しながら、圭子が笑う。

「お裁縫、あんなに苦手だったのに……」

「その節は、色々とお世話になりました」

改まった口調で圭子がふざけて頭を下げる。

小学校の家庭科の授業では、不器用な彼女をさおりと二人で何度となく助けてやったものだった。

「母は強しでね、何でもやるって決めたのよ。“おくるみ”一つだつてそう。何でも買えるほど、甲斐性のある旦那じゃないしね」

そう言いながら、圭子のそれが照れ隠しであることを、長い付き合いの理穂子には分かっていた。生まれてくる子に手作りのものを用意してやりたいのだ。針を動かす圭子の表情は優しく穏やかで、それは彼女の少女時代を知っている理穂子にとって、初めて見る“母”としての圭子の姿だった。

しばらく静かな時が過ぎ、向かいの保育園も午睡の時間に入ったのか子どもたちの声が止んだ。

理穂子は知らぬ間に、窓辺でうたた寝をしていた。

不意に眼が覚めて圭子の方を見てみると、彼女はまだ一心に針を動かしていた。

「……それ、何？」

まどろみから覚めたばかりの理穂子の目に、裁縫セットの横にピツタリと寄り添うように置かれた、銭湯でよく見かける黄色い洗面器が映った。

目にも鮮やかなその安っぽい黄色は、理穂子が眠る前には確かに無かったものだ。

「ああ、これね」

圭子は手を止めて洗面器に視線を落とすと、気のせいか眉間に皺を寄せて言った。

「悪阻しゅわいが酷いのよ。隣りの家の昼御飯の匂いでも吐きそうになっちゃって。慌てて持って来たの。最近じゃ常に傍らにコレよ」

圭子の言う通り、開け放した窓越しに、隣りの家から魚の焼ける匂いが伝わってくる。脂の乗ったその匂いは、理穂子の胸も不快に詰まらせた。

「分かるよ、いつも車に揺られてる気分だよね」

思わずそう呟くと、圭子はキョトンとした顔をした後、急にプツと吹き出した。

「やだなあ。何であんたがそんなこと分かるのよ」

理穂子はハツとしたように慌てて口を嚙む。

「……保育園のお母さんたちに聞いたのよ。毎日そんな人を見てる

から、つい自分が体験したみたいな気持ちになってたの」

苦い笑いを零して目を背ける理穂子の気持ちに、圭子が気付く筈もなかった。

(2)

「遅いお昼だけど、あんたも食べていく?」

「いいの?」

「鳥のササミしかないけどね」

圭子は針を置き、黄色い洗面器片手に立ち上がった。

「妊娠する前は、あんな味の無いものゴメンだったのに、今はこれしか食べられないの。もう何羽食べたかな。お前、鳥に呪われるぞ”って、伊藤が本気で心配してる」

そう言って笑う圭子につられて、理穂子も少しだけ声を立てて笑う。

「生米を食べる人だっているんだから、ササミくらい可笑しくないんじゃない?」

「そうよね。口に入れられるものは、何だって入れなきゃ。元気に産まれてきてもらうためにはね」

ポンと軽く、張り出したお腹を叩いて、圭子がダイニングと繋がった小さなキッチンへ向かう。

「じゃあきつと、ウサギも食べられるよ」

その背中に、ポツリと落とした不穏な響きを伴う言葉を、圭子が聞き咎めて振り返る。

「……あんだ、何言ってるの？」
「鳥のササミと、そっくりの味らしいよ」

子どもの消えた保育園の園庭を見下ろしながら、理穂子が抑揚のない声で続ける。

「……理穂子？」

「ごめん。昨日子どもたちに、ウサギの童話を聞かせてきたばかりだったから」

振り向いた理穂子の声音は、もういつもの明るい調子に戻っていた。

一瞬、理穂子の只ならぬ雰囲気にもまれて言葉を無くしていた圭子だったが、見慣れた理穂子の表情に安堵したように息を吐いた。

「もうっ！ 脅かさないでよ。急に変なこと言うからビックリしたじゃない」

「だから、ごめんってば」
「何でウサギの童話から、ウサギを食べる話になるのよ！ あんだ、そんな怖い話、子どもたちに聞かせるの？」

安堵すると同時に、趣味の悪すぎる理穂子のものとも思えない冗談にハメられた自分が悔しくて、圭子はプリプリと怒り出した。そんな圭子を見て、理穂子は静かに笑っただけだった。

「保護者から苦情が来るよ」

「そうだね……泣いてる子もいた」

「怖い先生だね。まったくもうっ！」

怒りついでに、窓辺で佇む理穂子の秀でた額に拳骨をお見舞いす

る。

理穂子は白い額を押さえたまま、そつと圭子の肩に顔を埋めた。子を宿した圭子の身体は全体的に丸みを帯び、顔を埋めると甘い乳の匂いに似た体臭がした。

自分が幼子になったような気持ちで、思い切りその匂いを吸い込む。

「……ねえ、あんた。やっぱり何かあったの？ ちよつと変だよ」

無造作に束ねた栗色の髪が、昼下がりの陽射しに染まり金色に輝いている。

呼吸のリズムとは別に小さく揺れる後れ毛が、理穂子の声にならない声を代弁していた。

ヒラリ……

若草色のスカートが翻る。

ヒラリ、ヒラリ……

蝶の羽が舞うように。

まだ春浅い日差しの中で、その女むすめが生きる、光に満ちた世界を彩るように、ヒラヒラと若草色の幸福が舞い踊る。

*

「ママ、この間ね、理穂ちゃん先生がね！」

若草色のシフォンのワンピースの裾を、手の中で皺々にしたまま、実はピョンピョンと飛び跳ねるように歩いている。

「ウサギさんがね、和尚さんとね……」

「実、ごめんね。ママ急いでるから、前を見てもうちよっただけ早く歩いて」

若草色のシフォンの先には、それと同じ色の柔らかい空気をまとった女の顔がある。

「実、こっちにおいで」

言うなり、実の手からシフォンを剥ぎ取って、葵はギュツと力を込めて甘えん坊な弟の手を握る。

「ヤダよ！ ママと手繋ぐんだ！ お姉ちゃんなんか、ヤダ！」

「ワガママ言わないのっ！」

葵に叱られて、引きづられるように歩く二人を振り返りながら、若草色の女は白く折れそうなほどに細い腕に嵌めた、華奢なブレスレット型の時計に目をやる。

「理穂ちゃん、帰ってるといいんだけど」

*

「本当にいつもごめんね、理穂ちゃん」

まだ早朝とも言える時間帯。

夜勤明けでベッドに潜り込んだばかりの理穂子は、遠慮がちな、しかしハッキリと朝の空気を切り裂く強かさを持ったチャイムの音で、まどろみから引き戻された。

ベッドの上に身体を起こした時から、予感があった。

出るまでも無い。

いつもの招かれざる客。

睡眠不足で重く痛む頭と、それ以上に重苦しい心を抱えて、アパートを訪れたその女を玄関先で出迎えた時、理穂子は既に後悔し始めていた。

布団を被って、惨めで滑稽なことこの上ない“居留守”を使っただとしても、この家にこの「光に満ちた」女を入れるべきではなかったのだ。

若草色のシフォンのワンピースに身を包んだ女　早川瑠璃は、玄関を開けた理穂子を見ると、着ている服のイメージそのままの、春の女神のような微笑を浮かべた。

「理穂ちゃん、一生のお願い！ 今日一日だけ、葵と実、預かってくれないかしら」

一生のお願い　そう言って片目を瞑りながら手を合わせるその仕草は、その辺りの女学生と変わらない。いや、むしろ可憐さという点においては、若さだけの女学生では太刀打ち出来ないだろう。

「実家の母の体調を崩してね。看病しようにも、この子たち二人を連れて行ったら、治るものも治らないと思って」

そう言いながら、瑠璃は理穂子が促す前に、ヒラリと蝶のような身軽さで理穂子の脇を通り過ぎ、まだカーテンを閉め切っているせ

いで薄暗い、理穂子のアパートの中へと進んでいく。

「理穂ちゃんは、今日何か予定があったかしら？」

瑠璃は初めて思い到ったというように、ただ後ろを暗く沈んだ顔で静かに着いて来ていた理穂子を振り返る。

「……いえ、別に」

聞き取れないほどの小さな声だったが、瑠璃はフワリと満開の笑みを浮かべた。

「ありがとう！ 今度絶対、何かお礼させてね。葵も実も、本当に理穂ちゃんのことを大好きなのよ」

振り返れば、狭い玄関には瑠璃の脱ぎ捨てた白い華奢なサンダルが、羽を休める蝶のような形で転がっている。

まるで、春の女神の化身のようだ。

理穂子の部屋を歩く瑠璃の素足の爪先は、薄い桃色に染められている。

その綺麗に塗られた桃色の爪先が、寝室の前に敷いた日に焼けたびれたマットレスに食い込む様子を見た時、理穂子は思わず顔を背けたくなくなった。

「幸福」の権化であるようなこの女に踏まれるくたびれたマットレスは、まるでポロポロに疲れた自分のような気がした。

華やかなフローラル系の香水の匂いを撒き散らしながら、瑠璃は蝶のように軽やかに、愛しい我が子をこの薄暗い空間に置いていく準備を進める。

理穂子は両腕を葵と実に引っ張られながら、ただ呆けたようにその様子を眺めていた。

瑠璃に初めて会ったのは、理穂子が高校一年生の時。

早川との子どもを墮ろす、ちょうど一年ほど前のことだった。

早川の『友達』と称して、幾人もの女が自宅を訪れていたが、一目見たその時から、瑠璃が『特別』であることが理穂子には分かっていた。

政財界の大物の一人娘である瑠璃は、企業としての『早川家』に必要なことは明白だったが、早川にとってそれだけの存在でないことは、誰の目にも明らかだった。

生まれ落ちた時から何不自由のない暮らしを送り、屈託のない美しい微笑を浮かべる瑠璃は、早川にとっては太陽のように感じられたことだろう。

早川の気持ちがり穂子にはよく分かる。

影を持つ者が、光に憧れずにはいられない気持ちを。

そんな憧れは、決して長く続きはしないのに。

結局、影に戻ってくるくせに。

理穂子は瑠璃の背中を見ながら、ほんの少し口角を上げて笑った。

「実、葵、いい子にしているね。夜には迎えに来るからね」

言うなり、瑠璃は断りもせず、いきなりシャツと音をたてながらリビングのカーテンを開けた。

途端に入り込んできた目を焼く朝の光に、闇に慣れていた理穂子

の目は眩み、思わず瞼を伏せて唇を噛んだ。

「今日はいいいお天気だから、理穂ちゃんにお散歩に連れて行ってもらうといいわ」

瑠璃の言葉に、実が「お散歩、お散歩」とはしゃいだ声を上げながら、力の抜けた理穂子の腕を左右に激しく揺さぶった。

されるがままの理穂子は少しよろけながら、容赦なく目を焼こうとする太陽から視線を逸らした。

瑠璃はしゃがんで実と葵の額に一つずつキスを落としてやってから、尚も立ち尽くしたままの理穂子を見上げて言った。

「そうだ、理穂ちゃん」

この女に見つめられると、何も無いのに構えてしまう。昔からそうだった。

「今週の日曜日、空いてる？」

「また、二人を預けるつもりですか？」

「ううん、違うわ」

瑠璃は苦笑しながら首を横に振る。

「兄がね、葵と実を一日動物園に連れて行ってくれるって言うから、一日自由になるから、

久しぶりに買い物にでも出ようかと思って。理穂ちゃんが一緒に来てくれたら楽しいわ」

理穂子より随分年上だというのに、屈託なく笑うその表情はまだ充分な愛らしさを残している。

「それでね、帰りに家に寄って食事しない？　いつものお礼も兼ねて、理穂ちゃんにあげたいものがあるの」

両手を胸の前で組み合わせて、フフツと微笑む。

「太っちゃって、入らなくなった洋服がいっぱいあるのよ。捨てるには勿体ないし、理穂ちゃんがもらってくれたら嬉しいな」

「全然、そんな風には見えませんが」

理穂子は冷めた視線で、瑠璃の頭から爪の先まで不躰な視線を隠そうともせずに行った。

理穂子の視線に気付いたのかどうか、瑠璃は肩を竦めてそっと理穂子に近付いて言った。

「実はね……」

そう言って、瑠璃は理穂子の耳元に唇を寄せる。

甘い香りが、鼻先をくすぐる。

「……もう一人、子どもが出来たの」

聞いた瞬間、理穂子の背筋を冷たい汗が流れ落ちた。

まだ、ナイシヨよ　洋介さんにも言っていないの。

あとの瑠璃のセリフは、理穂子の耳には全く入ってこなかった。無意識に、自分の腹に手をやる。

「ママ、お腹すいたよ」

その時、葵が瑠璃のシフォンのスカートの裾を引っ張ったせいで、理穂子にとって死ぬほど息苦しかった空間に、小さな亀裂が入った。

「ああ、ごめん。それじゃあ、ママはもう行くね。理穂ちゃんに悪いけど、この子たちまだ朝ご飯も食べてないから、よろしくね。今日は本当にありがとうね。来週の件、考えておいてね」

瑠璃はそう言って微笑むと、入って来た時と同様、蝶のような軽やかさで、ヒラヒラと飛びながら理穂子のアパートを出て行った。理穂子に玄関まで見送る気力は無かった。

「理穂ちゃん先生？」

立ち尽くしたまま様子のおかしい理穂子を見上げて、実がクイツクイツとその手を引っ張る。

理穂子はそれに引きずられるように、腹を押さえてその場にズルズルと崩れ落ちた。

瑠璃の残した甘い香水の残り香が急に鼻について、そのままそこで激しく嘔吐した。

「理穂ちゃん先生っ?!」

すえた匂いと、猥染みた唸り声を零しながら胃の内容物を吐き出し続ける理穂子に驚いた葵が駆け寄って来る。

繋いだ手を理穂子の吐瀉物で汚した実は、驚いてその場で泣き出してしまった。

「理穂ちゃん先生！ 理穂ちゃん先生！」

肩を揺する葵も泣きながら理穂子の名を呼び続けるが、その二人の激しい泣き声さえも、徐々に意識の片隅に追いやられていった。

隆志はいつもの習慣で、全ての門戸に朝刊を配り終えた帰り道、理穂子のアパートの下を通りかかった。

使い古したスクーターのエンジン音が、時折ポフツポフツと怪しげな音を立てるのを騙し騙し走らせる。

こんなボロでも、販売店からの借り物である以上、大事に扱わなければならぬ。特に、朝刊配りのルート以外に、『斎木のアパート』という余計なルートを回ってもらっているのだ。

毎月ガソリン代がかさみすぎじゃないかと販売店の店主に疑いの目を向けられても、まだこの辺りの地理に明るくないから迷ってしまうのだと苦しい言い訳をしながら、隆志の迂回は続いていた。

いつの間にか、理穂子の生活パターン、夜勤や日勤のシフトまで覚えてしまった隆志だったが、今日は様子が違っていた。

いつもなら夜勤明けのこの時間、理穂子のアパートでは日に焼けたカーテンがびっちり窓を覆い、この家の主人の浅い眠りを守っている頃だった。

だが今日は、レースのカーテンさえも開け放され、容赦ない陽射しが部屋の中に差し込んでいた。

それはまるで、安らげる寢床を無理やり暴かれ、暴力のような陽の元に晒された小さな鳥の巣のようだった。

なぜか胸騒ぎを覚えた隆志は、ポフツツと不穏な音を立てるスクーターのエンジンを切って、背伸びをするように理穂子が住む二階の窓を見上げた。

気のせいかな、奥で小さな黒い頭が二つ、チラチラと揺れる光景が目に入る。

隆志はスクーターを投げ出して、アパートの階段を駆け上がった。無理やり開け放たれたカーテンと同じように、玄関の戸も風に遊

ばれ、バタンツと大きな音を立てながら、幾度となく壁にぶつかっていた。

「齋木っ?!」

隆志は慌てて、理穂子のアパートの中に駆け込んだ。脱いだ靴につまづいて前につんのめりそうになりながら、哀れな小鳥の姿を探す。

「ライダーのおじちゃんっ!」

その時、悲痛な雛の声にも似た叫び声が、隆志を呼んだ。

その時隆志は、陽を避けたような薄暗い寝室に続く廊下の向こうで、身体を二つに折り曲げて横たわる小鳥と、その小鳥の側で泣きはらした目で助けを待つ、二匹の小さな雛の姿を見つけた。

「齋木っ!」

叫んで駆け寄った隆志の両腕に、泣きじゃくる二人がしがみつく。

「助けて、おじちゃん! 理穂ちゃん先生が死んじゃうっ!」

苦しげに息を継ぐ理穂子の瞳は固く閉じられ、額には脂汗が浮いていた。

隆志は傷ついた小鳥を抱え上げ、陽に荒らされた哀れな巣を飛び出した。

意識のない理穂子を抱えたまま、隆志は一番近くにあった総合病院のロビーに駆け込んだ。

「番号札を取って、お待ちください」

ろくに隆志の顔を見ることもせず、そう告げた受付の女に、隆志は身を乗り出して詰め寄った。

「そんな悠長なこと言ったられないんだよ！早く通して」

「ですから、予約でないなら、番号札を……」

「死にそうなんだよっ！」

ドンツとカウンターを拳で叩く鈍い音とともに、隆志の怒声がロビー中に響き渡る。

「……頼むから、助けてくれ」

まだカウンターに置いたままの拳を震わせながら、隆志は俯いたままそう言った。受けの女はようやくガタツと音を立てて椅子から立ち上がり、内線電話を掴んだ。

「……もしもし、緊急外来を……」

しばらくの後、ロビー奥の診察室から出てきた何人もの看護師や医師の手によって、理穂子は医療用ベッドへ移された。

「……齋木、大丈夫だから。もう、心配ないからね」

運ばれていく最中も、隆志は意識のない理穂子に声をかけ続けた。

「付き添いの方は、ここでお待ちを」

処置室に入る直前、隆志は看護師に制され、廊下に一人取り残された。

理穂子はベッドに寝かされたまま、処置室のドアの向こうへと消えた。

どれくらいの間そうしていたのだろう。

処置室の前の椅子で俯いていた隆志の視界に、白衣を着た医師の足が見えた。

「……あの女性の、付き添いの方ですか？」

隆志は弾かれたように顔を上げた。

「は……はいっ！」

「……お腹の子の、お父さん？」

心なしか、医師は険しい表情で隆志を見つめている。肯定も否定も出来ず、隆志は曖昧に頷いた。

「ちょっと、こちらへ」

医師は渋い顔をしたまま、顎をしゃくって隆志を促した。

狭い問診室に通された隆志の前で、医師は無言のまま自分の席に着いた。その隣りには、若い看護師の女が、これもまた一切口を閉ざしたまま佇んでいる。

二人が醸し出す雰囲気から、隆志は暗に自分が責められている空気を痛いほど感じていた。

医師がカルテを繰る乾いた音だけが、問診室で発せられる唯一のものだった。

「……どうしますか？」

沈黙を唐突に破ったのは、医師の方だった。

「え？」

医師の問いの意味が分からず、思わず聞き返す隆志に、医師は厳しい口調で言った。

「産む気があるんですか？ それとも、ここで処置を？」

「それって、どういう……」

医師は左右に首を振ってから、隆志の目を見つめて言った。

「一体、どんな生活を送って来たんですか？ まさか、妊娠に気付かなかつたわけじゃないでしょう。食事もまともに取っている形跡がない。あの様子じゃ、検診にも行ったことがないでしょう？ もし行っていたら、どんな医者だって、即入院させています」

何と言葉を返していいのか、戸惑いばかりを見せる隆志に、医師は盛大な溜息を吐き出して、怒気を含んだ声で言った。

「なぜ、こんな風になる前に、もっと身体を労わるように言わなかったんですか！ あなた、父親でしょう？ 命を何だと思ってるんですか。あなたも、あの女性も」

隆志には何も返す言葉がなかった。

ただ、黙って俯くしかない。

医師は諦めたようにもう一度大きな溜息を吐くと、諦めたように隆志から視線を外した。

「危ないところでしたが、今のところ赤ちゃんは無事です。だが、次に無理をすれば、母体共々、保障できません」

「……ありがとうございます」

消え入るような声で、隆志が答える。

それだけ言うのが精一杯だった。

「直に、麻酔も醒めるでしょう」

いくらか怒気の収まった医師の声が、頭上から降って来る。その言葉に、隆志が椅子から腰を浮かしかけた時、いきなり問診室のドアが開け放たれ、息を切らせた男女が飛び込んできた。

「何ですか、あなたたちは？」

ノックも無しに、不躰に飛び込んできたこの客人に、医師は眉を吊り上げた。

「すみません、早川理穂子の親族の者です」

長身の男の方が、紳士然とした態度で医師に向かって頭を下げた。

「理穂子の兄の、早川洋介と言います」

立ち上がるタイミングを逃した隆志は、下からその男の端正な顔を見上げていた。

トレンチコートの男

それは間違いなく、理穂子のアパートの前で、理穂子を泣かせていたあの男だった。

（早川洋介 あいつは、悪い男だ）

妙に幼稚な、だが真剣極まりない健吾の言葉が不意に浮かんでくる。

「……妹は一体……」

「家族もご存知無かったですか？」

医師は眉間に皺を寄せて、隆志と早川を交互に見やる。

その時初めて、早川は隆志の存在に気付いたようだった。

「……君は……」

そう言った次の瞬間、早川の目に鋭い光が浮かんだ。

それは一瞬の変化だったが、冷たい憎悪に満ちた青い炎のように隆志には感じられた。早川はすぐに何事もなかったようにその炎を打ち消し、医師に視線を戻した。

「教えてください。僕は兄ですが、妹の親代わりでもあります。妹はどこか悪いんですか？」

「……妊娠されてます。今、8週目に入ったところです」
「え？」

声を発したのは、早川ではなかった。

これまで早川の後ろで息を切らせていた女が、形の良い唇を白い手で覆って、目を見開いている。

「理穂ちゃんが……そんな……」

緑色のシフォンのワンピースがヒラリと舞い、座っている隆志の擦り切れたジーンズの腿を撫でていく。病院の消毒液の匂いと、女から漂う花の香りが同時に隆志の鼻を付いて、その違和感に思わず胸が詰まるような感覚を覚えた。

「……あなた」

女はしなだれかかる様に、早川の胸に縋りついた。早川は自然な仕草で、女の肩を抱き、そのまま擦ってやった。

何もかもが自然すぎて、却って芝居染みて見えた。

「あなたが、理穂ちゃんのこと？」

早川の胸に頭を預けたまま、女はまるで汚いものを見るような目で隆志を見下ろした。

無理もない。

今の自分は、勤め先である新聞販売店の制服を着込み、下は擦り切れたジーンズに、煮染めたような汚れの浮いた、履き潰したスニーカーと言った姿だった。

まるでスクリーンの中から抜け出してきたような、美しい夫婦の前では、自分は浮浪者のようだと隆志は思った。

「理穂子に会えますか？」

早川は妻の肩を擦る手に力を込めて、妻の視線を隆志から引き離れた。隆志のことは、無視するように暗に妻に伝えたのが分かった。

「処置室から一般病棟へ移しています。もう麻酔も切れる頃だと思いますが……君、案内して」

医師は隣りで控えていた若い看護師に指示をして、夫妻を部屋の外へと促した。

二人は隆志を振り返ることもなく、看護師の後ろについて出て行った。

「……あなたは？」

一人取り残された隆志を見て、医師は不審そうな顔で尋ねた。早川の態度からも、隆志が女の家族に認められた存在では無いことを悟ったようだった。

隆志はただ頭をペコリと下げ、逃げるように問診室を後にした。それでも、このまま理穂子を置いて帰ることは出来なかった。遠くから一目だけでもいい、理穂子が本当に無事にいるのか、それを確かめて、ひっそり帰ろうと思った。

隆志の足は、自然に早川夫妻が消えた、病棟の方へと向かっていった。

*

「理穂ちゃん、理穂ちゃん！」

下腹部が脈に合わせて鈍い痛みを訴えている。まどろみの中に入れば幾分悼みは和らぐものを、先ほどから甲高い女の涙声で名を呼ばれ、理穂子は眉をしかめた。

痛い……

痛い……

やめて、呼ばないで。

お腹が痛い……

赤ちゃんに、悪いから。

お願い、止めて……

赤ちゃん。

私の、赤……

パチツと音がするよつに、理穂子の薄く静脈の浮いた瞼が開かれた。

「理穂ちゃんっ！」

瑠璃の声は、ますますトーンを上げていく。

「気が付いたのね。良かった！」

理穂子が視線を定まらせるよりも早く、瑠璃はワッと泣き出して、横たわる理穂子の上に覆いかぶさった。

「…………義姉さん?…………ッ」

目の焦点が合ってくるのと同時に、下腹を襲っていた鈍痛が、明らかな痛みが変わって理穂子を襲った。

「水臭いわ。どうして言ってくれなかったの？ もっと早く相談してくれていたら…………」

瑠璃は自分が涙を流す方に忙しく、苦痛に歪める理穂子の表情には気付いていなかった。

「本当の姉妹だと思ってって、いつも言っているのに。私だって、二人も産んでいるのよ。きっと、力になれたわ」

この人は何を言っているのだろう。

理穂子は痛み以外まだ覚醒しきらない意識の中で、騒々しく泣き喚く腹の上の瑠璃の頭を見ながら考えを巡らせた。

第一、ここはどこなのだろう。

いつものように、体よく葵と実の世話を押し付けられて、自分のアパートに居たはずなのに。

だが、今自分が横たわっている背中のマットレスは固く、見上げる天井はアパートよりもよほど殺風景だ。

「理穂ちゃんが妊娠していることを知っていたら、葵や実を預けたりしなかったわ。ごめんなさい、無理をさせて。私のせいね」

その時、理穂子はハッと我に返った。

そうだ。

この女が帰った後、たまらない吐き気と腹痛に襲われて、そして……
ゆっくりと頭を巡らせた先には、病室の扉のところで佇む早川の姿があった。

*

「あ！ ライダーのおじちゃんっ！」

理穂子の病室を探しあぐねていた時、長い廊下の向こうから、小さな姉弟が先に隆志の姿を見つけて駆け寄って来た。

「お前ら、どうやってここに？」

今にも泣き出しそうな不安気な顔で隆志に走りより、弟の実にあつては埃っぽい隆志の販売所の制服の胸に顔を埋めて本格的にベソをかき始めている。

「おじちゃんと理穂ちゃんが行っちゃってから、パパの会社に電話したの」

実は違い、姉らしく説明する葵だったが、噛み締めた唇は小刻みに震え、必死で涙を堪えているのが分かった。

隆志は今更になって、理穂子を助けるのに夢中で、この幼い姉弟を理穂子のアパートに置き去りにしてしまったことを思い出した。
どんなに怖かったことだろう。

「……ごめんな。二人つきりにさせて」

隆志はそう言うと、泣き出す寸前で堪えている葵の頭を抱き寄せた。

「葵は偉かったな。ちゃんとパパに連絡して、実と待ってたんだろ。偉いな、お前は」

すると葵は、もう我慢の限界とばかりに、隆志の胸で思い切り泣きじゃくり始めた。姉のそんな姿を見て、実も火がついたように泣き出した。

病院の廊下で大泣きする二人を抱きしめる隆志を、すれ違う看護師や患者たち、面会の客たちはあからさまに非難の目を向けてきたが、隆志は構わずに、この幼い姉弟の頭をいつまでも優しく撫でてやった。

*

ベッドの上の理穂子と目が合った早川は、そのまま微動だにせず、静かに口を開いた。

「瑠璃……ちょっと、出ていてくれるか？」

未だ、無抵抗の理穂子にしがみついていた瑠璃は、泣きはらした目で早川を振り返った。

「実と葵を廊下で待たせたままだ。あいつら、昼食もまだだろう。頼むよ」

「……そうね。分かったわ」

瑠璃はようやく理穂子から身体を離し、代わりに理穂子の左手をギュッと握り締めて言った。

「理穂ちゃんには、私と洋介さんが付いてるわ。だから、安心していつでも頼ってね」

理穂子が答える前に、早川が再度、瑠璃を促す。

瑠璃が白いハンカチを取り出して、優雅な仕草で濡れた頬を拭くと、もう涙の痕は綺麗に消えていた。

瑠璃が出て行った後も、早川はしばらくドアのところに佇んだまま、すぐに理穂子のベッドの側に近づこうとはしなかった。

早川の拳は何かに耐えるように、固くグーの形に握られていた。

「言えばいいじゃない」

不意に、横たわる理穂子のが口を開いた。

「義姉さんに、言えばいいわ。理穂子は産まないよって」

早川は、拳を握り締めたまま、無言で理穂子の枕元へと寄って来た。

「……俺の子か？」

ベッドの上の理穂子の瞳が大きく揺れる。

水気を含んだ大きな目が、怒りと憎しみを込めてキラリと光る。

よろめきながら身体を起こす理穂子に、無意識に差し伸べられた早川の手を、理穂子はすげなく振り払う。

そして、無言のまま、拳を握り締め、目の前にある早川の胸をド
ンツとひとつ叩いた。

一つ、もう一つと、打ち付けるようにその拳の数を増やしていく。
早川はただ黙って、理穂子の殴打を受け入れている。

打ちつけるほどに、早川の体温と、体臭に混じったあのムスクの
香りが立ち上り、それは同時に理穂子の胸も苦しく殴打した。

「…………ごめん」

理穂子の拳を受け入れたまま、早川は呟く。

「…………あの男がいたから」

「あの男？」

「…………お前が、俺から逃げたのかと思ったんだ」

理穂子の白く小さな拳を取って、早川が呟く。彼の言葉の意味が
分からず、理穂子は啞然とした表情を浮かべていたが、やがてクツ
と咽喉の奥を押しつぶすような笑いをこぼした。

「本当に、呆れた人ね」

嘲るように続ける。

「あなたは、何も分かってない」

早川の手を振り払い、理穂子は声を上げた。

「姉さんに言えはいいのよ。理穂子の力になれることなんか、何も
ないって。“だって、理穂子は産まないよ。俺の子だから、産まな
いよ”って」

いつかの自分が浴びせた言葉を、理穂子はまるで壊れたテーブルコーダーのように繰り返す。

「俺たちの三番目の息子が娘か、愛人と妻の子どもが同級生だなんて、そんな三文小説みたい你真似は出来ないから””って」

感情のままに理穂子が一息に叫び終わると、早川は呆然とした様子で目を見開いた。

「……今、何て？」

「義姉さんのことも知らなかったの？ あなたは本当に、何も知らないのね」

皮肉気に歪められた理穂子の片頬を、新たな筋を作って静かに涙が流れていく。

「本当なのか？」

「自分で確かめてみたら」

冷たく突き放す理穂子に、早川は眉をひそめて背を向けた。

*

「葵！ 実！」

病室から出てきた瑠璃は、隆志に抱かれている二人の姉弟を見て、悲鳴に近い金切り声を上げた。

「何してるの？ こっちへいらっしやい！」

若草色のシフォンのワンピースを身にまとった少女のような女だったが、敵意剥き出しの蔑むような瞳が、遠慮なく隆志へ向けられていた。

隆志の胸で緊張の糸が解けて泣いていた姉弟はようやく落ち着いて来たところで鬼の形相の母親に呼ばれ、困惑したように隆志と母を見比べていた。

「……ママのところへ行けよ」

隆志はそんな二人の背中を軽く押し、母の元へと促す。

瑠璃は戸惑いながら歩いて来た二人を自分の身体で庇うようにしてから、隆志を一瞥し、礼の言葉一つなく、隆志の脇を通り過ぎた。

「……ライダーのおじちゃん、バイバイ」

振り返って手を振りかけた実の頭を、乱暴な力で戻し、瑠璃は足を早めた。

三人の背中が見えなくなるまで見送ってから、隆志は大きな溜息をついて後ろを振り返った。

瑠璃が出てきた病室のドアを見やる。

『早川理穂子様』と書かれたネームプレートが下がる病室の前に立ち、ドアに手をかけては、何度もその手を下ろし、俯いたまま固く目を閉じた。

何度かそれを繰り返してから、隆志はやがて意を決したようにドアノブを回す手に力を込めた時、中から理穂子と早川の声が聞こえて来た。

「……俺と、誰も知らない場所へ行くか？」

背を向けたまま呟いた早川の言葉は、耳をすませても聞き取れないほど微かなものだった。

「早川グループのことも、親父のことも、死んだ母や美紗緒さんのことも、今の家族のことも、何もかも全部忘れて、俺と逃げるか？」
先ほどよりはっきりとした呟きで、早川が告げる。

「何、言ってるの？」

理穂子の声は震えている。

「考えたことはない、お前は？ 理穂子……」
「兄さんっ！」

涙声で理穂子が叫ぶ。

そのまま嗚咽を漏らす彼女を振り返り、出て行きかけた早川は再び理穂子の横に無言で立ち尽くす。

「……出来るわけない。そんなこと、出来るわけないじゃない」
「そうだよ」

あっさりとして、早川は頷く。

「俺は、こんな嘘を、平気でつける男なんだ」

涙と怒りに燃えた目で、理穂子が早川を見上げる。

「知ってただろ、理穂子？ 何で、騙される」

露悪的なことを口にしながら、そんな早川の目にも涙が光っていた。

理穂子の拳が、再び早川の胸に打ち付けられる。

「……酷い男」

「……ああ」

「死ねばいい……あんたなんか……」

「お前に殺されるなら、本望だよ」

早川はそう言って、胸を叩く理穂子の体ごと、きつく彼女を抱きしめた。

勢いでほんの少し開けてしまったドアの隙間から、早川の広い背中と、その肩に爪を立て、泣きじゃくる理穂子の姿が見えた。

「……兄……さん」

無意識に早川を呼ぶ理穂子に、早川は搾り出すような声で答える。

「許しは、請わない」

それは理穂子に向けた言葉のようで、自分自身に言い聞かせる言葉にも聞こえた。

「俺たちは、泣いたりもしないんだ」

早川の拳を握る手に力が籠もる。

「……鎖の、数が増えた」

早川の唇から、掠れた笑い声に似た音が漏れた。

「お前と、俺を繋ぐ、罪の鎖だ。いいよ、理穂子　俺も一緒に、血を流すから」

後姿しか見えない早川の背に、隆志は深い闇が見えた気がした。音を立てず静かに、隆志は病室のドアを閉めた。

闇の中に、二人だけを残して。長い廊下を一人で歩きながら、隆志は理穂子に問いかける。

彼は、君の炎？

君の情熱を、傾ける相手？

傷を負うのは、いつも君だ。

彼じゃない。

彼は少しも、傷つかない。

だって、彼は傷つくことに愛を見ている。

君が傷つくほどに、血を流すほどに、彼はその中に愛を見るんだ。

君も、そうなのだろうか。

自分の傷の中に、彼への愛を見ているのだろうか。

それならきつと、君へは届かない。

皮膚の上を、ただ撫でるように、優しく労わることしか出来ない
僕の愛では。

刺青のように互いに深く刻まれた、彼と君の炎の前では、僕の愛
など一瞬で燃え尽きてしまうのだろうか。

それでも、ねえ…… 斎木

それでも、君はそんなにも、彼を求めるの？

空が高くなった

隆志は目を細めながら、西の稜線に沈む、皐月の夕焼け空を見上げた。

気付けばGWが終わり、五月も半場を過ぎていた。

瑠璃とのやり取りから傷ついた理穂子を病院に担ぎ込んだ3月の終わりは、まだ肌寒く、春も浅く感じられたのに、二ヶ月もしない内に、今では動けば薄っすらと汗ばむほどの陽気に包まれていた。

原付バイクのエンジンを止め、隆志は日課と化した、理穂子のアパートの下でバイクから降りる。

春夏秋冬代わり映えのしない古びたジーンズに履きつぶしたスニーカーの足で、トントんと二階へと駆け上がる。

ついこの前までは、こんな風に気軽にかかることなど出来なかった。

いつでも、まるで覗き見ているような罪悪感に似た居たたまれなさを感じながら、アパートの下で理穂子の気配を窺うのがせいぜいだった。

だが、今は堂々と 否、緊張する相手の不在を知っているからこそ、弛緩した気持ちだが、皮肉にも彼の足を軽くさせる。

理穂子はアパートにはいない。

入院して二週間もしない内に、彼女は誰にも告げずに、一人黙って病院を出て行った。

「あ、ライダーのおじちゃん」

俯き、ジーンズのポケットに両手を入れたまま猫背気味に階段を上がってきた隆志の前に、すっかり顔馴染みになった二人の姉弟がいた。

「お前ら、こんなところで何してんだ？」

夜間まで預けられている二人は、本来なら今頃は、理穂子の勤め先である保育園にいるはずの時間だった。

「ルルちゃんがね、そこにいるの」

郵便受けに手を伸ばして、懸命に中を覗き込もうとしていた葵が答える。

隆志が寄っていくと、確かにアパートの玄関の扉を、前足で蹴るかすかな音が聞こえて来た。

「ルルちゃんのお家にね、ご飯がいっぱいあったんだけど、全部食べちゃって、お家を倒して、出てきちゃったんだと思うの」

葵は真剣な顔で隆志に訴える。

隆志は理穂子の薄暗い寝室で、ケージに入れられた小さなウサギの姿を思い出していた。

「ルルちゃん、きっとお腹すいてるのよ。可哀相」

「かわいそう」

葵に続いてそう訴える実の視線を受け、隆志は頭を掻いた。

「もしかして、それで保育園抜け出して来たのか？」

隆志が呆れたように呟くと、二人は揃ってコクリと頷いた。

「しょうがないな……ちょっと、待ってる」

隆志はそう言つと、今上つてきた階段を音を立てて再び駆け下りた。

暫らくして隆志は、キャベツの葉や芯が山盛り入った、ビニール袋を提げて帰つて来た。

「その八百屋で残りモンもらつてきた。ちょっと、どいてる」

隆志はビニール袋に手を入れると、掴みだしたキャベツの葉を一枚、郵便受けの中に落としこんだ。

トサツと、幾分湿つた音を立てて落ちたその行く末に耳を澄ませると、すぐさまパリパリと勢いよく咀嚼する音が聞こえて来た。

郵便受けを人差し指で全開になるまで押し上げて中を覗くと、薄暗い玄関で、微かに蠢く白い背中が見えた。

「食ってるよ」

隆志が葵と実を振り返ると、二人は顔を見合わせて満面の笑みを浮かべた。

「実もやりたいっ!」

すかさず実が手を上げると、葵も弟に負けじと手を上げた。

「分かったよ。順番な」

隆志はビニール袋の中のキャベツを一枚ずつ二人に握らせると、交代で抱き上げて、郵便受けの合間から、ルルのエサやりをさせてやった。

これからどんどん陽が長くなってくる。

夏に向かおうとする季節の中で、隆志は不意に思考を止める。

理穂子の子は、無事だろうか。萌えいずる深緑のように、理穂子の腹の中で確かに育っているだろうか。

その存在が、どこにいるとも知れない理穂子を支えてくれているだろうか。

幼い姉弟がはしゃぐ声の間から、控えめだが強かな、小さな獣の咀嚼の音が聞こえてくる。

「良かったね、実。ウサギさんも、食べるものがなきや可哀相だよ」

「……も？」

不意に呟かれた葵の言葉を聞きとがめて、隆志が尋ねる。

「だって、ウサギさんはいつも、食べられちゃう方なんですよ？」

真っ直ぐな瞳で、キョトンと自分を抱き上げている隆志を振り返る。

「ウサギを、食べる？」

ギョツとするような話だが、姉に続いて実も答える。

「理穂ちゃん先生から聞いたお話」

そう言いつと、葵はまるで暗唱するように、理穂子から聞いたという童話を語り出した。

昔、昔

或る森の奥深くに、道に迷った旅人がありました。

旅人は傷を負い、お腹を空かせて、今にも死んでしまいそうでした。

森に住む狐と猿とウサギが、この哀れな旅人を見つけました。

三匹は、何とか旅人を助けたくて、それぞれ自分に出来ることを探しました。

木登りが得意な猿は、早速森の木に登り、沢山の木の実や果物を取ってきました。

鋭い爪を持つ狐は、川へ行き、新鮮な魚をどっさり捕まえて来ました。

そして、ウサギの番になりました。

猿のような身軽さも、狐のような鋭い爪も持ち合わせていないウサギは途方にくれました。

自分は、お腹を空かせて死にそうな旅人のために、何もしてあげられない。

しかし、ウサギは気付きました。

たった一つだけ、ウサギにも旅人のためにしてやれることがあったのです。

それに気付いた途端、ウサギは嬉しくて居ても立ってもいられなくなつて、森の中を駆け出していました。そして、乾いた小枝や落ち葉を沢山拾って戻ってきました。

何をするつもり？　そう尋ねる猿と狐に、ウサギは嬉しそうに答えました。

「僕に出来る、たった一つのことだよ」

そう言つて、小石を擦り合わせて火を付けると、拾った落ち葉や小枝を積み上げた山の中へ放り込みました。

炎は勢いよく燃え上がります。

「ねえ、旅人さん。僕には身軽な身体も、鋭い爪もありません。だけど、僕は僕をあげられます。僕の肉はきつと美味しいから、残さず食べて、早く元気になってね」

そう言つと、ウサギはあつという間に炎の中へ身を投げてしまいました。

「おじちゃん？ ライダーのおじちゃん？」

ツンツンと上着の裾をつままれて、隆志はハッと我に返った。

「どづしたの？」

気付けば青ざめた顔の隆志を、幼い二人の姉弟が心配そうに見上げていた。

「……何でもないよ」

隆志は額を拭くと、ビッシヨリと嫌な汗で濡れていた。

葵の話の聞いている時、不意に炎に身を焼くウサギの像が浮かんできた。言い知れぬ不吉な予感、未だドアを隔てて伝わる小さな咀嚼の音に合わせてどんどん膨らんでいくようだった。

隆志は頭を振り、葵と実を振り返った。

「ほら、エサもやったし、これでしばらくは安心だろ。送ってつてやるから、脱走がバレない内に帰った方がいい」

「ライダーのバイクに乗れる？」

「ああ」

頷いてやると、実は大はしゃぎで階下に向かって駆け出した。

「こら、実！ 一人で先にいっちゃダメでしょ！」

やんちゃな弟を叱りながら、葵も後に続いて下りていく。

二人の背中を見送りながら、自身も階下へと向かって歩みだそうとした隆志だったが、一瞬、視界が不安定にグラリと揺れた。

ルルの咀嚼の音が、気のせいが大きくなったような気がする。

季節は初夏へ向かっているというのに、隆志の背には冷たい汗が一筋、流れ落ちていた。

「お疲れ様」

年老いた新聞販売所の所長は、事務所の電話が置かれた灰色のデスクに突つ伏す隆志を、曲がった背中を更に曲げて覗き込むようにして声をかけた。

「お・つ・か・れ・さ・ま！」

今度は幾分声の調子を上げて、少しも反応を示さない隆志の耳元で同じ言葉を区切るようにハッキリと告げた。

そうしてようやく、隆志は顔を上げる。

「何か用事でもあるのかい？ 最近ずっと変だよ」

「……いえ、別に」

隆志は瞳を覆い隠すほどに、長く伸ばしっぱなしになっている前髪をかきあげて答えた。

「配達が終わったんなら部屋へ戻りなさい」

「……すみません」

隆志はボリボリと頭を掻いてから、ノソリと立ち上がった。

「最近、非番の日でもそうしてるね」

シヨボシヨボと眉間を揉みながら、訝しげな視線を投げってくる所長に、隆志は彼が言わんとしていることを理解した。

所長は隆志が何か良からぬことでも考えて、事務所の金でも盗むのでは無いか、そういった類のことを心配しているのだ。

確かに、ここ最近不審を招くような行動を取っている自分が悪い。だが、服もろくに買う金がなく、勤務の時も非番の時も支給された一張羅の販売店の制服を着込み、勤勉に努めている自分が、いつまでもそんな風な目で見られることに一抹の切なさを覚える。

「部屋に帰って、休みます」

隆志は長身の身体を折り曲げて窮屈そうに頭を下げると、住み込みの自分にあてがわれた二階への階段を、所長を振り向くことなく上って行った。

背後に刺さるジトリと冷たい所長の視線は確かに痛かったが、隆志はそれより何倍も事務所に残された黒い電話機に未練を残していた。

非番の日でも、隆志が事務所の電話の前で陣取っていたのには理由がある。

隆志は待っていた。

熊本に居た時、自分を東京へと呼び戻した、あの無言電話を。

理穂子がかつて確かに自分に対して向けていた、助けを求める、

もの言わぬ声を待っていた。

もしやと思い、『不知火』へ自分から公衆電話で電話をかけたこともある。

『……はい「スナック 不知火」』
「マサさん？」

電話に出た商売っ気のまるでない、ぶっきらぼうな懐かしい声を聞いて、隆志はそれがすぐにアカリの子弟、『不知火』の用心棒も兼ねた従業員のマサであることが分かった。

「久しぶり、マサさん」

『お？ その声……隆志か？』

熊本から五年ぶりに帰って来たというのに、挨拶もそこそこにすぐに東京へ出てきてしまった不義理な自分なのに、未だに電話の声一つで思い出し、家族のように扱ってくれる、この店の人々の温かさで救われる。

「マサさん、今はどんな髪型なの？」

人と馴れ合うことの苦手な隆志でも、思わず軽口が漏れる。

『よく聞いてくれたな。今はなあ……』

『なんね？ マサ、あんた今、隆志ば言いよつと？』

懐かしい、若い娘の熊本訛りが聞こえてくる。

『ちょっと、代わらんね！ 受話器は寄越しんしゃいっ！』

『やめろっ、亮子っ！ い、痛い、首絞めんなっ！』

受話器の向こうで大騒動になっている様子が伝わってくる。鼻っ柱の強い、だがいじらしく自分を慕ってくれる、はこの亮子の声だと分かる。

『二人とも、いい加減にしなさいっ!』

受話器をキーンとさせる女のドスの効いた声がして、ガチャガチャと雑音がしたかと思うと、この店の主、隆志の叔母にあたる八代アカリがようやく電話口に出た。

『本当に隆志君なの?』

「はい」

『全く、あんたって子は……東京に行ったら行ったで、半年も連絡寄越さないで。まあ、でもいいわ。この前は五年だったからね』

相変わらずの気風の良いアカリの声を聞いていると、疲れた隆志の心にも少しだけ気力が戻ってくるような気がする。

「……あのさ、聞きたいことがあるんだけど」

あまり長く声を聞いていたら情が勝って東京での暮らしを投げ出し帰りたくなってしまいそうだったので、隆志はさっさと電話をかけた当初の目的を思い出し、切り出した。

「斎木からそつちに、何か連絡はない?」

『ナナちゃん? ナナちゃんに何かあったの?』

勘のいいアカリはすぐに隆志の様子に気が付いて、声を潜めた。隣にマサや亮子がいるのを気遣ったのだろう。

「何も無いよ。聞いてみただけだ」

『東京で、ナナちゃんに会ったんじゃないの?』

「……うん」

『隆志君？ 本当に、何かあったんじゃないの？』

アカリの声音がキツくなる。

「本当に何も無いよ。ごめん、アカリさん。邪魔したね」

『ちよつと、隆志君？！ たかつ……』

アカリにこれ以上何か聞かれる前に、隆志は自分から受話器を置いた。

14歳の時、髪を赤く染め東京から逃れてきた理穂子が、一人であつて智之と親子三人で暮らした街に戻り、『不知火』に身を寄せていたのは、期間にすればほんの数週間のことだ。

だがあの時、互いに別の痛みを抱えながら、キャンプファイヤーの前でひと時寄り添つた魂は、長い間隆志の理穂子に対する胸の炎を燃やす、明らかかな糧となつた。

傷ついた理穂子は、今もひっそりとあの隆志たちが生まれ育つた灰色の街に戻っているのではないか。

いい思い出ばかりではない、だが貧しくとも人の温もりがあつたあの街に……。

隆志にはそう思えてならなかつた。

もうほとんど忘れかけていた、かつては自分と母親の美華の住まいであつた長屋の電話番号を回してみようとようやく決心したのは、『不知火』に電話をかけた随分と後になってからのことだつた。

あの長屋には、今は智之が住んでいる。

隆志が不在にした五年の間、隆志の居場所を守ってくれた男だ。

理穂子の父親で、隆志の母親の美華を愛した故に、幼い二人に耐え難い心の傷を残しつつも、隆志にとっては美華さえも与えてくれ

なかった、肉親以上の愛情と優しさを注いでくれた相手でもある。

理穂子が彼を頼って行くのではないかと思う反面、自分にとっても父親のような存在の智之に、理穂子の今の惨状を悟られるのではないか、そんな恐怖があった。

だが、今は理穂子を見つける方が専決だった。

（次に無理をすれば、母体共々、保障できません）

医師の冷たい無機質な言葉が蘇る。

どこにいても、ただ無事でいてくれさえすればそれでいい。

10円玉を何枚も握り締めて、隆志は夜の電話ボックスに入った。

『……はい、もしもし』

夜の帳の向こうで、柔らかく響く智之の声が聞こえる。

「……俺だけど」

短くそれだけ言った隆志の言葉に、受話器の向こうで息を飲む音が聞こえた。

『……隆志君？』

静かな、それでいて深い音色を持つ声は、学生の時の隆志を呼ぶ声と何も変わらない慈愛に満ちていて、隆志は思わず胸が熱くなった。

「智之さん、正直に答えて」

気を緩めれば、受話器を握り締めたまましゃくりあげて智之に全てを打ち明けてしまいそうになるのを堪えるために、隆志はわざと低い声で、感情を込めずに尋ねた。

「齋木は、街に帰ってるんじゃない？」

わずかな沈黙の後、智之が次の言葉を紡ぐために乾いた唇を湿らす微かな音が、受話器越しに聞こえて来た。

『何のことだい？ 理穂子は君と一緒に東京にいるんじゃないのかい？』

「智之さん、今一人？」

『もちろんだよ。急にどうしたんだい、隆志君？』

挨拶もそこそこに問い詰めるような話し方をする隆志を咎める前に、智之は困惑しているようだった。

スマートな外見に反して、器用な男ではないことは昔から良く知っている。

彼が嘘をついているとも思えない。

だが、隆志には先ほど智之が一瞬紡いだ、不自然な沈黙が気になった。

「……何でもないよ。また、電話する」

『隆志君』

受話器を置こうとする隆志を、智之が止める。

「理穂子と、喧嘩でもしたのかい？」

本心から心配している様子が伝わってきた。

残念だけど、喧嘩が出来るような仲間でもないんだよ、俺たち。

隆志は自嘲気味に心の中でそう呟くと、無言のまま受話器を置いた。

返事の代わりに響くツーツーという無機質な通話終了音を聞いているから、智之は静かに耳に当てた受話器を置いた。

そして、日に日に陽気を増す、最近の気候に合わせて開け放した縁側の向こうに目を向ける。

暗闇の中、ほの白く浮かんだ浴衣の背中は、自分が覚えている幼い頃の姿よりも更に小さく、弱々しく萎んでしまったように見える。

「……理穂子」

華奢な背中では暗闇を向いたまま、ピクリとも反応を示さない。

「……本当に、良かったの？」

答えのない娘に向かって、無駄と分かりつつも智之は声をかける。青い匂いのする畳を踏んで、影に埋もれた縁側に降り立てば、呆けたように一心に暗闇だけを見つめている理穂子のこけた横顔が目に入る。

理穂子は一日の大半を、ここでこうして過ごしていた。

骨と皮ばかりのような身体に反して、僅かに膨らみを見せる下腹の存在が、智之が隆志を理穂子に引き合わせるのを躊躇わせる要因の一つでもあった。

隆志も理穂子も何も話さないの、智之には難しい選択に思えた。

半年前に五年ぶりにこの街に帰って来た時は、すぐに辿りついてしまうのが怖くて、自分でも滑稽だと思いながら、終電に乗っていたにも関わらず、一つ前の駅で降りて一夜を明かした。

目覚める前の工場のシルエットに向かって歩きながら、灰色の街が徐々に朝焼けに包まれていく光景を眺めた。

あの時は、胸が詰まるような懐かしさに駆け出したい衝動を覚える一方で、どうしようもなく足取りが重くなった。

酷い言葉を投げつけて置き去りにした、隆志がこれまでの生涯でただ一人、心の底から愛した女性に会うのが怖かったからだ。

今も、あの時と変わらず、足は鉛を下げたように重く、隆志の意のままにならない。

だが、その足を引きずりながらも、隆志は恐怖より勝る胸騒ぎに突き動かされるように、灰色の街を目指した。

智之が一瞬の隙に見せたあの沈黙こそが、隆志をここまで誘う道標となっていた。

理穂子はきつと、この街にいる。

朝日を背景に佇む小さな長屋の一角に着くと、隆志は黄色く変色した紙に滲んだインクで『島貫』と書かれた表札の、横の引き戸に手をかけた。

そつと引こうとした瞬間、中からガラスと音を立てて引き戸が開いた。

驚いて、早朝の静かで張り詰めた空気の中、隆志は思わず叫び声を上げそうになったが、自分で自分の口を塞いで、ようやく思いとどまった。

それは、引き戸を開けた側も同じだったようで、戸口に佇む智之は「うわっ」と短く叫んだ後、大きく目を見開いて隆志を見た。

「……隆志君？」

「悪い、智之さん。連絡もしないで」

早朝なので周囲の長屋を気遣って声を潜めた隆志がそう言つと、智之はグイッと隆志の手を取って、長屋の中に導いた。

「ここは君の家だよ？ 実家に帰ってくるのに、遠慮することなんか何もないよ」

相変わらずの智之の優しさに、隆志は胸がチリチリと痛くなった。

「わざと、連絡しないで来たんだ」

「え？」

「……斎木が、ここにいるんでしょ？ 智之さん」

隆志の言葉に、智之は一瞬返す言葉を失った。

「電話の様子で分かった。俺が連絡したら、きっと斎木は逃げ出しちまう。だからわざと、何も言わずに来たんだ」

智之は、掴んだままになっていた隆志の手を、今になってようやく離した。

「……君に、嘘を付く気はなかったんだよ」

智之は申し訳なさそうに首を横に振った。

「だけど、今の理穂子を君に会わせていいのか分からなかった。理穂子は何も話さないから」

「……斎木は、どこ？」

智之は無言で、部屋の奥の暗がりを目を向けた。

まだ雨戸を開けていないせいで、部屋の中は未だに夜の帳が下りているようだった。

瑠璃が押しかけ、あの陽に荒らされたアパートで腹を抱えて蹲っていた理穂子の姿を思い出し、ここでは優しい闇が理穂子を守っているのだとほんの少し隆志は安堵した。

「……斎木に、会ってもいい？」

「ああ。でも、驚かないでくれよ」
「え？」

訝しがる隆志に、智之は無言で隆志の前に立って部屋の奥へと案内した。

「理穂子。隆志君が来てくれたぞ」

雨戸を閉め切った暗がりに向かって声をかける智之の背中越しに、隆志は目を疑う光景を見た。

立て付けの悪い引き戸の隙間から入る朝の陽射しが微かに浮かび上がらせたのは、信じられないほどに痩せ衰えた小さな背中を覆う、艶を失った栗色の髪だった。

「……齋……木？」

乾いた喉の奥から搾り出すような声で、ようやくその名前を呼ぶ。だが、華奢な背中は一ピクリとも反応を見せない。

「齋木！」

もう一度、今度は先ほどよりもハッキリとした口調で呼びかける。だが、その声が届いている様子は無かった。

「前に行つて、顔を見せてあげてごらん」

智之が後ろで、隆志の背中を軽く押す。促されるまま、乾いた栗色の髪を目で追いながら、その身体の前に回りこんだ。

焦点の合っていない、髪と同じ栗色の瞳がそこにはあった。

目の前の隆志を通りすぎ、その視線はどこか遠くを見ている。

「齋木？ 俺だよ」

意図せずとも震えてしまう声で、縋るように理穂子に呼びかける。

「随分探したんだよ。あのチビたちも心配して……」

話の途中で、隆志は不意に背筋が寒くなった。

理穂子の視線は先ほどから一度も隆志を捉えることなく、ただ表情を無くしたまま虚空を見つめている。

「……智之さん。斎木は一体……？」

「ここに帰って来た時から、ずっとこの調子なんだよ」

智之は視線を落として言った。

「話してくれないか？ 東京で何があったのか」

隆志は痩せ衰えた理穂子の身体から、異常に張り出したように見える理穂子の腹部に目をやった。主の栄養分を、まるで全て吸い尽くそうとしているかのように見えるそれは、最早グロテスクにさえ思えた。

理穂子を悩ませる全ての元凶のように思えてきた時、隆志は咄嗟に畳に額を擦り付けるようにして、智之に土下座していた。

「俺の子です。俺に甲斐性がないから、斎木がこんなことに……」

だが智之は、静かに首を横に振った。

「僕にまで嘘は無しだよ、隆志君。君が本当に理穂子の相手だったら、理穂子はこんな風になったりしない」

浅はかな嘘を軽くないなされ、畳に擦り付けた額から頬にかけカッと熱が集まるのを隆志は感じた。

「……今日は早番だから、僕はもう出かけなきゃならない。理穂子をお願いしてもいいかい？」

畳から顔を上げた隆志に、智之は力なく微笑んで見せた。

「何もすることはないよ。理穂子は一日その調子だ。雨戸を開けて

やったら、一人で縁側に座っている。残り物だけど、台所には今朝のご飯が少し残っているから、お腹がすいたら食べるといい」

じゃあ、よろしく頼むよ。

そう言って、智之は出て行った。

先ほど戸口のところで行き会ったのは、仕事へ行こうとしていた智之とかち合わせになったからだと言えど今更気付く。

二人きり残された薄暗い長屋には、闇より思い沈黙が訪れた。

「……齋木」

居たたまれなくなった隆志が言葉を発した時、その音が思いのほか大きく、隆志は自分で自分の声に驚いた。

隆志は膝で畳を擦って、滑り込むように理穂子の顔を正面から覗き込む。

「齋木、腹減ってない？」

手を着いた理穂子が座る布団は、わずかに湿っているように感じた。

「ちょっと、待ってて」

隆志は返事がないことを承知の上で、勢いよく立ち上がった。

理穂子からの返答ははなから期待していないのに、こうして滑稽なほどに大きな動きで理穂子の視界に飛び込むのには訳がある。

このまま理穂子を放っておいたら、闇に同化してしまうのではな
いか。心地よい闇に囚われたまま、その華奢な身体は徐々に侵食さ
れ消えて無くなってしまふのではないか。理屈ではないそんな恐怖
と焦りから、隆志は台所へ走りながらも、一人言のような理穂子へ

の問いかけを止めなかった。

智之が家を出て行く間際に言った通り、余熱を残した電気釜の中には丁度軽く二膳程の白米が残っていた。

智之が買い足した一人暮らし様の小さな冷蔵庫を開けると、これもまた卵があつらえたように二つ、慎ましやかに並んでいた。

隆志は迷わずその二つを手に取り、まだ温かい湯気を上げる白米をご飯茶碗に盛ると、その上に生命力に溢れたような鮮やかな黄身を落とした。

(上手になつたわねえ)

その時不意に、耳元を甘い女の息と声が掠めた気がして、隆志は思わず首をすくめた。

(昔は上手に玉子割れなくてさ、玉子かけご飯を作る時は殻がいっぱい入ってたのに)

聞きなれたその声に、隆志は頭を振って左右に目を凝らす。

だが、当然長屋の中には理穂子と隆志の二人しかいる筈もない。

再び静まり返った長屋の空気に、先ほどの奇異な体験が却ってありありと蘇る。

「……………母さん？」

(まだ小さかったから、下手クソでさあ。玉子上手に割れなくて、殻がいっぱい入ってたの。私、思わず怒っちゃって……………あんたは、あんなに小さかったのにさ、一生懸命だったのに……………あの時は、(めんねえ)

高校二年生の冬、隆志の母美華は、一酸化炭素中毒でこの家で死んだ。

最後に別れた朝、隆志が朝帰りの美華のために玉子かけご飯を作った時、美華が不意に幼い日の隆志の姿を懐かしむようにしみじみとこう言ったのだった。

「……何だよ。あんなに好き勝手生きてた癖に、まだこの世に未練があるのかよ。成仏出来てないの？ 母さん」

そう独り言のように呟くと、隆志は不意に可笑しくなってきた。

「だったら、仕事してくれよ。斎木を守ってやって……ろくな守護霊じゃなくても、いないよりマシだ」

何よ、母親に向かって失礼ね

今にも、美華のそんな台詞が聞こえて来そうだった。

隆志は載せる盆もないまま、新鮮な玉子を落としたばかりのご飯二膳を持って、未だ暗い部屋の中で身じろぎもしない理穂子の元へと戻った。

「雨戸開けていい？ もう朝だよ。体内時計が狂うと、腹も減らないうって言うしさ」

返事のないことを承知しているから、理穂子の答えも待たずに雨戸を開ける。夏に近づきつつある朝の陽射しは、既に肌を焼く鋭さを帯びているが、几帳面な智之が縁側の上に庇ひさしを設けてくれたお陰で、部屋の中に入り込んでくる光は優しくかった。

「斎木、ほら」

隆志は理穂子の少し湿った手のひらの中に茶碗を握らせるが、その手に最早握力は残っていないようで、隆志が手を離れた傍から、茶碗は理穂子の手から零れ落ち、理穂子の膝と畳を黄色く汚した。

「……ッ」

その直後、理穂子は異様に突き出た腹を二つに折り曲げるように前のめりになり、隆志の目の前で激しく嘔吐した。

*

「……君が、責任を感じる必要は無いよ」

理穂子と同じ部屋の、彼女から一番離れた対角線上の角に背中を預け、膝を抱えて蹲っていた隆志の頭を、帰宅した智之の柔らかく大きな手が撫でた。

「食事を取らせようとして、僕も何度も無理矢理口に詰め込んだりもしたけど、すぐに戻してしまつてダメだった。見かねて、知り合いの医者にリングルを打ってもらつてる。今はそうやって、ようやく命を繋いでる状態なんだ」

そう会話を交わす二人の視線の先で、理穂子は一人縁側から宵闇に包まれていく長屋の前の荒れた庭先を見つめている。

その日から隆志は長屋に泊まりこみ、仕事へ出かける智之を見送つた後は、一日理穂子の傍をウロウロとしながら、身の回りの家事をこなした。

例えその薄茶色の目に自分の姿が映っていないことが分かっていても、どんなに問いかけても返事が無いことが分かっていても、ただ傍にいられるだけで良かった。

離れていた五年よりももっと、近い距離にいながらとてつもなく遠く感じた、この半年の東京での生活を思えば、ずっと隆志の心は満たされていた。

「隆志君、いいものをもらってきたよ」

帰宅した智之が開口一番、嬉しそうに手荷物の中から取り出したものを見て、隆志はポカンと口を開けた。

「智之さん、それ……」

「うちの現場監督がお嬢さんのために買ったらしいんだけど、買すぎて余ったからお裾分け。夕飯の後、庭でどう？ 君も久しぶりだろ、花火なんて」

そう言う智之の顔は、少年のように無邪気に輝いている。

様々な種類の花火が色とりどりに詰め込まれたビニール袋を掲げると、自慢げに隆志に向かって振ってみせた。

「智之さんて、時々すごいガキみたいだよ」

「そうかい？ 君が大人っぽすぎるんだよ」

靴を脱いできちんと玄関に揃えて並べると、智之は今や抜かされた長身の隆志の肩を叩いて、台所へ向かった。

お、今日は湯豆腐か

隆志が作っておいた夕飯の材料を覗き込んだ智之の明るい声が、彼が消えた先の台所から響いてくる。そんな日常の何気ない音が、夕暮れ時の長屋の陰鬱な空気を払拭する。

隆志も夕食の準備に取り掛かるべく、智之の後に続いて台所へ足を向けた。

「ほら、隆志君。どれがいい？」

夕食の後、智之は宣言通りに縁側から庭先に降りて、花火の準備を始めた。傍らに置かれたバケツには、既に水が張られ、蚊取り線香の火が縁側で夏特有の香りを放って揺れている。

「何でもいいよ」

いい大人の男が二人で庭先で花火をするという事実には、些か居たたまれなくなつた隆志は、ぶっきらぼうに答える。

すると智之は、中でも一番長くキラキラ輝く派手な包装を施された花火を隆志に手渡した。

「もう、いいからさっさとやって終わらせようよ」

半ば、自棄になつた隆志がそう言つて、二人だけの花火大会が開催された。

理穂子はいつもの縁側に座り、相変わらず呆けたように庭先を見つめている。

二人が放つ小さな炎の明滅が、理穂子のガラス玉のような薄茶色の瞳にチラチラと揺れて映っている。

無言で次々と花火の山を消化していくと、バケツの中は花火の残骸と火薬で茶色く汚れた水で溢れそうになつた。

「一回、捨てて水を取り替えてくるよ」

智之はそう言つと、バケツを掴んで突っかけていた下駄を脱いで家の中が上がつた。

もう残っているのは、線香花火の束だけだつた。

隆志は縁側に腰を下ろし、火薬の匂いと闇に漂う煙の残骸に目を

向けた。

久しぶりだろ？ 智之は先ほどそう言ったが、隆志がこの家でこんな「正式な」花火をした経験は一度もない。

いつでも美華の目を盗んで、美華の店のマッチをくすねては一人で火遊びに興じたことはあっても。

だが隆志にとってはその火が、どんな花火よりも彼の心を癒し満たしてくれた。

「……しまぬき……く……ん」

その時だった。

幼い頃の炎の記憶に思いを馳せていた隆志の耳に、か細く、ともすれば風に掻き消えてしまいそうな声が、自分の名を呼んでいるのが聞こえた。

驚いて振り返った視線の先には、人形のように佇む理穂子が、真っ直ぐに自分を見つめていた。

「……斎……木？」

すぐには信じられなくて、隆志はまじまじとそのガラス玉の瞳を覗き込む。どんなに見つめても決して焦点の合わなかった目は、弱々しくも今はきちんと隆志の姿を捉えている。

「……花火、私もやりたいな」

青白い頬を不器用に引きつらせるような笑顔だったが、理穂子は確かにそう言った。

「……本当に？ 斎木……もう、大丈夫なの？」

予想もしない事態に、隆志は唾を飲み込みながら、ようやくそれだけ言った。理穂子の不器用な笑みが深くなる。それは、肯定の合図のようだった。

「智之さんっ！ 智之さんっ！」

隆志は大慌てで下駄を脱ぎ捨てると、長屋の中に駆け込んで智之を呼んできた。

隆志に負けず劣らず動転した様子の智之の前でも、理穂子は何ヶ月ぶりかに「正気」を取り戻した目で二人に笑みを向けた。

最後に残った線香花火を片手に持って、縁側に腰かけた理穂子は首を傾げて炎の珠が弾ける様子を見つめている。

隆志はその横で静かに、そんな理穂子を見守っていた。

再び家の中へ引込んだ智之が、ここに帰って来てから理穂子を見てもらっていた町医者に連絡を入れている声が聞こえてくる。

「……覚えてる？ 島貫君。いつかもこうやって、二人で花火をしたね」

どこか作り物めいて見える磁器のような頬は、炎が映えてほんの少し血色を取り戻したように見える。

「島貫君が持ってたマッチで、花火を見せてくれた」

理穂子は思い出すように、フツツと軽く肩を揺すって笑った。

「……ピンクのサンダルも貸してくれたね」

そうだ。

鼻緒の切れた下駄で足を痛めていた理穂子のために、隆志は家に舞い戻り、美華のサンダルを持ち出してきた。

商売道具を勝手に拝借したために、後でバレた時、美華にこっぴどく怒られた。そのサンダルを智之が返しに来たことをきっかけにして、智之と美華の関係が始まってしまったのだから、皮肉と言えば皮肉だった。

「……パパのアパートで、煙草に火を着けてくれたのも島貫君だった」

髪を染めてこの街に戻って来た、15歳の理穂子の姿が今のやつれた彼女の面影に重なる。

美華との関係もとうに終焉を迎えた後、智之が一人で暮らすアパートに忍び込んで、二人で慣れない煙草を無理にふかした。

あの時胸を満たした苦い紫煙の味が、不意に口内に蘇ったような気がした。

「島貫君の火は、いつも優しいね」

視線は儂く燃える火の珠に注いだまま、理穂子が呟く。

「……あつたかい」

パチパチと控えめに弾ける火の粉に手のひらをかざして、ホッと息を吐くように微笑む。

「あたたかい？ 熱いの間違いじゃないの？」

隆志がそう言うと、理穂子はほんの少し笑みを深くした。

ポトリ……

その時、静かな音を立てて、小さな炎の珠が地面に落ちた。

「……ここで、三人で暮らさないか？」

訪れた宵闇に紛れた隆志の声に、理穂子が驚いたように顔を上げる。

「もう、あんなところに帰るなよ。アパートや仕事の後始末は、俺が何とでもするから。ここで、智之さんと俺と……暮らそうよ」

隆志にとっては、プロポーズよりも勇気のいる、精一杯の言葉だった。

だが、今言わなければ一生後悔する　そう思って勇気を振り絞

った。

膝の上で握った拳が、いつの間にかジツトリと汗ばんでいる。理穂子はそんな隆志の拳の上に、白くヒンヤリとした自分の手をそっと重ねた。

「……ありがとう、島貫君」

頼りなく思っていたガラス玉の目は、それでも確かな意思を秘めて、俯く隆志を覗き込むように見つめる。

「でも、一度戻らなきゃ。アパートも仕事のこと、ケジメをつけるためにも、自分で責任を取らなきゃね」

「でもっ！」

「心配しないで。すぐに、帰ってくるから」

隆志を諭すように、理穂子は笑みを深める。

「……そしたらここで、一緒に暮らしてくれる？」

その言葉に、隆志は何度も頷くことで気持ちを返した。本当は、胸がいっぱいで言葉にならなかった。

「……うん、斎木……うん」

ようやくそれだけ呟くと、隆志は理穂子の白い手の甲に、自分の手のひらを重ねた。

「ここがいいよ、島貫君」

数週間ぶりに戻って来た東京は、わずかの間に様変わりしているように見えた。隆志が理穂子の行方を追ってここを出た時には、朝夕の空気に僅かに初夏の匂いが感じられる程度だったが、今や宵の頃は完全に熱帯夜の様相を呈していた。

理穂子は一人で大丈夫だと言ったが、隆志がそれを許さなかった。半ば強引に理穂子の後について、東京へ舞い戻った。

智之を説得するのも骨の折れる作業だった。ようやく正気を取り戻したばかりだというのに、今東京へ戻ったらどうなるか分からない。

智之が心配するのはもったもなことだった。

だが、隆志が片時も離れないことを約束した上で、必ず戻ると誓った上で、最終的には洪々二人を送り出した。

今、隆志と理穂子は彼女のアパートの下で立ち止まっていた。

「もう行って。島貫君も、ずっと私のために仕事休んでいたんでしよう？ 辞めるにしても、きちんと話をして来なきゃ、クビになったら退職金も出ないよ」

彼女にしては珍しい軽口まで言いながら、理穂子はそつと隆志の胸を押した。

「部屋の後片付けがすんだら連絡するよ。だから、今日はもう遅いし、行って」

確かに、隆志と生まれ育ったあの街に帰り、智之も交えた三人で暮らすと約束してくれた理穂子だったが、隆志と付き合おうと言ったわけではない。

恋人でもない自分が、夜遅い時間から理穂子のアパートにあがるような真似は出来なかった。

「何かあったら、すぐ連絡してよ」

理穂子は微笑んだまま頷く。

「絶対だよ」

子どものように念を押す隆志に合わせて、理穂子も何度も力強く頷いてくれた。

後ろ髪を引かれるような気持ちながら、隆志は理穂子のアパートを後にした。

久々すぎる自分の城は、ドアを開けた途端に胸の悪くなるような臭気を漂わせた熱気が押し寄せてきた。

慌てて壁に手を這わせて光源を探す。

しかし、カチツカチツと何度かスイッチを押してみても、部屋に明かりが灯されることはなかった。

「……あ、そっか」

そこで理穂子は初めて事態を理解する。

ずっと高熱水費さえ支払っていなかったのだ。電気もガスも、とうの昔に止められているに決まっていた。

暗闇と臭気に満ちた空間は異様で、そこが自分の部屋だと分かつ

ていても、一瞬踏み込むのに躊躇した。

だが理穂子はパンプスを脱ぎ、玄関の中に一歩踏み出した。

又ルリ……

その瞬間、ストッキングの足が何とも深い極まりない感触とともに滑った。

「……な……何？」

足の裏に手をやると、腐臭を放つ草の残骸のようなものが指先を汚した。

理穂子は慌てて履いていたスカートの端でその手を拭くと、逃げるように更に一歩部屋の中に進んだ。

その時だった。

「きゃっ！」

悲鳴を上げて、理穂子が玄関先に倒れこむ。

暗がりです道を塞いでいた『何か』につまづいたのだ。慌ててその

『何か』を振り返った理穂子は、倒れこんだ姿勢のまま固まった。

「……え？」

我が目を疑うように、闇の中に目を凝らす。

「……ルル？」

やがて、闇に慣れてきた目がその『何か』の輪郭を徐々に浮かび上がらせて来た時、理穂子は全身の毛が逆立つような感覚に襲われ

た。

「…………嘘…………嘘でしょう？」

四つんばいで這うような姿勢で、闇の中で最早物言わぬ物体と成り果てたかつての家族の元へ身を寄せる。

白い毛糸玉のようだったその柔らかい毛並みに手を伸ばすと、腐った肉から溢れ出した粘液が理穂子の手のひらにまとわりついた。

*

(ウサギって、何で“一羽”って言うか知ってる?)

人の都合など一切無視して、理穂子の誕生日に突然現れた早川は、悪戯をしかける少年のような顔で、理穂子のアパートの前に立っていた。

手にした妙に大きなプレゼントの箱を理穂子に開けさせると、中でぬいぐるみのように蹲っていた子ウサギの姿に、思わず理穂子が感嘆の声を上げるのを、嬉しそうに眺めていた。

その愛くるしい姿に早川へ浴びせる非難の言葉を一瞬忘れた理穂子に向かって、早川は唐突にこんな話を始めた。

(鶏肉以外の獣の肉を食べるのがご法度だった仏教の僧侶たちが、編み出した裏技さ。ウサギの耳を見て、『これは耳じゃない。羽根だ。だから、こいつは鳥なんだ。だから、食べていいんだ』ってさ。無茶な理由だろ? 飛べもしないのに)

そう言っつて早川は、理穂子に胸に抱かれる子ウサギに手を伸ばした。

(このウサギは俺だよ、理穂子。飛べもしないのに、毎日早川グループのために、『飛べ』って言われてるウサギ)

そのまま早川の手は、理穂子の首筋を上って、その頬に添えられる。

(だから、食べていいよ。いつか本当に飛べなくなる日が来たら。君が好きなあの童話のウサギみたいに、喜んで火の中に飛び込むから)

「あ……ああ……」

言葉にならない呻き声が、理穂子の口から零れ落ちる。

もう手のひらに乗るほど小さくもなく、半ば腐り落ちようとしているルルの身体を、掻き抱く。

そうしている内にも、ドロリと解けた小さく哀れな獣の肉の欠片が、理穂子の腕をすり抜けて、床にポトリポトリと重い音を立てて零れ落ちていく。

「……ごめんね、こんなに長い間放っておいて」

(お前のためなら、喜んで火の中に飛び込むから)

それが、全てを失わせたお前への、せめてもの代償だから。

どこか恍惚とした暗い瞳でそう告げる早川に、理穂子は魅入られたように動けなくなっていた。

そのままどちらともなく、吸い寄せられるように唇を寄せた瞬間、早川が「痛っ」と悲鳴を上げた。

理穂子と早川の体の間に挟まれた子ウサギが、思い切り早川の指を噛んだのだ。

(……っ痛いな。仮にも主人に向かって、何だよお前)

片目を細めて本気で痛そうにしている早川に、理穂子はなぜだが発作的に笑いが込み上げていた。

(ウサギに噛まれるなんて！)

一度始まった笑いの発作はなかなか鎮まらない。

(何だよ、嬉しそうだな。理穂子)

腕の中のウサギの背を撫でながら尚も笑いが止められない理穂子を見て、やがて早川もつられるように笑い出した。

(ひどいな、お前は)

小さな獣を間に挟んで、つかの間陽だまりのアパートで笑い転げた思い出が、理穂子の胸に蘇った。

あの時抱きしめた小さな命と、陽射しの中で少年のように笑う早川の記憶は、今手の中で腐り落ち悪臭を放つても尚、理穂子の脳裏から消え去ってはくれなかった。

「…………ごめんね、ごめんね…………」

理穂子はただ腐ったその皮膚に頬を摺り寄せ、咽び泣くことしかできなかった。

一体、何に対する謝罪であるのか、それさえも最早、理穂子の中では曖昧になっていた。

（島貫君の火は、いつも優しいね　　）

線香花火を見つめながら、そう呟いた理穂子。

隆志にとつての炎の記憶を辿ると、そこにはいつも理穂子がいた。

（ルルがね、お腹すいてるの　　）

アパートに背を向けながらも、なかなか離れがたくノロノロと歩いてきた隆志の脳裏に、不意に葵と実、二人の幼い姉弟の声が蘇ってきた。

そう言えば、あのウサギはどうしたのだろう。

郵便受けの隙間から、キャベツを落としたのはもう何週間も前のことだ。

この猛暑の中、閉め切られた室内で小さなあの獣はどうなったのだろう。

その途端、胸騒ぎにザワリと皮膚が粟立った。

隆志は踵を返し、何かに急かされるように理穂子のアパートへと駆け出した。

「……………」

細く開いたドアの隙間に手を差し入れ、濃厚な闇を覗かせていた理穂子のアパートへ一歩踏み込んだ瞬間、隆志は言葉を失った。

腐った獣の肉の匂い。

床には、同じく腐敗したキャベツの残骸が無数に散らばっている。隆志は汗まみれのＴシャツの胸元を引っ張って慌てて鼻と口に押し当てた。しかし、薄い布一枚では到底、この部屋の異様な空気が

ら身を守ることは出来なかった。

「斎木っ！ 斎木っ！」

隆志は又ルつく床に土足のまま踏み込み、理穂子の姿を探す。部屋の奥はもっと、底なし沼のように深い闇と淀んだ空気に満ちていた。

隆志には、まるで理穂子とその闇でできた沼に溺れているように感じた。

だが、いくらその名を呼んでも、理穂子からの返事は無かった。

「……斎……」

その時、締め切ったカーテンの隙間から、アパートの裏手の空き地が見えた。ジリジリと音を立てる切れかけた電球に照らされたそこは、子どもが遊び場にすらないような、伸び放題になった雑草に覆われたただの荒地だった。

その空き地に、まるで幽霊のように立ち尽くす、頼りない女の後ろ姿が見えた。

その瞬間、隆志は弾かれたようにアパートを飛び出していた。

「齋木っ！ お前、何して……」

理穂子の細い手首を掴んで振り向かせた隆志の前で、理穂子は力のない笑みを浮かべた。

「……そんな怖い顔しないで。ルルを送ってあげただけ。送り火の準備をしていたの」

そう告げる理穂子の白い手の中には、小さなライターが握られている。

隆志が理穂子の視線を追って足元へ視線を向けると、伸びた雑草の寝床に横たわらされた、半ば腐り落ちたウサギの死骸が目に入った。

その時だった。

隆志の視界の隅で、一瞬、草むらの影に何か鈍色に輝くのが見えた。

その輝きに目を凝らすと、そこにはまるで生い茂る雑草に隠すかのように置かれた、灯油缶が見えた。

それは、ウサギ一羽の送り火と言うには、過ぎた量だった。理穂子の細い指先が微かに震え、ライターを持ち直す。

「齋木っ！」

咄嗟に隆志は理穂子の手首を掴んだ。

「何考えてるの?! お前、一体……」

「離してっ! 一緒に逝かせてっ! ルルは私の家族だったの!」

大きな目に涙をいっぱい溜めて、理穂子はなけなしの力で隆志に抵抗を試みる。

「ふざけるなよっ! そんなこと、黙って見過ごせるわけないだろっ!」

「嫌っ! 離して、お願いっ!」

激しく揉みあう内に、理穂子がバランスを崩してよろめいた。その先に、鈍色に輝く灯油缶があった。

ゴンッ

鈍い音がして、缶が倒れる。中から溢れ出した液体が、鼻をつく匂いを撒き散らした次の瞬間、隆志が奪いかけていたライターが着火したまま、灯油の海の中へ落下した。

ブワッ

一瞬の内に、熱風が隆志と理穂子の頬を張った。

空き地はあっという間に、炎の海と化した。

未だ隆志に手首を取られたままの理穂子は、荒れ狂う炎の渦を見つめながら、動けずにいた。

隆志も、無意識に膝が笑い出すのを押さえることが出来なかった。

「火事だっ！ 裏の空き地が燃えてるぞっ！」

事態に気付いた近所の住人たちが騒ぎ始める声が聞こえる。

「……………」

その時、理穂子は不意に崩れ落ちるように地面に膝をついた。

「斎木？」

慌てて覗き込んだ隆志の前で、理穂子は額に脂汗を浮かべて、苦しげに息を継いでいた。

「斎木、どうしたんだよ？ 具合悪いのか？」

その時、隆志の目に信じられない光景が飛び込んできた。

剥き出しの膝を土で汚し、小さく震える理穂子のスカートの裾から覗く白い内腿を、赤い血が一筋、汚していた。

「……………」

目の前で起こっていることに、頭がついていかない。

病的なほどに白い理穂子の内腿と、毒々しい血の赤が、現実感を伴って隆志の頭に入ってこない。

「……………」

つめき声にすらならない理穂子の強く短く吐き出す息に、隆志は

ようやく我に返った。

「しっかりしろよっ！ 斎木」

隆志は理穂子の細い腕を取って自分の肩に回すと、そのまま理穂子の前に屈みこみ、理穂子を自分の汗で濡れた背中に凭れさせる。

「……すぐ、病院へ連れて行くから。もうちょっと、頑張れ！」

隆志はもう背中にしがみつく力さえない理穂子を、一気に背負い上げた。

その時、一張羅のように着ていた新聞販売店の作業着のズボンのボタンが弾けて、地面に落ちた。

背に感じる理穂子は、ふと振り返ると、そこに居ないのではないかと不安になるほど、あまりにも軽く儚かった。

隆志はグツと自分の唇を噛み締める。

唇を裂く痛みと、薄っすらと滲んだ血の味が、これが現実で、理穂子が確かに存在して自分の背にしていることを証明してくれるような気がした。

隆志は理穂子を背負ったまま、炎の中を走り出す。

背に感じる理穂子の体温は夏だというのに、どんどん熱を失い冷たくなっていく。

「斎木……しっかりして。斎木っ！」

走りながら、必死に理穂子に語りかける。

ふと、美華のことが頭をよぎった。

もう、思い出すこともなかったのに。

高校三年の時、あまりにもあっけなく死んだ母。

一生を、母よりも女として生きた、あの薄情なほどに美しい女の姿を。

母の生前、女として生きる母には、自分は邪魔者だったとずっと思っていた。なぜ、要らない自分を産んだのだと、本気で恨んだこともある。

だが、母は自分が居たから、生きていたのだ。

奔放に、男を手玉に取って、美しさに寄りかかりながら、自在に生きていたと思っていた。だが、自分が居なかったら、母はきっと父の後を追っていただろう。自由な母を、この世に繋ぎ止めるものなど、自分以外には存在しなかったのだから。熊本で過ごした五年間の中で、隆志はそのことによろやく気がついた。

理穂子の中に、今宿っている命。

それが、美華にとつての隆志のように、理穂子を繋ぎとめてくれるものであればいい。

どこまでも闇の中へ、隆志の手の届かない場所へ、一人で墜ちていこうとする理穂子を、繋ぎとめてくれるものであれば。

「……………めんね」

炎が草木を焼く音に混じって、背中から消え入るような小さな声が聞こえてきた。

近所から集まってきた住人たちで、現場は既に騒然となっていた。その雑踏を掻き分けながら、隆志は首を振って降りかかる火の粉を払うと、再び理穂子を背負いなおして、走るスピードを上げた。

*

君の中に宿った小さな命は、君にとって本当に憎しみと哀しみの塊でしかなかったの？

だって僕は、聞いてしまったから。

薄れゆく意識の中で、君が何度も詫びる声を。

彷徨える魂を導くという送火でさえ、君の行く先を照らすことは叶ぬのだと、小さな生命が僕に語りかける声が聞こえた気がした。

差し伸べる手を握り返す力もない君の欠片は、なす術もなく僕の背中を伝い、君の涙と共に零れて落ちた

第8話「送火」おくりび 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9486/>

炎の中へ

2011年12月17日08時54分発行